

千葉県八千代市

# 黒沢池上・新林遺跡発掘調査報告書

土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

2003.8

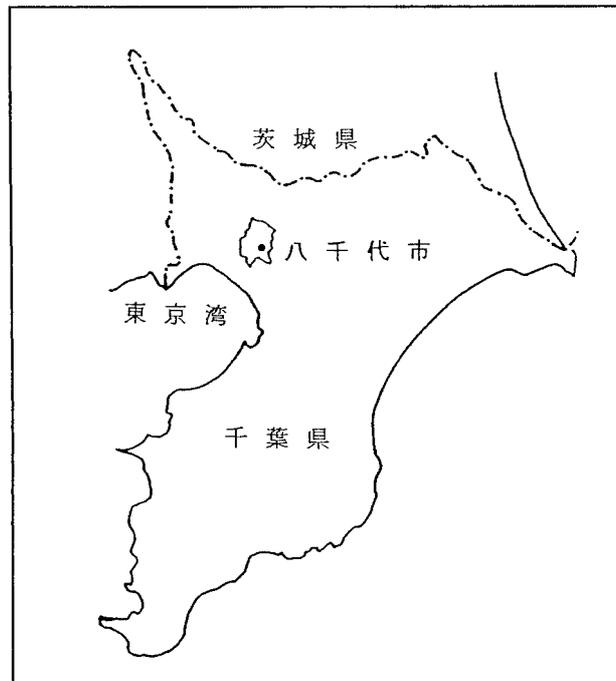
八千代市上高野第1土地区画整理組合

八千代市遺跡調査会

# 千葉県八千代市

## 黒沢池上・新林遺跡発掘調査報告書

土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査



八千代市遺跡調査会

# 序 文

八千代市は首都30キロ圏に位置し、印旛沼と新川周辺に広がる千葉丘陵の田園を背景とした恵まれた立地の中で、農業を中心に成長してきましたが、昭和30年代以降、経済の高度成長に伴い人口が急増し、首都圏の住宅都市としての性格を強めてきました。本市は、都心や近郊都市への通勤エリアとして京成電鉄線、第3セクターによる東葉高速鉄道等の交通網が整備され、また大学の誘致と周辺に住宅を整備した文教都市としての事業も成果をあげつつ、更に進められています。一方、市中央部を南北に貫流する新川を親しみのある水の広場として、遊歩道の整備や新川千本桜植栽事業として川沿いに桜を植樹する計画も進められています。

今回の発掘調査の契機となった区画整理事業は、市域南部の京成勝田台、東葉勝田台の両駅に至近の位置にある上高野地区及び村上の一部地区に住宅を供給する目的で計画されたため、調査を実施しました。

調査の結果、縄文時代前期後半から中期前半の遺構・遺物を中心に発見することができました。当該時期の遺構は検出がむずかしいため、調査例が少なく貴重な資料を加えることとなります。また遺物では、縄文時代前期後半から末葉の土器資料が比較的多く出土し、この時期の研究に資料を加える成果となりました。

本書を刊行するにあたり、この報告書が八千代市の縄文時代を考古資料を通じて考えるきっかけになっていただければ幸いです。

最後に、発掘調査から報告書刊行に至るまでご指導・ご協力いただいた千葉県教育庁文化財課、八千代市教育委員会、八千代市上高野第1土地区画整理組合をはじめ、関係諸機関の皆様に対して深く感謝いたします。また、暑い中で発掘作業や十分な期間のない中で整理作業に従事いただいた調査員や調査補助員、整理補助員の方々にもあわせてお礼申し上げます。

平成15年 8 月

八 千 代 市 遺 跡 調 査 会  
会 長 萩 原 康 正

# 凡 例

1. 本書は、千葉県八千代市上高野字新林1191-1他に所在する、黒沢池上遺跡及び新林遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、八千代市上高野第1土地区画整理組合の委託を受け、八千代市遺跡調査会が実施した。
3. 発掘調査・本整理作業は以下のとおり実施した。

## 黒沢池上遺跡確認調査

期 間 平成13年4月3日～同年4月17日  
面 積 370 m<sup>2</sup>/4,600m<sup>2</sup>  
担 当 常松 成人

## 黒沢池上遺跡本調査

期 間 平成13年5月9日～同年7月24日  
面 積 1,800 m<sup>2</sup>  
担 当 常松 成人

## 新林遺跡（d地点）1次確認調査

期 間 平成13年2月15日～同年2月28日  
面 積 530 m<sup>2</sup>/5,300m<sup>2</sup>  
担 当 常松 成人  
備 考 平成12年度国庫県費補助事業

## 新林遺跡（d地点）2次確認調査

期 間 平成13年3月9日～同年3月30日  
面 積 780 m<sup>2</sup>/14,400 m<sup>2</sup>  
担 当 常松 成人 宮澤 久史  
備 考 八千代市遺跡調査会委託事業

## 新林遺跡（d地点）本調査

期 間 平成13年7月30日～同年11月7日  
面 積 2,860 m<sup>2</sup>  
担 当 朝比奈竹男 宮澤 久史

## 本整理作業

期 間 平成15年2月3日～同年8月31日  
担 当 森 竜哉

4. 本書の編集・執筆は森 竜哉を中心に第3章第3節は松浦史浩が執筆した。
5. 現地での遺構写真は調査担当者が、報告書掲載の遺物写真は森が撮影した。
6. 本書の作成・刊行については、下記の調査員及び整理補助員と森が協力して行い、森が統括した。  
〔調査員〕伊藤 弘一 川口 貴明 松浦 史浩  
〔整理補助員〕杉山由美子 小林 孝彰 小弓場直子 高橋 昌代 立松紀代美 寺澤 洋子  
日向 洋子 細川 麻里 山下千代子
7. 出土遺物、実測図等の資料は、八千代市教育委員会において保管している。
8. 本書の遺構番号は、発掘調査時のまま使用している。
9. 遺構・遺物の縮尺は下記のとおり統一している。  
〔遺構〕住居（D）1/80 竪穴遺構（I）1/80 ピット（P）1/40  
〔遺物〕土器・大型石器1/3 土製品1/2 剥片・小型石器2/3
10. 遺物の繊維土器及び遺構の焼土範囲にスクリーントーンを使用した。
11. 出土石器の分析と石質については、川端結花氏にご教示いただいた。記して感謝いたします。
12. 本書使用の地図は、下記のとおりであり、一部加筆している。  
第2図 八千代市上高野第1土地区画整理組合作製 1/1,000 事業現況図
13. 発掘調査から整理作業において下記の諸氏・機関にご指導、ご協力いただきました。記して感謝いたします。（敬称略）  
八千代市上高野第1土地区画整理組合 千葉県教育庁文化財課 八千代市都市整備課

# 本文目次

序文  
凡例

## 第1章 序説

第1節 調査に至る経緯.....	1
第2節 調査の方法と経過.....	1

## 第2章 検出された遺構と遺物

第1節 黒沢池上遺跡.....	4
第2節 新林遺跡.....	26

## 第3章 まとめ

第1節 黒沢池上遺跡.....	96
第2節 新林遺跡.....	96
第3節 縄文時代前期末葉の土器について.....	98

報告書抄録

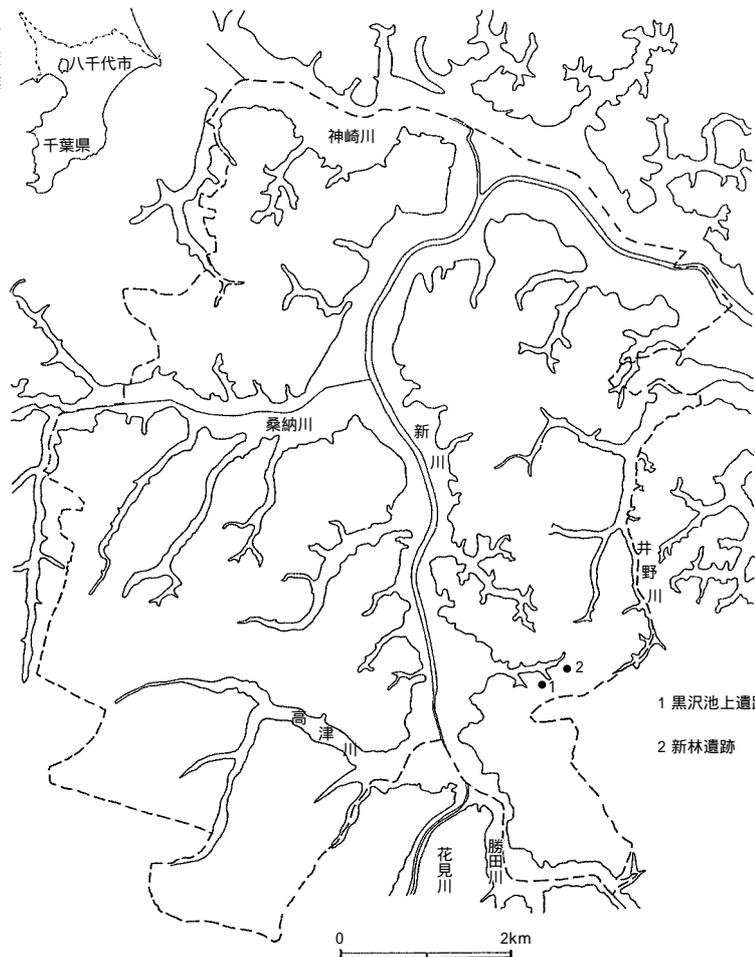
# 挿図目次

第1図 グリッド設定図 .....	2	第28図 遺構外出土遺物(1).....	24
第2図 事業範囲図 .....	3	第29図 遺構外出土遺物(2).....	25
第3図 黒沢池上遺跡トレンチ配置図 .....	4	第30図 新林遺跡トレンチ配置図 .....	26
第4図 黒沢池上遺跡遺構配置図 .....	5	第31図 新林遺跡遺構配置図(1).....	27
第5図 01.02.03D 平面図 .....	6	第32図 新林遺跡遺構配置図(2).....	28
第6図 01D 出土遺物(1).....	6	第33図 01D 平面図 .....	30
第7図 01D 出土遺物(2).....	8	第34図 02D 平面図 .....	30
第8図 02D 出土遺物 .....	8	第35図 01.02.03D 出土遺物.....	31
第9図 03D 出土遺物 .....	8	第36図 03D 平面図 .....	33
第10図 01.02.03.04.05.07P平面図 .....	10	第37図 04D 平面図 .....	33
第11図 02.04.05.07P出土遺物 .....	10	第38図 05.06D平面図 .....	34
第12図 06.08P平面図 .....	12	第39図 07D 平面図 .....	34
第13図 06.08P出土遺物 .....	12	第40図 05.06.07.08D出土遺物.....	36
第14図 09.10.11.12.13P 平面図 .....	14	第41図 08D 平面図 .....	37
第15図 10.11.12.13P出土遺物 .....	14	第42図 09D 平面図 .....	37
第16図 14.15.16.17.18.19.20P 平面図 .....	16	第43図 10D 平面図 .....	38
第17図 14.15.16.17.18.20P出土遺物 .....	16	第44図 11D 平面図 .....	38
第18図 21.22.24.25.26P 平面図 .....	18	第45図 09.10.11D 出土遺物.....	40
第19図 22P 出土遺物 .....	18	第46図 12D 平面図 .....	41
第20図 27.28.29.30.31.32.33P 平面図 .....	19	第47図 13D 平面図 .....	41
第21図 27.30P出土遺物 .....	19	第48図 01.02.03.04I平面図 .....	42
第22図 34.35.36.37.38.39.40P 平面図 .....	21	第49図 13D.01.02.03.04I出土遺物 .....	44
第23図 38.39.40P 出土遺物.....	21	第50図 新林遺跡下層トレンチ配置図 .....	45
第24図 41P 平面図 .....	22	第51図 05I 遺物出土状況 .....	45
第25図 41P 出土遺物 .....	22	第52図 05I 出土遺物 .....	46
第26図 01M 平面図.....	22	第53図 01.02.03.04.05.06.08P 平面図 .....	48
第27図 01M 出土遺物.....	22	第54図 01.03.05P 出土遺物.....	48

第55図	07.09.10.11.12.13P平面図	50	第81図	71.72.73P 出土遺物	71
第56図	10P 出土遺物	50	第82図	76.77.78.79P平面図	73
第57図	14.15.16.17.18.19.20.21.25P 平面図	52	第83図	76.77.78.79P出土遺物	73
第58図	16.17.18.19.20P 出土遺物	53	第84図	80.81.82.83.84P 平面図	75
第59図	22.23.24.26.27.28P平面図	54	第85図	80.81P出土遺物	75
第60図	24.26.27.28P出土遺物	54	第86図	85.86.87.88.89.90P平面図	78
第61図	29.30.31.32.33.34.35.36P平面図	56	第87図	86P 出土遺物	78
第62図	29P 出土遺物	56	第88図	91.92.93.95P平面図	79
第63図	37.38.39.40.41P 平面図	58	第89図	95P 出土遺物	79
第64図	37.38P出土遺物	58	第90図	94.96.97.98.99.100P 平面図	81
第65図	42.43.44.45.46.47.48P 平面図	60	第91図	94.97.98P 出土遺物	81
第66図	43.46.47P 出土遺物	60	第92図	101.102.103.104P平面図	82
第67図	49.50.51.52.53P 平面図	62	第93図	103P出土遺物	82
第68図	49.52.53P 出土遺物	62	第94図	105.106.107.108.110.111.112P 平面図	84
第69図	54.55.56P 平面図	64	第95図	108.112P 出土遺物	84
第70図	54.55.56P 出土遺物	64	第96図	109.117.114P 平面図	86
第71図	57.58.59.61P平面図	65	第97図	109.113.114P 出土遺物	86
第72図	57.59P出土遺物	65	第98図	113.115.116P 平面図	87
第73図	62.63.64.65.66P 平面図	67	第99図	115P 出土遺物	87
第74図	62.66P出土遺物	67	第100 図	遺構外出土遺物( 1 )	89
第75図	67.69P平面図	69	第101 図	遺構外出土遺物( 2 )	91
第76図	67P 出土遺物	69	第102 図	遺構外出土遺物( 3 )	92
第77図	69P 出土遺物	69	第103 図	遺構外出土遺物( 4 )	94
第78図	68.70P平面図	70	第104 図	遺構外出土遺物( 5 )	95
第79図	68P 出土遺物	70	第105 図	遺構外出土遺物( 6 )	96
第80図	71.72.73.74.75P 平面図	71			

# 写真图版目次

- 図版 1 黒沢池上遺跡遺構 1 完掘全景 01M.01D 全景
- 図版 2 黒沢池上遺跡遺構 2 02D.03D.01P ~ 04P 全景
- 図版 3 黒沢池上遺跡遺構 3 05P ~ 12P 全景
- 図版 4 黒沢池上遺跡遺構 4 13P ~ 20P 全景
- 図版 5 黒沢池上遺跡遺構 5 21P.22P.24P.25P.27P ~ 29P 全景
- 図版 6 黒沢池上遺跡遺構 6 30P ~ 37P 全景
- 図版 7 黒沢池上遺跡遺構 7 38P ~ 41P 全景
- 新林遺跡遺構 1 完掘全景
- 図版 8 新林遺跡遺構 2 完掘全景 01D ~ 03D 全景
- 図版 9 新林遺跡遺構 3 03D ~ 07D.09D 全景
- 図版10 新林遺跡遺構 4 09D ~ 13D.01I 全景
- 図版11 新林遺跡遺構 5 02I ~ 05I.01P ~ 04P 全景
- 図版12 新林遺跡遺構 6 05P ~ 10P 全景
- 図版13 新林遺跡遺構 7 11P.12P.14P ~ 17P 全景
- 図版14 新林遺跡遺構 8 18P ~ 21P.23P ~ 25P.27P.28P 全景
- 図版15 新林遺跡遺構 9 29P.31P ~ 36P 全景
- 図版16 新林遺跡遺構10 37P ~ 42P.45P.46P 全景
- 図版17 新林遺跡遺構11 43P.44P.47P ~ 50P 全景
- 図版18 新林遺跡遺構12 52P ~ 57P 全景
- 図版19 新林遺跡遺構13 59P ~ 64P 全景
- 図版20 新林遺跡遺構14 58P.66P.69P.71P.72P.73P.76P.77P 全景
- 図版21 新林遺跡遺構15 79P ~ 84P 全景
- 図版22 新林遺跡遺構16 86P.89P ~ 92P.94P.95P 全景
- 図版23 新林遺跡遺構17 96P ~ 103P 全景
- 図版24 新林遺跡遺構18 106P.108P.111P.112P.113P.116P 全景
- 図版25 黒沢池上遺跡出土遺物 1 01D ~ 03D
- 図版26 黒沢池上遺跡出土遺物 2 02P ~ 16P
- 図版27 黒沢池上遺跡出土遺物 3 17P ~ 41P.01M
- 図版28 黒沢池上遺跡出土遺物 4 遺構外 1 ~ 26
- 図版29 黒沢池上遺跡出土遺物 5 遺構外 27 ~ 45
- 図版30 新林遺跡出土遺物 1 01D.02D
- 図版31 新林遺跡出土遺物 2 03D.05D
- 図版32 新林遺跡出土遺物 3 06D ~ 08D
- 図版33 新林遺跡出土遺物 4 09D ~ 11D
- 図版34 新林遺跡出土遺物 5 13D.01I ~ 03I
- 図版35 新林遺跡出土遺物 6 04I.05I
- 図版36 新林遺跡出土遺物 7 01P ~ 54P
- 図版37 新林遺跡出土遺物 8 55P ~ 78P
- 図版38 新林遺跡出土遺物 9 79P ~ 115P
- 図版39 新林遺跡出土遺物10 遺構外 1 ~ 30
- 図版40 新林遺跡出土遺物11 遺構外 31 ~ 56
- 図版41 新林遺跡出土遺物12 遺構外 66 ~ 100
- 図版42 新林遺跡出土遺物13 遺構外 101 ~ 130
- 図版43 新林遺跡出土遺物14 遺構外 131 ~ 150
- 図版44 新林遺跡出土遺物15 遺構外 151 ~ 162



1. 黒沢池上遺跡 (縄文前・中)
2. 新林遺跡 (旧石器, 縄文早・前・中, 中近世)
3. 持田遺跡 (縄文前・中, 古墳後, 奈良・平安)
4. 正覚院館跡 (中世)
5. 村上向原遺跡 (縄文前・中, 弥生後, 古墳中・後, 奈良・平安)
6. 大塚南遺跡 (奈良・平安)
7. 殿内遺跡 (縄文中, 弥生後, 古墳前・後, 奈良・平安, 中世)
8. 境作遺跡 (縄文中, 奈良・平安)
9. 浅間内遺跡 (旧石器, 縄文早・中, 弥生後, 古墳前・後, 奈良・平安)
10. 白筋遺跡 (古墳後期, 奈良・平安, 根上神社古墳含む。)
11. 村上込ノ内遺跡 (旧石器, 縄文, 弥生後, 古墳後, 奈良・平安, 中世)
12. 名主山遺跡 (弥生後, 奈良・平安)
13. 野路作遺跡 (奈良・平安)
14. 村上第2塚群 (縄文早・前, 近世)
15. 村上第1塚群 (旧石器, 縄文早, 古墳, 中近世)
16. 沖塚遺跡 (旧石器, 縄文, 古墳前, 奈良・平安)
17. 黒沢台遺跡 (旧石器, 縄文, 奈良・平安, 中近世)
18. 台北側遺跡 (旧石器, 縄文, 奈良・平安)
19. 二重堀遺跡 (旧石器, 縄文早・前・後, 中近世)
20. 稲荷前遺跡 (縄文早・中・後, 奈良・平安, 近世)
21. 上谷津台南遺跡 (縄文早・中・後)
22. 上谷津遺跡 (縄文後)

1 黒沢池上遺跡  
2 新林遺跡

## 遺跡の位置と周辺の遺跡

# 第1章 序 説

## 第1節 調査に至る経緯

平成12年3月、組合認可前の八千代市上高野第1土地区画整理組合設立準備委員会から土地区画整理事業のため、当該地に埋蔵文化財が所在しているか否かの照会文書が八千代市教育委員会に提出された。現況は畑と山林で、現地踏査では縄文土器等遺物の出土もみられた。周知の遺跡内であり、隣接区域において発掘調査が行われ、多くの成果をあげている実績もあったことから、照会地52,000㎡の内、谷部分と発掘調査実施部分を除いた新林遺跡21,800㎡、黒沢池上遺跡 4,600㎡について遺跡が所在する旨事業者回答した。

事業者との協議により全体について記録保存の措置をとることとなった。樹木の伐採、基準点測量等の依頼の中で、確認調査についての協議をもった。その結果、新林遺跡の21,800㎡の内 5,400㎡について、国庫補助事業として実施することとし、他については時間的な制約もあることから八千代市遺跡調査会による委託事業として事業者負担により調査をすることとなった。事業計画が整い、土木工事にかかる発掘の届出をまって平成13年2月に新林遺跡第1次確認調査を国庫補助事業として実施した。その後3月に新林遺跡(第2次)を、4月に黒沢池上遺跡の確認調査を調査会委託事業として行った。調査の結果、縄文時代前期後半～中期にかかる住居跡、土坑を中心とした遺構、遺物が検出された。

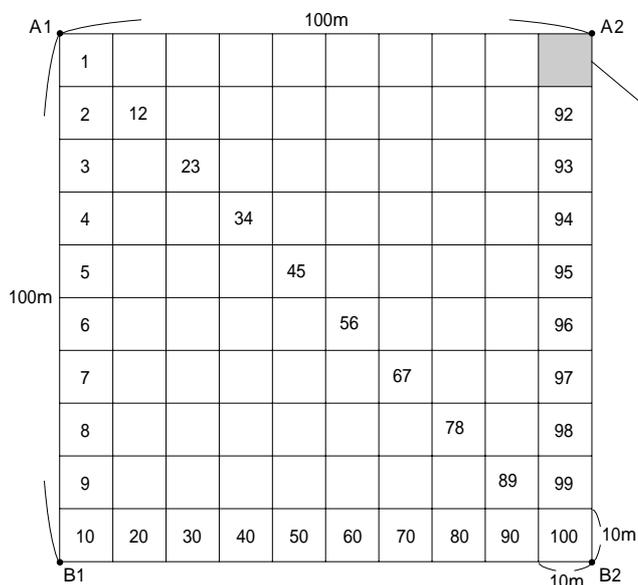
## 第2節 調査の方法と経過

確認調査の成果から、遺物包含層の存在、遺構プランの確定のむずかしさ等遺構確認にかかる割合が高いことが想定された。その結果、包含層・遺構の遺物に留意しながら遺構確認、遺構調査を進めていく方法をとった。

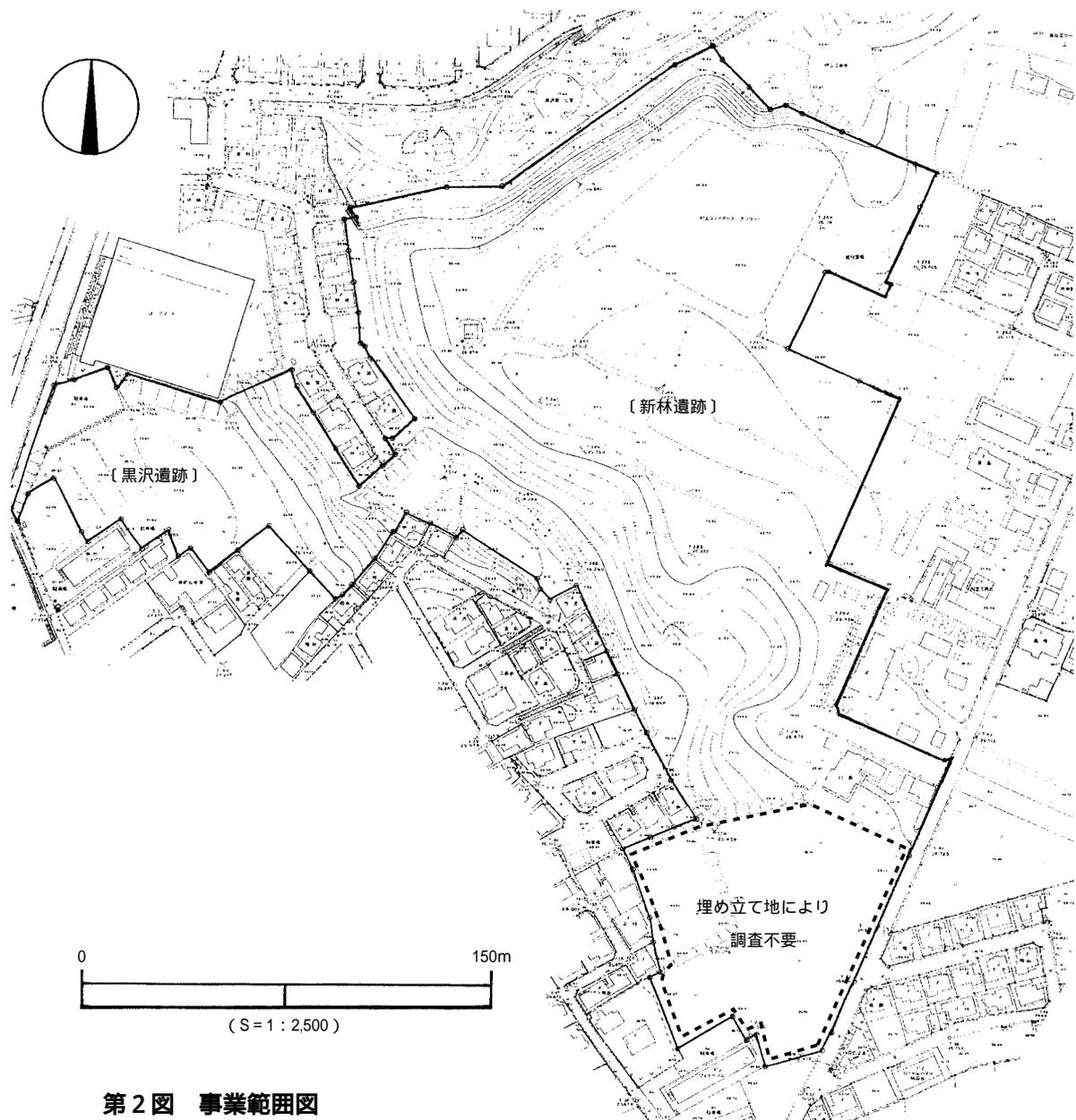
両遺跡の基本層序は、層表土、a層黒褐色土(腐食土)、b層褐色土(新期テフラ層)、c層暗褐色土(新期テフラ層下の腐食土部分)、層(ソフトローム層)で以下ローム層となっている。遺物は、b層下部～c層中に集中して出土している。遺構確認面は、おおむねc層において行った。調査区の設定は、第1図に示したとおりである。100m四方を大グリッドとして東西に数字、南北にアルファベットを配して北西方向の交点を大グリッド(A1区)名称とした。大グリッド内を10m四方に分割して中グリッド(A1-1～100G)とした。中グリッド内を5m四方に分割して小グリッドとした。(A1-1～100-1～4G)遺構外遺物の取り上げや遺構の位置は、グリッド名によって明確化した。

調査は、黒沢池上遺跡が平成13年5月9日～7月24日、新林遺跡は同年7月30日～11月7日の期間をもって実施した。部分的な現場の引渡し等もあり、調査は急を要した。経過は黒沢池上遺跡が、5月9日・10日に飛び地部分の01P～03P調査、5月21日から調査再開で、重機による表土除去後プラン確認作業に着手する。5月29日～6月4日04P～10P調査、6月4日～6月12日11P～16P調査、6月14日第2回目の表土除去に入る。並行してピット調査、プラン確認作業を行う。6月29日19P以降調査、7月2日01D,02D調査開始。順次ピット調査を行う。7月13日～17日下層及び03D調査、7月21日遺構調査をほぼ終了し、遺構全景写真撮影。7月24日遺物洗浄、注記等終了後器材撤収により現場における調査を終了した。

新林遺跡は、7月30日～8月13日にかけて重機による表土除去作業を行う。調査区は、5か所に分散しているため便宜的にA～F区とし、最終的に面積が大きいE区に集結していく形をとった。7月30日テント設営等環境整備、調査区内木根撤去、8月6日～8月28日A区遺構調査、並行してE区プラン確認作業を8月30日まで行った。同日よりピット半截等遺構調査に移行していった。B,D,F区は9月半ば



第1図 グリッド設定図

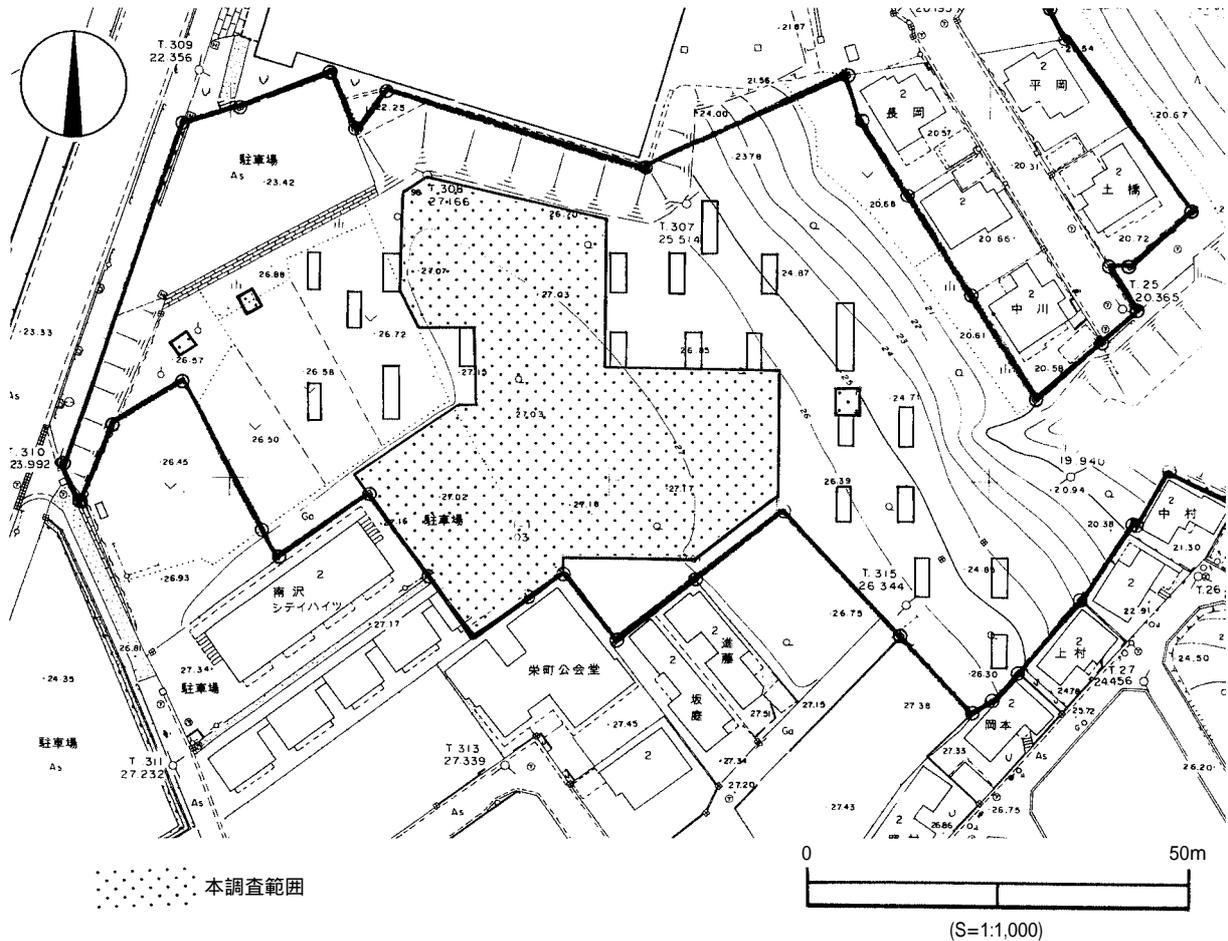


第2図 事業範囲図

までに遺構調査を終了して、E区に合流した。10月9日までに01D～03D,01I～03I,16P～32Pの遺構調査に着手しほぼ完了した。10月は人員を増やし、33P～116P,04D～10D,04Iについて調査を進めていった。この間に、調査期間の延長について区画整理組合と協議し、11月初旬の延長で結論を得た。10月後半から11D～13D調査、下層部確認調査と05I本調査、11月3日にほぼ遺構調査を終了し、遺構全景写真撮影。11月5・6日遺物洗浄、注記等終了後器材撤収により11月7日に現場における調査を終了した。

## 第2章 検出された遺構と遺物

### 第1節 黒沢池上遺跡



第3図 黒沢池上遺跡トレンチ配置図

本遺跡では、竪穴住居跡3軒、土坑39基、陥穴1基、溝状遺構1条を検出した。時期は全て縄文時代に属すると考えられる。竪穴住居跡は、前期後半1軒、中期後半2軒である。陥穴は、覆土遺物から前期後半以前に想定される。土坑は、出土遺物がなく特定できない遺構はあるが、前期後半～末葉、中期前半、中期後半の3時期に各々属すると考えられる。溝状遺構は、重複している16P及び01Dの土層断面から判断して中期後半以降に想定される。

#### a. 住居跡・竪穴遺構(D)

##### 01D(第5図 写真図版1)

規模 4.25m × 3.85m のややいびつな円形 主軸方位不明

確認面 b～c層中 深さA-A'間 A 15cm A'20cm C-C'間 C 15cm C'19cm

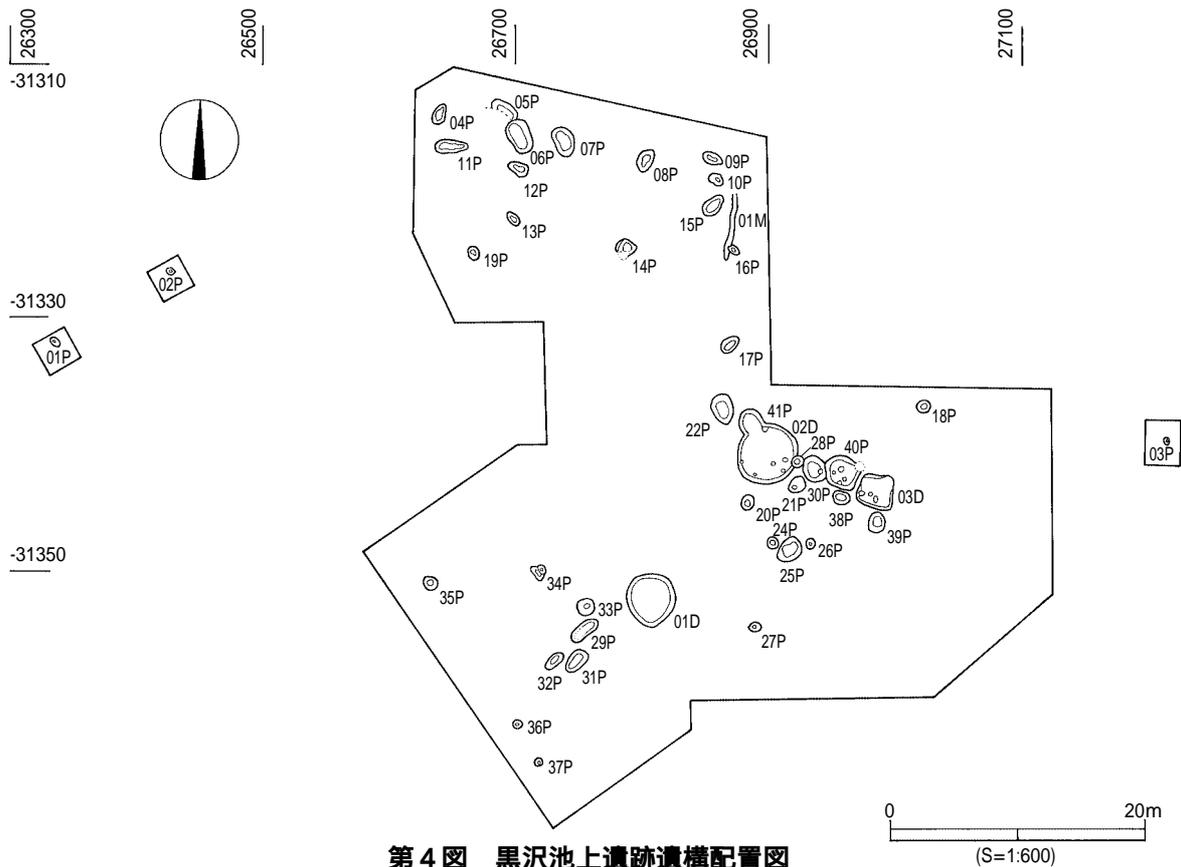
床面 ほぼ平坦なソフトローム中の地床だが、硬化面等の遺存は見られなかった。

ピット 検出されなかった。

覆土 暗褐色土を主体した自然堆積の土層だが、5層は新たに掘られている。01Mの覆土である。

遺物 石器、剥片類は床面に近い高さで、土器片は覆土上層～中層で出土している。

備考 柱穴、炉等の施設がなく、遺物も少ない。竪穴遺構としての性格が考えられる。時期について



第4図 黒沢池上遺跡遺構配置図

は、石棒片や土器から中期後半に位置づけたい。

**02D (第5図 写真図版2)**

規模 5.03m x 4.7mのややいびつな円形 主軸方位不明 28P, 41P と重複している。両者を切っており、本遺構が新しい。

確認面 b ~ c層中 深さA-A'間 A 8cm A' 5cm D-D'間 D 10cm D'10cm

床面 やや凹凸のあるソフトローム中の地床だが、やや踏み締めた部分が2か所見られた。

ピット 4口あったが、いずれも浅い。

炉 遺構中央のやや北寄りに遺存する。規模は、33cm x 25cmの楕円形で、深さ5cmである。使い込まれておらず、覆土は、暗褐色土に微量の焼土粒を含んだ層である。

覆土 暗褐色土を主体した自然堆積の土層だが、6層は埋没後の土層である。

遺物 炉周辺の北側で多く出土している。10を除いて、覆土上層から出土している。

備考 住居として長く使用した痕跡は薄い。時期は遺物から中期後半と考えられる。

**03D (第5図 写真図版2)**

規模 2.3m x 2.8mのややいびつな台形 主軸方位不明

確認面 b ~ c層中 深さA-A'間 A 10cm A'15cm C-C'間 C 5cm C'5cm

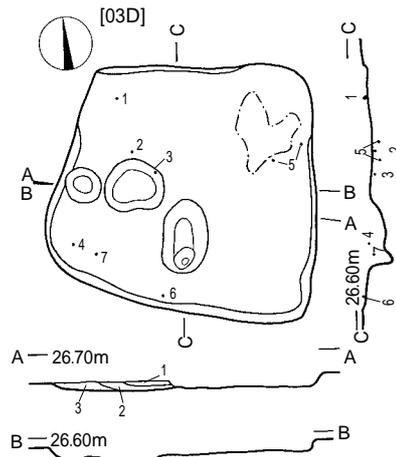
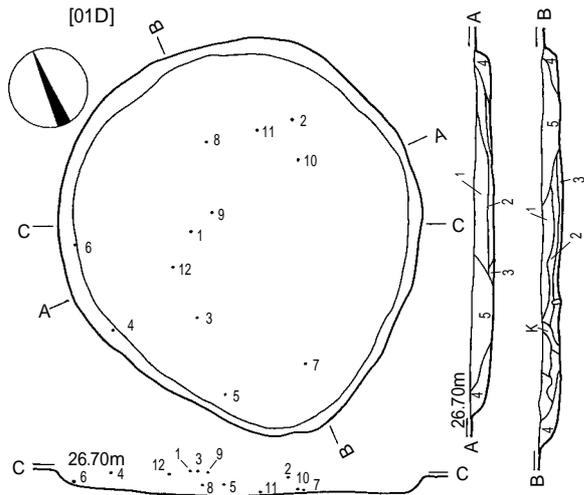
床面 南北方向で南側に向かってやや下がっている。踏み締められている部分が1か所見られた。

ピット 西側に3口検出された。覆土は暗褐色土にロームが混入している。焼土の混入は見られない。

覆土 部分的な土層観察だが、暗褐色土主体の自然堆積の土層であろう。

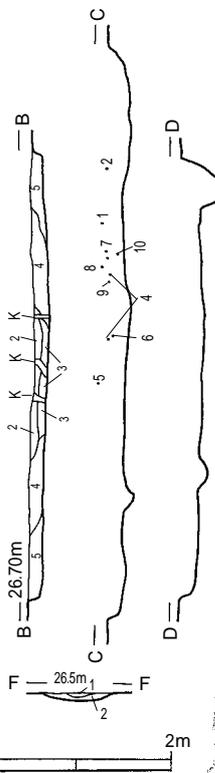
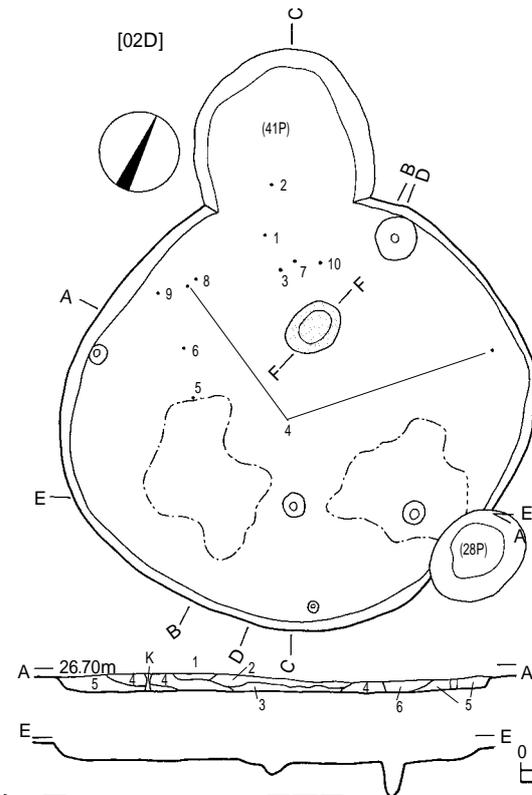
遺物 遺物はほぼ床面上からの出土であるが、前期後半と中期前半の遺物が混在している。

備考 出土遺物から前期後半ないし中期前半の竪穴遺構と考えられる。



03D 土層説明

- 1 暗褐色土 少量のローム、微量の黒色土混入。粘性しまりともに弱い。
- 2 暗褐色土 少量の黒色土、微量のローム混入。粘性しまりともに弱い。
- 3 暗黄褐色土 少量の暗褐色土混入。粘性しまりともに弱い。



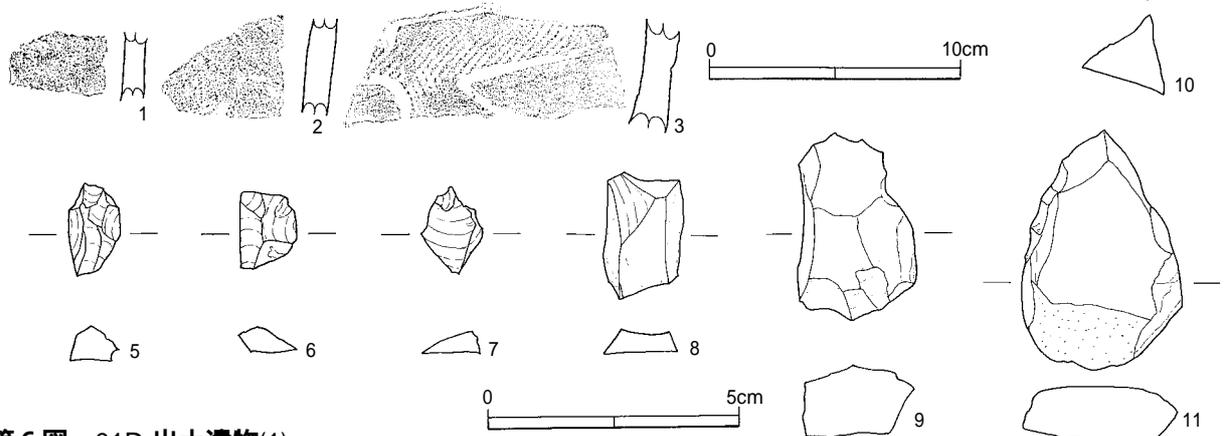
01D 土層説明

- 1 暗褐色土 2mm ~ 5mm のローム粒混入。粘性弱くしまりやや強い。
- 2 暗黒褐色土 5mm ~ 10mm のローム粒混入。粘性弱くしまりやや強い。
- 3 暗褐色土 5mm ~ 20mm のローム粒混入。粘性弱くしまり2層よりやや強い。
- 4 暗褐色土 ローム粒ごく少量混入。粘性弱くしまりやや強い。
- 5 暗黄褐色土 5mm ~ 15mm のローム粒多量に混入。粘性なくしまりふつう。

02D 土層説明

- 1 暗褐色土 5mm ~ 15mm のローム粒少量混入。粘性しまりともに弱い。
- 2 暗褐色土 5mm ~ 10mm のローム粒多量に混入。粘性しまりともに弱い。
- 3 暗褐色土 1mm ~ 5mm のローム粒多量に混入。粘性弱くしまりふつう。
- 4 暗褐色土 5mm ~ 20mm のローム粒少量混入。粘性弱くしまりやや強い。
- 5 暗褐色土 5mm ~ 20mm のローム粒やや多量に混入。粘性弱くしまりやや強い。
- 6 暗黄褐色土 5mm ~ 15mm のローム粒少量混入。ロームブロック微量含む。粘性弱くしまりふつう。

第5図 01・02・03D 平面図



第6図 01D 出土遺物(1)

## b. 住居跡・竪穴遺構(D)出土遺物

### 01D出土遺物(第6.7図 写真図版25)

1・2は無文だが阿玉台式であろう。3・4は加曽利E式の同一個体で、沈線区画内に単節LR縄文を充填する。5は、黒曜石の剥片で、1.8cm,幅1.0cm,重さ1.1gである。6は、黒曜石の剥片で、1.5cm,幅1.1cm,重さ0.9gである。7は、黒曜石の剥片で、1.7cm,幅1.2cm,重さ0.5gである。8は、頁岩の剥片で、2.5cm,幅1.5cm,重さ2.5gである。9は、安山岩の石核で、3.7cm,幅2.2cm,重さ13.2gである。10は、頁岩の剥片で、5.5cm,幅1.8cm,重さ11.4gである。11は、安山岩の削器で、4.7cm,幅3.2cm,重さ22.4gである。左側縁から先端部にかけて使用している。12は凹み石で、石棒の転用である。16.1cm,幅14.1cm,重さ3400gである。裏側の破損面は摩耗痕跡は顕著ではないが、面として整えているように見える。

### 02D出土遺物(第8図 写真図版25)

1は、櫛歯条線文で興津式であろう。2~4は加曽利E式である。2は無節Lを施文する。3は沈線区画内に単節LRを充填している。4も同様に無節L縄文を充填している。5は、沈線に沿って半截竹管の刺突列を施文している。五領ヶ台式であろう。6~9は加曽利E式の同一個体で、鉢形であろう。沈線区画内に単節LR縄文を充填している。10は、底部で木葉痕が明瞭である。

### 03D出土遺物(第9図 写真図版25)

1~3は同一個体である。単沈線による口縁部条線帯、輪積痕+凹凸文、三角文を施文する。浮島式ないし興津式である。4は、無文だが胎土から前期後半と思われる。5・6は阿玉台b式で、三角形断面の隆帯に沿って単列角押文を施文している。7は、土器片錘で三角形断面の隆帯が見られる。長さ4.8cm,幅3.5cm,重さ20.5gである。上部に切り込みが見られる。

## c. ピット・土坑(P)遺構と出土遺物

### 01P(第10図 写真図版2)

規 模 0.94m × 0.46m × 深さ0.1mの楕円形 長軸方位 N - 61° - W  
壁・底面 壁の立ち上がりは緩く、底面は平坦な部分はなく、緩やかな尖底である。  
覆 土 褐色土主体の自然堆積で、掘り直しや重複は見られない。  
備 考 出土遺物はなく、時期不明である。

### 02P(第10図 写真図版2)

規 模 0.52m × 0.4m × 深さ0.08mの長円形 長軸方位 N - 18° - E  
壁・底面 壁の立ち上がりは緩く、底面は平坦な部分が少なく、緩やかな傾斜である。  
覆 土 褐色土主体の自然堆積である。  
備 考 時期、性格については、有用な遺物がないため不明である。

### 02P出土遺物(第11図 写真図版26)

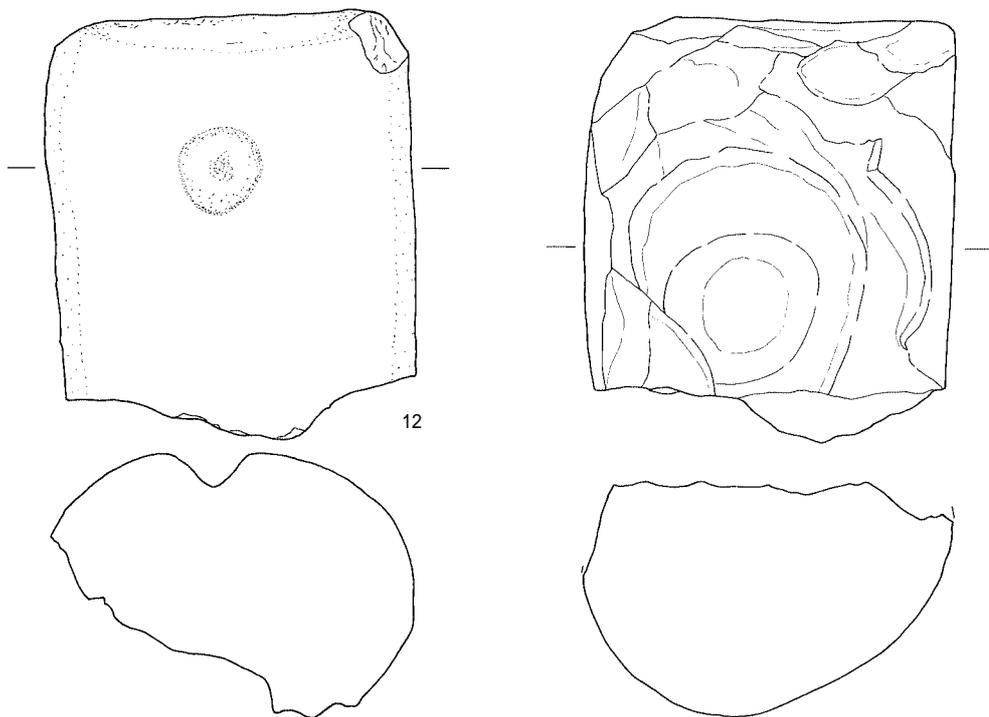
壁傾斜面からチャートの剥片が出土している。全長1.8cm 幅1.4cm 重さ0.2g

### 03P(第10図 写真図版2)

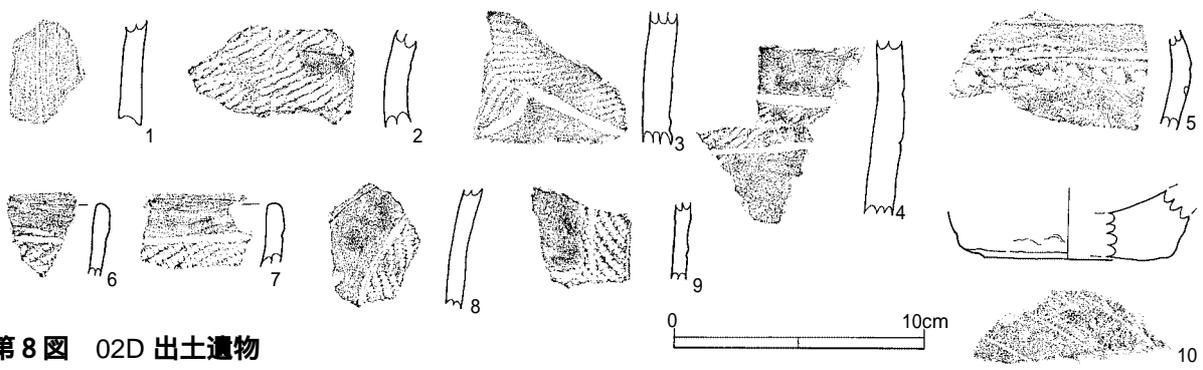
規 模 0.46m × 0.36m × 深さ0.34mの楕円形 長軸方位 N - 10° - W  
壁・底面 壁は傾斜があり角度をもって立ち上がる。底面は平坦な部分はなく尖底である。  
覆 土 暗褐色土~褐色土系の覆土で、締まりが弱いことから自然堆積と考えられる。  
備 考 出土遺物はなく、時期、性格ともに不明である。

### 04P(第10図 写真図版2)

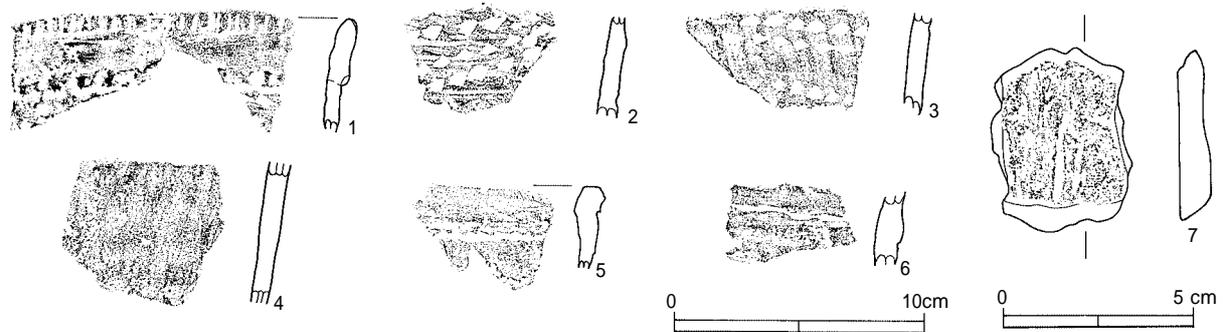
規 模 1.74m × 0.94m × 深さ0.14mの楕円形 長軸方位 N - 30° - E



第7図 01D 出土遺物(2)



第8図 02D 出土遺物



第9図 03D 出土遺物

壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。底面は皿状で、平坦面を意識してはいない。

覆 土 褐色土の覆土で、南方向からの自然堆積と考えられる。掘り直し、重複等はなかった。

備 考 出土遺物から、前期後半の土坑として考えられる。

#### 04P出土遺物(第11図 写真図版26)

1は、波状貝殻文に近い三角文を施文する深鉢胴部片である。07P2と同一個体と思われる。

#### 05P(第10図 写真図版3)

規 模 2.42m × (1.30m) × 深さ0.32m の隅丸長方形 長軸方位 N - 45° - W 南壁側はカクランを受ける。06Pを切っている。

壁・底面 壁はA側で緩やかに、A'側で角度をもって立ち上がる。底面は皿状でやや凹凸がある。

覆 土 褐色土の覆土で、自然堆積と考えられる。掘り直し、重複等はなかった。

備 考 出土遺物から、前期後半～中期前半の土坑として考えられる。

#### 05P出土遺物(第11図 写真図版26)

1は放射肋のない(無肋)貝による波状貝殻文で06P3と同一個体である。2は図の天地が逆で、単節LRの1段条における末端結節縄文[LR - RZ]で施文後にナデ消される。06P4と接合する。3は無文だが2と同一個体と考えられる。4は無文で、口唇に半截竹管による刺突が1ヵ所見られる。阿玉台式か。

#### 07P(第10図 写真図版3)

規 模 2.5m × 1.5m × 深さ0.16m の楕円形 長軸方位 N - 48° - W

壁・底面 壁は緩やかに立ち上がっている。底面は平坦である。

覆 土 褐色土の覆土で、自然堆積と考えられる。掘り直し、重複等はなかった。

備 考 出土遺物から、前期後半～末葉の土坑として考えられる。

#### 07P出土遺物(第11図 写真図版26)

覆土下層と上層において出土している。1は平行沈線・爪形文、押引平行沈線文を二種の半截竹管で施文する。06P1と同一個体である。2は波状貝殻文に近い三角文である。04P1と同一個体であろう。3は波状貝殻文(無肋)を施文する。4は2段の縄LR(末端結節された[LR - RZ])の側面圧痕で菱形状の文様を描出している。12P出土土器片と接合している。

#### 06P(第12図 写真図版3)

規 模 2.86m × 1.8m × 深さ1.42m の楕円形 長軸方位 N - 35° - W 05Pに切られる。

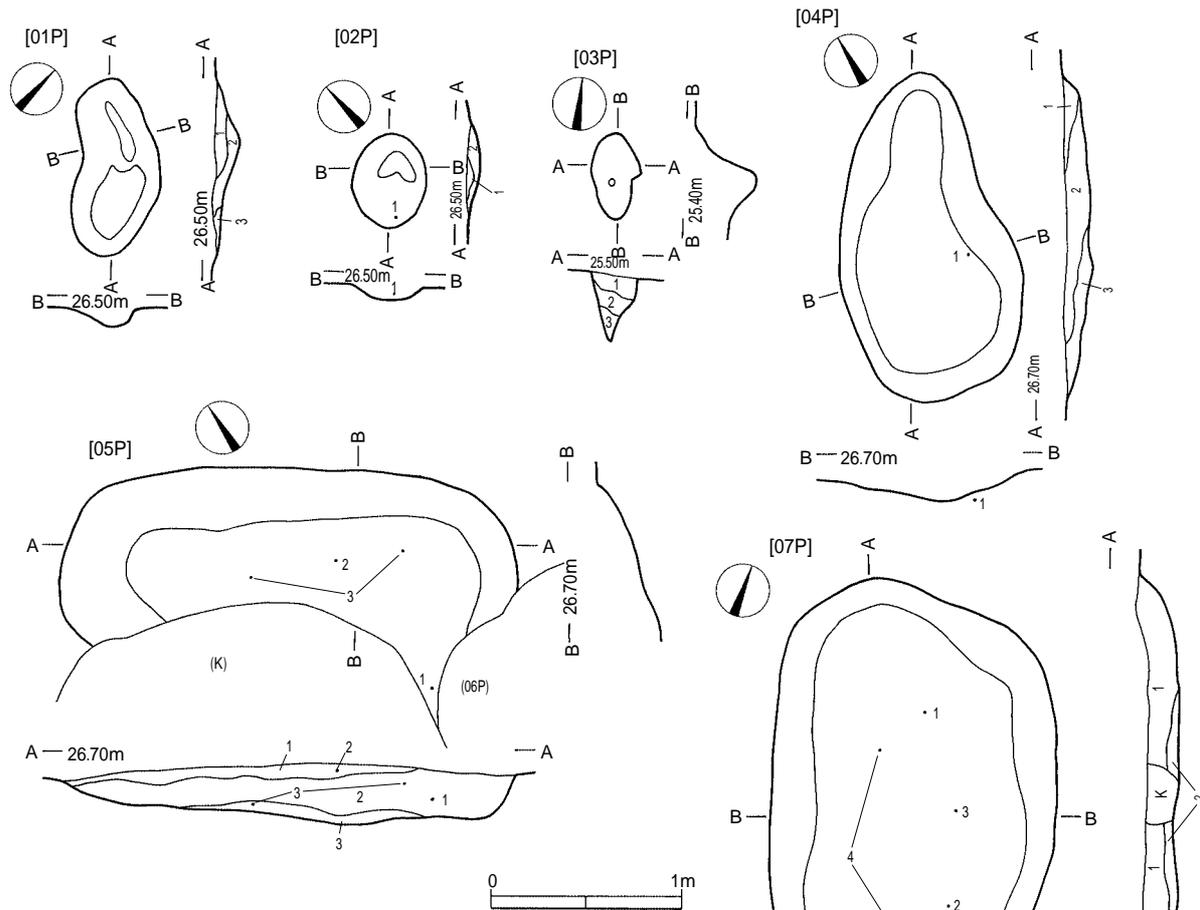
壁・底面 底面はほぼ平坦で、上場に近い楕円形である。壁は底面から角度をもって立ち上がる。上方でろう斗状に開いている。

覆 土 1～6.9～13層が暗褐色土を主体とした自然堆積層で、7.8.14～19層がロームを主体とした埋め戻し土である。

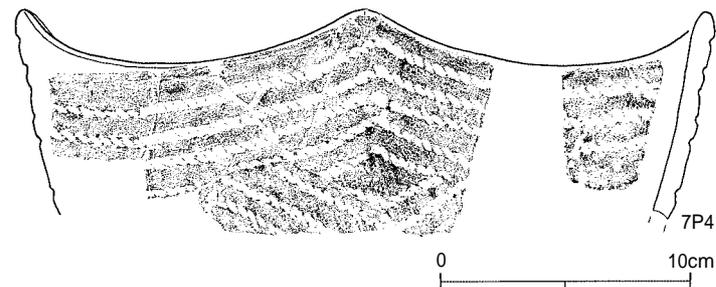
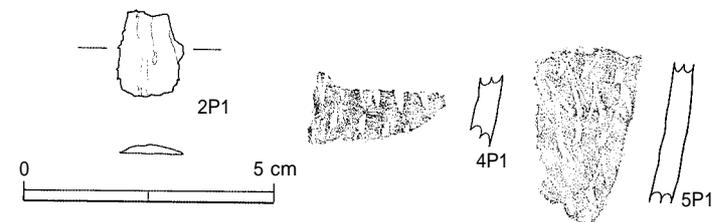
備 考 出土遺物から、前期後半以前の陥穴として考えられる。

#### 06P出土遺物(第13図 写真図版26)

覆土最上層において出土している。本跡に伴う遺物ではない。1は、棒状工具による単沈線の口縁部条線帯、半截竹管の刺突による凹凸文と爪形文を施文する。07P1と同一個体である。2は、底部に近い部分で、放射肋をもつ(有肋)貝による波状貝殻文を施文する。3も波状貝殻文(無肋)である。4は結節縄文[LR - RZ]である。05P2と接合する。5は、底部で浮島・興津式であろう。6は、阿玉台b式で三角形断面の隆帯に単列角押文が伴う。7は、土製珧状耳飾片であろう。8はホルンフェルスの石鏃で2.9cm、幅1.6cm、1.3gである。先端が欠損している。9は黒曜石の細石刃で2.0cm、幅7mm、0.2gである。下端部が欠損している。左辺側に刃こぼれが見られる。



第10図 01・02・03・04・05・07P 平面図



第11図 02・04・05・07P 出土遺物

- 01P 土層説明**
- 1 褐色土 暗褐色土が雲状に混入。粘性ふつう、しまり弱い。
  - 2 褐色土 明褐色土がブロック状に混入。粘性ふつう、しまり弱い。
  - 3 褐色土 粘性強くしまり弱い。
- 02P 土層説明**
- 1 暗褐色土 褐色土が雲状に混入。粘性ふつう、しまり弱い。
  - 2 褐色土 粘性ふつう、しまり弱い。
- 03P 土層説明**
- 1 暗褐色土 褐色土が雲状に混入。粘性強く、しまり弱い。
  - 2 褐色土 明褐色土、暗褐色土混合。粘性強く、しまり弱い。
  - 3 褐色土 明褐色土が斑点状に混入。粘性強く、しまり弱い。
- 04P 土層説明**
- 1 褐色土 明褐色土が斑点状に混入。粘性ふつう、しまり弱い。
  - 2 褐色土 明褐色土が雲状に混入。粘性強く、しまり弱い。
  - 3 褐色土 粘性強く、しまり弱い。
- 05P 土層説明**
- 1 褐色土 明褐色土が斑点状に混入。黒褐色土が少量混入。粘性ふつう、しまり弱い。
  - 2 褐色土 粘性強く、しまり弱い。
  - 3 褐色土 粘性強く、しまり弱い。2より明るい。
- 07P 土層説明**
- 1 褐色土 粘性強く、しまり弱い。
  - 2 褐色土 粘性強く、しまり弱い。1より明るい。

**08P (第12図 写真図版3)**

規 模 1.8m × 1.26m × 深さ0.26m の楕円形 長軸方位 N - 19° - E

壁・底面 壁は緩やかに立ち上がっている。底面は平坦ではなく、曲線を描くように傾斜している。

覆 土 褐色土の覆土で、自然堆積と考えられる。掘り直し、重複等はなかった。

備 考 出土遺物は浮いた状態であるが、中期前半の土坑か。

**08P 出土遺物 (第13図 写真図版26)** 三角形断面の隆帯が垂下する。阿玉台 b式である。

**09P (第14図 写真図版3)**

規 模 1.54m × 0.84m × 深さ0.16m の楕円形 長軸方位 S - 76° - W

壁・底面 壁は緩やかに立ち上がっている。底面は平坦ではなく、曲線を描くように傾斜している。

覆 土 褐色土の覆土で、自然堆積と考えられる。掘り直し、重複等はなかった。

備 考 出土遺物はなく、時期、性格ともに不明である。

**10P (第14図 写真図版3)**

規 模 1.18m × 0.88m × 深さ0.28m の不整楕円形 長軸方位 N - 68° - W

壁・底面 壁は北側で緩やかに、南側で角度をもって立ち上がっている。底面はほぼ平坦である。

覆 土 褐色土系の覆土で、しまりが弱い点もあり、自然堆積と考えられる。

備 考 出土遺物は浮いた状態であるが、中期前半の土坑と考えられる。

**10P 出土遺物 (第15図 写真図版26)**

覆土上層において出土している。1・3は同一個体で、遺構外16とも同一である。単節LRの0段における端末結節縄文S ([LR - 1S])である。2は阿玉台 b式の扇状把手で、三角形断面の隆帯と単列角押文で枠状区画をつくり、胴部は輪積痕と貝殻腹縁刺突によるヒダ状文である。4は阿玉台式の網代底部である。網代は2本越え、2本潜り、1本送りでつくられる。胴は隆帯が垂下する。

**11P (第14図 写真図版3)**

規 模 2.66m × 1.04m × 深さ0.15m の楕円形 長軸方位 S - 66° - W

壁・底面 壁は緩やかに立ち上がっている。底面はほぼ平坦である。

覆 土 褐色土の覆土で、自然堆積と考えられる。掘り直し、重複等はなかった。

備 考 本遺構に伴うかむずかしいが、前期末葉の土坑か。

**11P 出土遺物 (第15図 写真図版26)** 口縁下に2段の縄LRの側面圧痕で菱形を描出する。

**12P (第14図 写真図版3)**

規 模 1.64m × 1.04m × 深さ0.12m の楕円形 長軸方位 N - 82° - W

壁・底面 壁は緩やかに立ち上がっている。底面はほぼ平坦である。

覆 土 褐色土系の覆土で、西方向からの自然堆積と考えられる。

備 考 出土遺物から、前期後半の土坑と考えられる。

**12P 出土遺物 (第15図 写真図版26)**

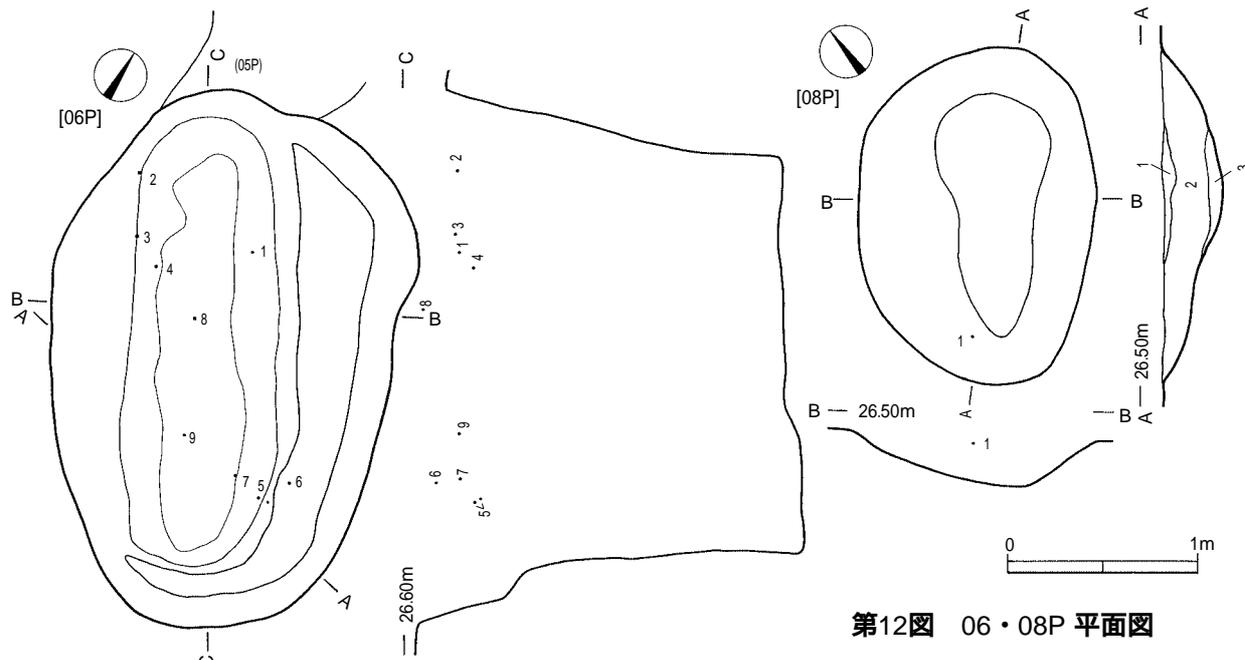
1は平行沈線文内に変形爪形文を施文する。2は土製塊状耳飾の半欠損品で、胎土は長石、雲母を含み粒子が細かい。3~5 共に珪質頁岩の剥片である。3は0.8cm,幅0.6cm,重さ0.1gである。4は1.7cm,幅1.6cm,重さ0.4gである。5は1.1cm,幅1.3cm,重さ0.08g である。

**13P (第14図 写真図版4)**

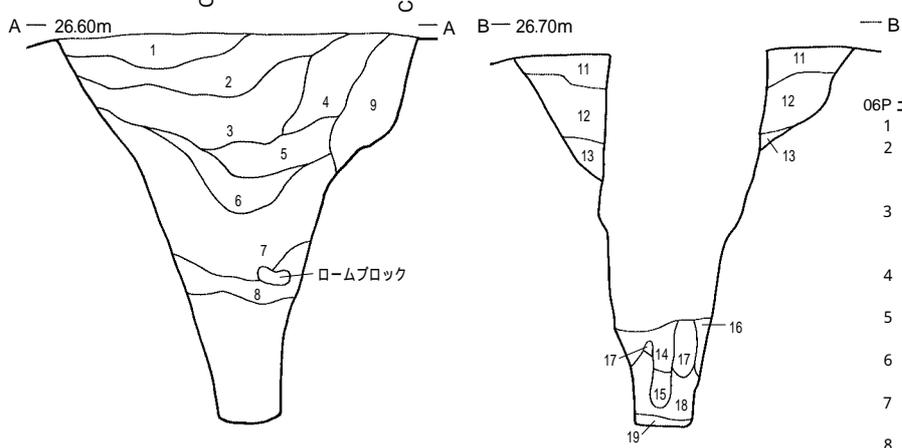
規 模 1.30m × 0.66m × 深さ0.12m の楕円形 長軸方位 N - 50° - W

壁・底面 壁は緩やかに立ち上がっている。底面はほぼ平坦である。

覆 土 褐色土の覆土で、自然堆積と考えられる。掘り直しや重複は見られない。



第12図 06・08P 平面図

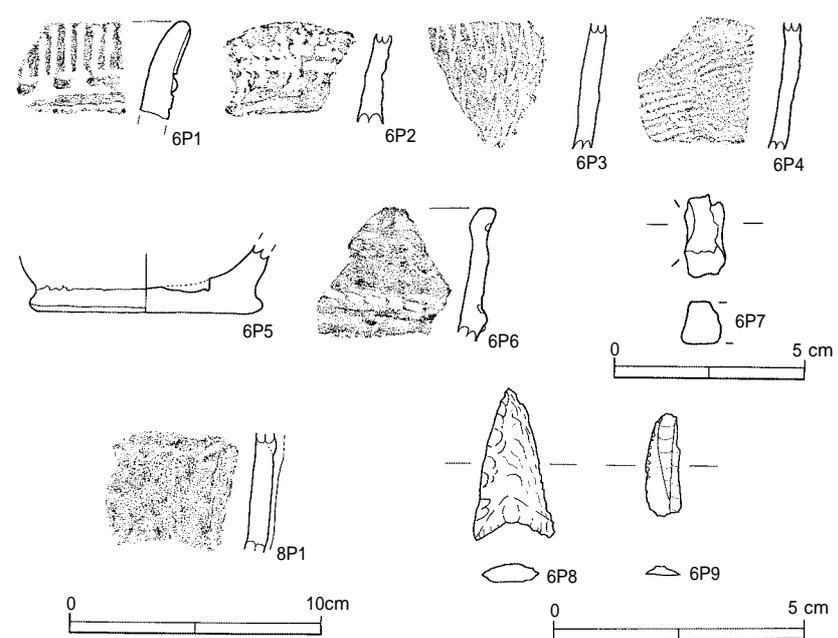


06P 土層説明

- 1 褐色土 粘性ふつう、しまり弱い。
- 2 褐色土 明褐色土が斑点状に混入。1mm 大炭化粒少量混入。粘性ふつう、しまりふつう。
- 3 暗褐色土 褐色土が斑点状に混入。1mm 大炭化粒、焼土粒少量混入。粘性強く、しまり弱い。
- 4 褐色土 褐色土が斑点状に混入。粘性ふつう、しまり弱い。
- 5 暗褐色土 - 黒褐色土 粘性強く、しまり弱い。
- 6 暗褐色土 明褐色土が斑点状に混入。粘性強く、しまり弱い。
- 7 褐色土 2 - 12cm大ロームブロック混入。粘性強く、しまり弱い。
- 8 暗褐色土 明褐色土を混入。粘性強く、しまり極めて弱い。
- 9 褐色土 明褐色土が斑点状に混入。粘性ふつう、しまり弱い。
- 11 褐色土 1層に相当。粘性強く、しまり弱い。
- 12 暗褐色土 3層に相当。褐色土が斑点状に混入。粘性ふつう、しまり弱い。
- 13 褐色土 4層に似る。粘性強く、しまり弱い。
- 14 褐色土 - 明褐色土 ぼそぼそする。粘性強く、しまり極めて弱い。
- 15 褐色土 - 明褐色土 - 暗褐色土混合。粘性極めて強く、しまり極めて弱い。
- 16 褐色土 - 明褐色土混合。粘性強く、しまり極めて弱い。
- 17 褐色土 縦長の亀裂のような隙間が見られる。粘性強く、しまり弱い。
- 18 褐色土 粘性強く、しまり弱い。
- 19 褐色土 - 暗褐色土 径1 - 2mm 大で長さ2cmの炭化材混入。粘性極めて強く、しまり弱い。

08P 土層説明

- 1 褐色土 やや暗い褐色土が雲状に混入。粘性強く、しまり弱い。
- 2 褐色土 明褐色土が斑点状に混入。粘性強く、しまり弱い。
- 3 褐色土 粘性強く、しまり弱い。



第13図 06・08P 出土遺物

備考 出土遺物から、前期後半の土坑と考えられる。

### 13 P 出土遺物 (第15図 写真図版26)

1は、波状貝殻文(有肋)を施文する。2は、胴部片で無文だが前期後半か。3は黒曜石の細石核で、2.0cm、幅1.5cm、重さ2.0gである。押圧剥離による稜が明瞭である。

### 14 P (第16図 写真図版4)

規模 1.21m × 0.84m × 深さ0.74m の不整形

壁・底面 壁は西側で段をもちながら、東は角度をもって立ち上がる。底面は部分的に平坦である。

覆土 1~3層が自然堆積、4~6層は埋め戻し層か。重複は見られない。

備考 出土遺物から、前期後半ないし中期前半の土坑と考えられる。

14 P 出土遺物 (第17図 写真図版26) 1は無文で阿玉台式、2は三角文を施文しており、浮島式である。3は、右辺側に微細剥離痕のある剥片で、2.8cm、幅1.1cm、重さ1.6gである。

### 15 P (第16図 写真図版4)

規模 1.96m × 1.20m × 深さ0.16m の楕円形 長軸方位 N - 10° - E

壁・底面 壁は西側で角度をもって、東は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

覆土 褐色土の覆土で、自然堆積と考えられる。掘り直しや重複は見られない。

備考 出土遺物から、前期後半の土坑と考えられる。

### 15 P 出土遺物 (第17図 写真図版26)

1は口縁部条線帯がヘラによる単沈線で、胴部に三角文を施文する。浮島式である。

### 16 P (第16図 写真図版4)

規模 0.84m × 0.52m × 深さ0.14m の楕円形 長軸方位 N - 82° - W 01Mに切られる。

壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦であるが、小ピットが見られる。

覆土 暗褐色土~褐色土の単一層である。掘り直しや重複は見られない。

備考 出土遺物から、中期前半の土坑と考えられる。

### 16 P 出土遺物 (第17図 写真図版26)

1は阿玉台式で、隆帯を貼付し、口唇上に棒状工具の押圧を加えている。

### 17 P (第16図 写真図版4)

規模 1.54m × 0.96m × 深さ0.1mの楕円形 長軸方位 N - 25° - E

壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。皿状の断面である。

覆土 褐色土の覆土で、自然堆積と考えられる。掘り直しや重複は見られない。

備考 出土遺物から、中期前半の土坑と考えられる。

17 P 出土遺物 (第17図 写真図版27) 1・2は無文だが、胎土から阿玉台式と考えられる。3は、黒曜石の剥片で、2.3cm、幅2.3cm、重さ2.5gである。

### 18 P (第16図 写真図版4)

規模 0.98m × 0.98m × 深さ0.2mの円形

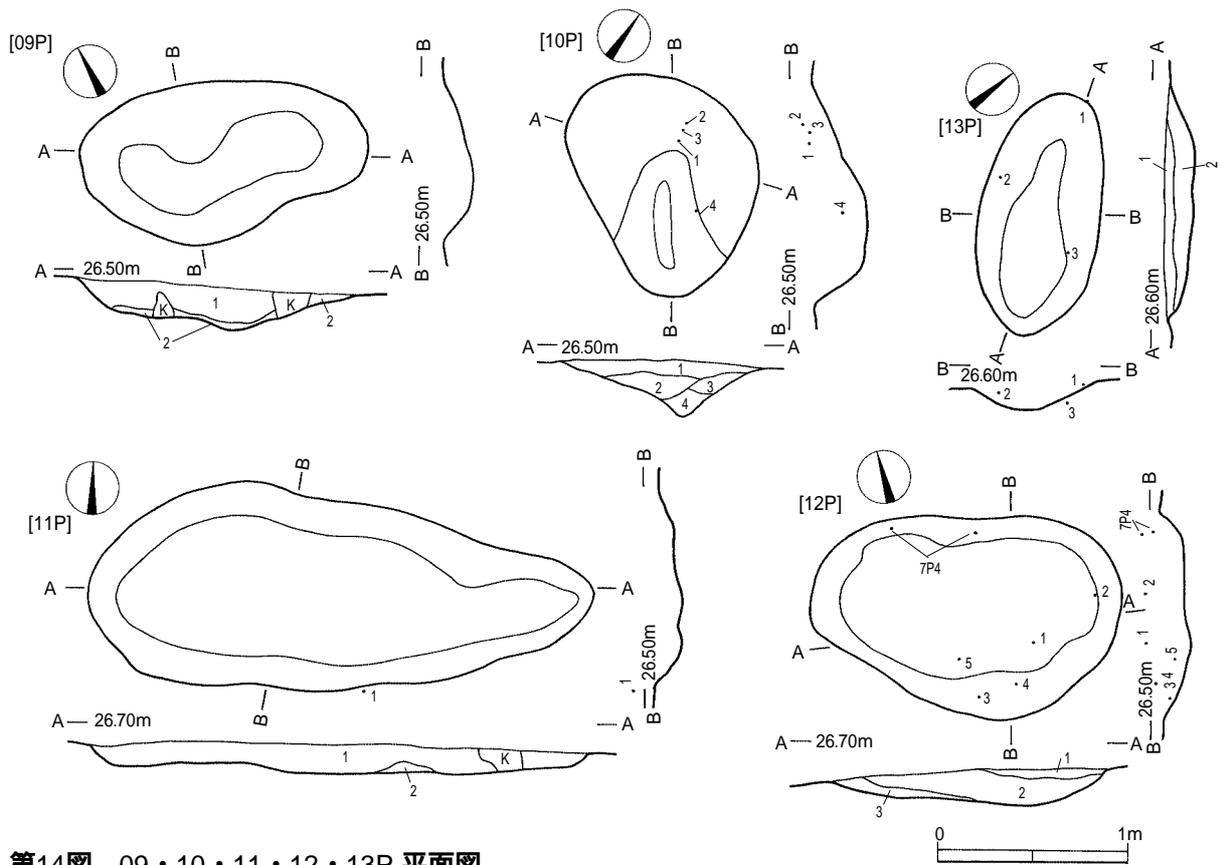
壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。

覆土 暗褐色土の覆土で、自然堆積と考えられる。掘り直しや重複は見られない。

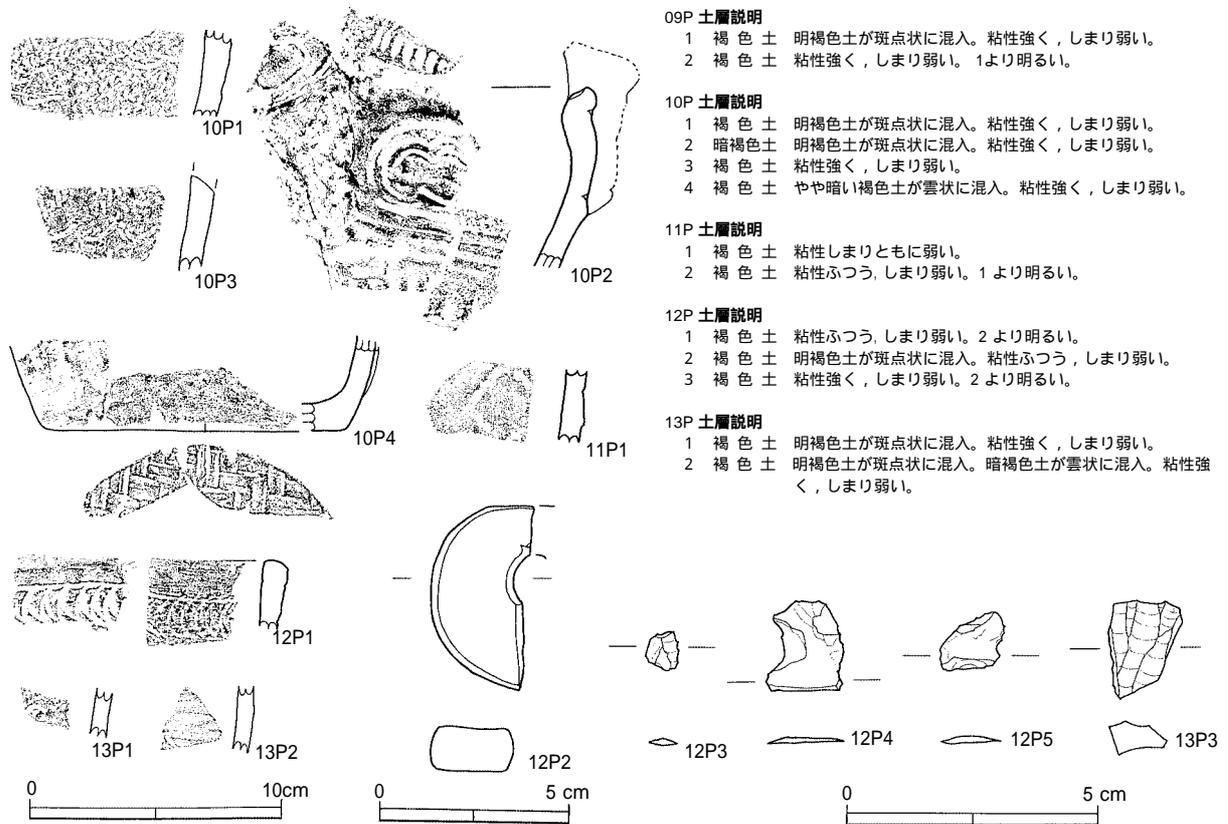
備考 出土遺物から、中期前半の土坑と考えられる。

### 18 P 出土遺物 (第17図 写真図版27)

1は阿玉台式で、輪積痕をヒダ状化している。2は無文だが、阿玉台式であろう。3は加曽利E式で、沈線区画内に単節RLを充填している。



第14図 09・10・11・12・13P 平面図



09P 土層説明

- 1 褐色土 明褐色土が斑点状に混入。粘性強く、しまり弱い。
- 2 褐色土 粘性強く、しまり弱い。1より明るい。

10P 土層説明

- 1 褐色土 明褐色土が斑点状に混入。粘性強く、しまり弱い。
- 2 暗褐色土 明褐色土が斑点状に混入。粘性強く、しまり弱い。
- 3 褐色土 粘性強く、しまり弱い。
- 4 褐色土 やや暗い褐色土が雲状に混入。粘性強く、しまり弱い。

11P 土層説明

- 1 褐色土 粘性しまりともに弱い。
- 2 褐色土 粘性ふつう、しまり弱い。1より明るい。

12P 土層説明

- 1 褐色土 粘性ふつう、しまり弱い。2より明るい。
- 2 褐色土 明褐色土が斑点状に混入。粘性ふつう、しまり弱い。
- 3 褐色土 粘性強く、しまり弱い。2より明るい。

13P 土層説明

- 1 褐色土 明褐色土が斑点状に混入。粘性強く、しまり弱い。
- 2 褐色土 明褐色土が斑点状に混入。暗褐色土が雲状に混入。粘性強く、しまり弱い。

第15図 10・11・12・13P 出土遺物

### 19P (第16図 写真図版4)

規 模 1.12m × 0.84m × 深さ0.24m の楕円形 長軸方位 N - 9° - W

壁・底面 壁は角度をもって立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

覆 土 暗褐色土の覆土で、自然堆積と考えられる。掘り直し、重複等はなかった。

備 考 出土遺物はなく、時期、性格ともに不明である。

### 20P (第16図 写真図版4)

規 模 1.30m × 1.02m × 深さ0.5mの不整形円形 長軸方位 N - 32° - E

壁・底面 壁は角度をもって立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

覆 土 図示できないが、褐色土の覆土で、ロームブロックを混入した人為堆積である。

備 考 出土遺物は浮いており明確ではないが、中期前半の土坑か。

20P出土遺物(第17図 写真図版27) 三角形断面の隆帯に単列角押文を施文する。

### 21P (第18図 写真図版5)

規 模 1.54m × 1.12m × 深さ0.36m の隅丸長方形 長軸方位 N - 21° - E

壁・底面 壁は角度をもって立ち上がる。底面は平坦だが、0.5m × 0.4m × 深さ0.16m のピットがある。

覆 土 暗褐色土の覆土で、2・3層は自然堆積と考えられる。掘り直し、重複等はなかった。

備 考 出土遺物はなく、時期、性格ともに不明である。

### 22P (第18図 写真図版5)

規 模 2.32m × 1.62m × 深さ0.3mの不整形楕円形 長軸方位 N - 25° - W

壁・底面 壁は傾斜をもって立ち上がる。底面は平坦である。

覆 土 暗褐色土を主体とした自然堆積層である。掘り直し、重複等はなかった。

備 考 出土遺物は、前期後半～中期後半と幅が見られる。時期の特定はできない。

22P出土遺物(第19図 写真図版27) 1は、櫛歯状工具(6本?)による条線文である。2は半截竹管による爪形文で、浮島式の浅鉢である。4は単節LR、5は単節RLで前期末葉、6は単節LRで諸磯b式である。7は口縁部に馬蹄形貼付文、胴部に縦位単沈線を施文する。類例を知らないが、前期末葉と考えたい。8・9は同一個体で五領ヶ台式であろう。沈線に沿って管状工具の刺突列が施文される。

### 24P (第18図 写真図版5)

規 模 0.94m × 0.9m × 深さ0.38m の円形

壁・底面 壁は角度をもって立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

覆 土 黒褐色土～暗褐色土の覆土で、自然堆積と考えられる。掘り直し、重複等はなかった。

備 考 出土遺物はなく、時期、性格ともに不明である。

### 25P (第18図 写真図版5)

規 模 2.18m × 1.68m × 深さ0.66mの不整形円形 長軸方位 N - 42° - E

壁・底面 壁は角度をもって立ち上がる。底面はやや凹凸があるが、平坦である。

覆 土 1～4層は自然堆積、5・6層は人為堆積の覆土と考えられる。掘り直しは見られなかった。

備 考 出土遺物はなく、時期、性格ともに不明である。

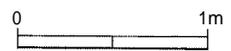
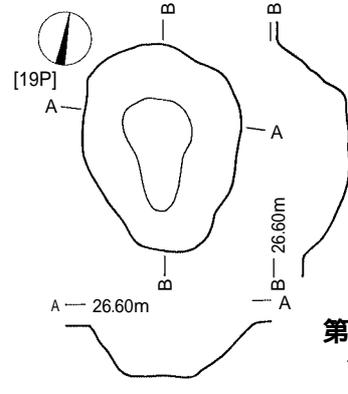
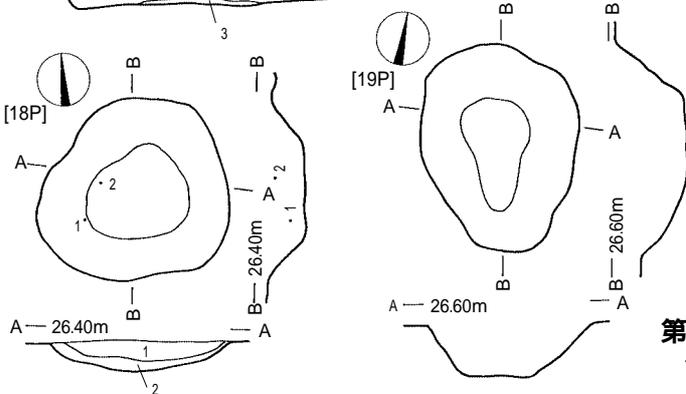
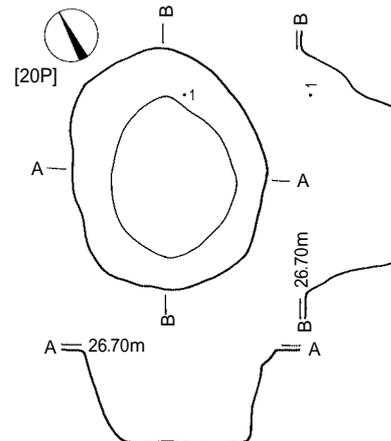
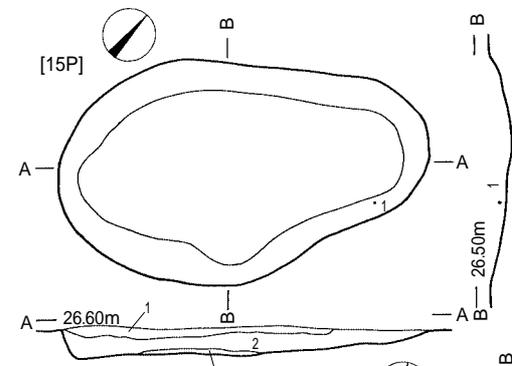
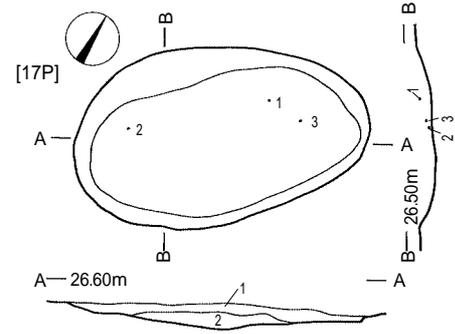
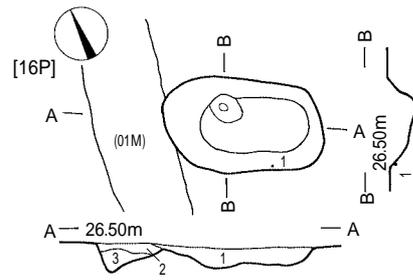
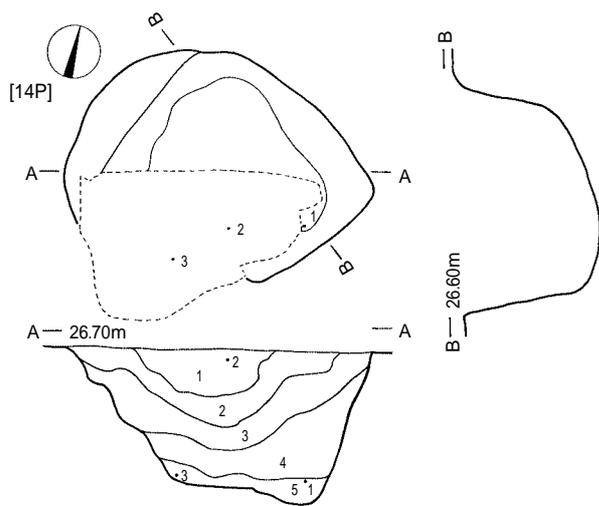
### 26P (第18図)

規 模 0.8m × 0.8m × 深さ0.28m の円形

壁・底面 壁は角度をもって立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

覆 土 暗褐色土の覆土で、自然堆積と考えられる。掘り直し、重複等はなかった。

備 考 出土遺物はなく、時期、性格ともに不明である。



第16図 14・15・16・17・18・19・20P 平面図

14P 土層説明

- 1 黒褐色土 褐色土がごく少量混入。粘性ふつう、しまり弱い。
- 2 暗褐色土～明褐色土 粘性強く、しまり弱い。1,3の混合層。
- 3 褐色土 4より明るい。粘性強く、しまり弱い。
- 4 褐色土 粘性強く、しまり弱い。
- 5 褐色土 4より明るい。粘性強く、しまり弱い。

15P 土層説明

- 1 褐色土 やや暗い褐色土がごく少量混入。粘性強く、しまり弱い。
- 2 褐色土 明褐色土が斑点状に混入。粘性強く、しまり弱い。
- 3 褐色土 粘性強く、しまり弱い。

16P 土層説明

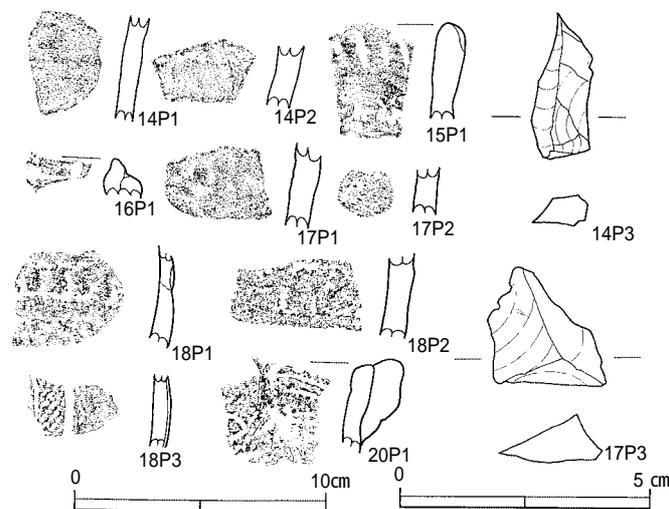
- 1 褐色土～暗褐色土 明褐色土が斑点状に混入。粘性ふつう、しまり弱い。
- 2・3 不明

17P 土層説明

- 1 褐色土 粘性ふつう、しまり弱い。
- 2 褐色土 暗褐色土が斑点状に混入。粘性ふつう、しまり弱い。

18P 土層説明

- 1 暗褐色土 少量のロームが斑点状に混入。微量の黒色土混入。粘性弱く、しまりふつう。
- 2 暗黄褐色土 微量の暗褐色土混入。粘性弱く、しまりふつう。



第17図 14・15・16・17・18・20P 出土遺物

### 27P (第20図 写真図版5)

規 模 0.89m × 0.68m × 深さ0.38m の楕円形 長軸方位 N - 66° - E  
壁・底面 壁は傾斜をもって立ち上がる。底面は平坦ではなく、U字状の断面をもつ。  
覆 土 暗褐色土の覆土で、自然堆積と考えられる。掘り直し、重複等はなかった。  
備 考 出土遺物は本跡に伴うかむずかしいが、前期後半の土坑か。

27P出土遺物(第21図 写真図版27) 覆土上層において出土している。1は櫛歯状工具(5本)による条線文である。2はガラス質黒色安山岩の剥片で、2.2cm,幅2.9cm,重さ2.5gである。

### 28P (第20図 写真図版5)

規 模 1.12m × 0.86m × 深さ0.34m の不整円形 長軸方位 N - 40° - E  
壁・底面 壁は傾斜をもって立ち上がっている。底面はやや凹凸はあるが、平坦である。  
覆 土 暗褐色土の覆土で、自然堆積と考えられる。  
備 考 出土遺物はなく、時期、性格ともに不明である。

### 29P (第20図 写真図版5)

規 模 2.48m × 1.06m × 深さ0.22m の楕円形 長軸方位 N - 47° - E  
壁・底面 壁は緩やかに立ち上がっている。底面は平坦である。  
覆 土 暗褐色土の覆土で、自然堆積と考えられる。  
備 考 出土遺物はなく、時期、性格ともに不明である。

### 30P (第20図 写真図版6)

規 模 2.17m × 1.88m × 深さ0.34m の不整円形 長軸方位 N - 54° - W  
壁・底面 壁はやや傾斜をもって立ち上がる。底面はほぼ平坦だが、南東立ち上がり部分に0.36m × 0.36m × 深さ0.1mの円形ピットが検出された。  
覆 土 暗褐色土の覆土で、自然堆積と考えられる。掘り直し、重複等はなかった。  
備 考 本遺構に伴うかむずかしいが、前期後半の土坑か。

30P出土遺物(第21図 写真図版27) 1は、波状貝殻文(有肋)を施文している。2は、天地逆だが2種類の原体による三角文である。3は三角形断面の隆帯と単列角押文、ヒダ状文を施文する。

### 31P (第20図 写真図版6)

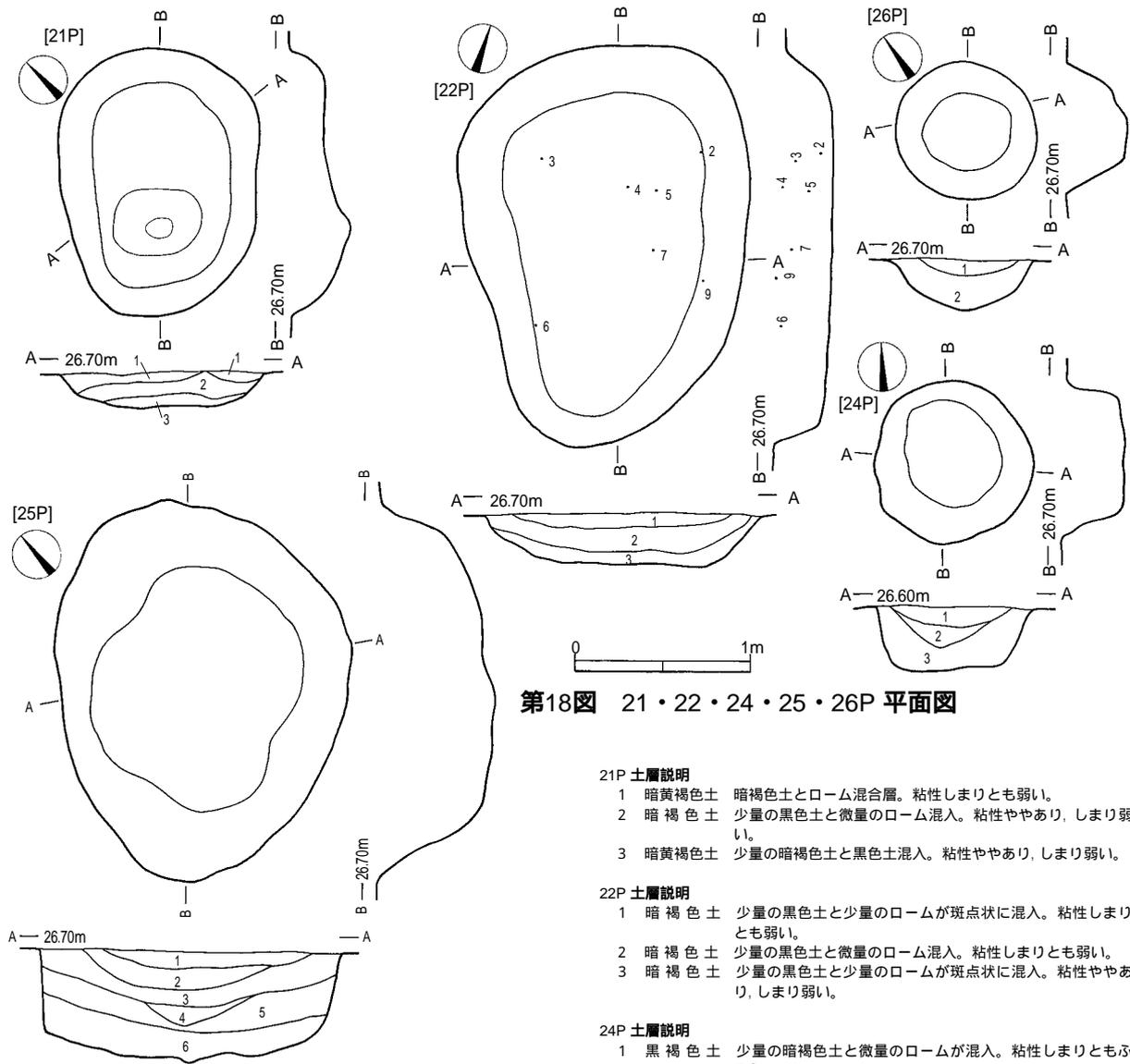
規 模 2.12m × 1.12m × 深さ0.22m の楕円形 長軸方位 N - 43° - E  
壁・底面 壁は緩やかに立ち上がっている。底面は平坦である。  
覆 土 暗褐色土の単一層で、自然堆積と考えられる。  
備 考 出土遺物はなく、時期、性格ともに不明である。

### 32P (第20図 写真図版6)

規 模 1.72m × 0.86m × 深さ0.18m の楕円形 長軸方位 N - 30° - E  
壁・底面 壁は緩やかに立ち上がるが、南側で中場をもつ。底面は平坦である。  
覆 土 自然堆積層であり、2基のピットの重複ではなく、単一遺構である。  
備 考 出土遺物はなく、時期、性格ともに不明である。

### 33P (第20図 写真図版6)

規 模 1.42m × 1.40m × 深さ0.18m の円形  
壁・底面 壁は緩やかに立ち上がっている。底面は平坦であるが、中央やや東に0.34m × 0.34m × 深さ0.08mの円形ピットが検出された。  
覆 土 暗褐色土の覆土で、自然堆積と考えられる。



第18図 21・22・24・25・26P 平面図

21P 土層説明

- 1 暗褐色土 暗褐色土とローム混合層。粘性しまりとも弱い。
- 2 暗褐色土 少量の黒色土と微量のローム混入。粘性ややあり、しまり弱い。
- 3 暗褐色土 少量の暗褐色土と黒色土混入。粘性ややあり、しまり弱い。

22P 土層説明

- 1 暗褐色土 少量の黒色土と少量のロームが斑点状に混入。粘性しまりとも弱い。
- 2 暗褐色土 少量の黒色土と微量のローム混入。粘性しまりとも弱い。
- 3 暗褐色土 少量の黒色土と少量のロームが斑点状に混入。粘性ややあり、しまり弱い。

24P 土層説明

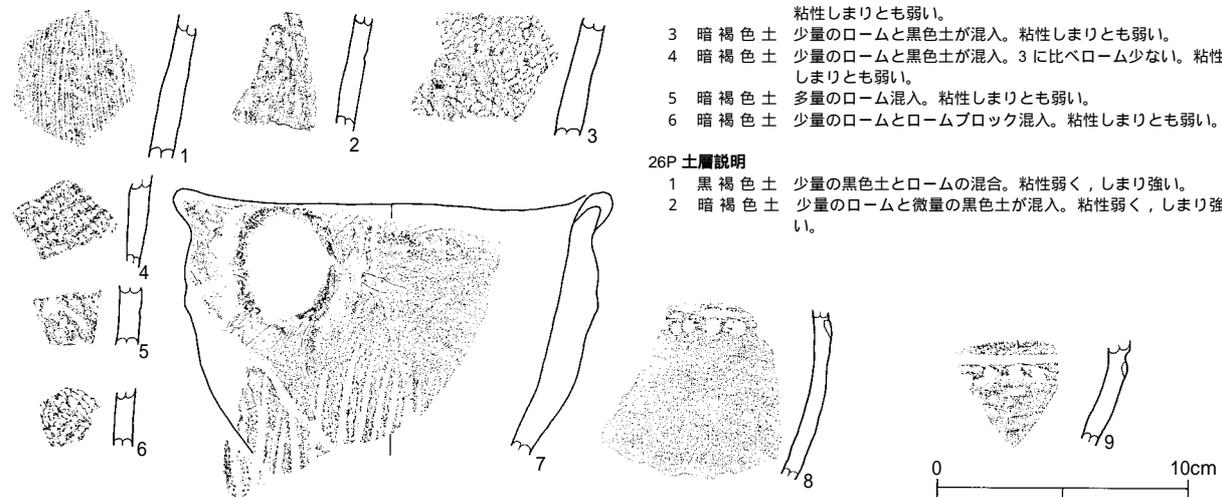
- 1 黒褐色土 少量の暗褐色土と微量のロームが混入。粘性しまりともふつう。
- 2 暗褐色土 少量の黒色土とローム混入。粘性しまりともふつう。
- 3 暗褐色土 少量のロームと微量の黒色土が混入。粘性ややあり、しまり強い。

25P 土層説明

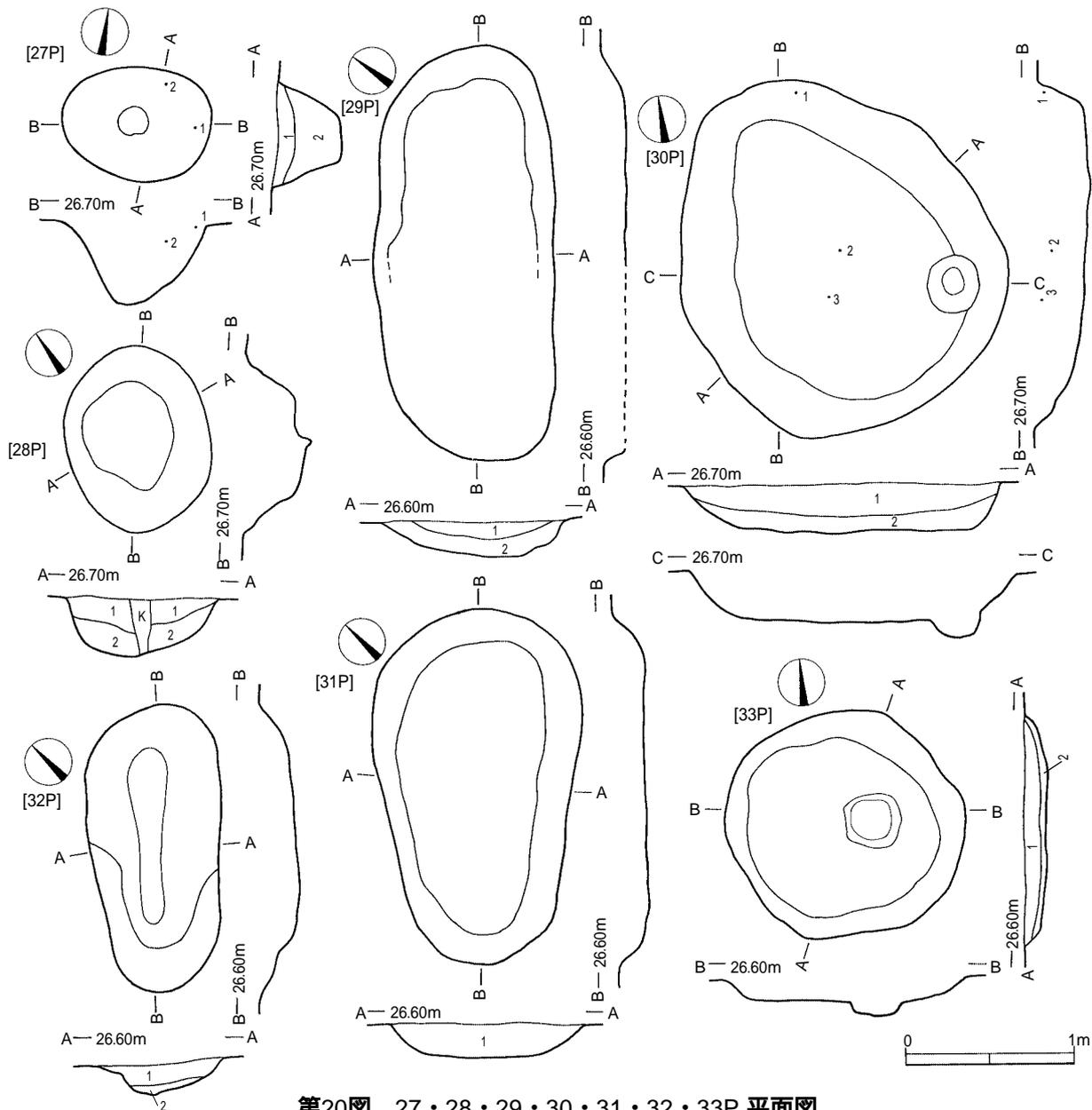
- 1 暗褐色土 少量の黒色土と微量のロームが混入。粘性しまりとも弱い。
- 2 暗褐色土 少量のロームと微量の黒色土が混入。部分的にローム多い。粘性しまりとも弱い。
- 3 暗褐色土 少量のロームと黒色土が混入。粘性しまりとも弱い。
- 4 暗褐色土 少量のロームと黒色土が混入。3に比べローム少ない。粘性しまりとも弱い。
- 5 暗褐色土 多量のローム混入。粘性しまりとも弱い。
- 6 暗褐色土 少量のロームとロームブロック混入。粘性しまりとも弱い。

26P 土層説明

- 1 黒褐色土 少量の黒色土とロームの混合。粘性弱く、しまり強い。
- 2 暗褐色土 少量のロームと微量の黒色土が混入。粘性弱く、しまり強い。



第19図 22P 出土遺物



第20図 27・28・29・30・31・32・33P 平面図

27P 土層説明

- 1 暗褐色土 少量の黒色土と微量のロームが混入。粘性しまりとも弱い。
- 2 暗黄褐色土 少量の黒色土が混入。粘性しまりとも弱い。

28P 土層説明

- 1 暗褐色土 少量の黒色土と微量のロームが混入。粘性しまりとも弱い。
- 2 暗黄褐色土 少量の暗褐色土が混入。粘性しまりとも弱い。

29P 土層説明

- 1 暗褐色土 微量の黒色土と少量のロームが斑点状に混入。粘性しまりとも弱い。
- 2 暗褐色土 少量のロームが混入。粘性しまりとも弱い。

30P 土層説明

- 1 暗褐色土 少量の黒色土と微量のロームが混入。粘性しまりとも弱い。
- 2 暗褐色土 少量のロームと微量の黒色土が混入。粘性弱く、しまりややあり。

31P 土層説明

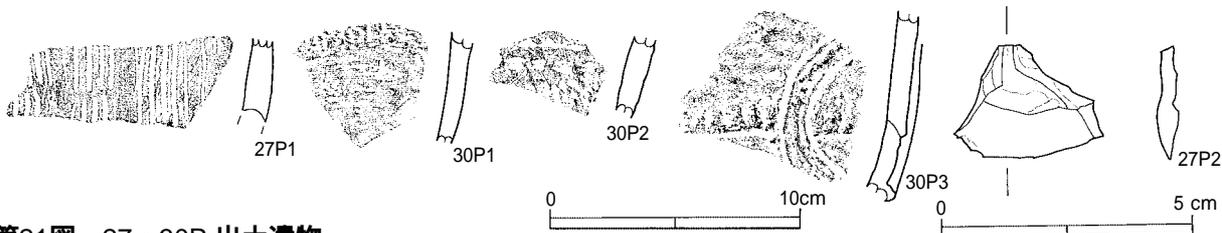
- 1 暗褐色土 少量の黒色土と微量のロームが混入。粘性しまりとも弱い。

32P 土層説明

- 1 暗褐色土 少量の黒色土と微量のロームが混入。粘性しまりとも弱い。
- 2 暗黄褐色土 多量のロームが混入。粘性しまりとも弱い。

33P 土層説明

- 1 暗褐色土 少量の黒色土と微量のロームが混入。粘性しまりとも弱い。
- 2 暗褐色土 少量のロームと黒色土が混入。粘性しまりとも弱い。



第21図 27・30P 出土遺物

備考 出土遺物はなく，時期，性格ともに不明である。

#### 34P (第22図 写真図版6)

規模 1.22m × 1.16m × 深さ0.36m の不整形 長軸方位 N - 64° - W

壁・底面 壁は角度をもって立ち上がる。底面は二段で，深さは0.18m,0.36m である。

覆土 2層の自然堆積層で，重複は見られない。

備考 出土遺物はなく，時期，性格ともに不明である。

#### 35P (第22図 写真図版6)

規模 1.24m × 1.08m × 深さ0.24m の長円形 長軸方位 N - 68° - W

壁・底面 壁は緩やかに立ち上がっている。底面は平坦である。

覆土 暗褐色土の覆土で，自然堆積と考えられる。

備考 出土遺物はなく，時期，性格ともに不明である。

#### 36P (第22図 写真図版6)

規模 0.70m × 0.58m × 深さ0.2mの長円形 長軸方位 N - 74° - W

壁・底面 壁は緩やかに立ち上がっている。底面はややU字状である。

覆土 暗褐色土の覆土で，自然堆積と考えられる。

備考 出土遺物はなく，時期，性格ともに不明である。

#### 37P (第22図 写真図版6)

規模 0.58m × 0.6m × 深さ0.18m の円形

壁・底面 壁は緩やかに立ち上がっている。底面はややU字状である。

覆土 暗褐色土の覆土で，自然堆積と考えられる。

備考 出土遺物はなく，時期，性格ともに不明である。

#### 38P (第22図 写真図版7)

規模 1.4m × 1.06m × 深さ0.16m の楕円形 長軸方位 S - 82° - W

壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。皿状の断面である。

覆土 暗褐色土の覆土で，自然堆積と考えられる。掘り直しや重複は見られない。

備考 出土遺物は幅があり，時期特定はむずかしい。

38P 出土遺物 (第23図 写真図版27) 1は胴部に三角文を施文する。2は頸部である。窓枠状隆帯中に連弧状に沈線を施文している。阿玉台 b式である。

#### 39P (第22図 写真図版7)

規模 1.7m × 1.32m × 深さ0.16m の長円形 長軸方位 N - 20° - E

壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。

覆土 暗褐色土の覆土で，自然堆積と考えられる。掘り直しや重複は見られない。

備考 遺物は覆土上層からの出土であり，時期については判然としない。

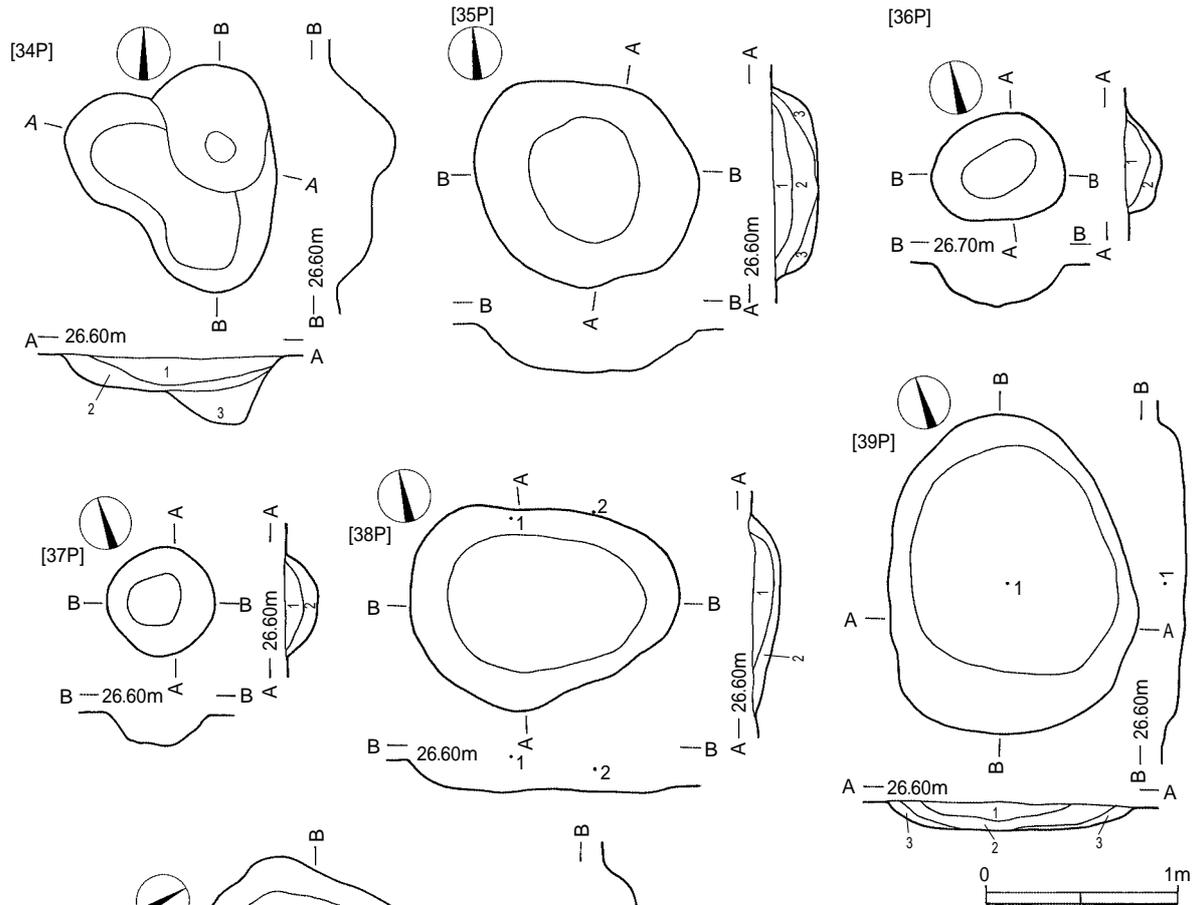
39P 出土遺物 (第23図 写真図版27) 1は三角形断面の隆帯と単列角押文，輪積部にヒダ状文を施文している。阿玉台 b式である。

#### 40P (第22図 写真図版27)

規模 2.94m × 2.52m × 深さ0.24m の不整形 長軸方位 N - 56° - W

壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。底面は平坦であるが，東側に向けて傾斜している。壁際に二口，中央とやや寄った部分に二口小ピットが穿たれる。5～10cm程度と浅い。

覆土 暗褐色土の覆土で，自然堆積と考えられる。掘り直しや重複は見られない。



第22図 34・35・36・37・38・39・40P 平面図

34P 土層説明

- 1 暗褐色土 少量のロームと黒色土が混入。粘性しまりとも弱い。
- 2 暗褐色土 少量の黒色土と微量のロームが混入。粘性弱く、しまりやや強い。
- 3 不明

35P 土層説明

- 1 暗褐色土 少量の黒色土と微量のロームが混入。粘性しまりとも弱い。
- 2 暗褐色土 少量のロームと微量の黒色土が混入。粘性しまりとも弱い。
- 3 暗黄褐色土 少量の暗褐色土が混入。粘性しまりとも弱い。

36P 土層説明

- 1 暗褐色土 少量の黒色土と微量のロームが混入。粘性しまりとも弱い。
- 2 暗褐色土 少量のロームと微量の黒色土が混入。1cm 大のローム粒含む。粘性しまりとも弱い。

37P 土層説明

- 1 暗褐色土 少量の黒色土と微量のロームが混入。粘性しまりとも弱い。
- 2 暗黄褐色土 少量の暗褐色土が混入。粘性しまりとも弱い。

38P 土層説明

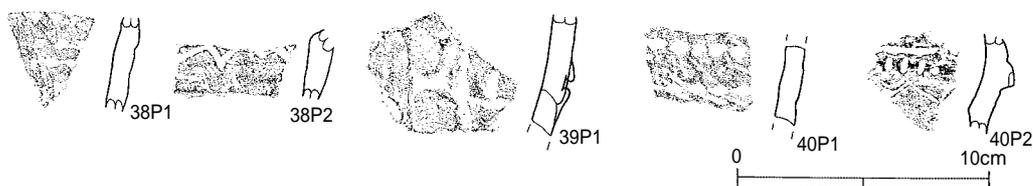
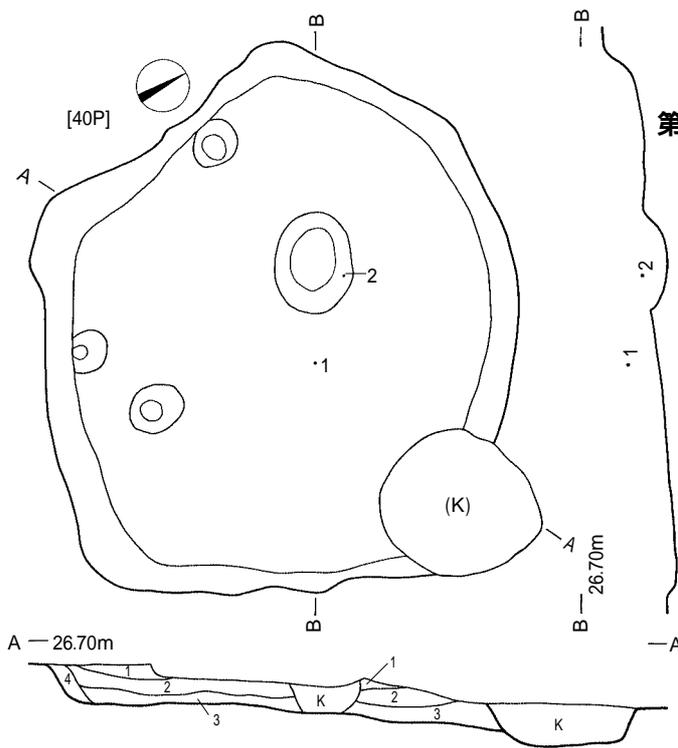
- 1 暗褐色土 少量の黒色土と微量のロームが混入。粘性しまりとも弱い。
- 2 暗褐色土 少量のロームが混入。粘性しまりとも弱い。

39P 土層説明

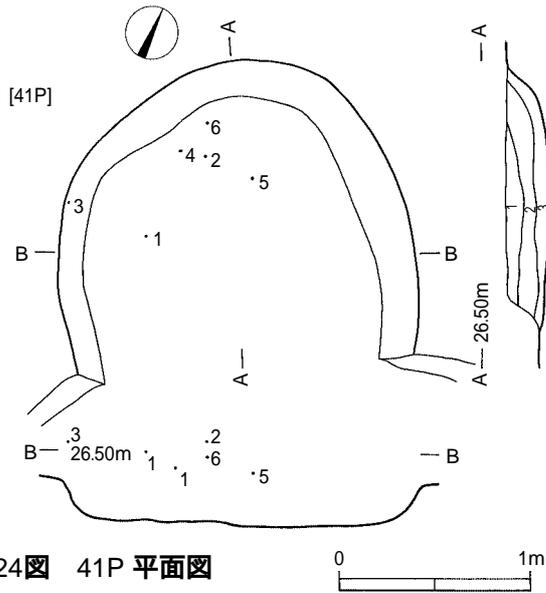
- 1 暗褐色土 少量の黒色土と微量のロームが混入。粘性しまりとも弱い。
- 2 暗褐色土 少量のロームと微量の黒色土が混入。粘性しまりとも弱い。
- 3 不明

40P 土層説明

- 1 暗褐色土 微量の黒色土とロームが混入。粘性しまりとも弱い。
- 2 暗褐色土 少量の黒色土と微量のロームが混入。粘性しまりとも弱い。
- 3 暗褐色土 少量のロームが混入。粘性しまりとも弱い。
- 4 暗黄褐色土 少量の暗褐色土が混入。粘性しまりとも弱い。



第23図 38・39・40P 出土遺物



第24図 41P 平面図

備考 出土遺物は幅があり，時期については判然としない。

40P 出土遺物 (第23図 写真図版27)

1は胴部に三角文を施文する。2は三角形断面の隆帯上部に棒状工具による刻目，隆帯に沿って単列角押文を施文する。

41P (第24.25図 写真図版7・27)

規模 (2.0)m × 1.88m × 深さ0.24m の隅丸方形 04Dと重複する。  
長軸方位 N - 62° - W

壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。

覆土 暗褐色土の覆土で，自然堆積と考えられる。掘り直しや重複は見られない。

備考 遺物は中期後半であり，該期の土坑と考えられる。

41P 出土遺物 (第25図 写真図版27)

覆土上層から6点出土している。1は胴部に平行沈線を施文する。3は沈線区画内にLR縄文を充填する。4も沈線区画がみられる。5・6は，黒曜石の剥片である。5は2.4cm,幅1.6cm,重さ3.2gである。6は1.9cm,幅1.1cm,重さ0.9gである。

c. 溝状遺構 (M)

01M (第26図 写真図版1)

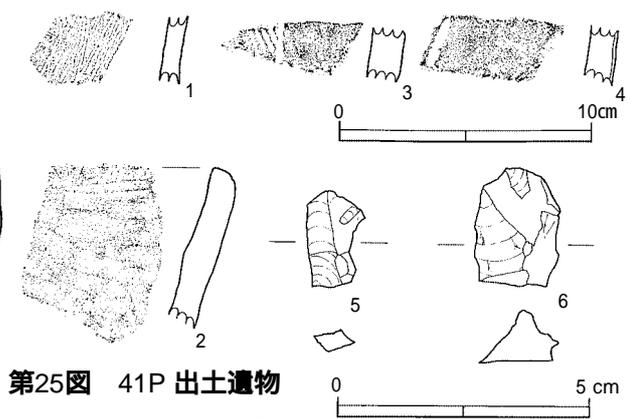
規模 ほぼ南北方向に部分的に立ち上がって遺存する。調査区南側の01Dの覆土にも現れており，全長50m以上と想定される。01D，16Pを切る。幅0.4m, 深さ0.4mである。  
長軸方位 N - 20° - E

壁・底面 断面はV字状で，底面は平坦な部分が少ない。

覆土 褐色土の覆土で，自然堆積と考えられる。掘り直しや重複は見られない。

備考 遺物は流れ込みで，01Dを切っており中期後半以降の溝である。

01M 出土遺物 (第27図 写真図版27) 1は擬口縁の顕著な胴部片で，上端部に2カ所，貝殻腹縁(有肋)の刺突が見られる。2は無文である。どちらも前期後半～末葉と考えられる。



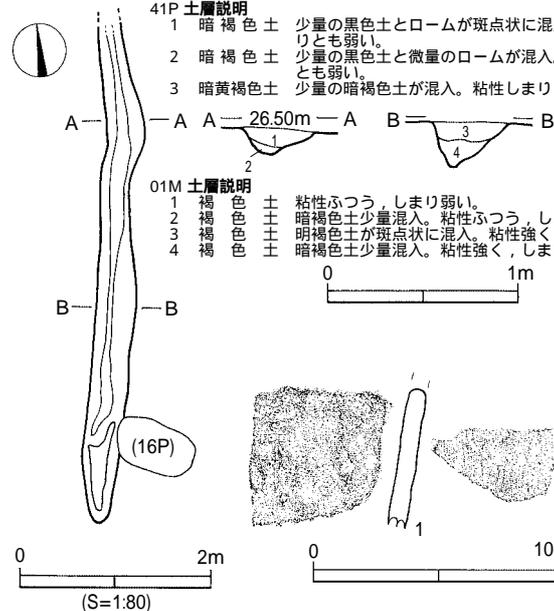
第25図 41P 出土遺物

41P 土層説明

- 1 暗褐色土 少量の黒色土とロームが斑点状に混入。粘性しまりとも弱い。
- 2 暗褐色土 少量の黒色土と微量のロームが混入。粘性しまりとも弱い。
- 3 暗黄褐色土 少量の暗褐色土が混入。粘性しまりとも弱い。

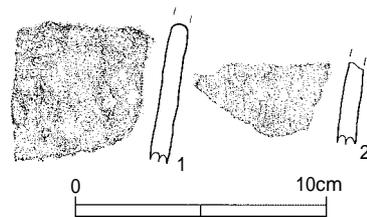
01M 土層説明

- 1 褐色土 粘性ふつう，しまり弱い。
- 2 暗褐色土少量混入。粘性ふつう，しまり弱い。
- 3 褐色土 明褐色土が斑点状に混入。粘性強く，しまり弱い。
- 4 褐色土 暗褐色土少量混入。粘性強く，しまり弱い。



第26図 01M 平面図

第27図 01M 出土遺物



#### d. 遺構外出土遺物(第28.29 図 写真図版28.29)

1～9は、興津式である。ただし、5・8は浮島式にさかのぼるかもしれない。1は5～6本単位の櫛歯条線で眼鏡状モチーフを描出する。2は、平行沈線文による口縁部条線帯と、櫛歯状工具による横位条線文を施文している。3も平行沈線文による口縁部条線帯で、以下、輪積痕+凹凸文、平行沈線文という構成である。4は口唇上面に竹管端部の刺突、胴部に波状貝殻文(有肋)を施文する。5は無肋貝の波状貝殻文を施文する。6は有肋貝による貝殻腹縁刺突文である。一列分が凹凸文化している。7は無文だが、輪積痕がわずかに残る。8は浅鉢の胴部で、平行沈線文と二連の棒状工具による刺突列が見られる。9は突出した底辺をもつ底部で、該期に属すると考えられる。

10～16は、前期末葉に位置づけられる土器群である。10～12は同一個体である。10は波状口縁の頂部を欠く口縁～胴部で、1段の縄Lの側面圧痕と同種の回転による無節縄文を施文する。波頂下に環状突起が付される。12は胴下部で、縄文施文後に一部に縦位さらに横位に小型の波状貝殻文(無肋)を施文する。13は口縁に無節縄文Lを施文する。14は単節RL縄文を施文する。15は外面と口唇上に単節RLを施文する。16は10P1・3と同一個体で、結節縄文[LR-1S]である。口唇上にもLRを施文している。

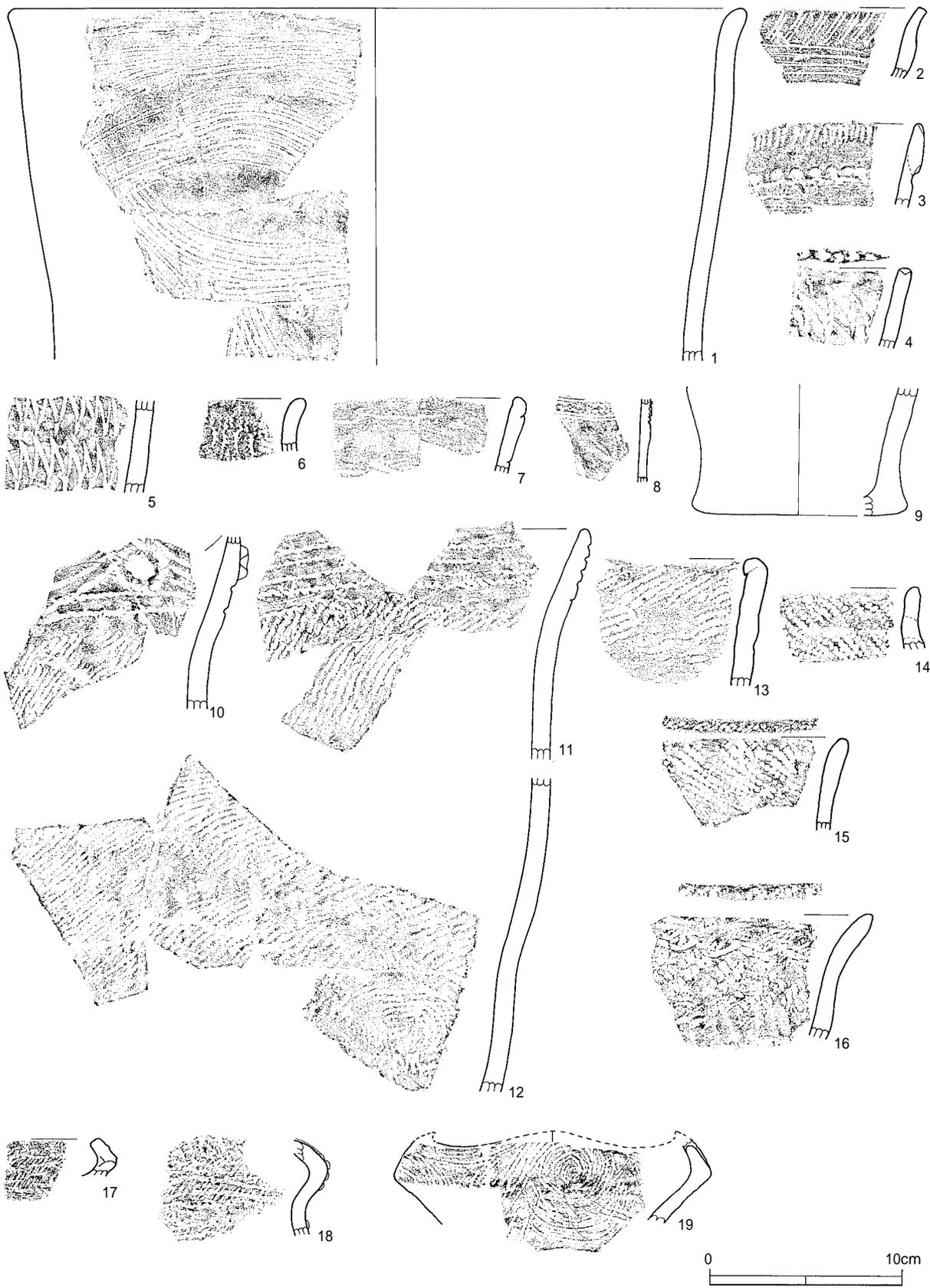
17～19は諸磯b式である。17・18は同一個体である。17はくの字状に内彎する口縁で、浮線文上に刻目を入れる。18には地文に単節RL縄文が見られる。19は、四単位の波状口縁で、くの字状に内折している。平行沈線文で波頂下に渦巻状モチーフを描出している。

20～34は中期阿玉台式である。ほぼb式に含められる。20・21は扇状把手で、垂下する三角形断面の隆帯に単列の角押文が伴う。22は窓枠状隆帯内に単列角押文がめぐり、胴部は輪積痕+貝殻文(有肋)によるヒダ状文である。23も同様の構成だが、口唇上に劣截竹管を刺突している。24は隆帯、単列角押文、下方に波状沈線を施文する。25・26は同一個体で、窓枠状隆帯に単列角押文と連弧状沈線文が伴う。27も同様で、口唇上に貝殻による押引文が施文される。28は扇状把手で、口唇の隆起部に沿って単列角押文が施文され、口唇の外側角と把手外周に管状工具による抉りが入る。さらに波頂下に焼成前の穿孔がされている。29は三角形断面の隆起帯に刻目が入り、下方は輪積痕をヒダ状化している。30も胴部に輪積痕をヒダ状化している。31は把手と隆帯が剥落している。32は隆帯の突起が付され、単列角押文を口唇上面と内面にも施文している。33は、隆帯のみの口縁部片である。34は阿玉台式の底部である。

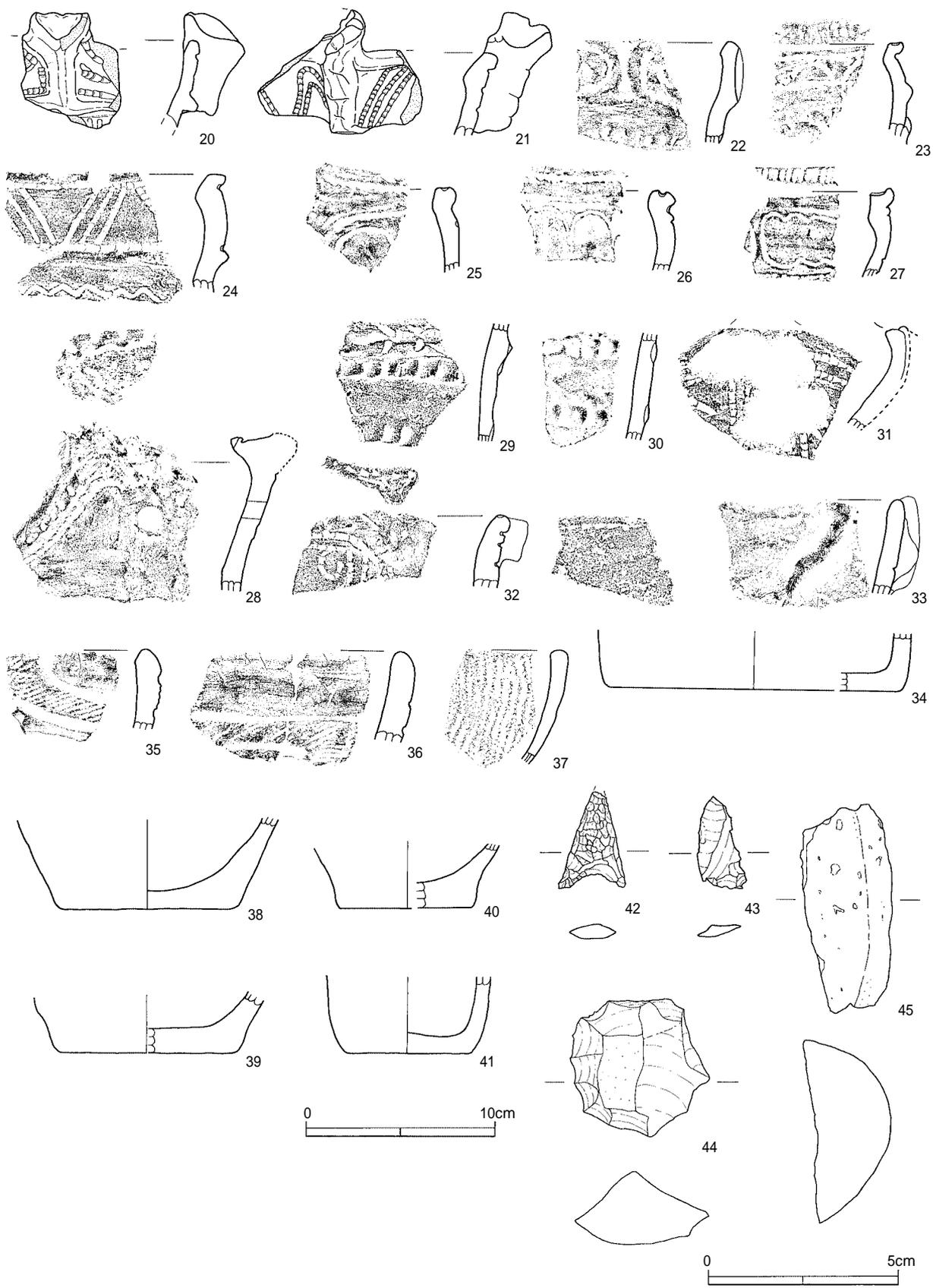
35～37は、加曽利E式である。35・36は、沈線区画内に単節LR縄文を充填している。37は単節LR縄文を施文している。

38～41は、底部を一括した。38は加曽利E式であろう。39～41は阿玉台式である。

42～45は、石器類を一括した。42はメノウの石鏃で、先端部が欠損する。火熱を受けている。推定長2.7cm、幅1.8cm、重さ1.3gである。43は黒曜石の剥片で、2.3cm、幅1.2cm、重さ0.8gである。44は安山岩の削器で、3.6cm、幅3.6cm、重さ25.5gである。右辺の一部を除いて刃部としている。45は安山岩の石皿片?と思われる。5.5cm、幅2.3cm、重さ50.2gである。

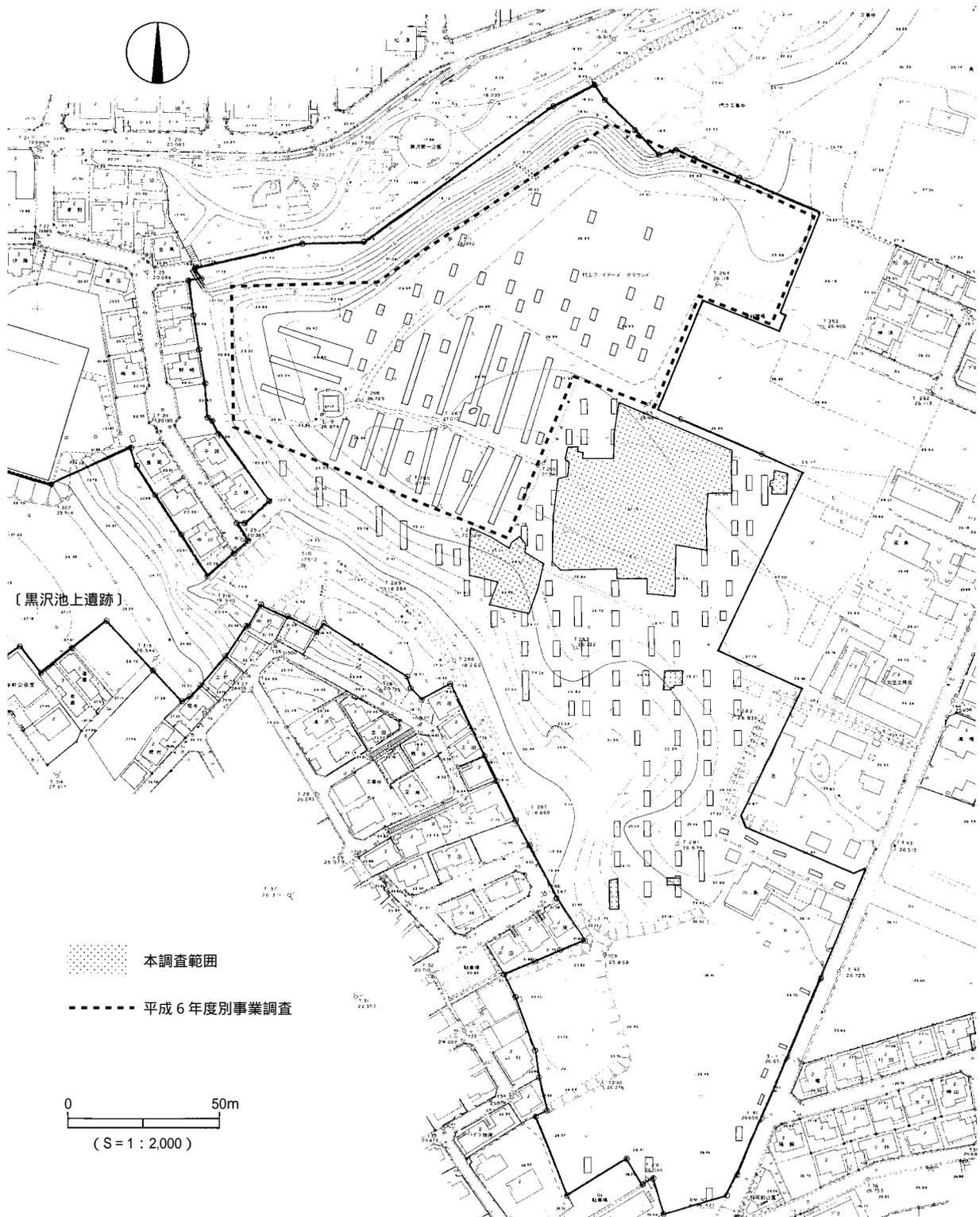


第28図 遺構外出土遺物(1)

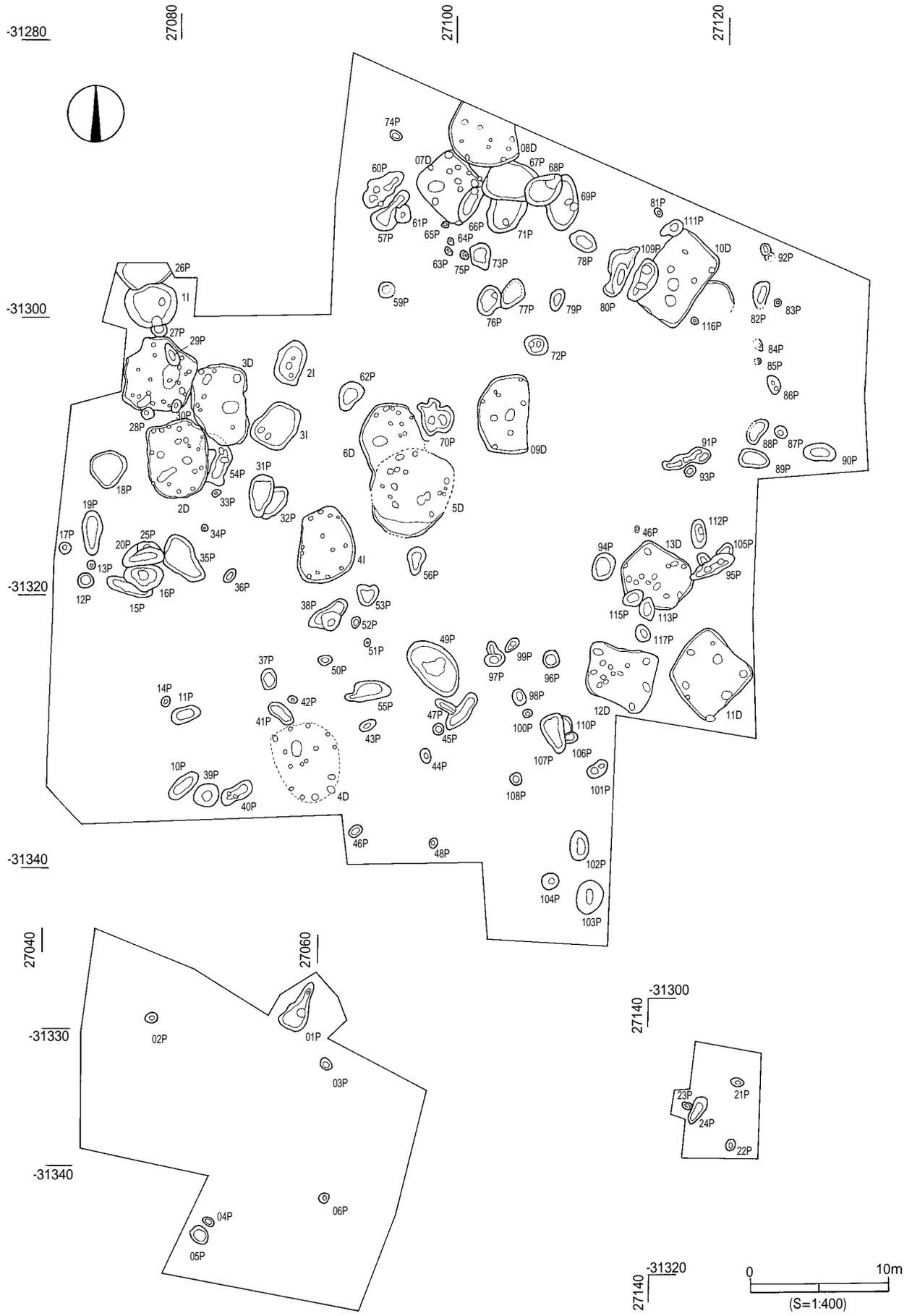


第29図 遺構外出土遺物(2)

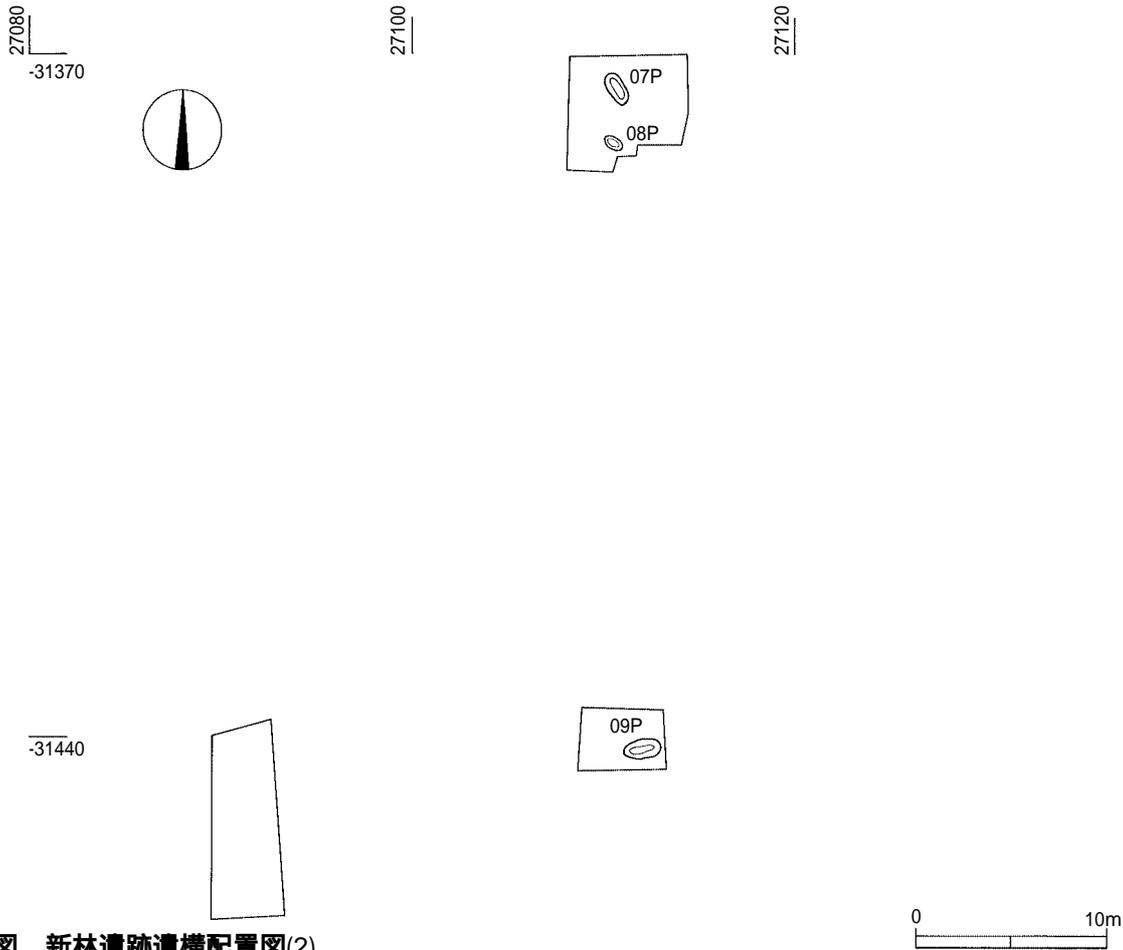
## 第2節 新林遺跡



第30図 新林遺跡トレンチ配置図



第31図 新林遺跡遺構配置図(1)



第32図 新林遺跡遺構配置図(2)

本遺跡では、石器・剥片の遺物集中地点1ヵ所、竪穴住居跡（竪穴遺構含む）15基、土坑113基、陥穴3基を検出した。時期は剥片集中地点が旧石器時代に属する他は、全て縄文時代に属すると考えられる。竪穴住居跡は出土遺物に幅があり特定がむずかしいが、全てほぼ前期後半に位置づけられよう。陥穴は、覆土遺物から前期後半以前に想定される。土坑は、出土遺物がなく特定できない遺構もあるが、前期後半を主体とした時期と中期前半の2時期に属すると考えられる。

**a . 住居跡・竪穴遺構（D・I）**

**01D（第33図 写真図版8）**

規模 5.32m × 5.3mのややいびつな方形 主軸方位 N - 8° - E 28Pを切り、29Pに切られる。

確認面 b ~ c層中 深さB-B'間 B 24cm B'27cm G-G'間 G 23cm G'16cm

床面 ほぼ平坦なソフトローム中の地床だが、硬化面等の遺存は見られなかった。

ピット 壁際に近い位置に見られるが、規則性はない。

覆土 暗褐色土を主体した自然堆積の土層である。

備考 P1は焼土等の検出はないが、位置、深さから炉としての可能性が考えられる。時期については興津式、五領ヶ台式の遺物が出土していることから前期後半ないし中期初頭か。

**遺物（第35図 写真図版30）**

1 ~ 3は興津式である。1は波状貝殻文（無肋）で、口唇部に凹みをつけて口唇が外反する。2も同様の口唇形態で、波状貝殻文的な三角文を施文している。3は波状貝殻文（無肋）である。4は単節LR・RLの羽状縄文（指ナデのため結束かどうか不明）で、口唇上に棒状工具側面を押圧している。5

～7は五領ヶ台式である。5・6とも01Iからの出土がある。5は突起に近い波状口縁で、内面の稜が顕著である。口縁部は隆帯をなし、管状工具による単沈線文で条線帯をつくる。地文は縦位回転の単節LRで、頸部に横位隆帯をつけ管状工具で沈線を引き、橋状をなさない貼付文を付す。同工具で口縁部隆帯の三角形刻文及び単沈線文への刺突による複合鋸歯文を施文している。6も5と類似する施文具・構成で、複合鋸歯文を垂下させる。胎土に雲母片を含む。7も01I出土片が接合している。地文はなく、半截竹管による複合鋸歯文が横位にめぐり、一部垂下する構成である。8・9は底部である。

#### 02D (第34図 写真図版8)

規模 5.72m × 4.32m の小判形 主軸方位 N - 4° - W

確認面 b ~ c 層中 深さC-C'間 C 8cm C'12cm B-B'間 B 11cm B'14cm

床面 ほぼ平坦なソフトローム中の地床だが、硬化面等の遺存は見られなかった。

ピット 壁際に近い位置に見られるが、規則性はないようである。

覆土 部分的ではあるが、暗褐色土を主体した自然堆積の土層と思われる。

備考 P1は焼土等の検出はないが、位置、深さから炉としての可能性が考えられる。時期については浮島式の遺物が出土していることから前期後半か。

#### 遺物 (第35図 写真図版30)

1～6はおおむね浮島式に位置づけられる。1は口唇部に刻みをつけ、変形爪形文を施文する。2・3は平行沈線文である。4・5は波状貝殻文(無肋)である。6は三角文である。7は単節LR・RLの羽状縄文で、結束第1種であろう。前期末葉である。

#### 03D (第36図 写真図版8・9)

規模 6.10m × 3.68m の隅丸長方形 主軸方位 N方向 59Pを切る。01Dと重複する。

確認面 b ~ c 層中 深さF-F'間 F 27cm F'20cm C-C'間 C 7cm C'23cm

床面 ほぼ平坦なソフトローム中の地床だが、硬化面等の遺存は見られなかった。

ピット 壁際に近い位置に見られるが、規則性はないようである。

覆土 ローム混入が多い暗褐色土だが、自然堆積の土層と思われる。

備考 P1は焼土等の検出はないが、位置、深さから炉としての可能性が考えられる。時期については早期井草式、浮島～興津式、前期末葉の遺物が出土していることから前期後半～末葉か。

#### 遺物 (第35図 写真図版31)

1は井草式である。口唇部は単節LRを斜行、口縁部は単節LRを縦横に回転させ羽状にしている。胴部は縦走させる。2～4は浮島・興津式である。2・3は波状貝殻文(無肋)を施文する。4は三角文である。5は1段の縄Lの側面圧痕で平行・菱形のモチーフを描く土器で、4単位程度の波状口縁をなすと考えられる。縄は波底部近くで端末結節をしている。[L - rZ]である。胴部以下を欠くが、複合口縁である。前期末葉に位置づけられよう。6・7は単節RLで、6は口唇上にも施文している。8は加曽利E式で、沈線区画内に単節LRを充填している。9～11は底部を一括した。

#### 04D (第37図 写真図版9)

規模 5.94m × 4.72m の小判形(想定) 主軸方位 N - 18° - W

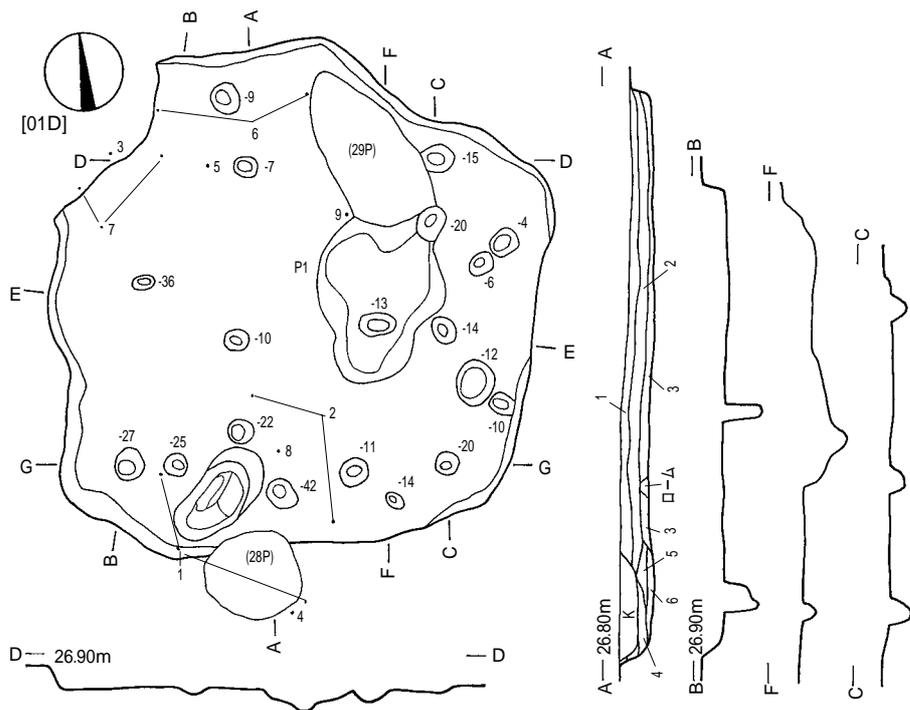
確認面 層上面 深さは不明

床面 ほぼ平坦なソフトローム中の地床だが、硬化面等の遺存は見られなかった。

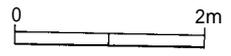
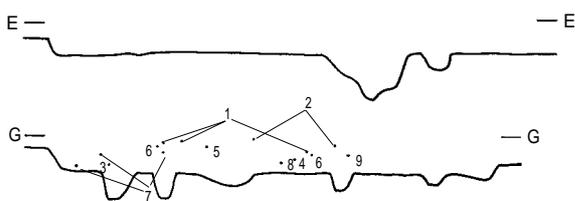
ピット 壁柱穴としてプランを想定した。

覆土 不明。

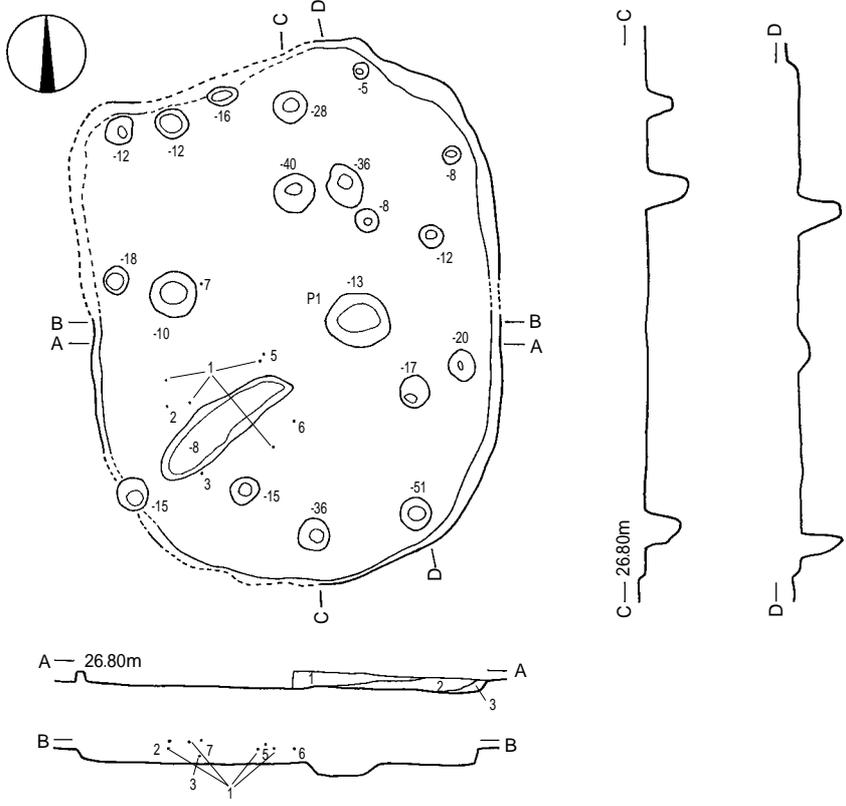
備考 P1は焼土等の検出はないが、位置、深さから炉としての可能性が考えられる。時期不明。



- 01D 土層説明**
- 1 暗褐色土 少量の黒色土，ロームが斑点状に混入。粘性しまりともに弱い。
  - 2 黒褐色土 少量の黒色土，ローム混入。粘性しまりともに弱い。
  - 3 暗褐色土 少量のローム，微量の黒色土混入。粘性しまりともに弱い。
  - 4 暗褐色土 少量の黒色土，ローム混入。粘性弱く，しまり強い。28P 覆土
  - 5 暗褐色土 少量のローム，微量の黒色土混入。粘性弱く，しまり強い。28P 覆土
  - 6 暗黄褐色土 少量の黒色土，暗褐色土混入。粘性強く，しまり弱い。28P 覆土



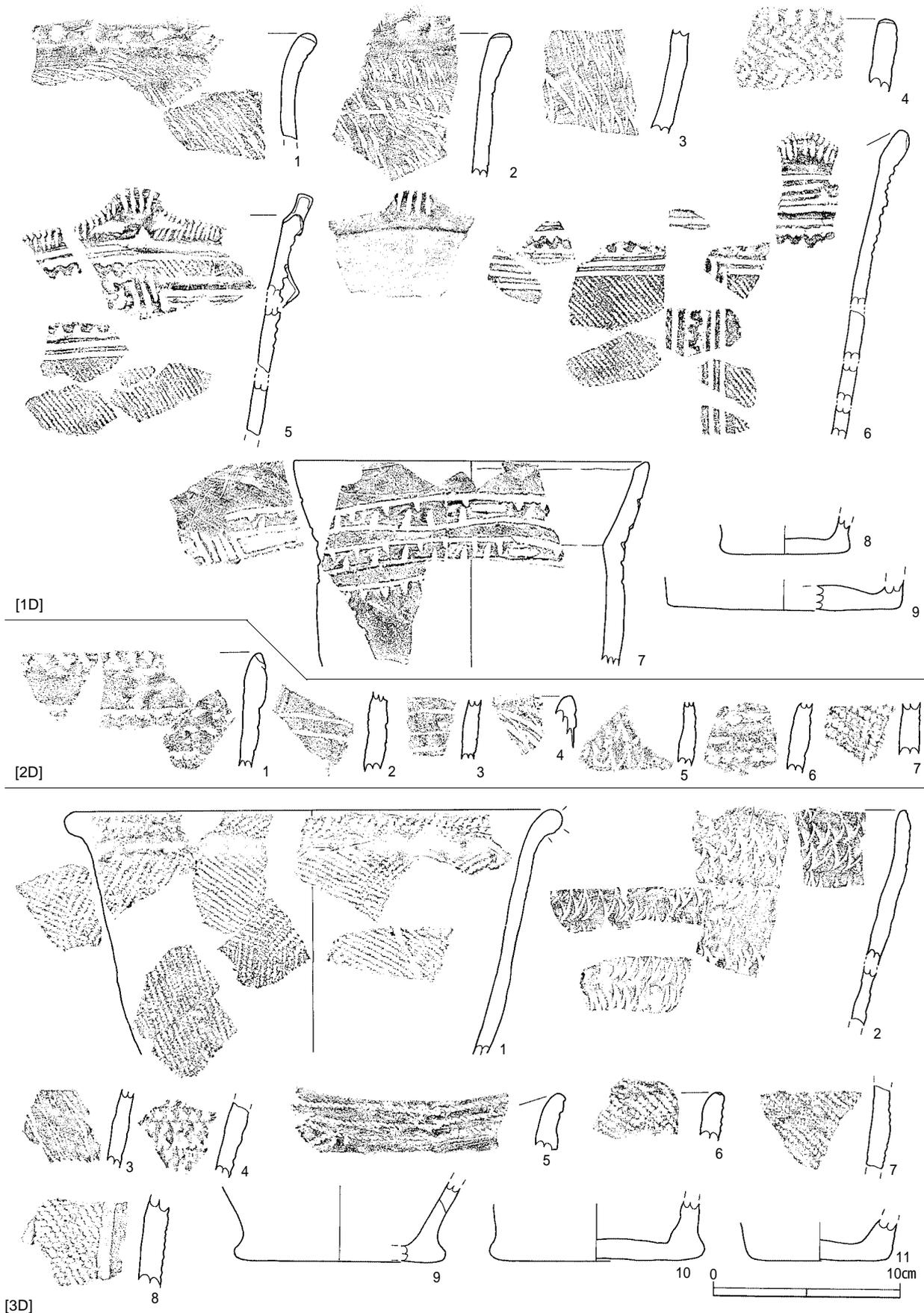
第33図 01D 平面図



- 02D 土層説明**
- 1 暗褐色土 微量の黒色土，ローム混入。粘性しまりともに弱い。
  - 2 暗褐色土 少量のローム，微量の黒色土混入。粘性しまりともに弱い。
  - 3 暗黄褐色土 少量の暗褐色土混入。粘性しまりともに弱い。



第34図 02D 平面図



第35圖 01・02・03D出土遺物

遺物 出土しなかった。

#### 05D (第38図 写真図版9)

規模 6.70m × 5.6mの不整長方形 主軸方位 N - 4° - W 06Dを切る。

確認面 b ~ c層中 深さC-C'間 C 7cm C'20cm D-D'間 D 11cm D' 9cm

床面 ほぼ平坦なソフトローム中の地床だが、硬化面等の遺存は見られなかった。

ピット 不規則であり、全体に浅い。

覆土 暗褐色土主体の自然堆積の土層と思われる。

備考 P1は焼土等の検出はないが、位置、深さから炉としての可能性が考えられる。時期については早期井草式、浮島式の遺物が出土していることから前期後半か。

#### 遺物 (第40図 写真図版31)

1 ~ 3は井草式である。1は口唇部・口縁部とも単節RLである。2は口唇部RLで口縁部は横走するようであるが不明である。3は遺構外5と接合する。口唇部はLR側面の押圧、口縁部はLRである。4はヘラの押しつけによる口縁部条線帯、輪積痕 + 凹凸文、三角文的な波状貝殻文を施文している。浮島式である。06D及び遺構外からも出土している。5は口唇上面に半截竹管内側で平行沈線文を引き、口縁直下から三角文を密に施文している。遺構外からも出土した。

#### 06D (第38図 写真図版9)

規模 (5.42m) × 4.4mの小判形 主軸方位 N - 38° - W 05Dに切られる。

確認面 b ~ c層中 深さ 北側で17cm 西側で16cm

床面 ほぼ平坦なソフトローム中の地床だが、硬化面等の遺存は見られなかった。

ピット 不規則であり、全体に浅い。

覆土 暗褐色土主体の自然堆積の土層と思われる。

備考 P1は焼土等の検出はないが、位置、深さから炉としての可能性が考えられる。時期については井草式、浮島～興津式、前期末葉の遺物が出土していることから前期後半～末葉であろう。

#### 遺物 (第40図 写真図版32)

1は井草式である。口唇部はRL、胴部は判然としないがRL0段多条であろうか。2 ~ 4は前期後半～末葉である。2は5本単位の櫛歯条線文を施文する。3は無文の口縁部で、細い沈線状の擦痕が一部に見られる。口唇形状は興津式に近い。4は輪積痕 + 凹凸文である。凹凸文は先のささくれた劣截竹管か有肋の貝殻で施文しているようである。

#### 07D (第39図 写真図版9)

規模 4.7m × 4.0mの長方形 主軸方位 N - 48° - W 66Pに切られる。67Pを切る。08Dと重複する。

確認面 b ~ c層中 深さ 北側で8cm 東側で4cm

床面 ほぼ平坦なソフトローム中の地床だが、硬化面等の遺存は見られなかった。

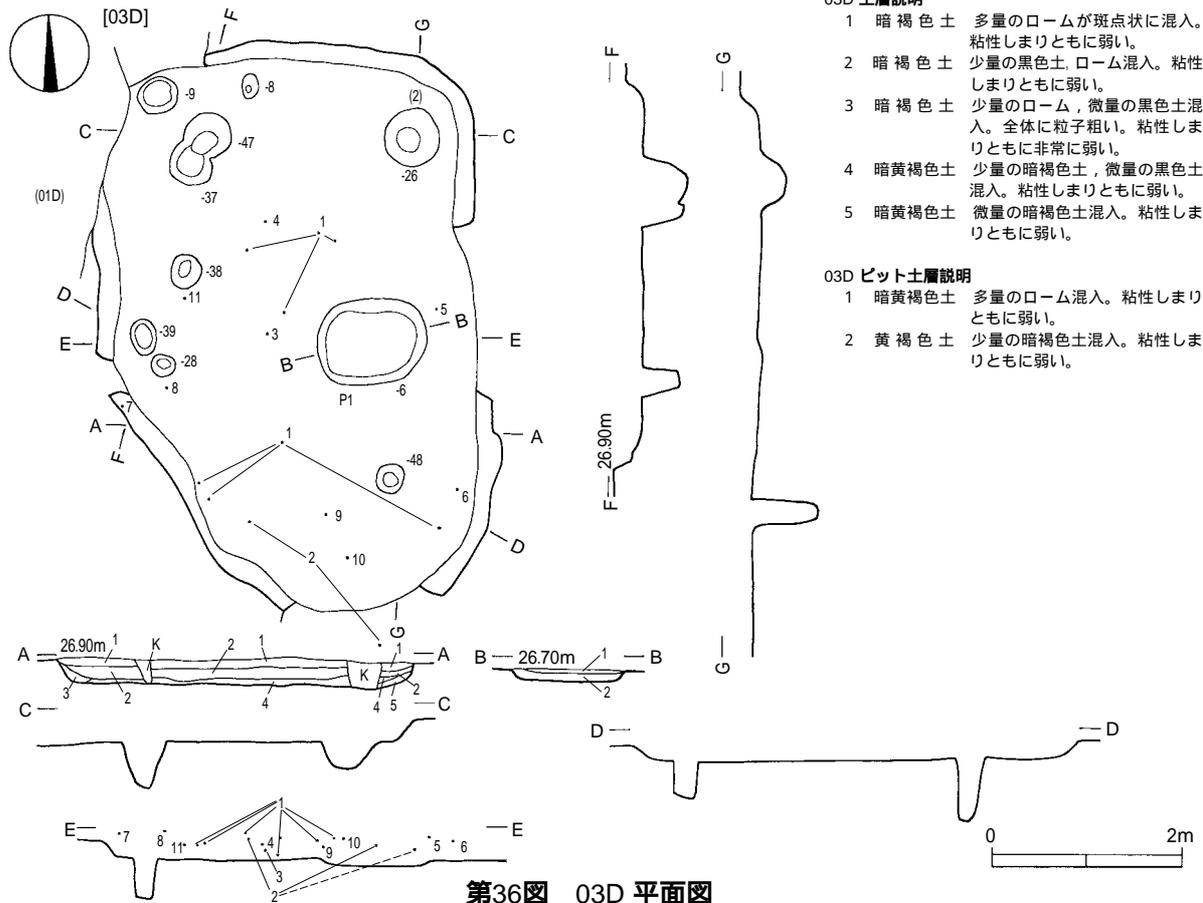
ピット 全体に浅く、規則性はみられない。

覆土 部分的ではあるが、暗褐色土を主体した自然堆積の土層と思われる。

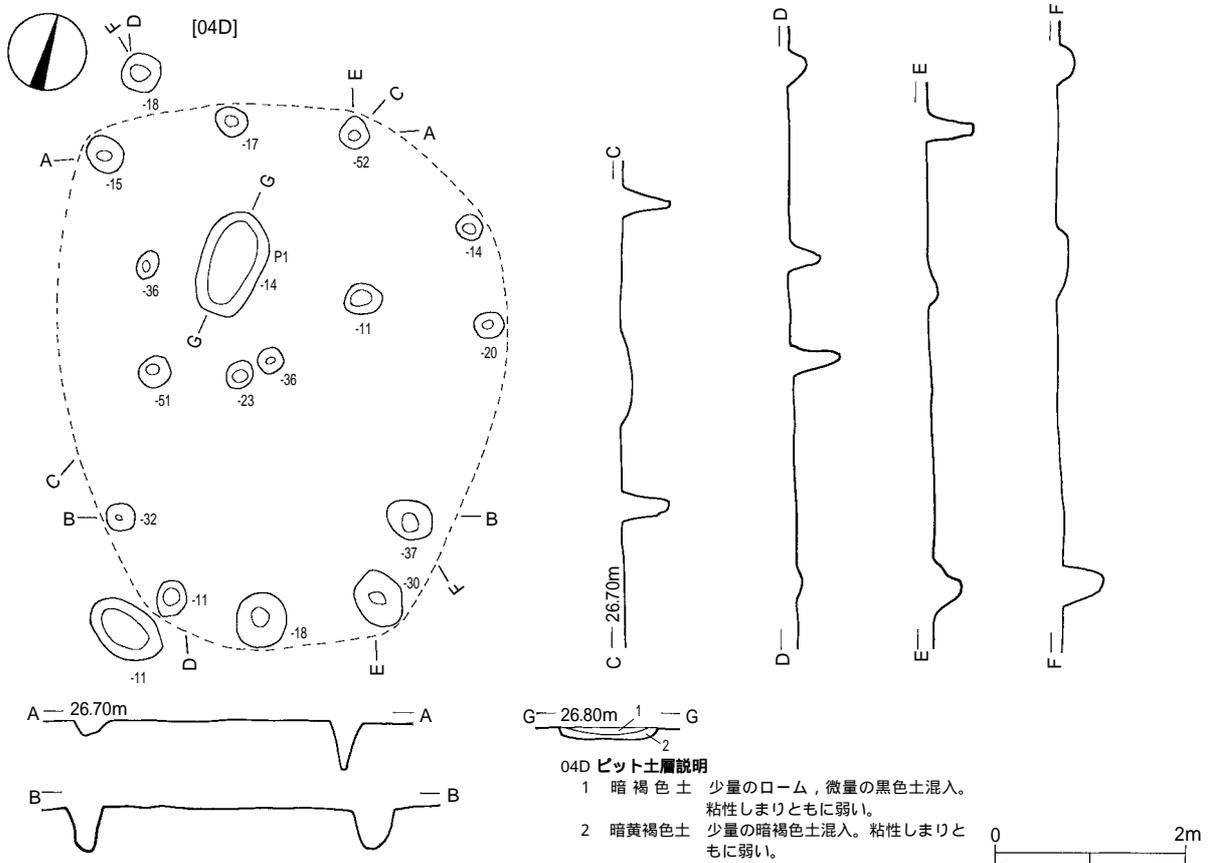
備考 P1は焼土等の検出はないが、位置、深さから炉としての可能性が考えられる。時期については浮島～興津式の遺物が出土していることから前期後半か。

#### 遺物 (第40図 写真図版32)

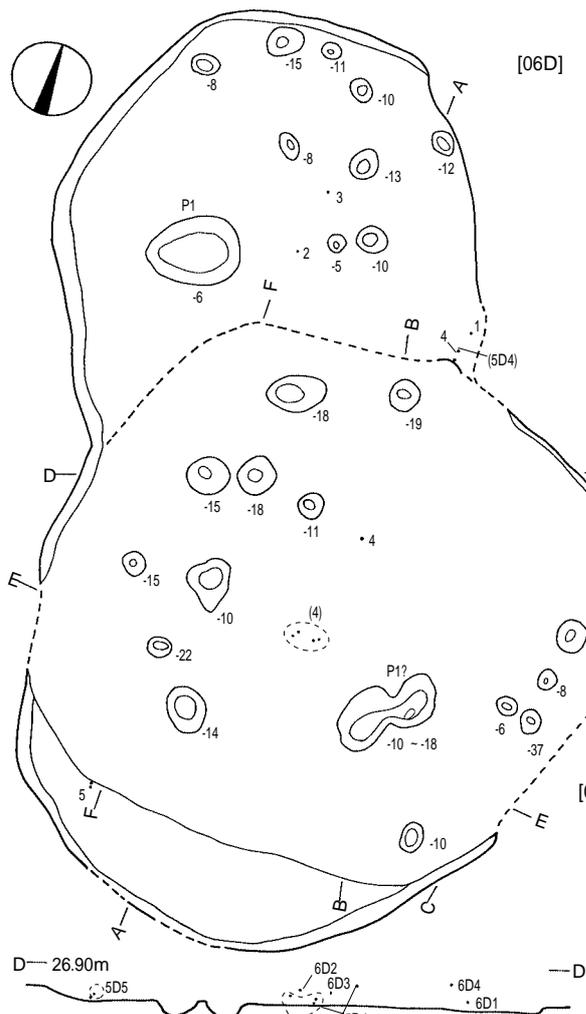
1は口唇に凹みをつけて小波状にした口縁部片で、口縁下には半截竹管による凹凸文を施文する。2も口唇に刻みをつけた口縁部片で、輪積痕 + 凹凸文である。3は波状貝殻文(無肋)、4は波状貝殻文(有肋)を施文する。5は無文で、撚糸文系土器の底部近くと考えられる。6は無文の底部で、浮島・



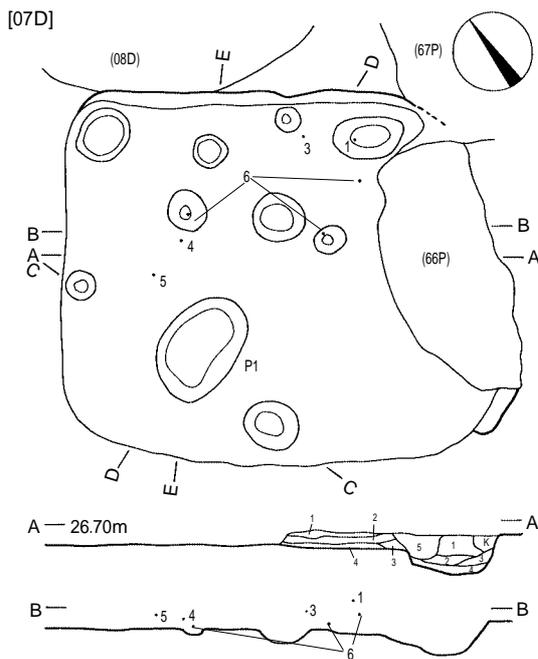
第36図 03D 平面図



第37図 04D 平面図



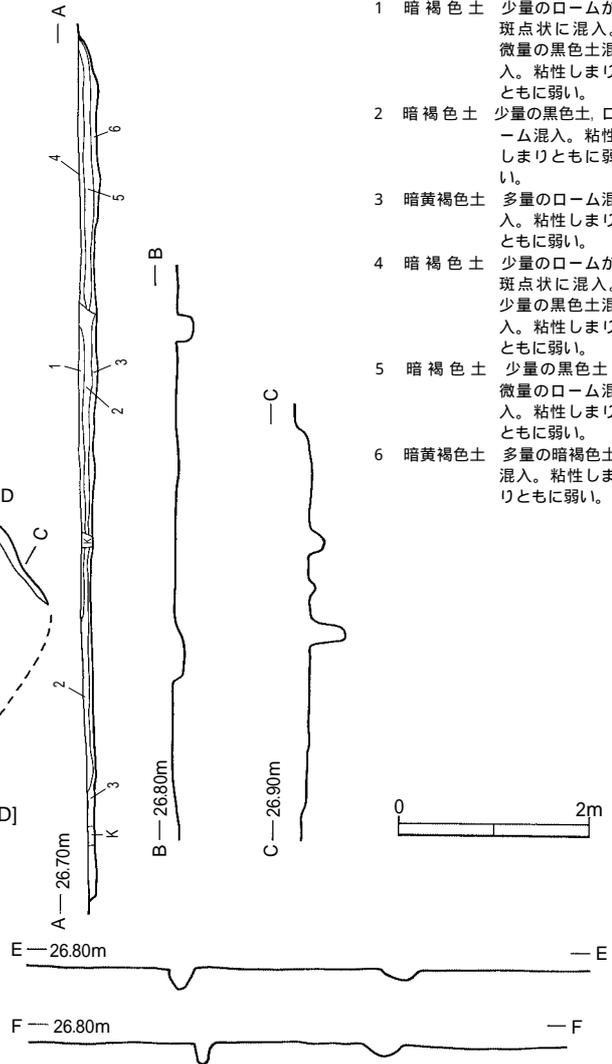
第38図 05・06D 平面図



第39図 07D 平面図

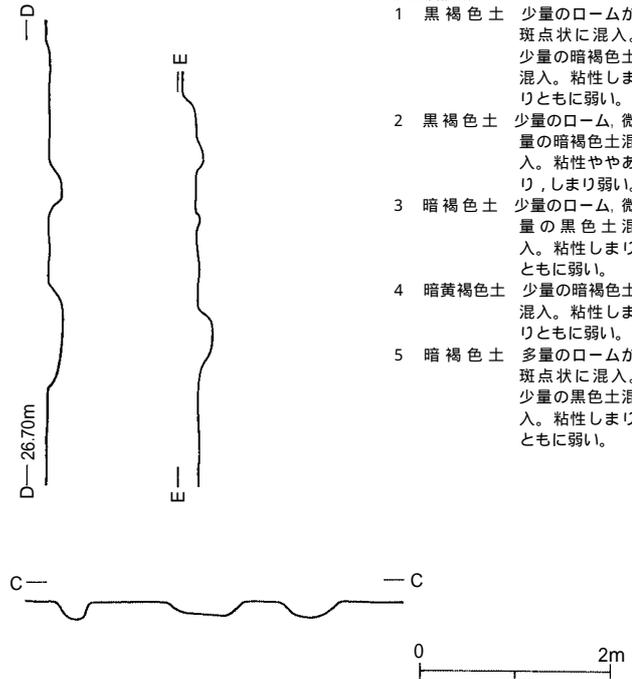
05.06D土層説明

- 1 暗褐色土 少量のロームが斑点状に混入。微量の黒色土混入。粘性しまりともに弱い。
- 2 暗褐色土 少量の黒色土、ローム混入。粘性しまりともに弱い。
- 3 暗黄褐色土 多量のローム混入。粘性しまりともに弱い。
- 4 暗褐色土 少量のロームが斑点状に混入。少量の黒色土混入。粘性しまりともに弱い。
- 5 暗褐色土 少量の黒色土、微量のローム混入。粘性しまりともに弱い。
- 6 暗黄褐色土 多量の暗褐色土混入。粘性しまりともに弱い。



07D土層説明

- 1 黒褐色土 少量のロームが斑点状に混入。少量の暗褐色土混入。粘性しまりともに弱い。
- 2 黒褐色土 少量のローム、微量の暗褐色土混入。粘性ややあり、しまり弱い。
- 3 暗褐色土 少量のローム、微量の黒色土混入。粘性しまりともに弱い。
- 4 暗黄褐色土 少量の暗褐色土混入。粘性しまりともに弱い。
- 5 暗褐色土 多量のロームが斑点状に混入。少量の黒色土混入。粘性しまりともに弱い。



興津式である。

#### 08D (第41図)

規模 4.82m × (4.6m)の不整形 主軸方位 不明 67P・01Dと重複する。

確認面 b～c層中 深さ 西側で12cm 東側で20cm

床面 ほぼ平坦なソフトローム中の地床だが、硬化面等の遺存は見られなかった。

ピット 全体に浅く、規則性はみられない。

覆土 暗褐色土を主体とした自然堆積の土層である。

備考 時期については、諸磯b式の土器が出土しており、該期に位置づけられる。

#### 遺物(第40図 写真図版32)

1は遺構外からも出土している。キャリパー形になると考えられ、半截竹管によるカマボコ形の断面となる平行沈線文が縦位に引かれる。興津式であろうと考えられる。2～4は諸磯b式である。2は単節RLの地文上に浮線文を貼付している。3も同様で、地文はRLとLRである。62P・遺構外からも出土している。4は平行沈線文で頸部に眼鏡状のモチーフを描出している。

#### 09D (第42図 写真図版9・10)

規模 5.62m × 3.74m の不整形長方形 主軸方位 N方向

確認面 b～c層中 深さA-A'間 A 23cm A'22cm D-D'間 D 22cm D'13cm

床面 ほぼ平坦なソフトローム中の地床だが、硬化面等の遺存は見られなかった。

ピット 不規則であり、全体に浅い。

覆土 暗褐色土主体の自然堆積の土層と思われる。

備考 P1は焼土等の検出はないが、位置、深さから炉としての可能性が考えられる。時期については浮島～興津式の遺物が出土していることから前期後半か。

#### 遺物(第45図 写真図版33)

1は遺構外からも出土した。6～8本単位の櫛歯条線文で、横位の上下区画及び楕円形+X字形の図文を描出している。口唇上面には半截竹管を縦横交互に向きを変えて刺突している。2は輪積痕+凹凸文を施文している。3・4は底部である。5は緩やかに外反する土器で、図示した以外にも遺構外から出土している。無肋貝による波状貝殻文を全面に施文する。

#### 10D (第43図 写真図版10)

規模 6.46m × 4.16m の長方形 主軸方位 N - 36° - E 109,111,114Pと重複

確認面 b～c層中 深さB-B'間 B 0cm B'2cm D-D'間 D 10cm D'2cm

床面 ほぼ平坦なソフトローム中の地床だが、硬化面等の遺存は見られなかった。

ピット 規則的な配列は見られない。

覆土 暗褐色土主体の自然堆積の土層と思われる。

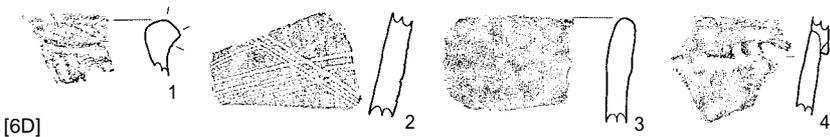
備考 P1は焼土等の検出はないが、位置、深さから炉としての可能性が考えられる。時期については浮島～興津式の遺物が出土していることから前期後半か。

#### 遺物(第45図 写真図版33)

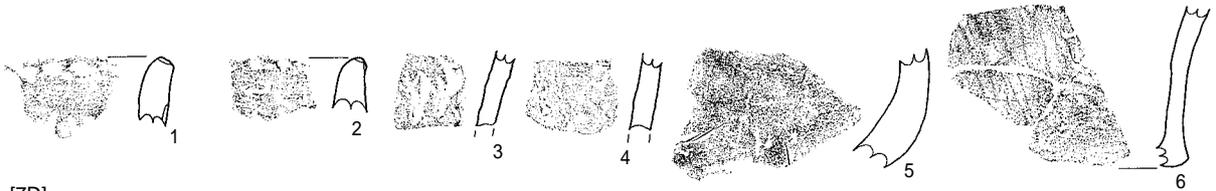
1は胎土に繊維を多く含む黒浜式である。反撚LLないし無節Lを施文する。2は109P3と接合する。口唇に棒状工具側面を押圧し、平行沈線文で口縁部条線帯をつくり、その下には横位に7本単位以上の櫛歯条線文を描出する。興津式である。3・4は有肋の波状貝殻文を施文する。5は外削ぎ状口縁に細い半截竹管を刺突して口縁部条線帯とし、胴部は無文である。浮島式である。



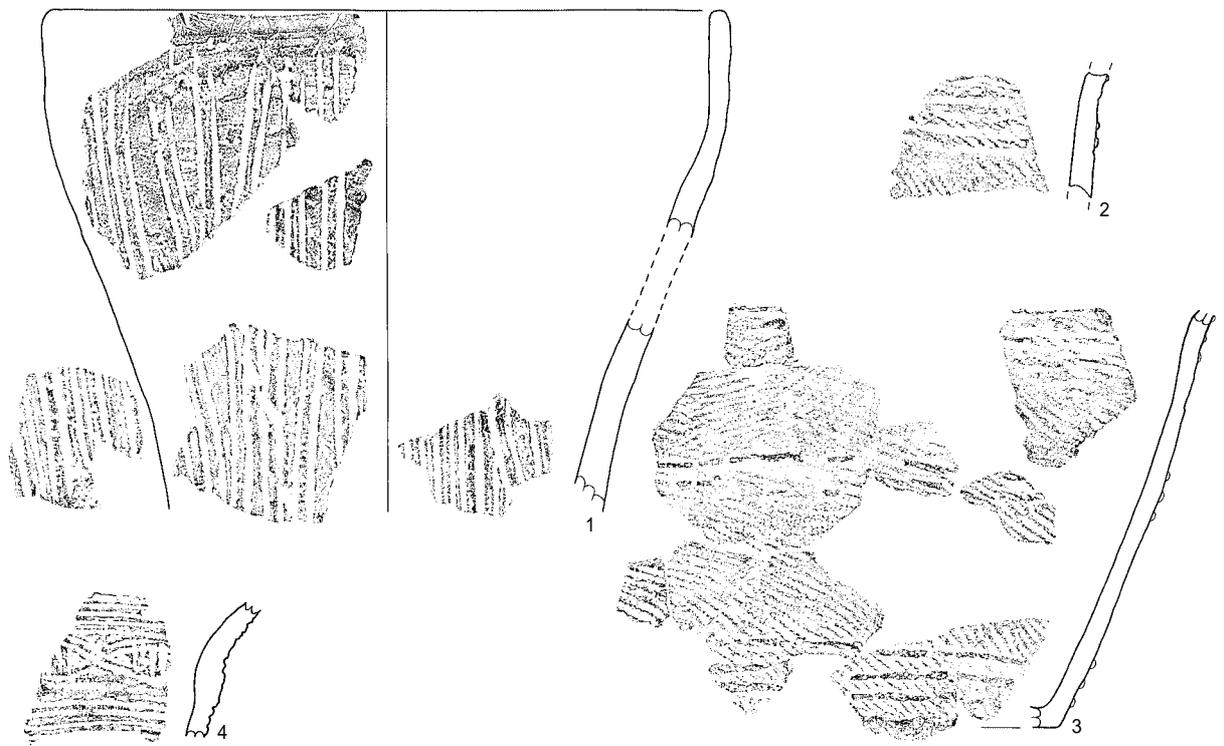
[5D]



[6D]



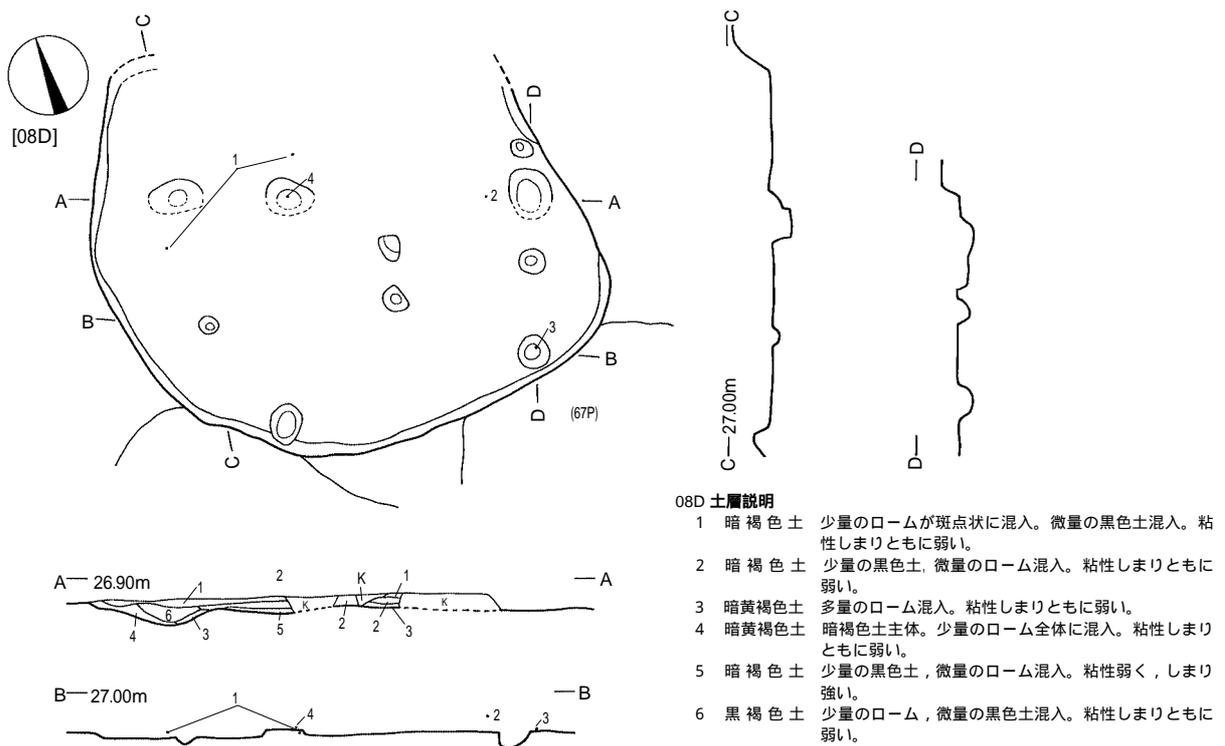
[7D]



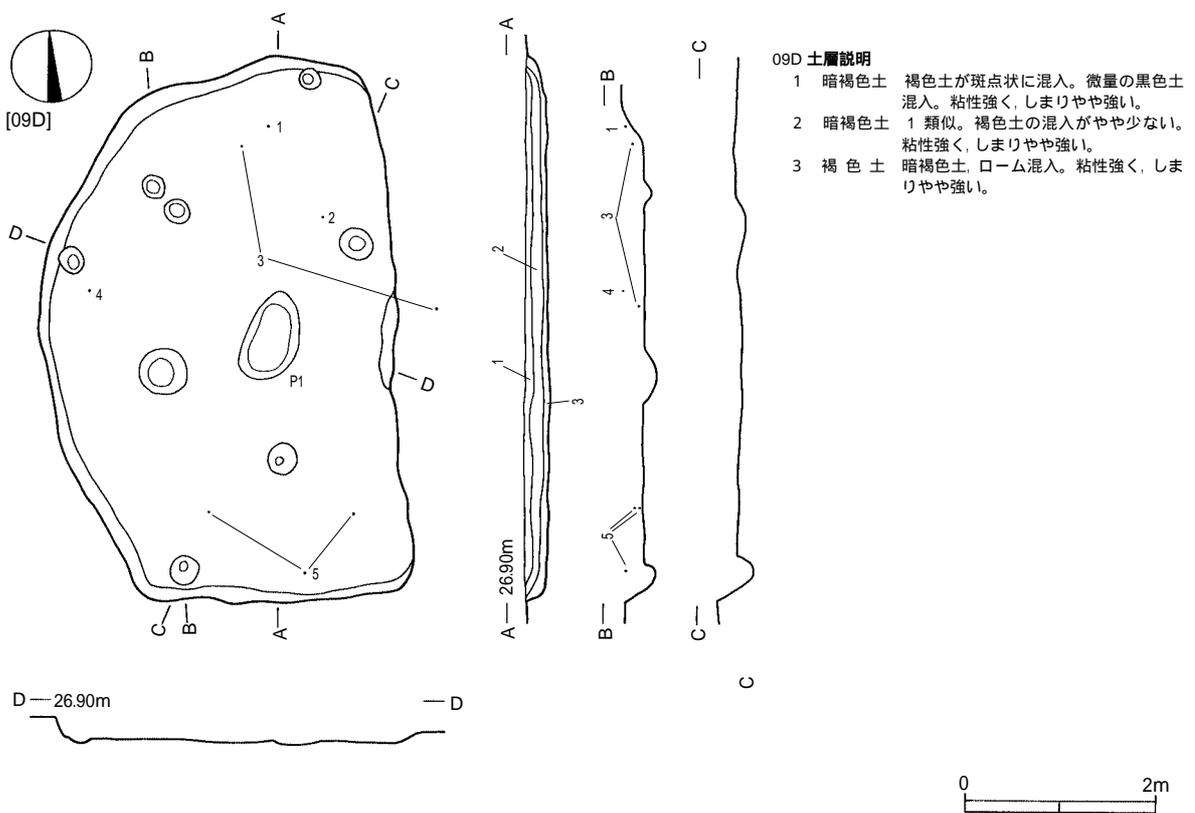
[8D]



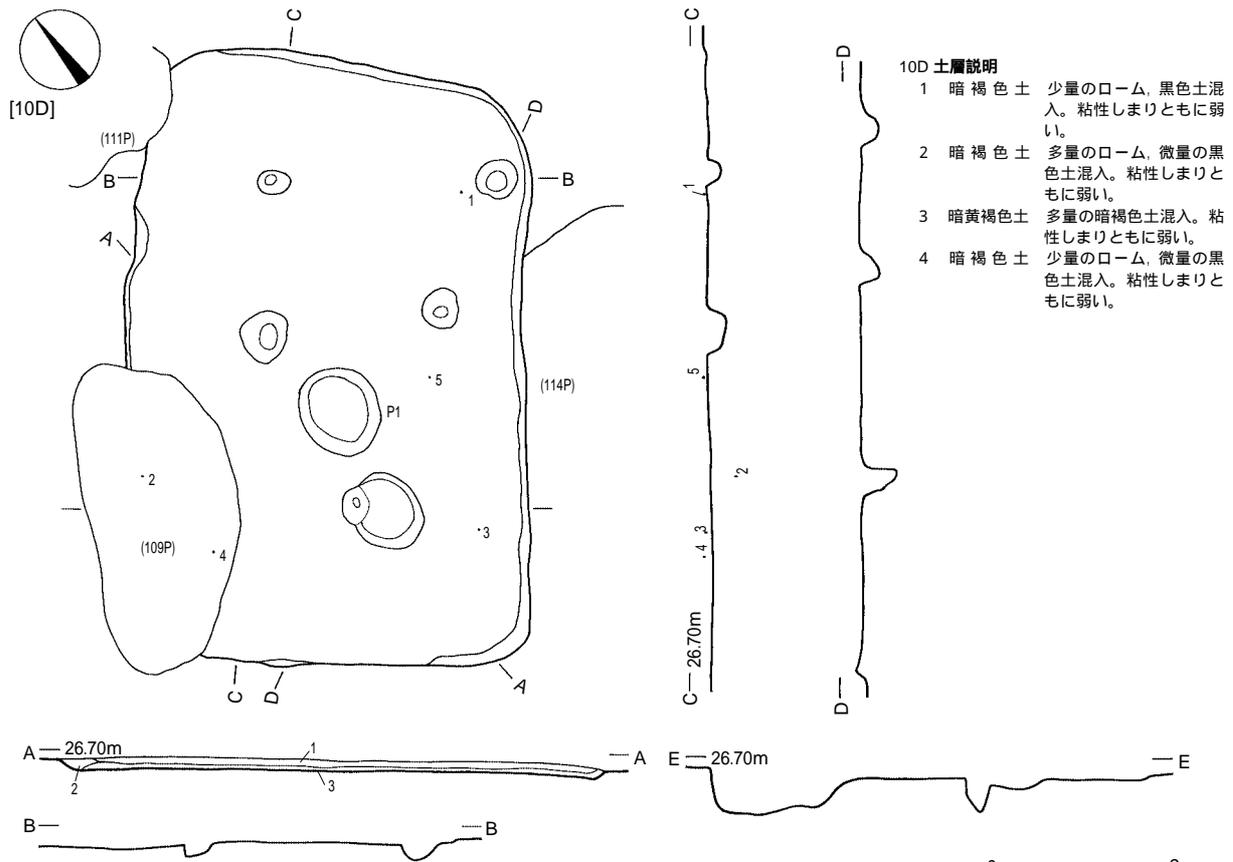
第40図 05・06・07・08D出土遺物



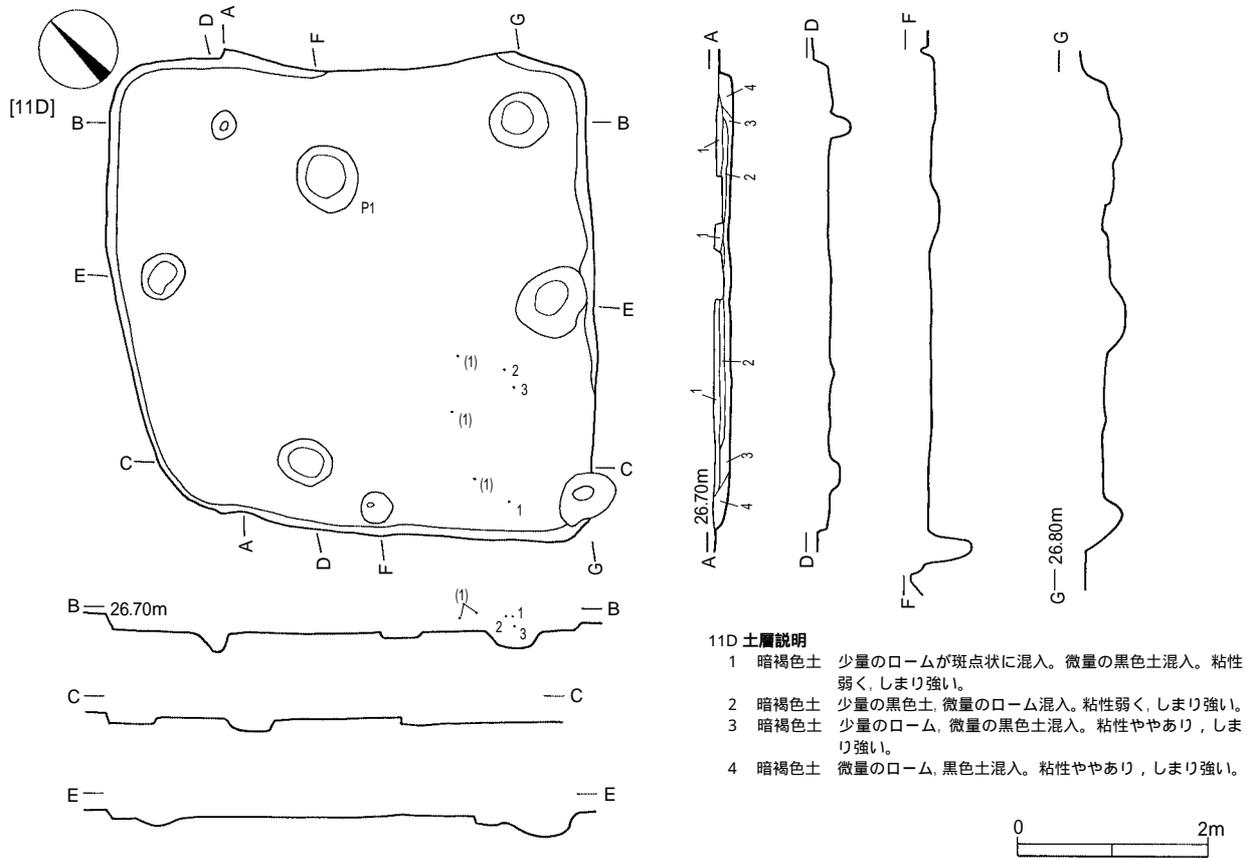
第41図 08D 平面図



第42図 09D 平面図



第43図 10D 平面図



第44図 11D 平面図

### 1 1 D (第44図 写真図版10)

規模 5.1m × 4.96m の方形 主軸方位 N - 44° - W

確認面 b ~ c 層中 深さB-B'間 B 16cm B'7cm D-D'間 D 12cm D'18cm

床面 ほぼ平坦なソフトローム中の地床だが、硬化面等の遺存は見られなかった。

ピット 壁際に近い位置に見られるが、規則性はない。

覆土 暗褐色土を主体した自然堆積の土層である。

備考 P1は焼土等の検出はないが、位置、深さから炉としての可能性が考えられる。時期については浮島～興津式の遺物が出土していることから前期後半か。

### 遺物(第45図 写真図版33)

1はやや外反する口縁～胴部である。胴部には無肋貝の波状貝殻文を施文する。輪積痕を明瞭にのこしている。2も無肋貝の波状貝殻文を施文する。3は輪積痕+凹凸文である。

### 1 2 D (第46図 写真図版10)

規模 4.88m × 4.16m の長方形 主軸方位 N - 84° - W

確認面 b ~ c 層中 深さB-B'間 B 5cm B'0cm E-E'間 E 0cm E'7cm

床面 ほぼ平坦なソフトローム中の地床で、中央から東壁際にやや硬化した床面が検出された。

ピット 全体に浅く、規則的な配列は見られない。

覆土 暗褐色土主体の土層である。

備考 遺物が出土していないため、時期不明である。

### 1 3 D (第47図 写真図版10)

規模 4.84m × 4.7mのややいびつな方形 主軸方位 N - 53° - W 115Pを切り、113Pに切られる。

確認面 b ~ c 層中 深さB-B'間 B 8cm B'5cm D-D'間 D 7cm D'8cm

床面 ほぼ平坦なソフトローム中の地床で、中央を中心としてやや硬化した床面が検出された。

ピット 全体に浅く、規則性は見られない。

覆土 暗褐色土を主体した土層である。

備考 P1は焼土等の検出はないが、位置、深さから炉としての可能性が考えられる。時期については浮島～興津式の遺物が出土していることから前期後半か。

### 遺物(第49図 写真図版34)

1は口唇を欠く若干内彎する口縁部で、単沈線文を施文する。2は113P・115Pからも出土した。口唇部に半截竹管の内側の刺突を2列、胴部は放射肋を強調した波状貝殻文を施文している。3は112P1、遺構外73・74と同一個体の可能性がある。縦位の浅い単沈線文と縦位の波状貝殻文(無肋)または三角文を施文している。4は有肋の貝殻による凹凸文と無肋貝殻による波状貝殻文の組合せである。5は無文の口縁部である。6は底部で、形態・胎土から五領ヶ台式か。

### 0 1 I (第48図 写真図版10)

規模 3.76m × 3.2mの不整形円形 主軸方位 N - 66° - E 26・27Pを切る。

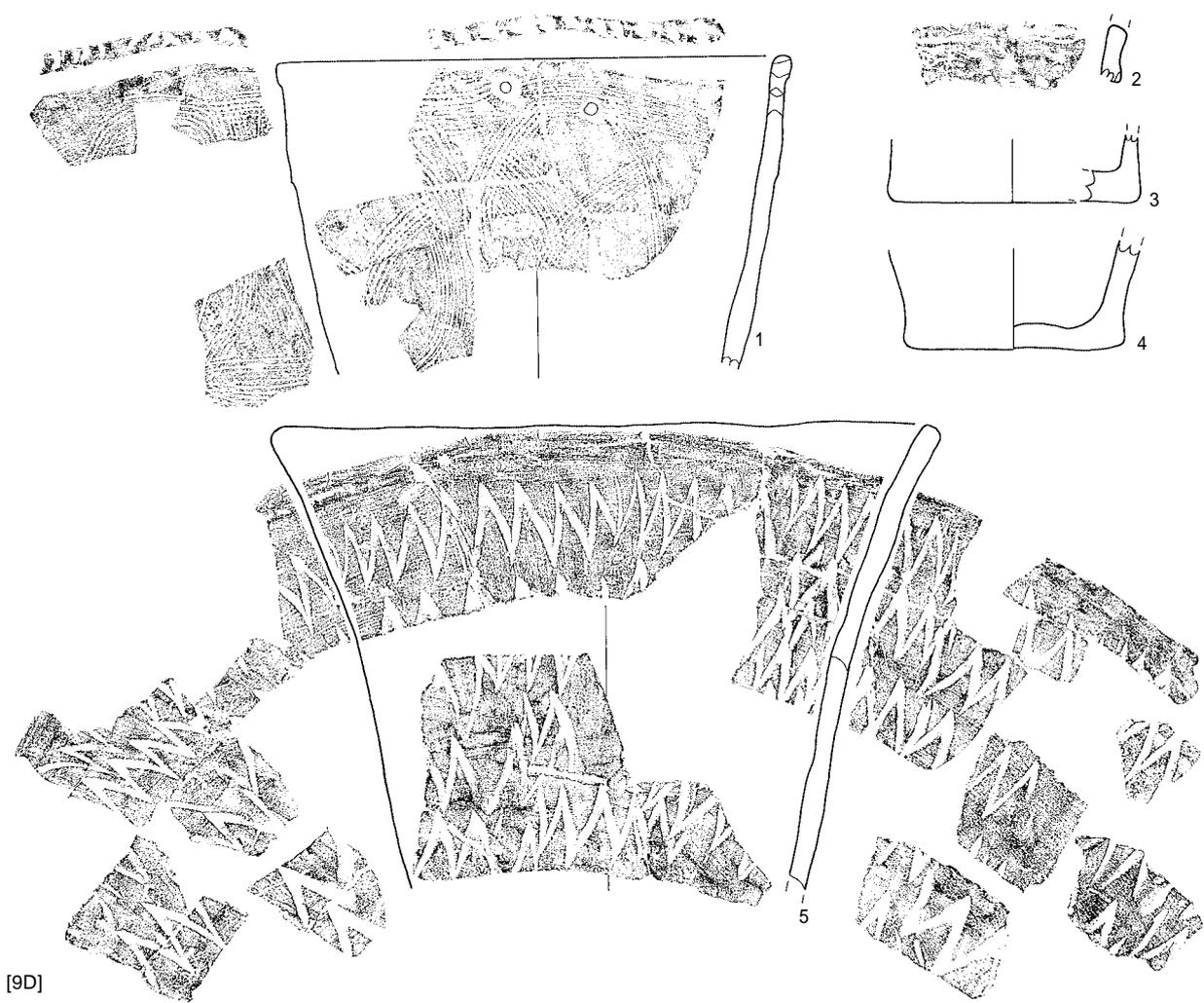
確認面 b ~ c 層中 深さB-B'間 B 26cm B'24cm

床面 ほぼ平坦なソフトローム中の底面だが、硬化面等の遺存は見られなかった。

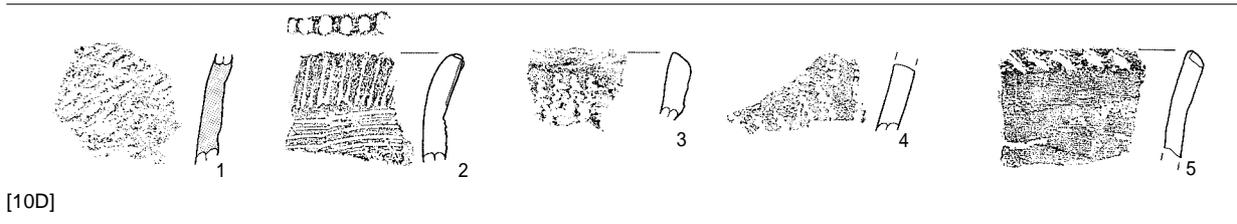
ピット 不規則であり、16cm,20cmと浅い。

覆土 暗褐色土主体の自然堆積の土層である。

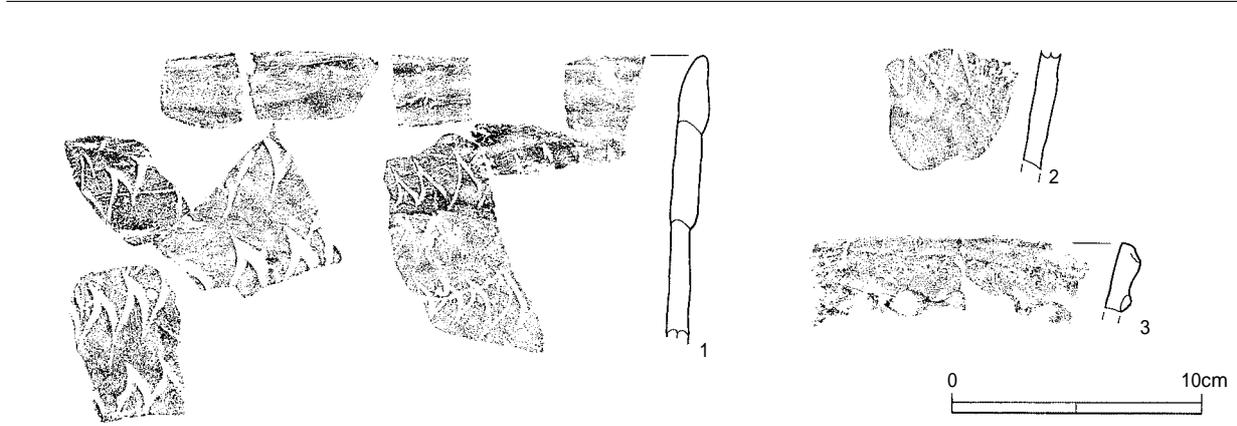
備考 炉等の施設は確認できなかった。時期については浮島～興津式の遺物が出土している。前期後



[9D]

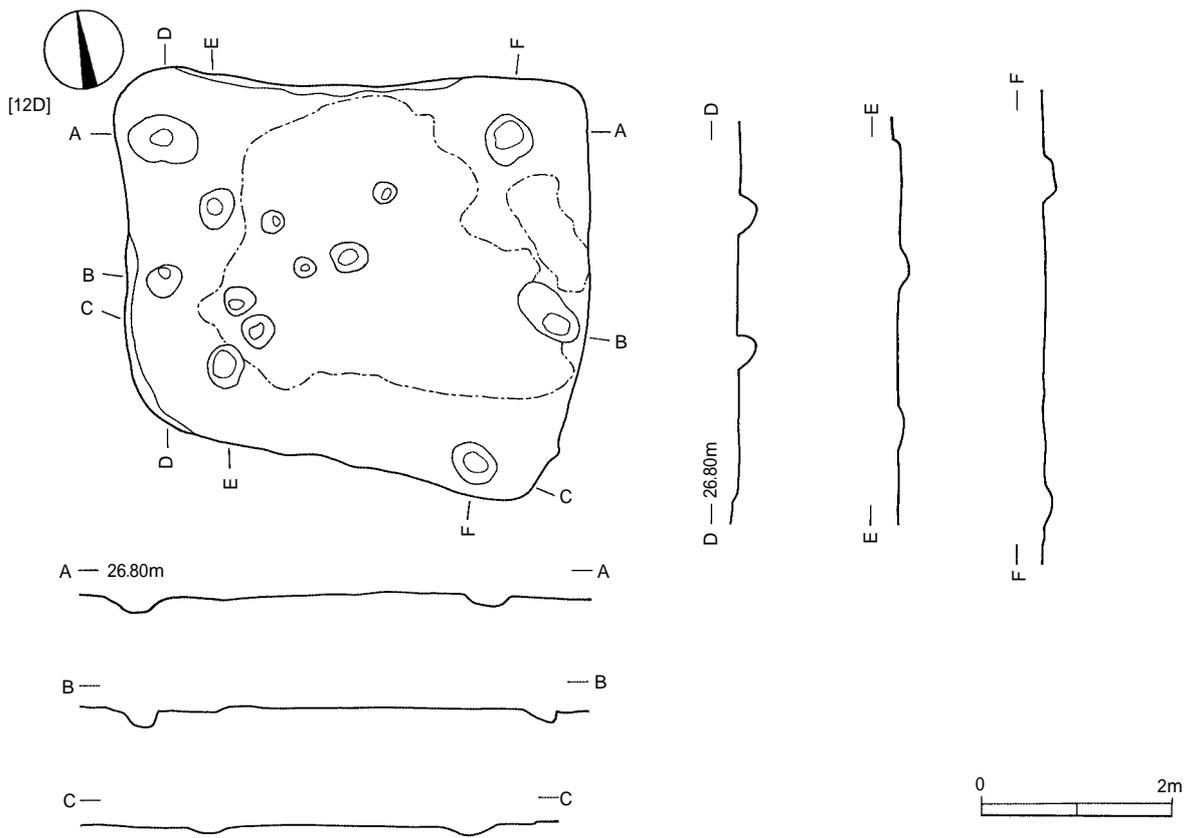


[10D]

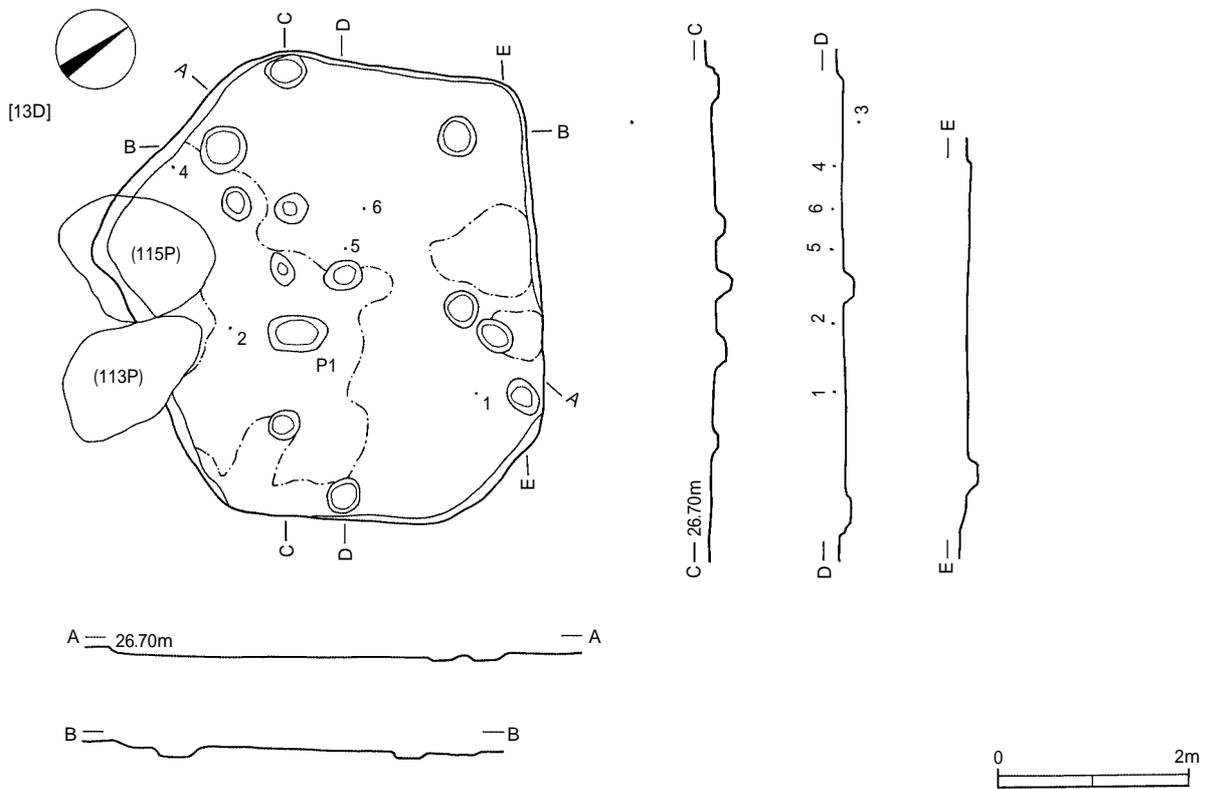


[11D]

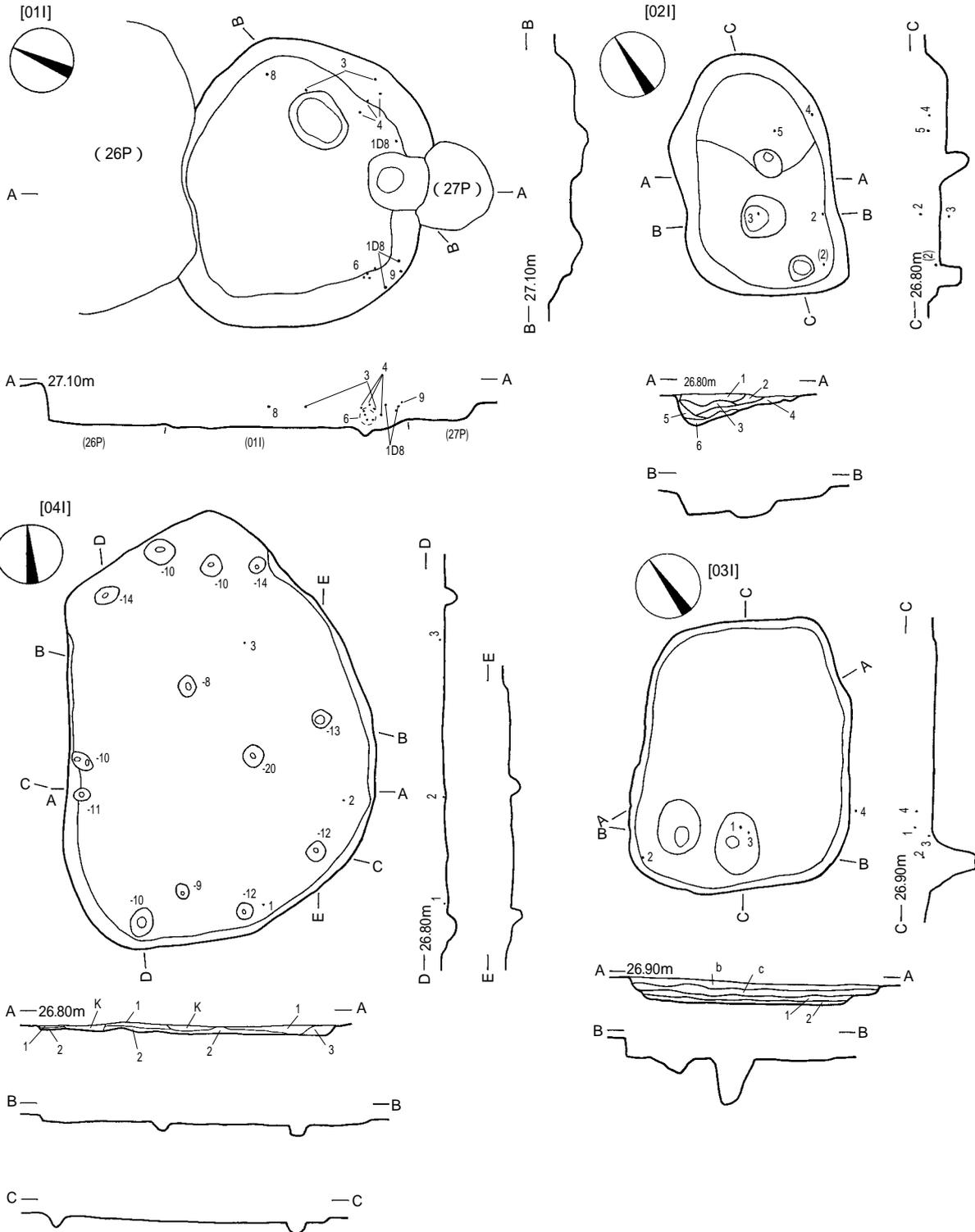
第45図 09・10・11D 出土遺物



第46图 12D 平面图



第47图 13D 平面图



02I 土層説明

- 1 暗黄褐色土 多量のローム、微量の黒色土混入。粘性しまりともに弱い。
- 2 暗褐色土 少量の黒色土、微量のローム混入。粘性しまりともに弱い。
- 3 暗褐色土 少量のローム、微量の黒色土混入。粘性しまりともに弱い。
- 4 暗黄褐色土 多量の2cm 大ロームブロック、少量の黒色土混入。粘性しまりともに弱い。
- 5 暗黄褐色土 多量のローム、微量の黒色土混入。粘性しまりともに弱い。
- 6 暗黄褐色土 少量の暗褐色土混入。粘性しまりともに弱い。

03I 土層説明

- b 褐色土 新期テフラ層  
 c 暗褐色土 ローム層と新期テフラ層の間層。黒色土混入。
- 1 暗褐色土 少量のローム、黒色土混入。粘性しまりともに弱い。
  - 2 暗黄褐色土 少量の暗褐色土混入。粘性しまりともに弱い。

04I 土層説明

- 1 暗褐色土 少量のローム、微量の黒色土混入。粘性しまりともに弱い。
- 2 暗黄褐色土 多量のローム混入。粘性しまりともに弱い。
- 3 黄褐色土 少量の暗褐色土混入。粘性しまりともに弱い。

第48図 01・02・03・04I 平面図

半と考えられる。

#### 遺物(第49図 写真図版34)

1は遺構外からも出土している。口縁部に指頭で凹みをつけ、その中に有肋貝殻の腹縁を刺突している。胴部は6～10本単位の櫛歯条線文である。口縁部横位、胴部縦位、胴部横位と上から順に施文している。2も櫛歯条線文で9本単位である。3～7は波状貝殻文(無肋)を施文する。3は口縁が強く外反する。28P1と同一個体の可能性が高い。5・6は貝殻を器面に対して垂直近くにして施文しており、同一個体の可能性がある。どちらも図示した以外に多くの小片が出土しており、5は遺構外からも出土している。7は口縁が外反し、口唇部に凹みをつけて波状にしている。波状貝殻文は腹縁中央部の施文が浅く、三角文化している。8は黒曜石の剥片で、1.2cm、幅0.9cm、重さ0.08gである。9も黒曜石の剥片で2.0cm、幅1.0cm、重さ0.3gである。

#### 02I(第48図 写真図版11)

規模 3.2m × 2.0mの不整長方形 主軸方位 N - 19° - E

確認面 b ~ c層中 深さB-B'間 B 32cm B'20cm C-C'間 C 16cm C'24cm

床面 東側で浅く、西側で深くなっている。

ピット 不規則で、8cm、16cm程度の深さをもっている。

覆土 上層でローム土、中層で暗褐色土、下層でロームブロック混じりのローム土という状況であり人為的堆積と考えられる。

備考 炉等の施設は確認できなかった。時期については諸磯b式、浮島式の遺物が出土している。前期後半と考えられる。

#### 遺物(第49図 写真図版34)

1は変形爪形文を施文する。2は外削ぎ状の口唇に平行沈線文で口縁部条線帯をつくり、胴部には放射肋を強調した波状貝殻文を施文している。3は2と類似する土器だが、別個体のようである。4・5は諸磯b式で、4は爪形文、5は平行沈線文を施文している。

#### 03I(第48図 写真図版11)

規模 3.48m × 2.68mの隅丸長方形 主軸方位 N - 39° - E

確認面 b層中 深さA-A'間 A 32cm A'28cm C-C'間 C 4cm C' 8cm

床面 ほぼ平坦なソフトローム中の底面で、硬化面等の遺存は見られなかった。

ピット 南壁際に2口検出された。

覆土 新时期テフラ層下の遺構で、確実に縄文時代の遺構としてとらえられる。土層は暗褐色土の自然堆積である。

備考 炉等の施設は確認できなかった。時期については前期後半～末葉、中期後半の遺物が出土している。特定はむずかしい。

#### 遺物(第49図 写真図版34)

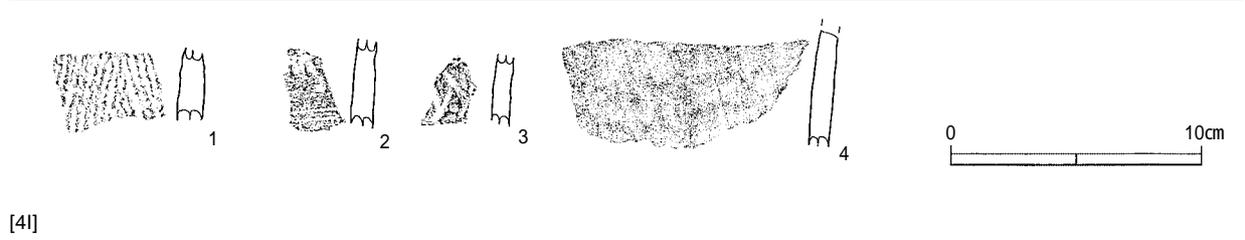
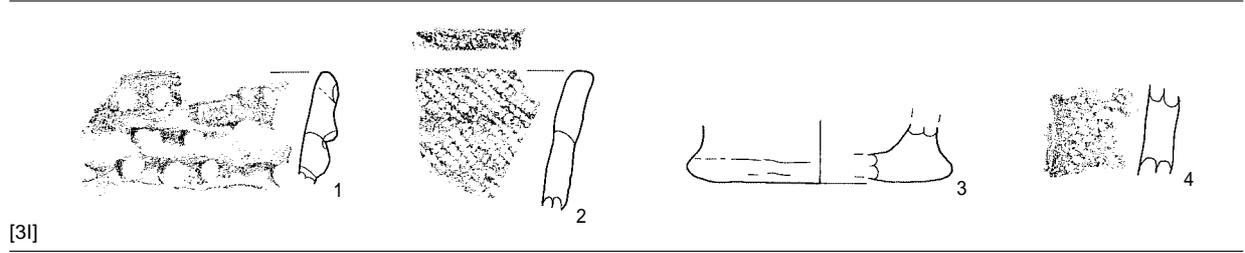
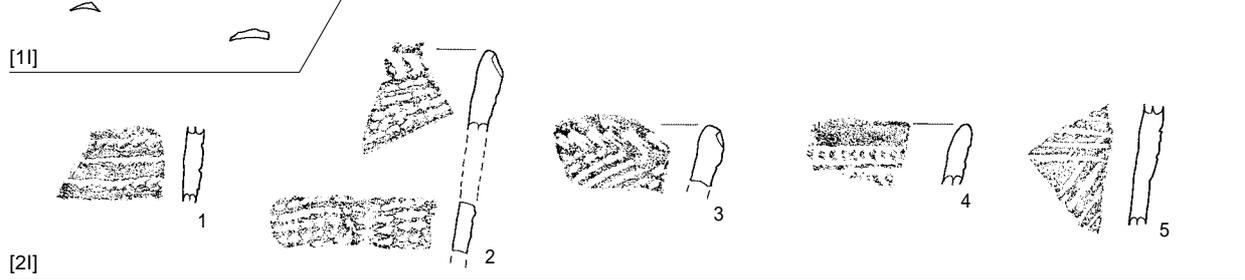
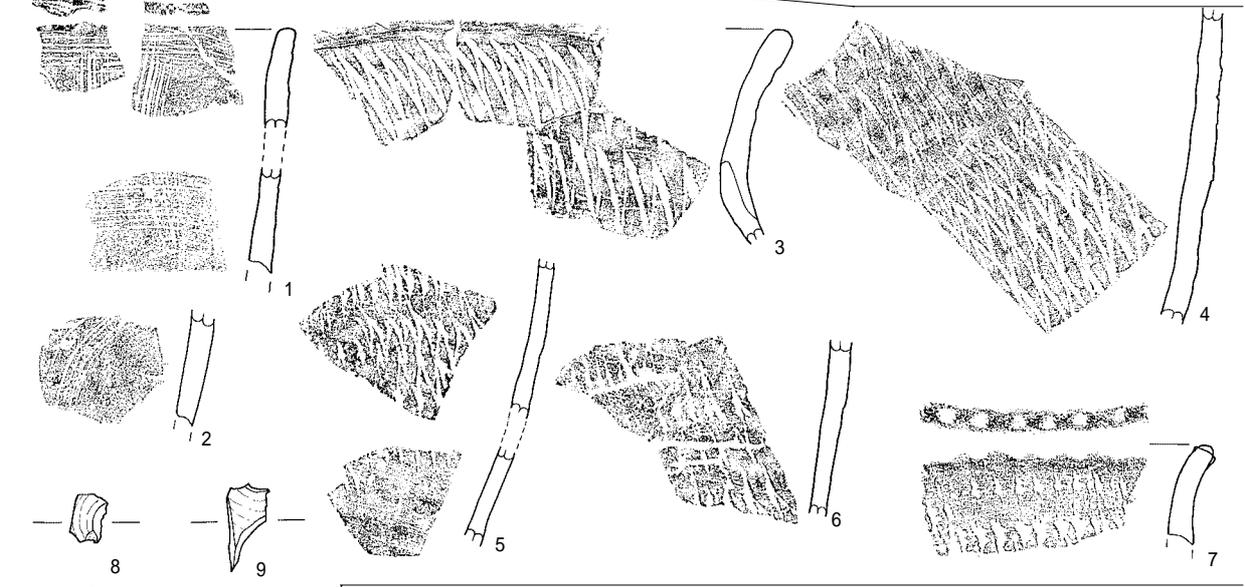
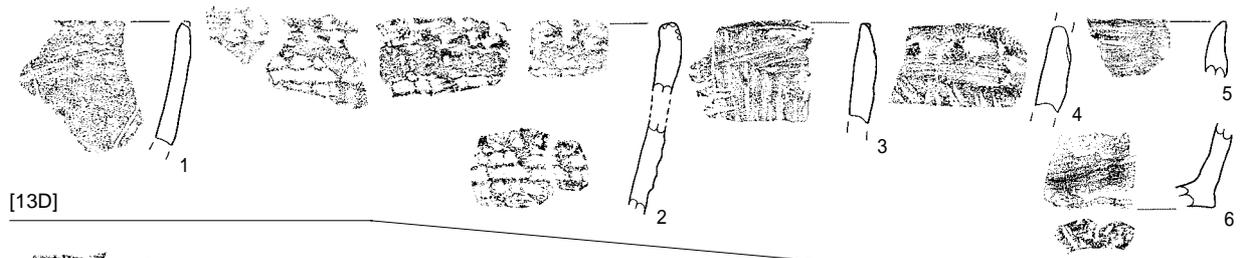
1は輪積痕+凹凸文で、遺構外75と接合する。2は前期末葉の土器で、複合口縁である。単節RLを外面及び口唇上に施文している。3は底辺の突出する底部で、浮島～興津式のものであろう。4は加曽利E式の胴部片で、単節LRが施文される。

#### 04I(第48図 写真図版11)

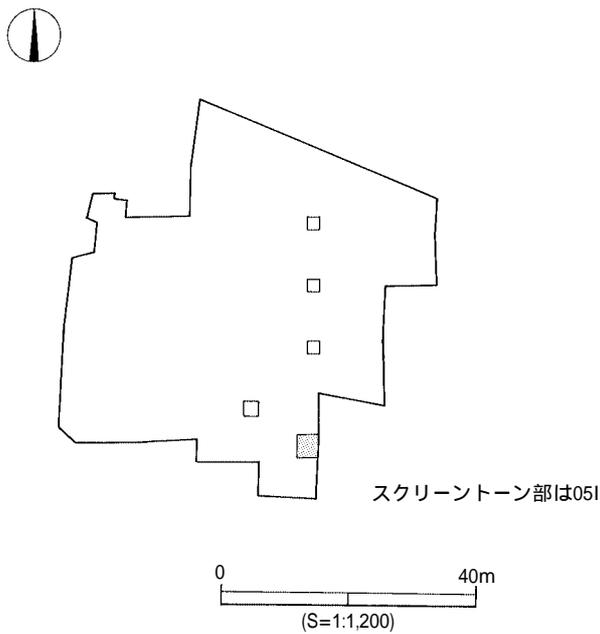
規模 5.28m × 4.04mの不整長方形 主軸方位 N - 6° - W

確認面 b ~ c層中 深さB-B'間 B 10cm B' 6cm E-E'間 E 6cm E' 6cm

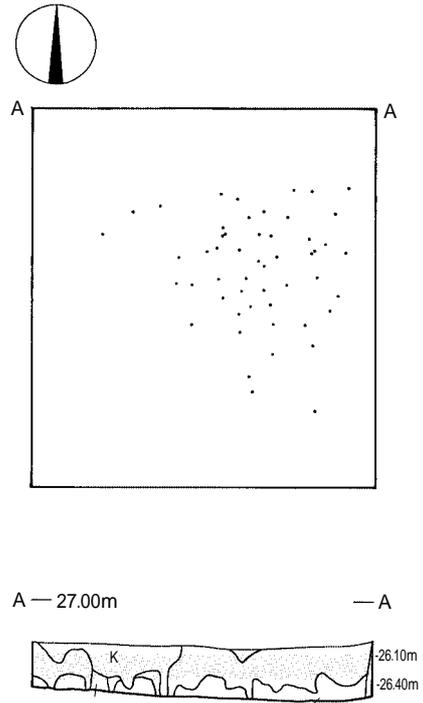
床面 ほぼ平坦なソフトローム中の底面だが、硬化面等の遺存は見られなかった。



第49图 13D · 01 · 02 · 03 · 04出土遺物



第50図 新林遺跡下層トレンチ配置図



スクリーントーン部は遺物レベルの  
上限、下限の範囲を示す。

第51図 05I遺物出土状況

ピット 壁際に検出されたが、不規則で浅い。

覆土 暗褐色土主体の自然堆積の土層である。

備考 炉等の施設は確認できなかった。時期については早期撚糸文系土器群、前期後半の遺物が出土しており、前期後半か。

#### 遺物(第49図 写真図版35)

1は撚糸文系土器の胴部片で、R縄の撚糸文を施文している。2は波状貝殻文(無肋)の下に平行沈線文を施文する。3も波状貝殻文(無肋)である。4は無文であるが、前期後半~末葉であろう。

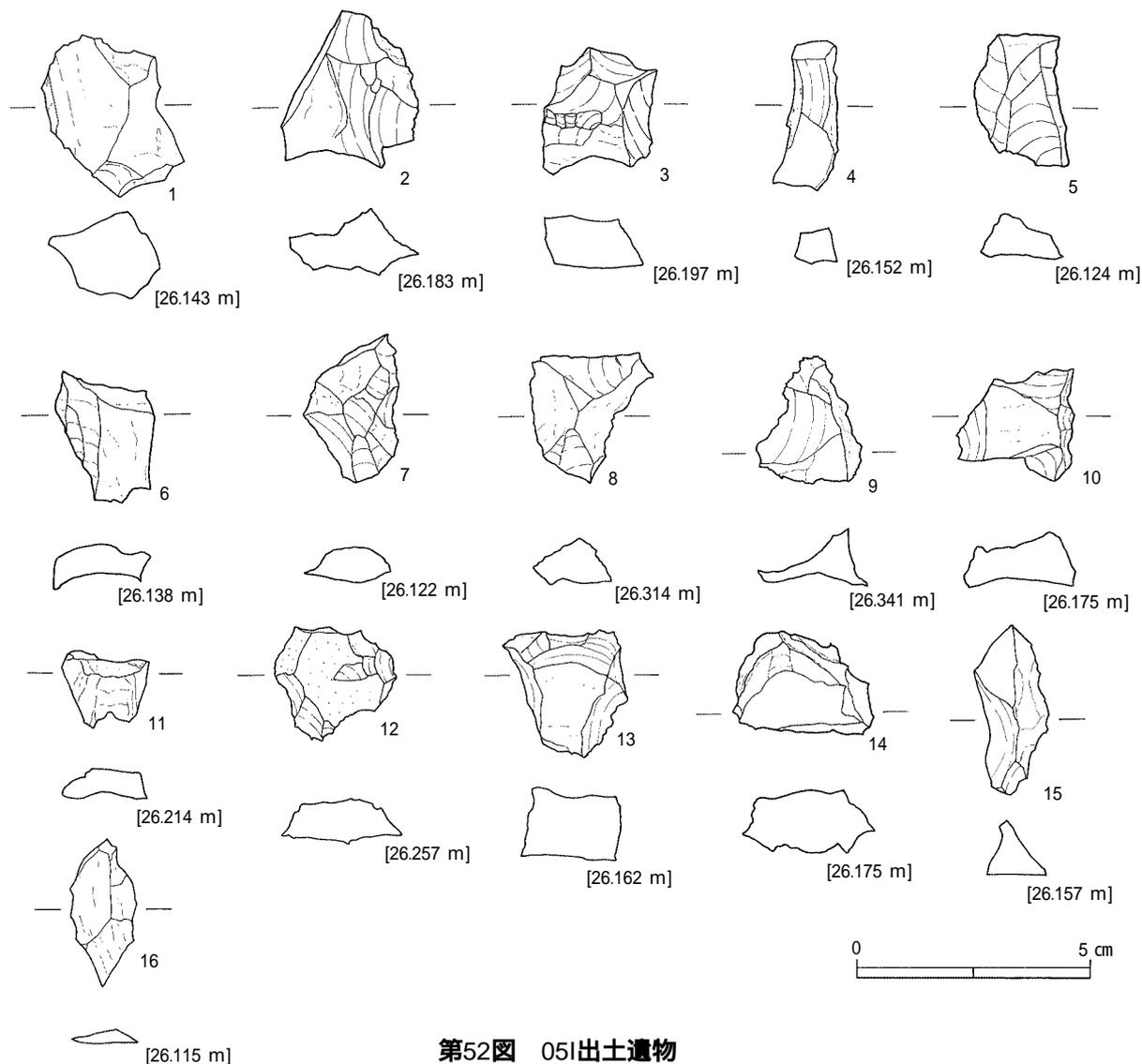
#### 05I(第50・51図 写真図版11)

規模 2.32m × 3.08m の扇形(A'側の遺物を起点として)

確認状況 調査後半の段階において、下層確認調査に着手した。10mピッチで2m × 2mのトレンチを設定し、基本的に 層の第 黒色帯下部を目標に確認を行った。この際に、第50図のスクリーントーン部において 層中から剥片が出土したため、拡張を行った。その結果、扇状の遺物集中地点を検出し、作業場としての広がりをつかえることができた。

出土層位 層中位。レベルとしては、26.12m ~ 26.34mとばらつきが見られるが、ほぼ26.15m ~ 26.20mの中に60% 弱程度収まっている。焼土、炭化物等の出土は見られなかった。

出土遺物 点数は全体で52点出土した。石材はチャートが49点、珪質頁岩?2点、安山岩1点となっている。チャートの内訳は石核8点、剥片35点、碎片6点となっている。製品はなく、二次加工した剥片が2点含まれる。珪質頁岩?の内訳は石核1点、二次加工した剥片1点である。安山岩は二次加工した剥片1点である。



第52図 05I出土遺物

遺物(第52図 写真図版35)

番号	器種	石質	長(c m)	幅(c m)	重さ(g)	備考
1	石核	チャート	3.4	3.0	13.0	
2	石核	チャート	3.3	2.9	10.8	
3	石核	チャート	2.7	2.4	7.8	
4	剥片	チャート	3.2	1.4	4.1	折れが見られる。主剥離面が節理面である
5	剥片	チャート	2.7	2.0	4.1	
6	剥片	チャート	2.8	2.1	4.3	折れが見られる。
7	剥片	チャート	3.1	2.1	4.1	
8	剥片	チャート	2.7	2.6	5.9	主剥離面が節理面である。
9	剥片	チャート	2.6	2.2	3.6	
10	石核	チャート	2.4	2.4	6.5	
11	剥片	チャート	1.9	2.2	1.9	
12	石核	チャート	2.4	2.6	6.2	
13	石核	チャート	2.7	2.6	10.2	
14	剥片	チャート	2.2	2.9	8.6	折れが見られる。
15	剥片	珩質頁岩?	3.6	1.6	4.3	二次加工のある剥片角錐状石器か?
16	剥片	安山岩	3.1	1.4	1.3	二次加工のある剥片

## b. ピット・土坑（P）遺構と遺物

### 0 1 P（第53図 写真図版11）

規 模 3.78m × 1.80m × 深さ0.32m の不整楕円形 長軸方位 N - 32° - E

壁・底面 壁は角度をもって立ち上がる。底面は平坦であるが、二口小穴が穿たれる。

覆 土 掘り直しが見られる。当初埋まった4・5・6層を切るように1・2・3層が掘られる。この1層中において火を使っている。また、4・5・6層は人為的堆積であろう。

備 考 時期を決定する出土遺物はないが、縄文時代の遺構と考えられる。

### 0 1 P 出土遺物（第54図 写真図版36）

石鏃が1点出土した。チャートで、2.7cm、幅2.3cm、重さ1.7gである。火を受けている。完形である。

### 0 2 P（第53図 写真図版11）

規 模 0.8m × 0.86m × 深さ0.38m の不整円形 方位計測なし

壁・底面 壁は中場をもち角度を変えて立ち上がる。底面は平坦ではなく尖っている。

覆 土 暗褐色土～褐色土の覆土で、自然堆積と思われる。

備 考 出土遺物はなく、時期、性格ともに不明である。

### 0 3 P（第53図 写真図版11）

規 模 0.96m × 0.64m × 深さ0.58m の長円形 長軸方位 N - 46° - W

壁・底面 壁は角度をもって立ち上がる。底面はやや凹凸が見られる。

覆 土 暗褐色土から黄褐色土の人為的堆積と考えられる。掘り直し、重複等はなかった。

備 考 出土遺物から、前期後半と考えられる。

### 0 3 P 出土遺物（第54図 写真図版36）

1は諸磯b式の浮線文土器である。地文は単節RLで浮線上に刻みをつけている。

### 0 4 P（第53図 写真図版11）

規 模 0.8m × 0.66m × 深さ0.3m の不整楕円形 長軸方位 N - 65° - W

壁・底面 壁は角度をもって立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

覆 土 暗褐色土の覆土で、自然堆積と考えられる。掘り直し、重複等はなかった。

備 考 出土遺物はなく、時期、性格ともに不明である。

### 0 5 P（第53図 写真図版12）

規 模 1.4m × 1.18m × 深さ0.74m の不整円形 長軸方位 N - 37° - W

壁・底面 壁は角度をもって立ち上がる。底面は南側に深く傾斜している。坑底中央に0.32m、深さ0.2mの円形ピットが穿たれる。

覆 土 1・2層は自然堆積、3・4・5層は人為堆積の覆土と考えられる。掘り直しは見られなかった。

備 考 早期の土器片が覆土最上層から出土しているが、特定はむずかしい。

### 0 5 P 出土遺物（第54図 写真図版36）

1は撚糸文系土器で単節LRを施文している。

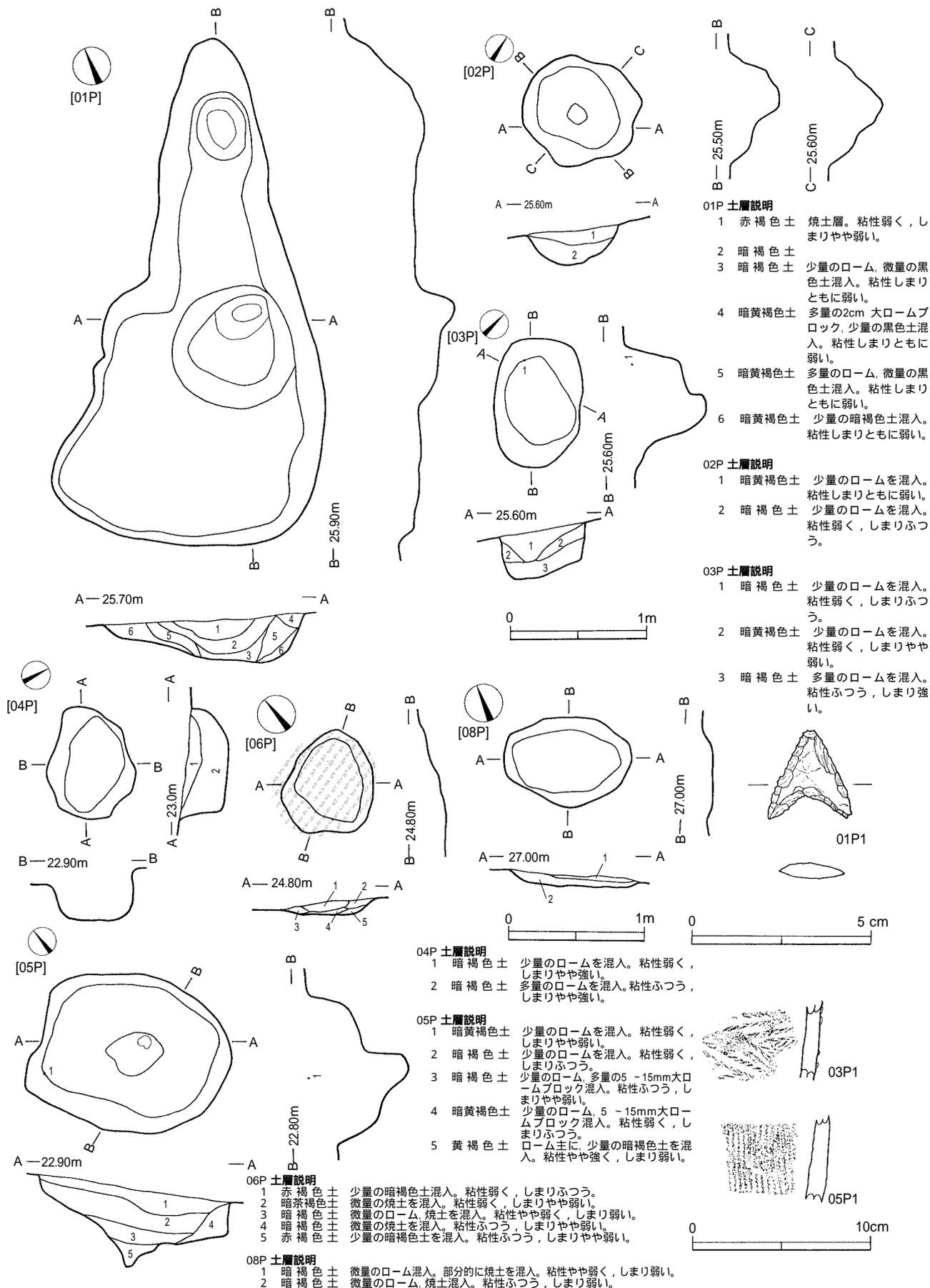
### 0 6 P（第53図 写真図版12）

規 模 0.82m × 0.63m × 深さ0.12m の円形 長軸方位 N - 52° - E

壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。底面は南側に傾斜している。

覆 土 焼土の堆積から使用停止後の状態をとどめている。

備 考 出土遺物はないが、縄文時代の炉穴ないし炉跡と考えられる。



第53図 01・02・03・04・05・06・08P 平面図

第54図 01・03・05P 出土遺物

**07P (第55図 写真図版12)**

規 模 1.75m × 0.74m × 深さ0.6mの楕円形 長軸方位 N - 29° - W

壁・底面 壁は傾斜をもって立ち上がる。底面に0.4m, 深さ0.1 ~ 0.12m の円形ピットが2基検出された。底面はおおむね平坦である。

覆 土 1 ~ 4層が埋没後の自然堆積, 5 ~ 7層が人為的埋め戻しの土層である。

備 考 出土遺物はないが, 縄文時代の陥穴と考えられる。

**08P (第53図 写真図版12)**

規 模 0.94m × 0.68m × 深さ0.02m の楕円形 長軸方位 N - 61° - W

壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。

覆 土 焼土・焼土粒の堆積が顕著である。

備 考 出土遺物はないが, 縄文時代の炉穴ないし炉跡と考えられる。

**09P (第55図 写真図版12)**

規 模 2.08m × 0.97m × 深さ1.58m の楕円形 長軸方位 N - 77° - E

壁・底面 底面から0.4m上がった地点から角度を換えて立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

覆 土 1・2層が埋没後の自然堆積, 3~5層が人為的埋め戻しの土層である。

備 考 出土遺物はないが, 縄文時代の陥穴と考えられる。

**10P (第55図 写真図版12)**

規 模 2.64m × 1.20m × 深さ0.12m の楕円形 長軸方位 N - 43° - E

壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。底面はやや凹凸が見られる。

覆 土 暗褐色土の自然堆積である。掘り直し, 重複等はなかった。

備 考 出土遺物から, 前期後半と考えられる。

**10P 出土遺物 (第56図 写真図版36)**

1は平行沈線文を交差させている。前期後半に位置づけられる。

**11P (第55図 写真図版13)**

規 模 2.18m × 1.20m × 深さ0.18m の楕円形 長軸方位 N - 70° - E

壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

覆 土 暗褐色土の自然堆積である。掘り直し, 重複等はなかった。

備 考 出土遺物はなく, 時期, 性格ともに不明である。

**12P (第55図 写真図版13)**

規 模 1.22m × 1.12m × 深さ0.12m の円形 方位計測なし

壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。底面は皿状である。

覆 土 暗褐色土の自然堆積である。掘り直し, 重複等はなかった。

備 考 出土遺物はなく, 時期, 性格ともに不明である。

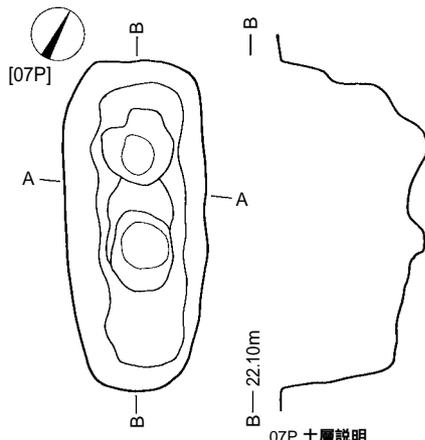
**13P (第55図)**

規 模 0.64m × 0.62m × 深さ0.55m の円形 方位計測なし

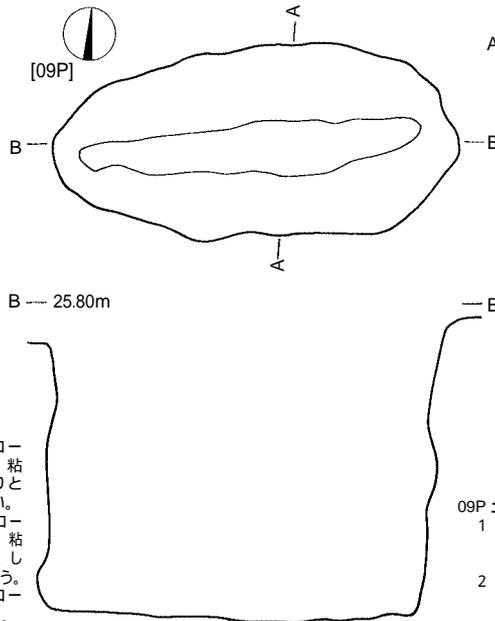
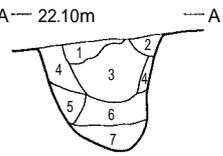
壁・底面 壁は角度をもって立ち上がる。底面は平坦面をもつ。

覆 土 柱掘り方の土層堆積である。1・2・3層が立ち腐れの土層, 4層が柱固定の土層である。

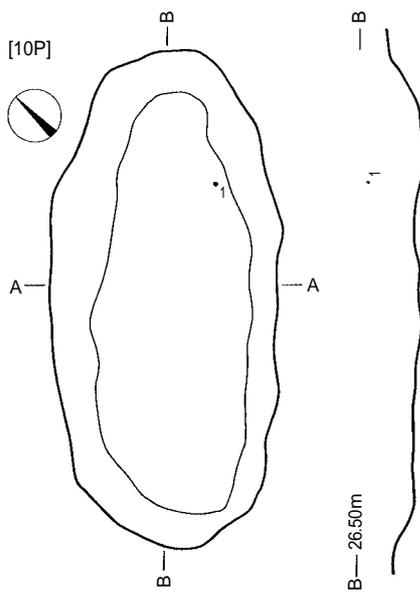
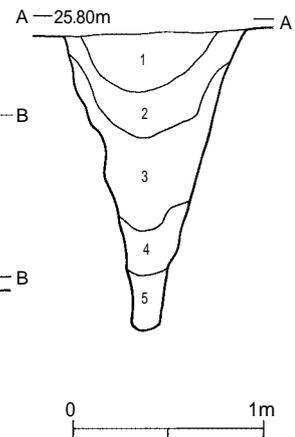
備 考 掘立柱建物跡とすべきその他のピットは不明であり, 時期, 性格ともに不明である。



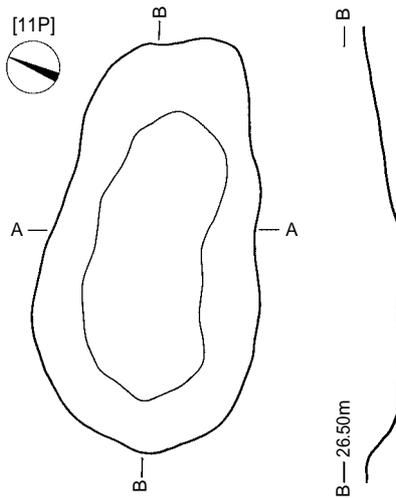
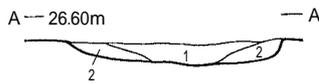
- 07P 土層説明**
- 1 暗褐色土 少量のローム混入。粘性しまりともに弱い。
  - 2 暗黄褐色土 微量のローム混入。粘性弱く、しまりふつう。
  - 3 暗褐色土 少量のロームが斑点状に混入。粘性しまりともふつう。
  - 4 暗褐色土 微量のロームを混入。粘性しまりともふつう。
  - 5 暗黄褐色土 微量のロームを混入。粘性やや強く、しまりやや弱い。
  - 6 暗黄褐色土 微量のローム、少量の暗褐色土混入。粘性ふつう、しまりふつう。
  - 7 暗黄褐色土 少量の暗褐色土、ロームを混入。粘性ふつう、しまりやや強い。



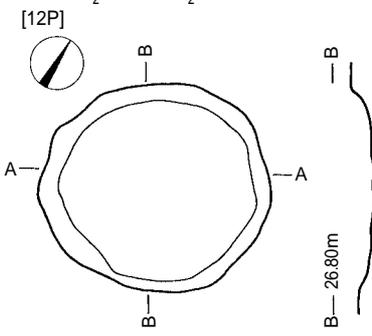
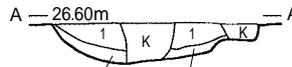
- 09P 土層説明**
- 1 暗茶褐色土 微量のローム混入。粘性しまりともふつう。
  - 2 暗褐色土 微量のローム混入。粘性やや強く、しまりやや弱い。
  - 3 黄褐色土 10-40mm大のロームブロック混入。粘性強く、しまり弱い。
  - 4 黄褐色土 10mm大のロームブロックを少量混入。粘性強く、しまり弱い。
  - 5 黄褐色土 10-20mm大のロームブロックを少量混入。粘性強く、しまり弱い。



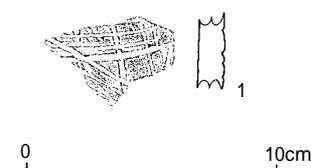
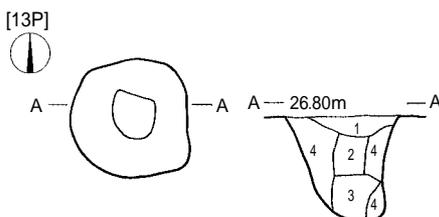
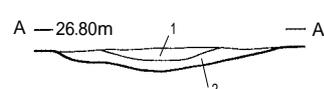
- 10P 土層説明**
- 1 暗褐色土 少量のローム、黒色土混入。粘性しまりともに弱い。
  - 2 暗黄褐色土 微量の暗褐色土混入。粘性しまりともに強い。



- 11P 土層説明**
- 1 暗褐色土 少量のローム、黒色土混入。粘性しまりともに弱い。
  - 2 暗黄褐色土 微量の暗褐色土混入。粘性しまりともに強い。



- 12P 土層説明**
- 1 暗褐色土 少量のローム、黒色土混入。粘性ややあり、しまり弱い。
  - 2 暗褐色土 少量のローム、黒色土混入。粘性しまりともに弱い。
  - 3 暗褐色土 少量のローム、微量の黒色土混入。粘性しまりともに弱い。
  - 4 暗黄褐色土 ローム主に、微量の暗褐色土混入。粘性しまりともに強い。



第55図 07・09・10・11・12・13P 平面図

第56図 10P 出土遺物

**14 P (第57図 写真図版13)**

規 模 0.74m × 0.48m × 深さ0.2mの楕円形 長軸方位 N - 32° - E  
壁・底面 壁はやや角度をもって立ち上がる。底面はほぼ平坦である。  
覆 土 暗褐色土の自然堆積である。掘り直し、重複等はなかった。  
備 考 出土遺物はなく、時期、性格ともに不明である。

**15 P (第57図 写真図版13)**

規 模 3.42m × 1.14m × 深さ0.16m の楕円形 長軸方位 N - 82° - W 16Pに切られる。  
壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。  
覆 土 暗褐色土の自然堆積である。掘り直しはなかった。  
備 考 出土遺物はなく、時期、性格ともに不明である。

**16 P (第57図 写真図版13)**

規 模 2.92m × 2.02m × 深さ0.68m の不整楕円形 長軸方位 N - 84° - E 15Pを切る。  
壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。底面は平坦部分がなく尖底となっている。  
覆 土 暗褐色土の自然堆積である。掘り直しはなかった。  
備 考 出土遺物から、前期後半と考えられる。

**16 P 出土遺物 (第58図 写真図版36)**

1は土製塊状耳飾である。6.1cm,幅2.6cm,重さ16.2g でやや大ぶりの製品である。2は無肋貝による波状貝殻文を施文する。

**17 P (第57図 写真図版13)**

規 模 0.94m × 0.84m × 深さ0.41m の円形 長軸方位 N - 27° - E  
壁・底面 壁は角度をもって立ち上がる。底面はすり鉢状で平坦面はない。  
覆 土 暗褐色土の自然堆積である。掘り直し、重複等はなかった。  
備 考 出土遺物から、前期後半と考えられる。

**17 P 出土遺物 (第58図 写真図版36)**

1は外削ぎ状口唇にヘラによる刺突で口縁部条線帯をなす。胴部は不明瞭だが、三角文か。2は三角文を施文している。

**18 P (第57図 写真図版14)**

規 模 2.72m × 2.63m × 深さ0.1mの円形 長軸方位 南北方向である。  
壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。  
覆 土 暗褐色土の自然堆積である。掘り直し、重複等はなかった。  
備 考 出土遺物から、前期後半と考えられる。

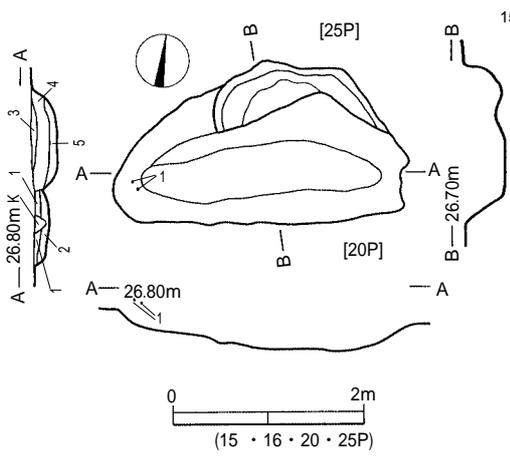
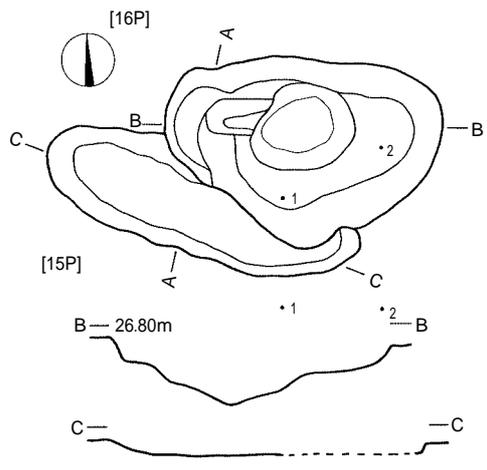
**18 P 出土遺物 (第58図 写真図版36)**

1は諸磯b式である。内折する口縁部に浮線文を貼付する。地文はなく、浮線上に刻みを付す。2は口唇上を棒状工具側面の押圧で凹みをつけ、胴部に単節RLを施文している。

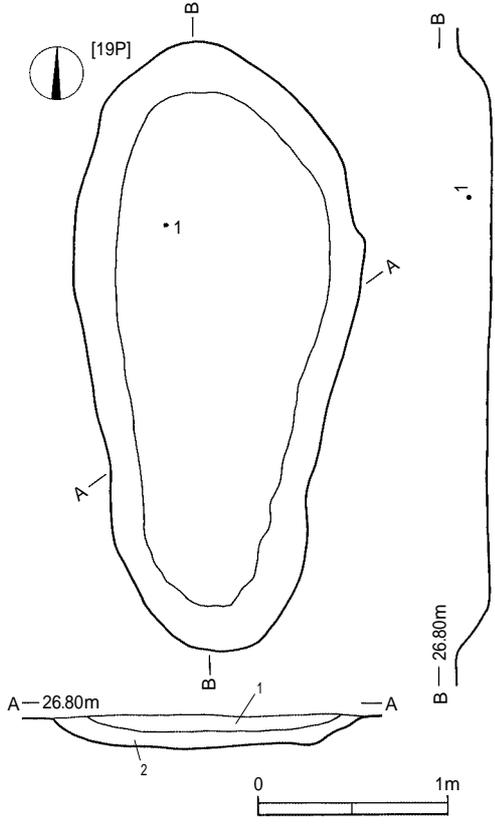
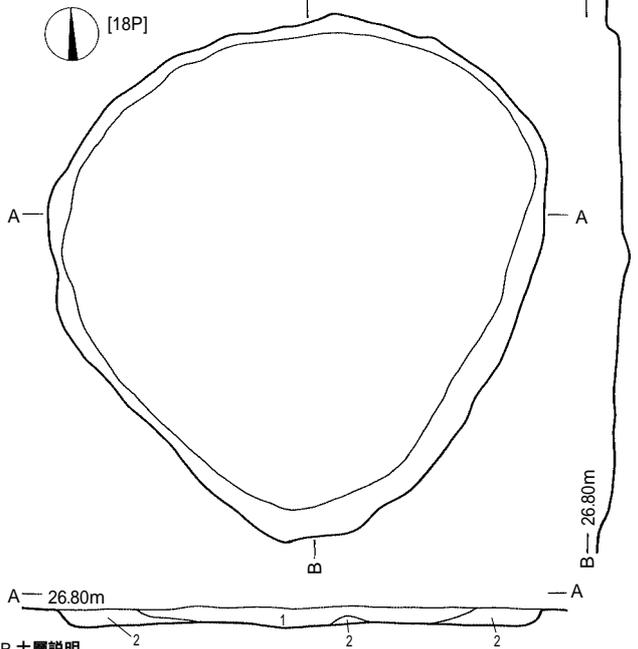
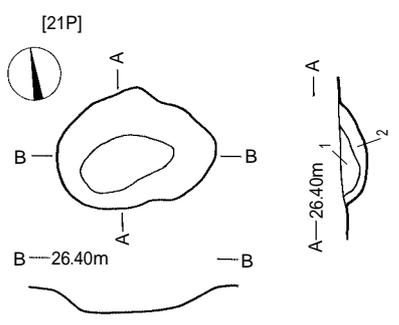
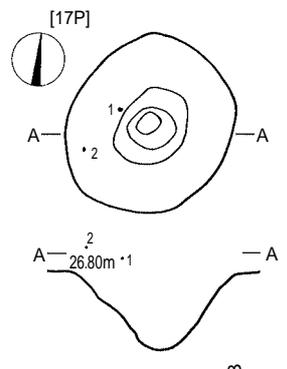
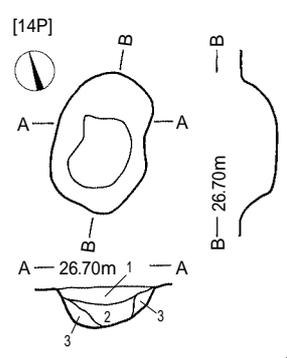
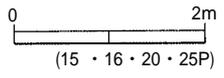
**19 P (第57図 写真図版14)**

規 模 3.23m × 1.52m × 深さ0.18m の楕円形 長軸方位 N - 10° - W  
壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。  
覆 土 暗褐色土の自然堆積である。掘り直し、重複等はなかった。  
備 考 出土遺物から、前期後半と考えられる。

**19 P 出土遺物 (第58図 写真図版36)** 1は三角文を施文している。



- 15.16P土層説明
- 1 暗褐色土 微量の黒色土, 少量のロームが混入。粘性しまりともに弱い。
  - 2 暗黄褐色土 ローム主に, 少量の暗褐色土混入。粘性しまりともに弱い。
  - 3 暗褐色土 少量の黒色土, 少量のロームが斑点状に混入。粘性非常に弱く, しまり強い。
  - 4 黒褐色土 少量の暗褐色土, 少量のロームが斑点状に混入。粘性弱く, しまり強い。
  - 5 暗褐色土 ローム主だが, 多量のローム, 微量の暗褐色土混入。粘性弱く, しまり強い。

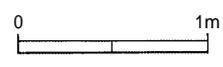


- 14P土層説明
- 1 暗褐色土 微量の黒色土, 少量のロームが斑点状に混入。粘性弱く, しまりやや強い。
  - 2 暗褐色土 少量の黒色土, 少量のロームが斑点状に混入。粘性弱く, しまりやや強い。
  - 3 暗黄褐色土 ローム主に, 少量の暗褐色土混入。

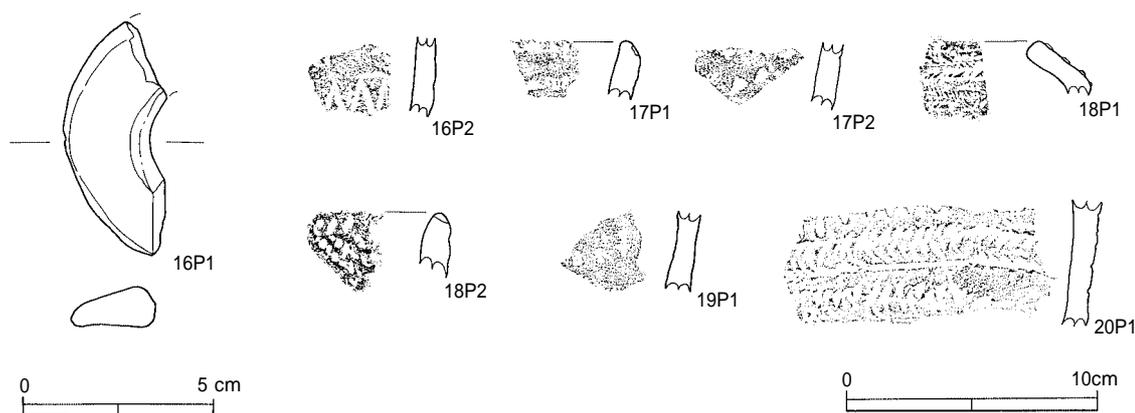
- 18P土層説明
- 1 暗褐色土 微量の黒色土, 少量のロームが混入。粘性しまりともに弱い。
  - 2 暗褐色土 暗褐色土主だが, 多量のローム, 微量の黒色土混入。粘性しまりともに弱い。

- 19P土層説明
- 1 暗褐色土 微量の黒色土, 少量のロームが混入。粘性しまりともに弱い。
  - 2 暗黄褐色土 ローム主に, 微量の黒色土, 暗褐色土混入。粘性しまりともに弱い。

- 21P土層説明
- 1 暗褐色土 微量のローム, 少量の暗黄褐色土が混入。粘性弱く, しまりやや強い。
  - 2 暗黄褐色土 少量の暗褐色土, 微量のローム混入。粘性やや弱く, しまりふつう。



第57図 14・15・16・17・18・19・20・21・25P平面図



第58図 16・17・18・19・20P 出土遺物

**20P (第57図 写真図版14)**

規 模 3.16m × 1.44m × 深さ0.36m の不整長方形 長軸方位 N - 76° - E 25P に切られる。

壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

覆 土 暗褐色土の自然堆積であるが、土層観察から2回程度の掘り返しが見られる。

備 考 出土遺物から、前期後半と考えられる。

**20P 出土遺物 (第58図 写真図版36)**

1は平行沈線文上に変形爪形文を施文している。変形爪形文間に半截竹管角?を使って刻みをいれるが、ずれて変形爪形文にかかっている。

**25P (第57図 写真図版14)**

規 模 (1.94)m × (1.60)m × 深さ0.2mの略円形 方位計測なし 20Pを切る。

壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

覆 土 暗褐色土の単一層である。

備 考 出土遺物はなく、時期、性格ともに不明である。

**21P (第57図 写真図版14)**

規 模 0.82m × 0.6m × 深さ0.13m の楕円形 長軸方位 N - 80° - E

壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。

覆 土 暗褐色土の自然堆積である。掘り直し、重複等はなかった。

備 考 出土遺物はなく、時期、性格ともに不明である。

**22P (第59図)**

規 模 0.74m × 0.7m × 深さ0.2mの円形 方位計測なし

壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。底面はすり鉢状である。

覆 土 暗褐色土の自然堆積層である。掘り直しは見られない。

備 考 出土遺物はなく、時期、性格ともに不明である。

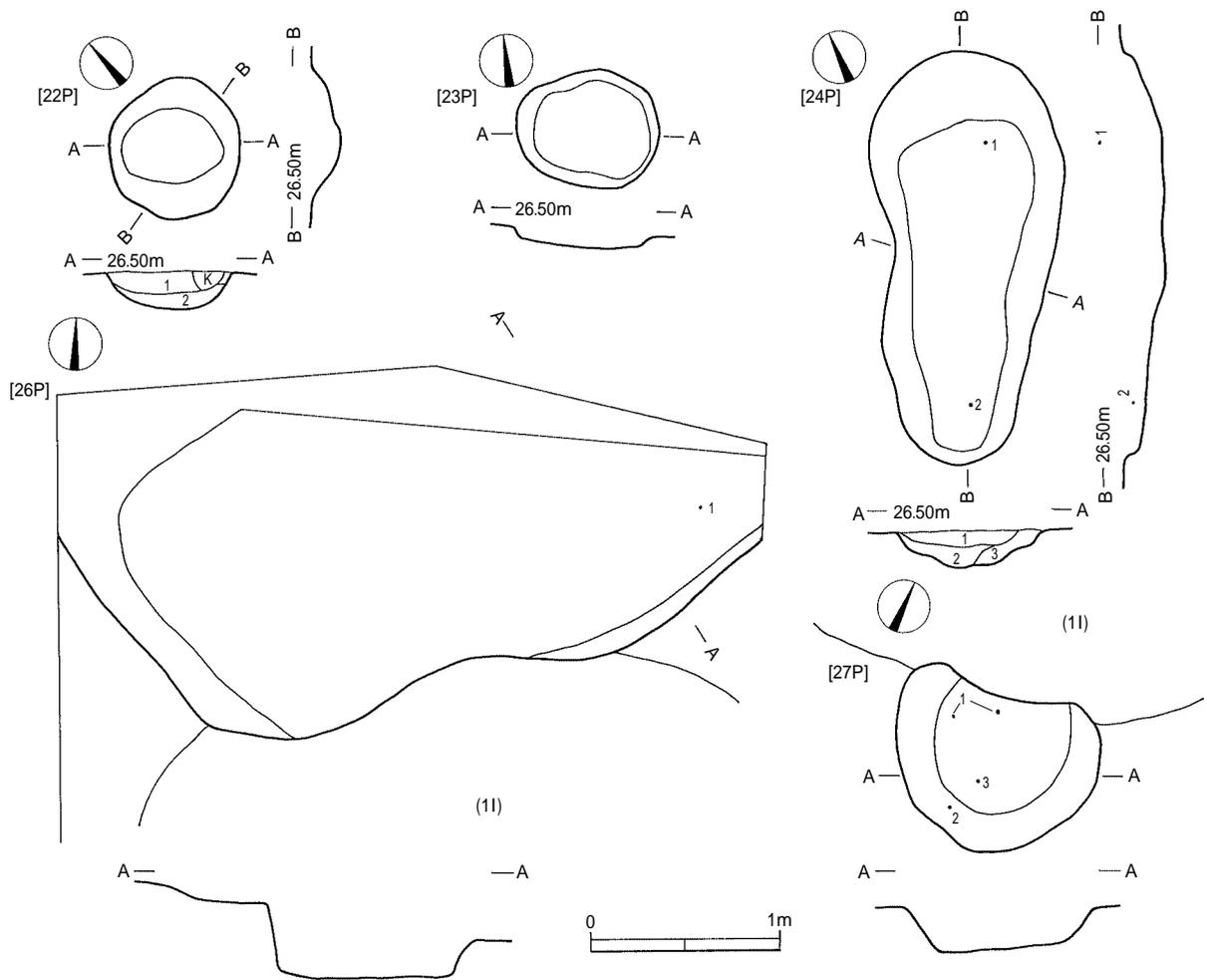
**23P (第59図 写真図版14)**

規 模 0.76m × 0.63m × 深さ0.1mの長円形 長軸方位 N - 84° - W

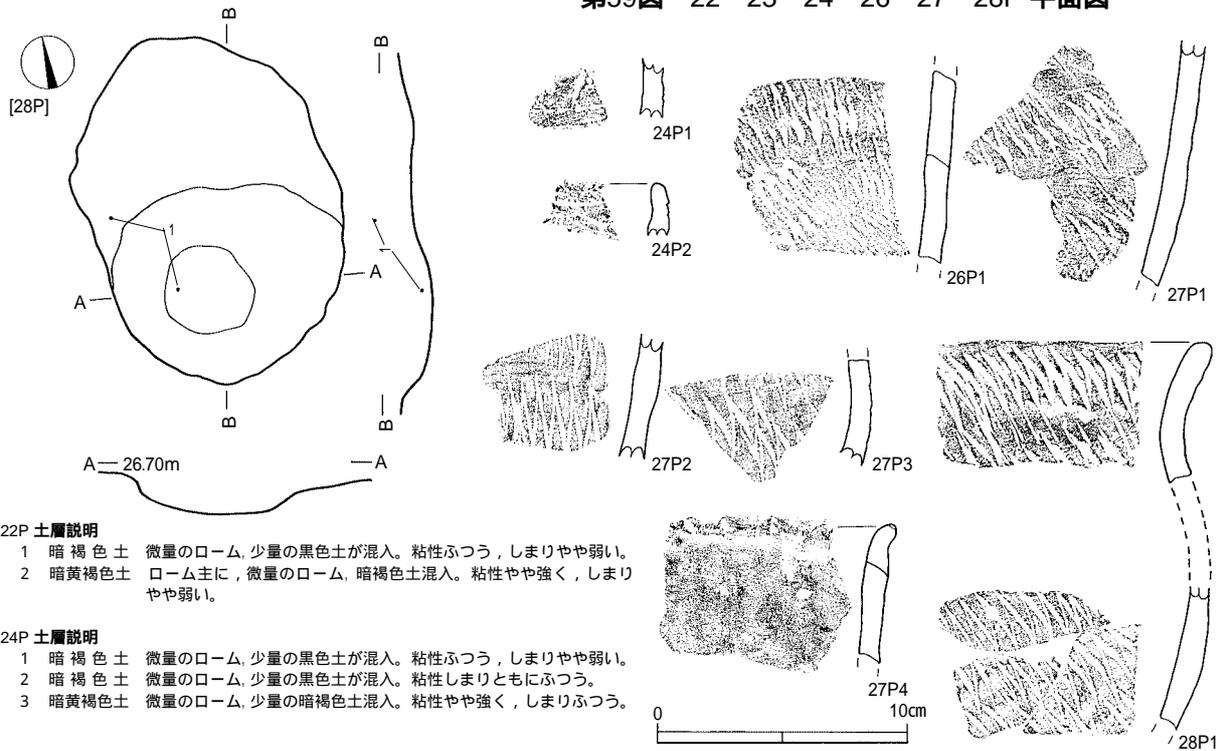
壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。

覆 土 暗褐色土の自然堆積である。掘り直し、重複等はなかった。

備 考 出土遺物はなく、時期、性格ともに不明である。



第59図 22・23・24・26・27・28P 平面図



22P 土層説明

- 1 暗褐色土 微量のローム、少量の黒色土が混入。粘性ふつう、しまりやや弱い。
- 2 暗黄褐色土 ローム主に、微量のローム、暗褐色土混入。粘性やや強く、しまりやや弱い。

24P 土層説明

- 1 暗褐色土 微量のローム、少量の黒色土が混入。粘性ふつう、しまりやや弱い。
- 2 暗褐色土 微量のローム、少量の黒色土が混入。粘性しまりともにふつう。
- 3 暗黄褐色土 微量のローム、少量の暗褐色土混入。粘性やや強く、しまりふつう。

第60図 24・26・27・28P 出土遺物

#### 24P (第59図 写真図版14)

規 模 2.21m × 1.0m × 深さ0.2mの楕円形 長軸方位 N - 22° - E  
壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。底面はやや凹凸がみられる。  
覆 土 暗褐色土の自然堆積である。掘り直し、重複等はなかった。  
備 考 出土遺物から、前期後半と考えられる。

#### 24P出土遺物(第60図 写真図版36)

1は有節平行沈線に近い変形爪形文である。2は平行沈線文で諸磯b式である。

#### 26P (第59図)

規 模 調査区外に延びているため不明 方位計測なし 01Iに切られる。  
壁・底面 壁は角度をもって立ち上がる。底面は平坦である。  
備 考 新期テフラ層下の遺構であり、前期後半と考えられる。

#### 26P出土遺物(第60図 写真図版36)

1は01I6・27P1と同一個体の可能性がある。無肋貝による波状貝殻文を施文する。

#### 27P (第59図 写真図版14)

規 模 (1.15)m × 1.07m × 深さ0.22mの円形 方位計測なし 01Iに切られる。  
壁・底面 壁はやや角度をもって立ち上がる。底面は平坦である。  
覆 土 暗褐色土の自然堆積である。掘り直しは見られない。  
備 考 出土遺物から、前期後半と考えられる。

#### 27P出土遺物(第60図 写真図版36)

1は01I6・26P1と同一個体の可能性がある。波状貝殻文(無肋)を施文する。2・3も波状貝殻文(無肋)である。4は口唇部に凹みをつけて小波状に作出し、そこに爪を押圧している。胴部は無文である。

#### 28P (第59図 写真図版14)

規 模 1.87m × 1.32m × 深さ0.2mの楕円形 長軸方位 N - 3° - E  
壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。  
覆 土 不明である。  
備 考 出土遺物から、前期後半と考えられる。

#### 28P出土遺物(第60図 写真図版36)

1は口縁部が外反し、胴部が膨らむ器形と推定される。無肋貝による波状貝殻文を施文する。01I3と同一個体となる可能性がある。

#### 29P (第61図 写真図版15)

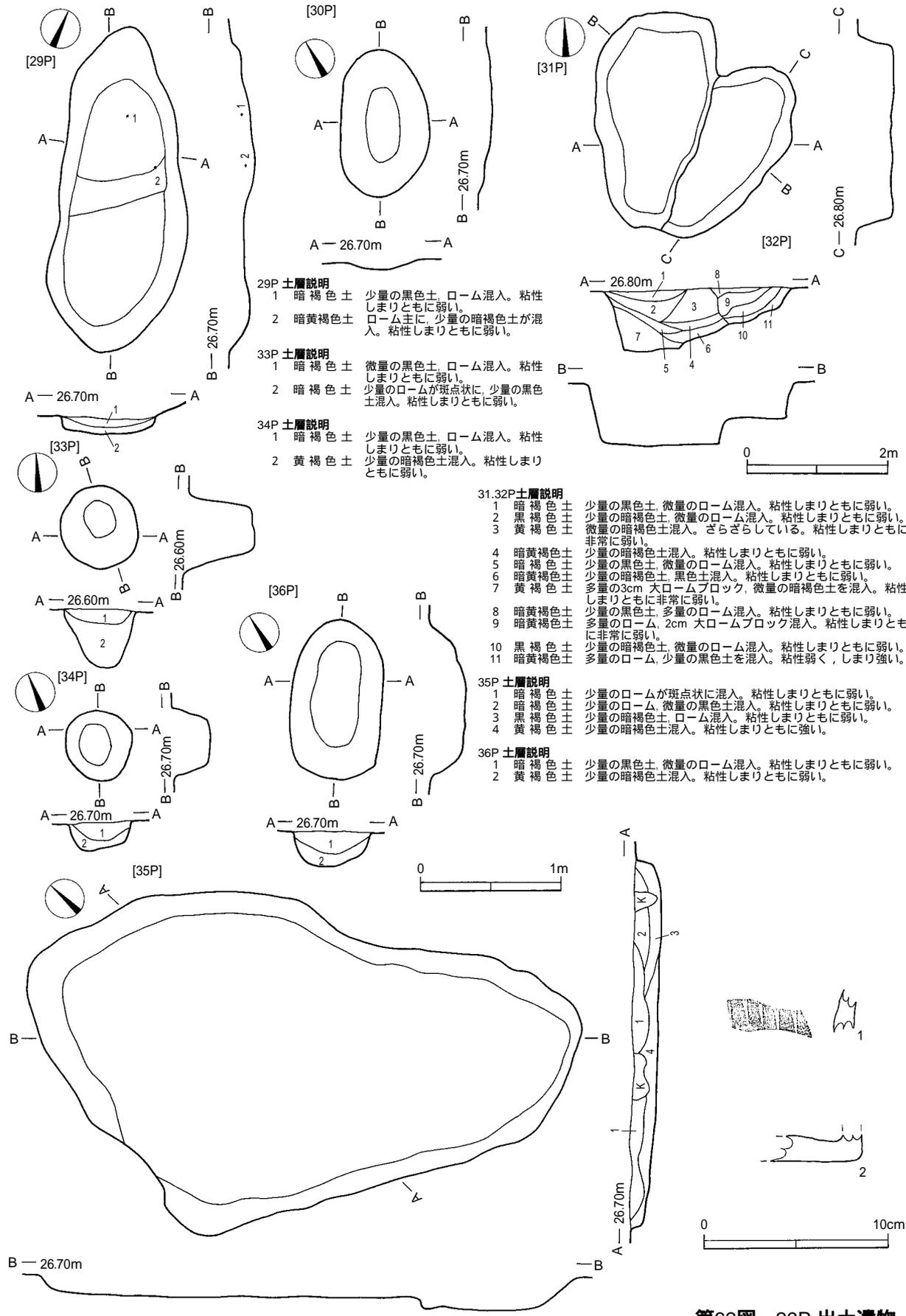
規 模 2.32m × 0.96m × 深さ0.1 ~ 0.2mの楕円形 長軸方位 N - 23° - W  
壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。底面は二段でほぼ平坦である。  
覆 土 暗褐色土の自然堆積である。掘り直しは見られない。  
備 考 出土遺物から、前期後半と考えられる。

#### 29P出土遺物(第62図 写真図版36)

1は波状貝殻文(無肋)を施文する。2は底部で、前期後半である。

#### 30P (第61図)

規 模 1.06m × 0.64m × 深さ0.06mの楕円形 長軸方位 N - 17° - E  
壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。掘り込みが浅い。  
備 考 出土遺物はなく、時期、性格ともに不明である。



第61図 29・30・31・32・33・34・35・36P 平面図

第62図 29P 出土遺物

### 3 1 P (第61図 写真図版15)

規 模 3.2m × 1.72m × 深さ0.84m の楕円形 長軸方位 N - 6 ° - E 32Pに切られる。  
壁・底面 壁は角度をもって立ち上がる。底面はほぼ平坦である。  
覆 土 3 ~ 7 層において人為的埋め戻しが行われている。1・2層は掘り直し後の自然堆積か。  
備 考 覆土, 形態から縄文時代の陥穴の可能性も考えられる。

### 3 2 P (第61図 写真図版15)

規 模 2.88m × 1.44m × 深さ0.52m の楕円形 長軸方位 N - 3 3 ° - E 31Pを切る。  
壁・底面 壁は角度をもって立ち上がる。底面はほぼ平坦である。  
覆 土 黄褐色土を主体とした人為的埋め戻し層と考えられる。  
備 考 覆土, 形態から縄文時代の陥穴の可能性も考えられる。

### 3 3 P (第61図 写真図版15)

規 模 0.6m × 0.56m × 深さ0.42m の円形 方位計測なし  
壁・底面 壁は角度をもって立ち上がる。底面はほぼ平坦である。  
覆 土 暗褐色土を主体とした自然堆積層である。掘り直し, 重複等はなかった。  
備 考 出土遺物はなく, 時期, 性格ともに不明である。

### 3 4 P (第61図 写真図版15)

規 模 0.5m × 0.48m × 深さ0.26m の円形 方位計測なし  
壁・底面 壁は角度をもって立ち上がる。底面はほぼ平坦である。  
覆 土 暗褐色土を主体とした自然堆積層である。掘り直し, 重複等はなかった。  
備 考 出土遺物はなく, 時期, 性格ともに不明である。

### 3 5 P (第61図 写真図版15)

規 模 3.86m × 2.42m × 深さ0.16m の不整楕円形 長軸方位 N - 3 8 ° - W  
壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。  
覆 土 4層において人為的埋め戻しが行われている。1 ~ 3層は自然堆積層であろう。  
備 考 出土遺物はなく, 時期, 性格ともに不明である。

### 3 6 P (第61図 写真図版15)

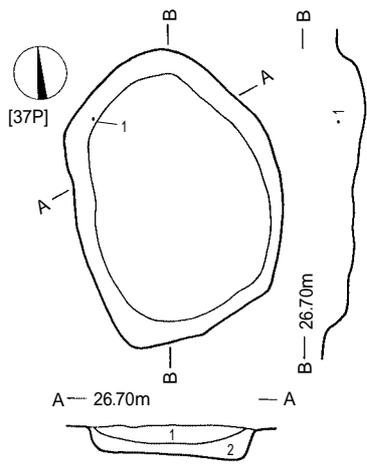
規 模 1.16m × 0.65m × 深さ0.26m の楕円形 長軸方位 N - 3 2 ° - E  
壁・底面 壁はやや角度をもって立ち上がる。底面はやや凹凸が見られる。  
覆 土 暗褐色土を主体とした自然堆積層である。  
備 考 出土遺物はなく, 時期, 性格ともに不明である。

### 3 7 P (第63図 写真図版16)

規 模 1.42m × 1.13m × 深さ0.1 ~ 0.16m の不整楕円形 長軸方位 N - 1 7 ° - W  
壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。底面はやや傾斜が見られる。  
覆 土 暗褐色土を主体とした自然堆積層である。  
備 考 出土遺物から, 前期後半に位置づけられる。

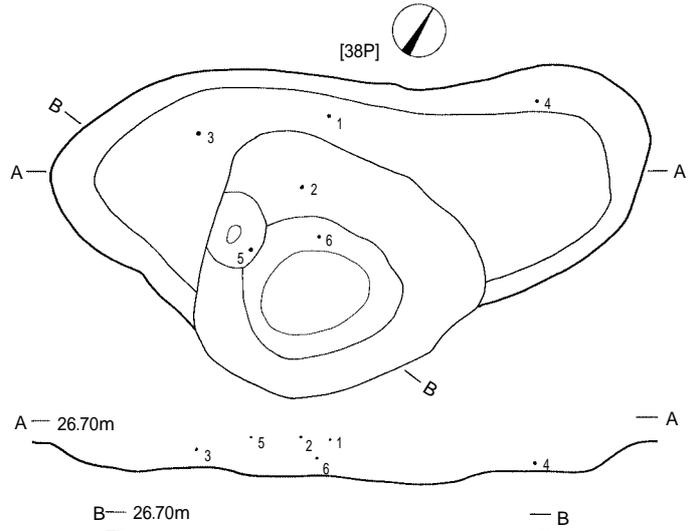
### 3 7 P 出土遺物 (第64図 写真図版36)

1は変形爪形文の上半部である。2は波状貝殻文(有肋)である。3は外削ぎ状口唇に半截竹管を刺突している。4は半截竹管の押し引きによる結節沈線文と平行沈線文の地文上に, 結節浮線文を施文している。諸磯c式新段階に位置づけられる。



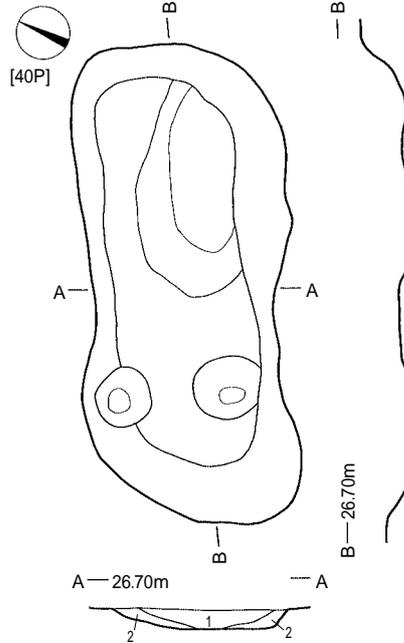
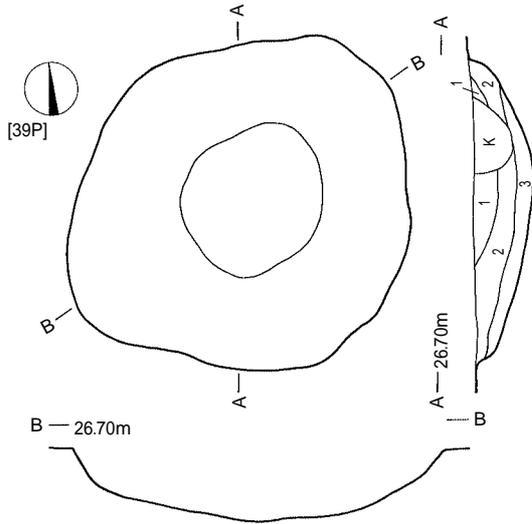
37P 土層説明

- 1 暗褐色土 微量の黒色土、ローム混入。粘性しまりともに弱い。
- 2 暗黄褐色土 多量のローム、微量の黒色土混入。粘性しまりともに弱い。



39P 土層説明

- 1 暗褐色土 少量のロームが斑点状に、少量の黒色土が混入。粘性しまりともに弱い。
- 2 暗褐色土 少量のローム、微量の黒色土混入。粘性しまりともに弱い。
- 3 黄褐色土 少量の暗褐色土混入。粘性しまりともに弱い。

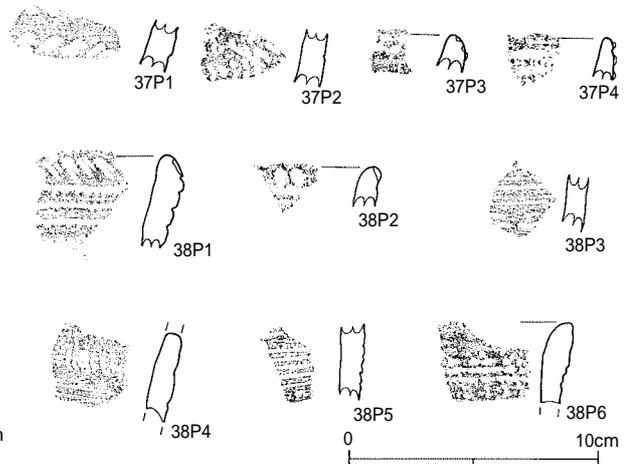
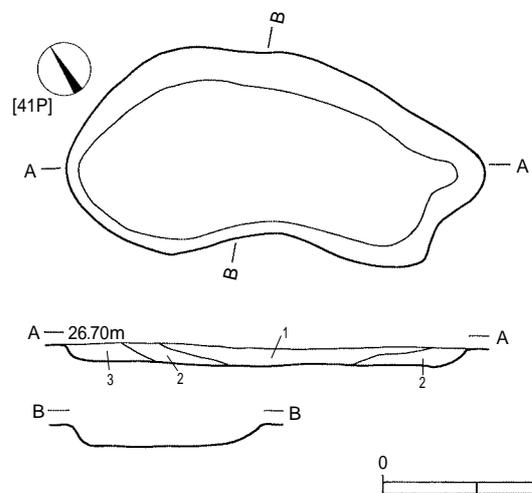


40P 土層説明

- 1 暗褐色土 少量のローム、微量の黒色土混入。粘性しまりともに弱い。
- 2 暗黄褐色土 多量の暗褐色土混入。粘性しまりともに弱い。

41P 土層説明

- 1 暗褐色土 少量のローム、黒色土が混入。粘性しまりともに弱い。
- 2 暗黄褐色土 少量の暗褐色土混入。粘性しまりともに弱い。
- 3 暗褐色土 少量のローム、微量の黒色土混入。粘性しまりともに弱い。



第63図 37・38・39・40・41P 平面図

第64図 37・38P 出土遺物

### 38P (第63図 写真図版16)

規 模 3.16m × 1.72m × 深さ0.2 ~ 0.36m の不整楕円形 長軸方位 N - 52° - E

壁・底面 楕円形と円形のピットが組み合っ一遺構となっている。壁は緩やかに立ち上がる。底面は二段で円形ピットが深い。

覆 土 暗褐色土を主体とした自然堆積層である。

備 考 出土遺物から、前期後半に位置づけられる。

### 38P 出土遺物 (第64図 写真図版36)

1は外削ぎ状口唇に平行沈線文による口縁部条線帯、胴部に変形爪形文を施文している。2は口唇部に棒状工具?による刻みをつけている。3・4は波状貝殻文(有肋)と平行沈線文を組み合わせている。5は平行沈線文を施文する。6は波状貝殻文(有肋)を施文している。

### 39P (第63図 写真図版16)

規 模 2.00m × 1.76m × 深さ0.36m の不整楕円形 長軸方位 N - 56° - E

壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。底面は浅鉢状で緩やかなカーブをもつ。

覆 土 暗褐色土を主体とした自然堆積層である。

備 考 出土遺物はなく、時期、性格ともに不明である。

### 40P (第63図 写真図版16)

規 模 2.54m × 1.12m × 深さ0.28m の楕円形 長軸方位 N - 56° - E

壁・底面 楕円形内に小ピット3基が組み合っ一遺構となっている。壁は緩やかに立ち上がる。

覆 土 暗褐色土を主体とした自然堆積層である。

備 考 出土遺物はなく、時期、性格ともに不明である。

### 41P (第63図 写真図版16)

規 模 2.2m × 1.11m × 深さ0.1mの不整楕円形 長軸方位 N - 58° - W

壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。底面はやや凹凸が見られる。

覆 土 暗褐色土を主体とした自然堆積層である。

備 考 出土遺物はなく、時期、性格ともに不明である。

### 42P (第65図 写真図版16)

規 模 0.74m × 0.6m × 深さ0.2mの長円形 長軸方位 N - 84° - W

壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。底面は浅鉢状で緩やかなカーブをもつ。

覆 土 暗褐色土を主体とした自然堆積層である。

備 考 出土遺物はなく、時期、性格ともに不明である。

### 43P (第65図 写真図版17)

規 模 1.18m × 0.82m × 深さ0.22m の楕円形 長軸方位 N - 66° - E

壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。

覆 土 暗褐色土を主体とした自然堆積層である。

備 考 出土遺物から、前期後半~末葉に位置づけられる。

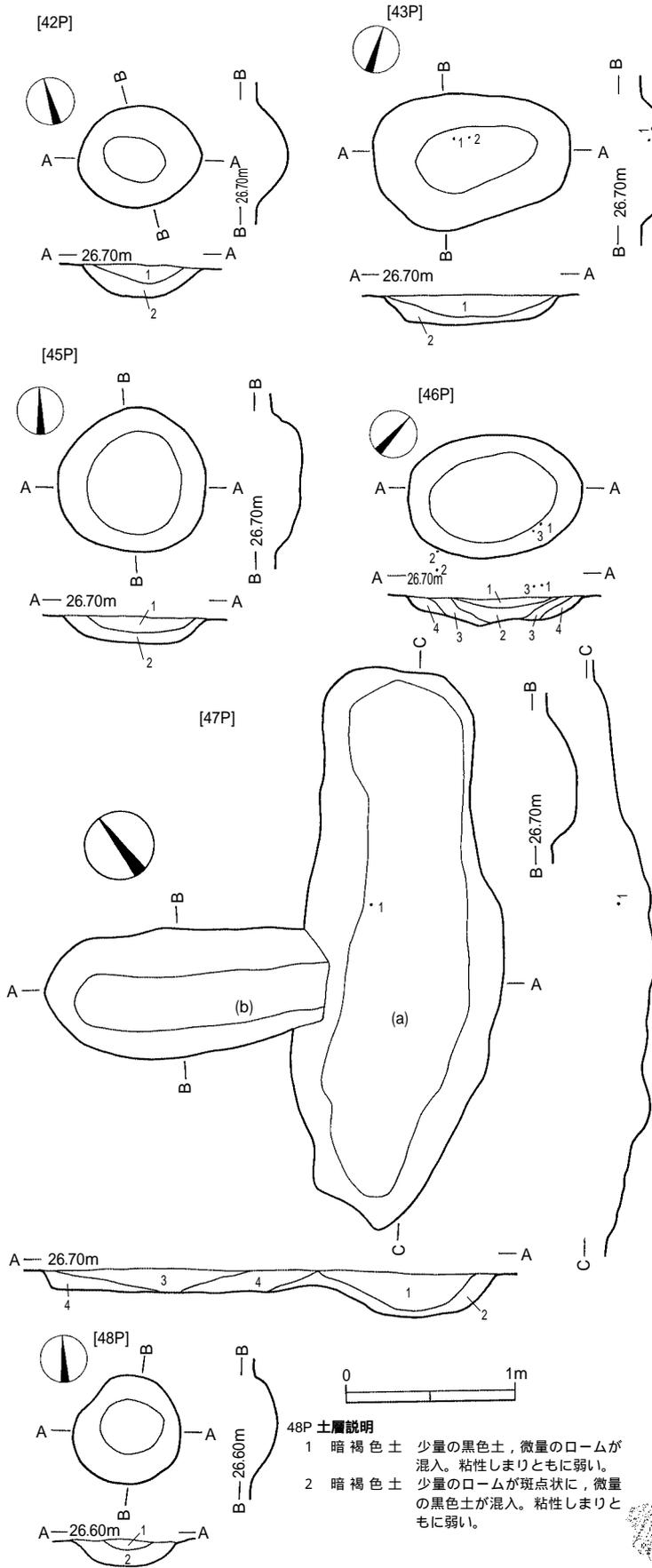
### 43P 出土遺物 (第66図 写真図版36)

1は凹凸文である。2は無文の口縁部で前期後半~末葉である。

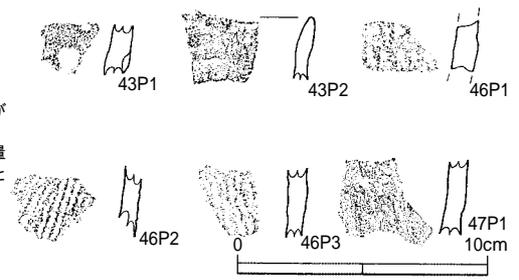
### 44P (第65図 写真図版17)

規 模 1.1m × 0.74m × 深さ0.38m の楕円形 長軸方位 N - 16° - W

壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。



- 42P 土層説明**
- 1 暗褐色土 少量のロームが斑点状に混入。粘性しまりともに弱い。
  - 2 暗黄褐色土 少量の暗褐色土混入。粘性しまりともに弱い。
- 43P 土層説明**
- 1 暗褐色土 少量のロームが斑点状に、少量の黒色土混入。粘性しまりともに弱い。
  - 2 暗黄褐色土 少量の暗褐色土、ローム混入。粘性しまりともに弱い。
- 44P 土層説明**
- 1 暗褐色土 微量のローム、黒色土が混入。粘性しまりともに弱い。
  - 2 暗褐色土 少量のローム、黒色土が混入。粘性しまりともに弱い。
  - 3 黄褐色土 微量の暗褐色土混入。粘性しまりともに弱い。
- 45P 土層説明**
- 1 暗褐色土 少量のロームが斑点状に混入。粘性しまりともに弱い。
  - 2 暗黄褐色土 少量の暗褐色土混入。粘性しまりともに弱い。
- 46P 土層説明**
- 1 暗褐色土 少量のローム、微量の黒色土が混入。粘性弱く、しまり強い。
  - 2 暗黄褐色土 多量のローム、微量の黒色土が混入。粘性弱く、しまり強い。
  - 3 暗褐色土 少量の黒色土、微量のローム混入。粘性弱く、しまり強い。
  - 4 暗黄褐色土 多量のローム混入。粘性しまりともに強い。
- 47P 土層説明**
- 1 黒褐色土 少量の暗褐色土が斑点状に、微量のロームが混入。粘性しまりともに弱い。
  - 2 黒黄褐色土 黒色土主に、多量のローム、微量の暗褐色土混入。粘性しまりともに弱い。
  - 3 暗褐色土 少量の黒色土、微量のローム混入。粘性しまりともに弱い。
  - 4 暗黄褐色土 多量のローム、微量の黒色土混入。粘性しまりともに弱い。



第65図 42・43・44・45・46・47・48P 平面図

第66図 43・46・47P 出土遺物

覆 土 暗褐色土を主体とした自然堆積層である。  
備 考 出土遺物はなく、時期、性格ともに不明である。

#### 4 5 P (第65図 写真図版16)

規 模 0.88m × 0.88m × 深さ0.16m の円形 方位計測なし  
壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。  
覆 土 暗褐色土を主体とした自然堆積層である。  
備 考 出土遺物はなく、時期、性格ともに不明である。

#### 4 6 P (第65図 写真図版16)

規 模 1.04m × 0.74m × 深さ0.16m の楕円形 長軸方位 N - 43° - E  
壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。  
覆 土 暗褐色土を主体とした自然堆積層である。  
備 考 出土遺物から、前期後半～中期前半に位置づけられる。

#### 4 6 P 出土遺物 (第66図 写真図版36)

1は三角文である。2・3は五領ヶ台式の胴部片である。2は単節RLを、3は単節LRを施文している。

#### 4 7 P (a) (第65図 写真図版17)

規 模 3.3m × 1.18m × 深さ0.25m の楕円形 長軸方位 N - 36° - E 47P (b) に切られる。  
壁・底面 壁の立ち上がりは一定ではない。底面は凹凸化していて平坦を意識していない。  
覆 土 暗褐色土を主体とした自然堆積層である。  
備 考 出土遺物から、中期前半に位置づけられるか。

#### 4 7 P (a) 出土遺物 (第66図 写真図版36)

1は無文で、五領ヶ台式である。49P5と同一個体である。

#### 4 7 P (b) (第65図 写真図版17)

規 模 1.64m × 0.78m × 深さ0.14m の楕円形 長軸方位 N - 56° - W 47P (a) を切る。  
壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。  
覆 土 暗褐色土を主体とした自然堆積層である。  
備 考 重複関係から、中期前半以降に位置づけられる。

#### 4 8 P (第65図 写真図版17)

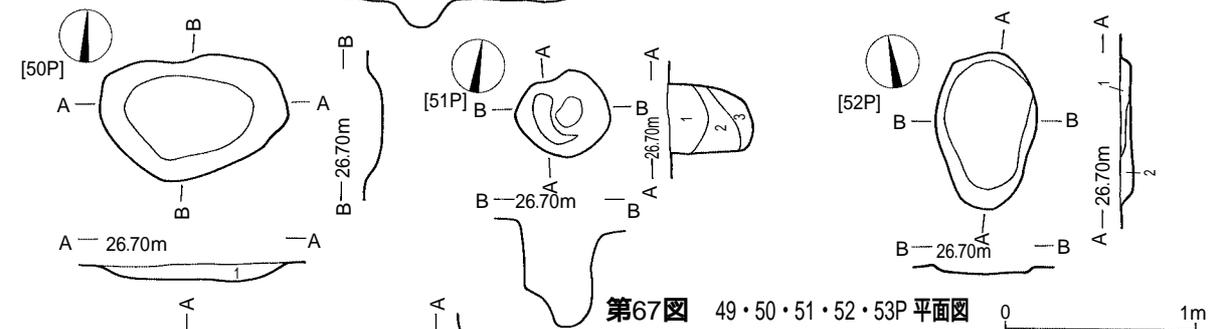
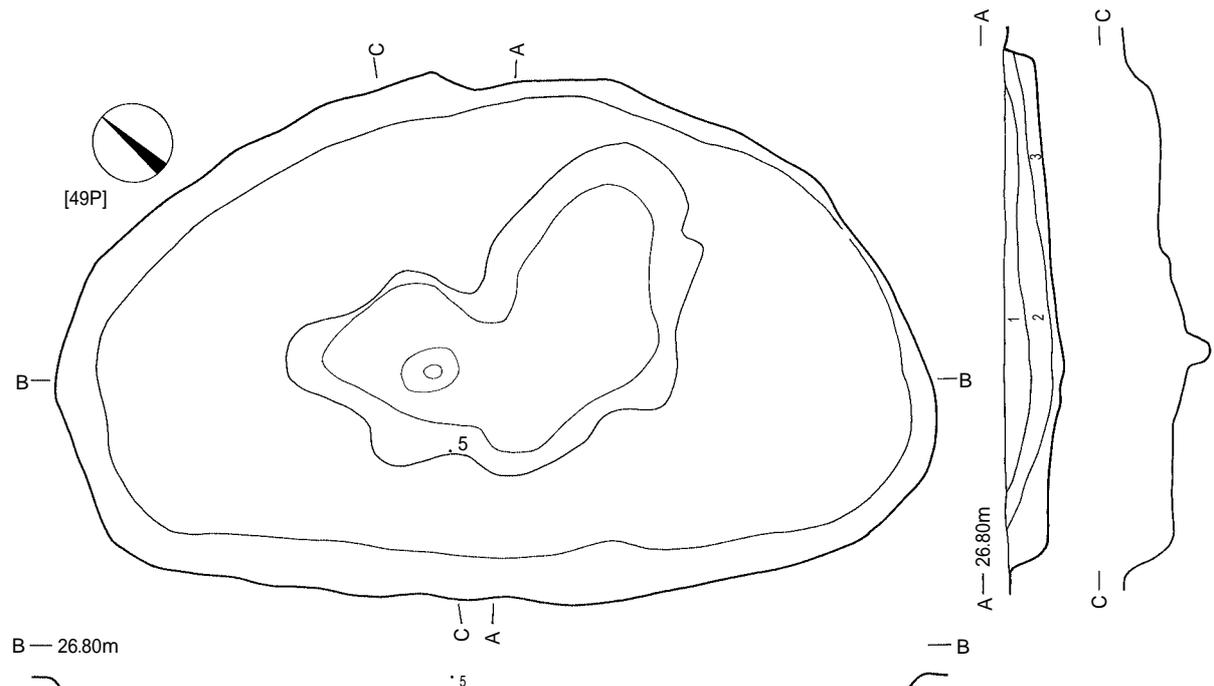
規 模 0.65m × 0.62m × 深さ0.14m の円形 方位計測なし  
壁・底面 壁はやや角度をもって立ち上がる。底面は平坦である。  
覆 土 暗褐色土を主体とした自然堆積層である。  
備 考 出土遺物はなく、時期、性格ともに不明である。

#### 4 9 P (第67図 写真図版17)

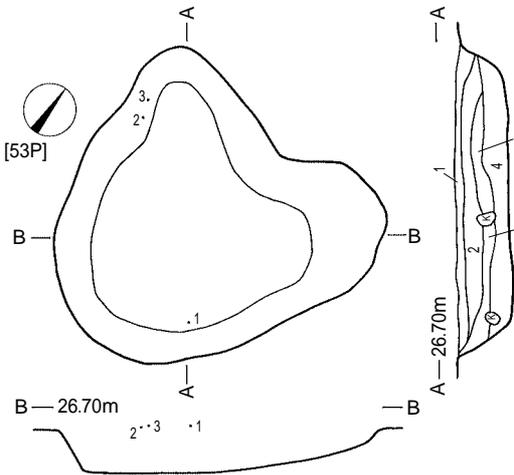
規 模 4.63m × 2.78m × 深さ0.14m の不整楕円形 長軸方位 N - 40° - W  
壁・底面 楕円形内に不整形ピットが入る。壁は緩やかに立ち上がる。底面は二段で平坦である。  
覆 土 暗褐色土を主体とした自然堆積層である。  
備 考 出土遺物から、中期前半に位置づけられる。

#### 4 9 P 出土遺物 (第68図 写真図版36)

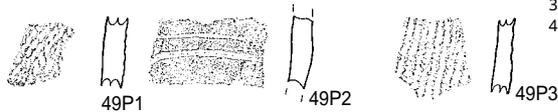
1は撚糸文系土器である。2・3は五領ヶ台式の胴部片である。2は平行沈線文、3は単節LRを施文している。4は無文で、胴下部で屈曲する器形のミニチュア土器である。5は47P1と同一個体で、五領ヶ台式の底部である。



第67図 49・50・51・52・53P 平面図



- 49P 土層説明**
- 1 暗褐色土 少量のロームが斑点状に、少量の黒色土が混入。粘性しまりともに弱い。
  - 2 黒褐色土 少量のロームが斑点状に、微量の暗褐色土が混入。粘性しまりともに弱い。
  - 3 暗黄褐色土 少量の暗褐色土混入。粘性しまりともに弱い。
- 50P 土層説明**
- 1 暗褐色土 少量のロームが混入。粘性しまりともに弱い。
- 51P 土層説明**
- 1 暗褐色土 多量のローム、少量の黒色土が混入。粘性しまりともに弱い。
  - 2 暗褐色土 少量のローム、黒色土が混入。粘性しまりともに弱い。
  - 3 黒褐色土 微量の暗褐色土、ローム混入。粘性弱く、しまり強い。
- 52P 土層説明**
- 1 暗褐色土 微量のローム、黒色土が混入。
  - 2 暗褐色土 少量のローム、微量の黒色土が混入。
- 53P 土層説明**
- 1 暗褐色土 少量のローム、微量の暗褐色土が混入。粘性しまりともに弱い。
  - 2 黒褐色土 少量の暗褐色土、微量のロームが混入。粘性しまりともに弱い。
  - 3 暗黄褐色土 多量のローム、少量の黒色土混入。粘性しまりともに弱い。
  - 4 黄褐色土 少量の暗褐色土混入。粘性しまりともに弱い。



第68図 49・52・53P 出土遺物

**5 0 P (第67図 写真図版17)**

規 模 1.0m × 0.63m × 深さ0.08m の楕円形 長軸方位 東西方向  
壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。底面は皿状で平坦である。  
覆 土 暗褐色土の単一層である。掘り直し、重複等はなかった。  
備 考 出土遺物はなく、時期、性格ともに不明である。

**5 1 P (第67図)**

規 模 0.48m × 0.42m × 深さ0.44m の不整形円形 方位計測なし  
壁・底面 壁は中場で段をもち立ち上がる。底面はU字状である。  
覆 土 暗褐色土～黒褐色土の覆土で、自然堆積と思われる。  
備 考 出土遺物はなく、時期、性格ともに不明である。

**5 2 P (第67図 写真図版18)**

規 模 0.82m × 0.54m × 深さ0.06m の楕円形 長軸方位 N - 8° - E  
壁・底面 壁はやや角度をもって立ち上がる。底面はほぼ平坦である。  
覆 土 暗褐色土主体の自然堆積と考えられる。掘り直し、重複等はなかった。  
備 考 出土遺物は、前期半ばである。本跡に伴うか不明である。

**5 2 P 出土遺物 (第68図 写真図版36)**

1は遺構外15と同一個体の可能性がある。単沈線文による斜格子文を施文する。黒浜式である。

**5 3 P (第67図 写真図版18)**

規 模 1.76m × 1.64m × 深さ0.28m の不整形 長軸方位 N - 50° - E  
壁・底面 壁はやや角度をもって立ち上がる。底面はほぼ平坦である。  
覆 土 暗褐色土～黄褐色土の自然堆積と考えられる。掘り直し、重複等はなかった。  
備 考 出土遺物は、前期後半～中期前半で時期の特定はむずかしい。

**5 3 P 出土遺物 (第68図 写真図版36)**

1は三角文を施文する。2は単節RL?を斜方向に回転させている。五領ヶ台式である。3は単節LRを施文している。前期末葉であろう。

**5 4 P (第69図 写真図版18)**

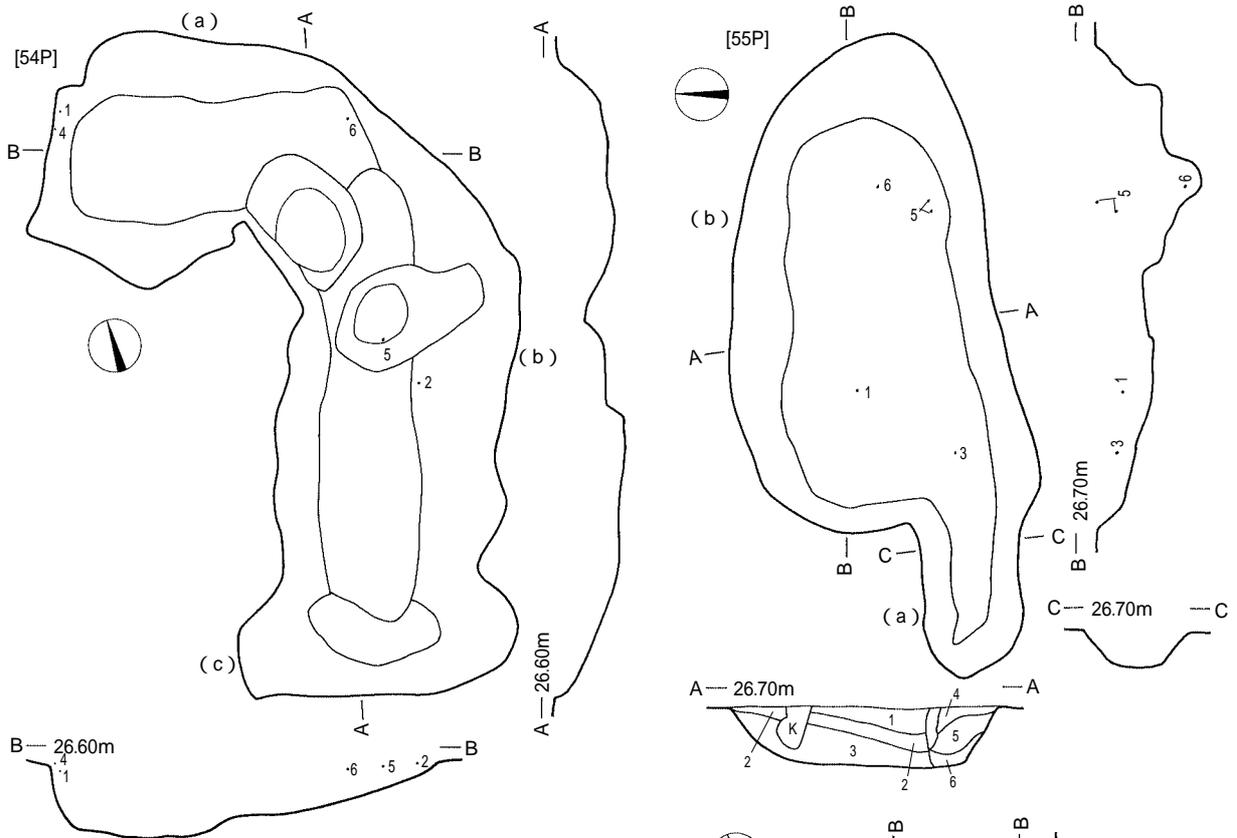
規 模 3.32m × 2.0m × 深さ0.3 ~ 0.38m の不整形 長軸方位 N - 13° - E  
壁・底面 本遺構は少なくとも3基のピットが重複している。北(a)、中央(b)、南(c)で、(c)が(b)を切っている。(a)が(b)を切っている。(a)の壁は角度をもって立ち上がる。底面は平坦である。(b)(c)の壁は緩やかに立ち上がる。底面はやや緩やかなカーブをもっている。  
覆 土 暗褐色土～黄褐色土の自然堆積と考えられる。  
備 考 出土遺物は、前期後半～末葉である。

**5 4 P 出土遺物 (第70図 写真図版36)**

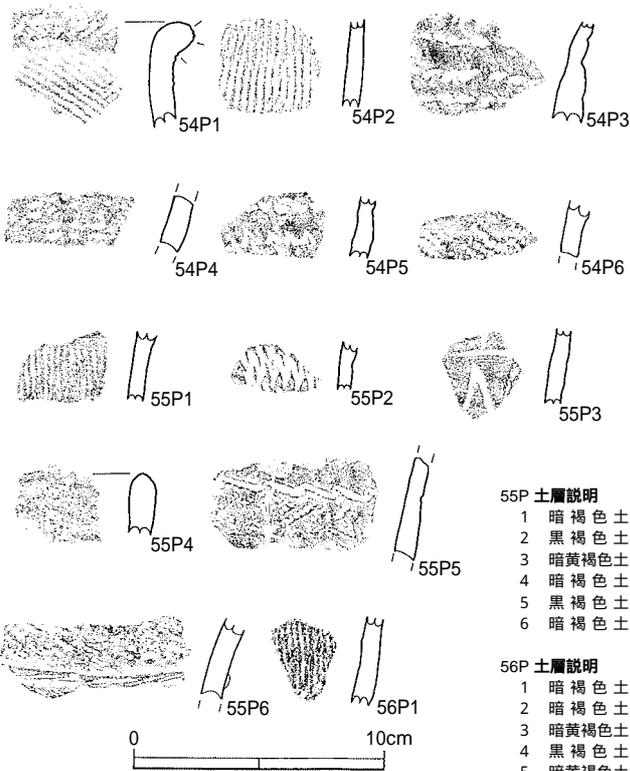
1は井草 式である。口唇部LR、口縁部RLを施文する。2は撚糸文系土器の胴部である。R縄の撚糸文である。3は変形爪形文を施文する。4は波状貝殻文(有肋)である。5は三角文を施文している。6は単節RLを施文している。複合口縁である。

**5 5 P (第69図 写真図版18)**

規 模 3.44m × 1.36m × 深さ0.32m の不整形楕円形 長軸方位 N - 84° - E  
壁・底面 本遺構も2基のピットが重複する。突起状にでた方を(a)、楕円形部分を(b)とした。(a)が(b)を切っている。(b)の底面は凹凸で平坦を意識していない。



第69図 54・55・56P 平面図



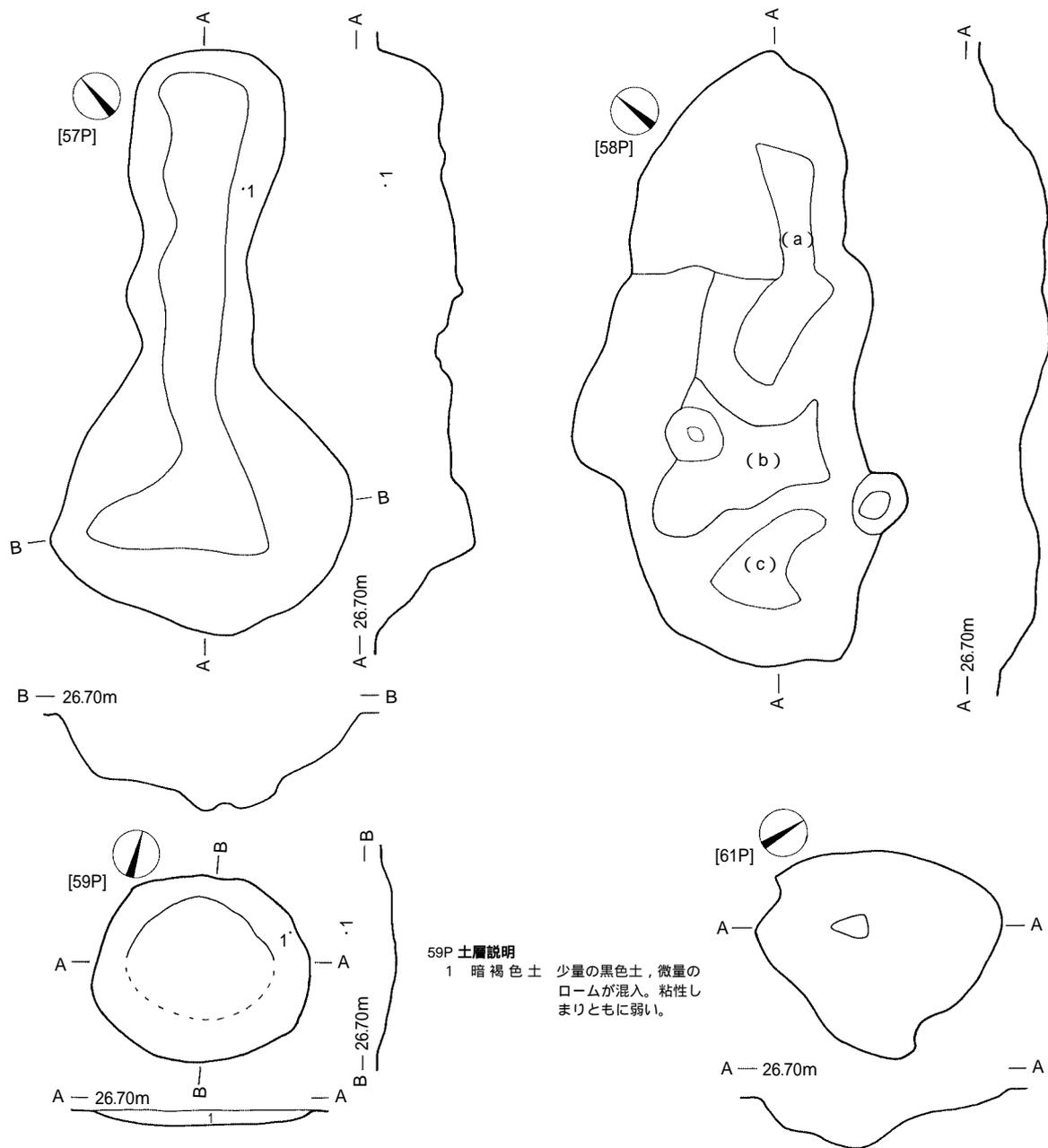
55P 土層説明

- 1 暗褐色土 少量のローム，黒色土が混入。粘性しまりともに弱い。
- 2 黒褐色土 少量の暗褐色土，ロームが混入。粘性しまりともに弱い。
- 3 暗黄褐色土 ローム主に，少量の暗褐色土混入。粘性しまりともに弱い。
- 4 暗褐色土 少量の黒色土，微量のロームが混入。粘性しまりともに弱い。
- 5 黒褐色土 少量のロームが斑点状に混入。粘性しまりともに弱い。
- 6 暗褐色土 少量の黒色土，ロームが混入。粘性しまりともに強い。

56P 土層説明

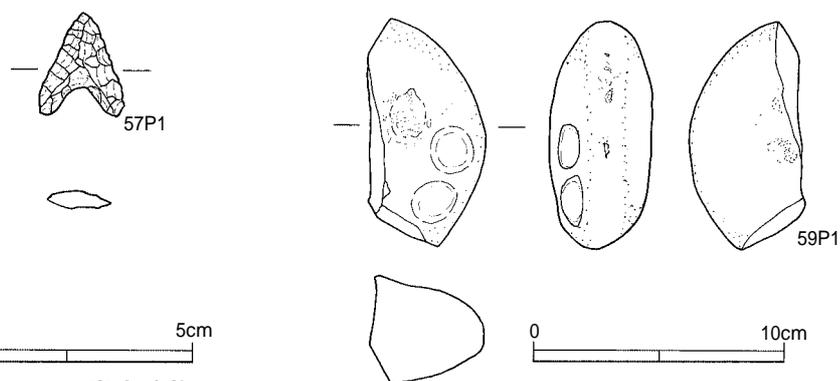
- 1 暗褐色土 少量のロームが斑点状に，微量の黒色土混入。粘性しまりともに弱い。
- 2 暗褐色土 少量の黒色土，ロームが混入。粘性しまりともに弱い。
- 3 暗黄褐色土 暗褐色土主に，多量のローム混入。粘性しまりともに弱い。
- 4 黒褐色土 黒色土主に，少量のロームが斑点状に混入。粘性しまりともに弱い。
- 5 暗黄褐色土 暗褐色土，ローム混合層で，微量のローム混入。粘性しまりともに弱い。

第70図 54・55・56P 出土遺物



59P 土層説明  
 1 暗褐色土 少量の黒色土、微量のロームが混入。粘性しまりともに弱い。

第71図 57・58・59・61P 平面図



第72図 57・59P 出土遺物

覆 土 暗褐色土～黄褐色土の自然堆積と考えられる。

備 考 出土遺物は、前期後半～末葉である。

#### 5 5 P 出土遺物 (第70図 写真図版37)

1は撚糸文系土器の胴部である。単節だが原体不明。2・3は波状貝殻文(無肋)を施文する。4は無文の口縁部で、前期後半～末葉であろう。5は結節縄文[LR-RZ]である。結節部を上に行っている。2段目はナデ消されている。6は諸磯b式の浮線文土器で、地文は単節RL、浮線上に刻みを有する。

#### 5 6 P (第69図 写真図版18)

規 模 2.1m×1.39m×深さ0.3mの不整楕円形 長軸方位 N-8°-E

壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。底面中央にピットがあり、深さ0.28mである。

覆 土 暗褐色土を主体とした自然堆積と考えられる。掘り直し、重複等はなかった。

備 考 出土遺物は、早期撚糸文系土器群である。

#### 5 6 P 出土遺物 (第70図 写真図版37)

1は撚糸文系土器である。単節RLを縦走させている。

#### 5 7 P (第71図 写真図版18)

規 模 3.43m×1.72m×深さ0.52mのヒョウタン形 長軸方位 N-40°-E

壁・底面 壁は角度をもって立ち上がる。底面はやや凹凸がある。

覆 土 暗褐色土を主体とした自然堆積と考えられる。掘り直し、重複等はなかった。

備 考 出土遺物は、石鏃が1点である。

#### 5 7 P 出土遺物 (第72図 写真図版37)

1はチャートの石鏃で、完形である。2.1cm、幅1.7cm、重さ0.8gである。

#### 5 8 P (第71図)

規 模 3.62m×1.52m×深さ0.35～0.4mの不整楕円形 長軸方位 N-50°-E

壁・底面 底面は凹凸がみられる。土層観察から(a)から(b)そして(c)に作り替えが見られた。

覆 土 暗褐色土を主体とした自然堆積と考えられる。

備 考 出土遺物はなく、時期、性格ともに不明である。

#### 5 9 P (第71図 写真図版19)

規 模 1.28m×1.13m×深さ0.12mの円形 方位計測なし

壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。底面は皿状である。

覆 土 暗褐色土の単一層である。

備 考 出土遺物は、石器が1点である。

#### 5 9 P 出土遺物 (第72図 写真図版37)

1は砂岩の磨石・敲き石の欠損品である。1/2弱の遺存である。重さ203gである。

#### 6 1 P (第71図 写真図版19)

規 模 1.42m×1.16m×深さ0.36mの不整円形 長軸方位 N-38°-E

壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。底面は平坦部分が少ない。

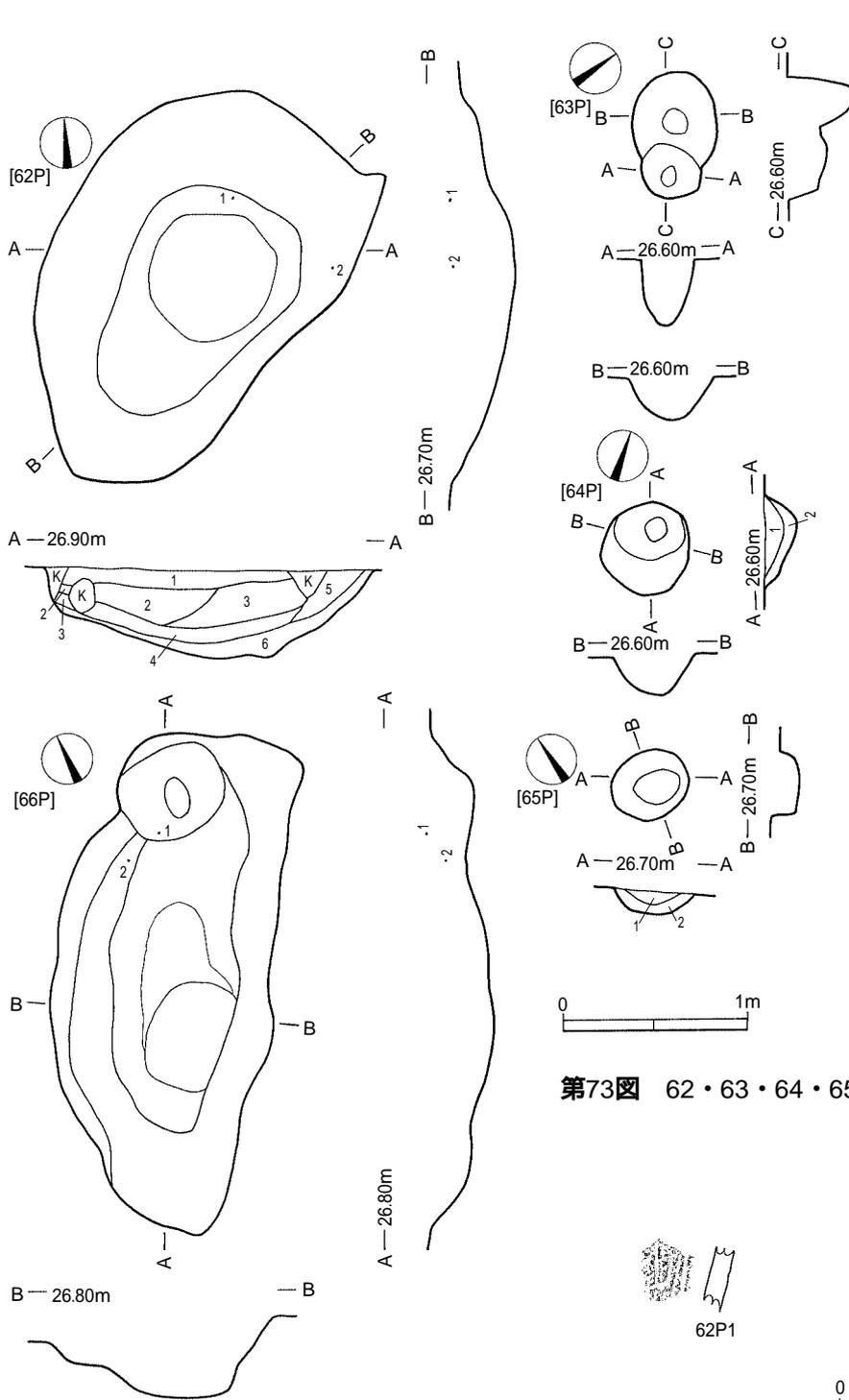
備 考 出土遺物はなく、時期、性格ともに不明である。

#### 6 2 P (第73図 写真図版19)

規 模 2.32m×1.46m×深さ0.5mの不整楕円形 長軸方位 N-32°-E

壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。底面は皿状で平坦面は意識されない。

覆 土 暗褐色土を主体とした自然堆積と考えられる。掘り直し、重複等はなかった。



62P 土層説明

- 1 暗褐色土 少量の黒色土，微量のロームが混入。粘性弱く，しまり強い。
- 2 黒褐色土 少量の暗褐色土が斑点状に混入。粘性弱く，しまり強い。
- 3 黒褐色土 微量の暗褐色土，ローム混入。粘性弱く，しまり強い。
- 4 黒褐色土 少量のロームが斑点状に，微量の暗褐色土混入。粘性弱く，しまり強い。
- 5 暗褐色土 少量のローム，微量の黒色土混入。粘性弱く，しまり強い。
- 6 黒黄褐色土 ローム主に，暗褐色土，少量のロームが混在する。粘性やや強い。

64P 土層説明

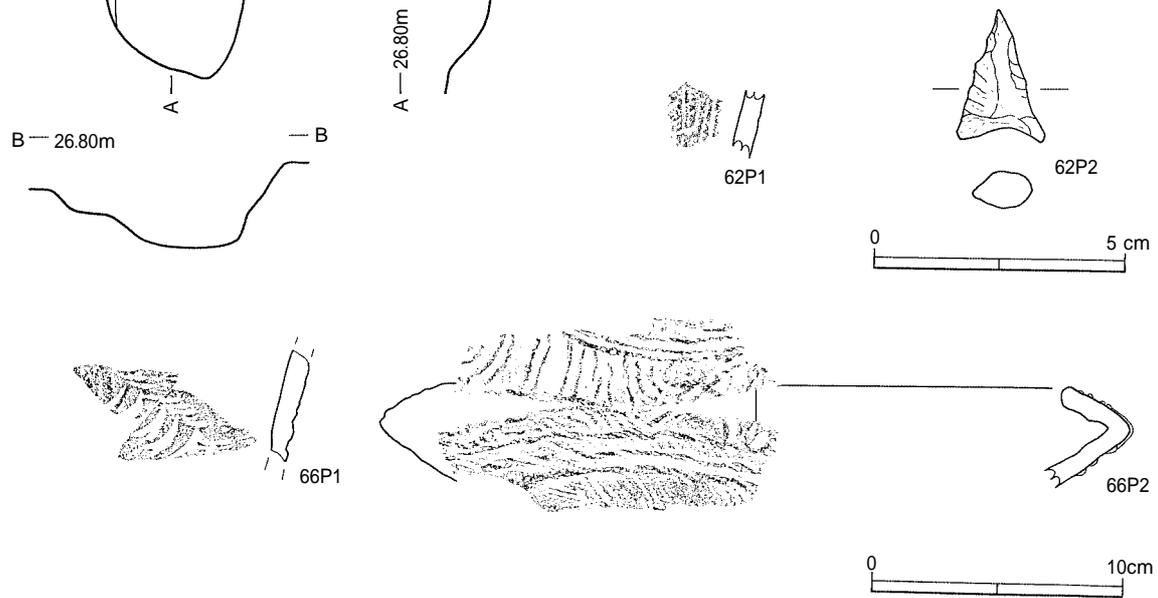
- 1 暗褐色土 少量の黒色土，ロームが混入。粘性しまりともに弱い。
- 2 暗黄褐色土 暗褐色土主だが，多量のローム混入。粘性しまりともに弱い。

65P 土層説明

- 1 暗褐色土 少量のローム，微量の黒色土が混入。粘性しまりともに弱い。
- 2 黄褐色土 ローム主に，少量の暗褐色土が混入。粘性しまりともに弱い。



第73図 62・63・64・65・66P 平面図



第74図 62・66P 出土遺物

備考 出土遺物は、前期後半である。

#### 6 2 P 出土遺物 (第74図 写真図版37)

1は単節RLである。諸磯b式か。2は安山岩の石鏃で完形である。2.6cm,幅1.7cm,2.0gである。

#### 6 3 P (第73図 写真図版19)

規模 0.7m×0.46m×深さ0.2～0.35mのヒョウタン形 長軸方位 N-56°-W

壁・底面 2基のピットからなる。底面はU字状で平坦面は意識されない。

覆土 暗褐色土を主体とした覆土である。

備考 出土遺物はなく、時期、性格ともに不明である。

#### 6 4 P (第73図 写真図版19)

規模 0.52m×0.48m×深さ0.24mの円形 方位計測なし

壁・底面 壁はやや角度をもって立ち上がる。底面はU字状で平坦面は意識されない。

覆土 暗褐色土を主体とした自然堆積である。

備考 出土遺物はなく、時期、性格ともに不明である。

#### 6 5 P (第73図)

規模 0.45m×0.4m×深さ0.14mの円形 方位計測なし

壁・底面 壁はやや緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

覆土 暗褐色土を主体とした自然堆積である。

備考 出土遺物はなく、時期、性格ともに不明である。

#### 6 6 P (第73図 写真図版20)

規模 2.74m×1.26m×深さ0.35mの不整楕円形 長軸方位 N-28°-E

壁・底面 本跡は重複ないしは作り替えが考慮されるが、明確ではない。壁はややだらだらしており、掘り返しが考えられる。底面も同様にやや凹凸が見られる。

備考 出土遺物は、前期後半である。

#### 6 6 P 出土遺物 (第74図 写真図版37)

1は波状貝殻文に近い三角文を右下がりに施文している。68P出土土器と接合している。112P1とも同一個体の可能性がある。2は口縁がくの字状に内屈する諸磯b式の浮線文土器である。地文は単節RLで浮線文上にさらに同原体の縄文を施文する。

#### 6 7 P (第75図 写真図版20)

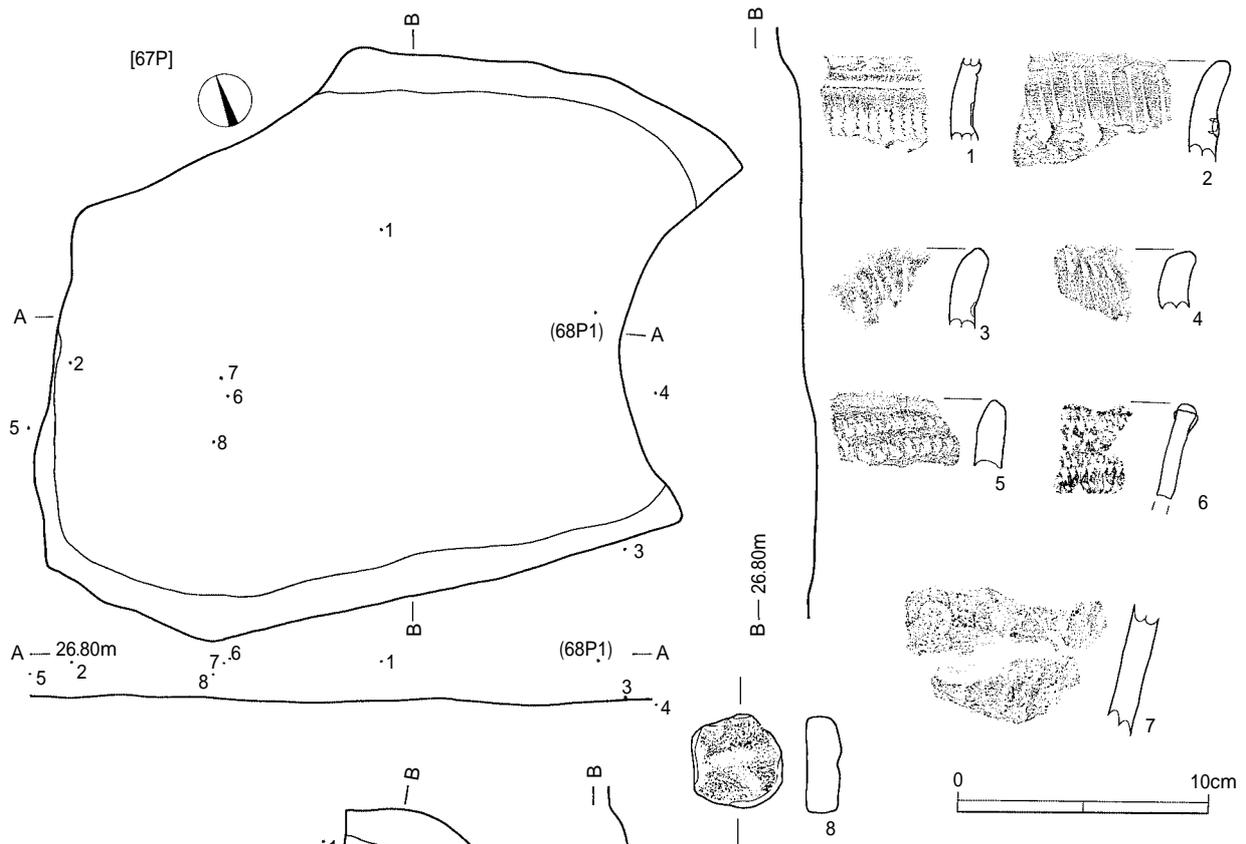
規模 (3.60)m×2.92m×深さ0.12～0.22mの不整形 長軸方位 N-76°-W 68Pと重複

壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

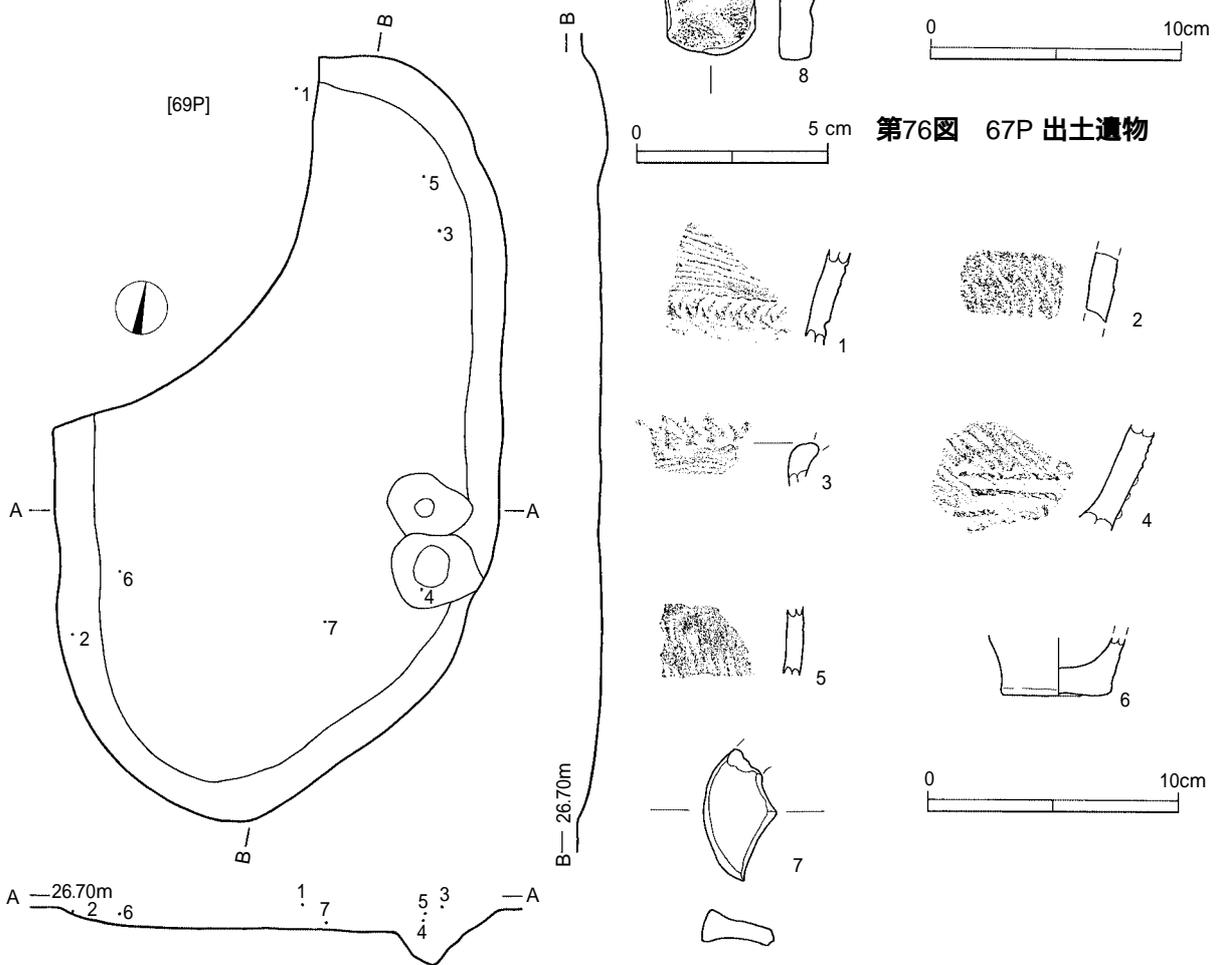
備考 出土遺物は、前期後半である。

#### 6 7 P 出土遺物 (第76図 写真図版37)

1～6は興津式である。1は口縁直下と考えられる。貝殻腹縁刺突文に平行沈線文区画が伴い、下端に有肋の貝殻による凹凸文を施文している。2は68P2と同一個体である。平行沈線文による口縁部条線帯と、胴部の波状貝殻文(有肋)の間に、半截竹管の押し引きと有肋貝殻の刺突による凹凸文が交互に施文されている。3は波状貝殻文(有肋)が口縁直下まで施文されており、さらに有肋貝殻による凹凸文がつけられている。4も口縁直下から波状貝殻文(有肋)を施文している。5は有肋貝殻を原体とする三角文であるが、下列を欠いている。6は口唇部を小波状に作出し、波状貝殻文に極めて近い三角文を施文している。7は無文である。8は波状貝殻文(無肋)の土器片を利用した土製円盤である。2.5×2.3cmの円形で7.1gである。周縁は研磨されている。

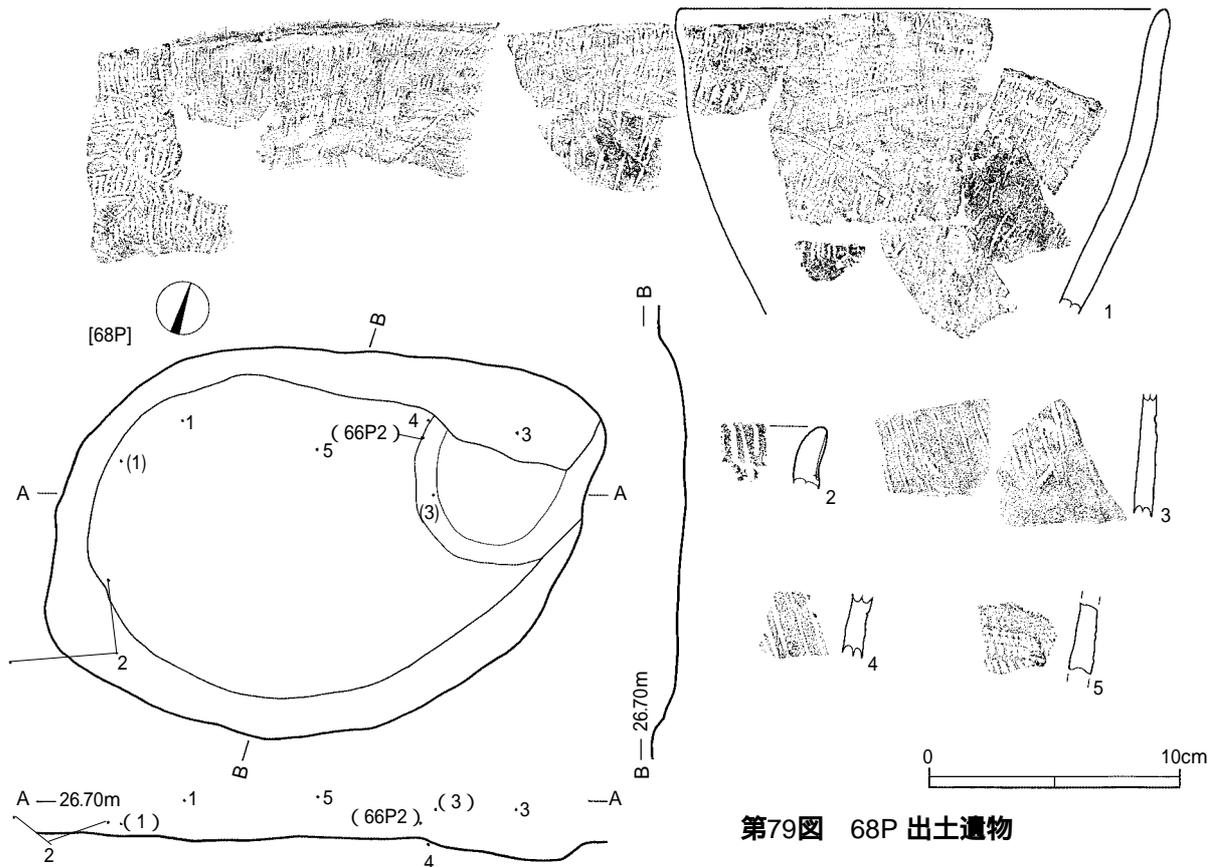


第76图 67P 出土遺物



第75图 67・69P 平面图

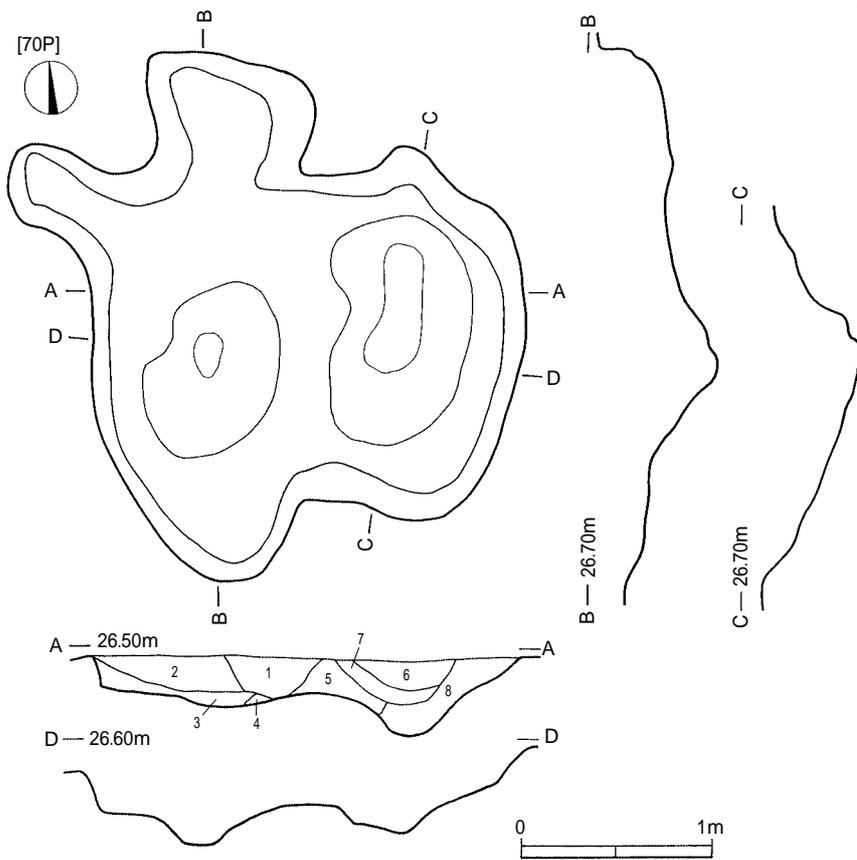
第77图 69P 出土遺物



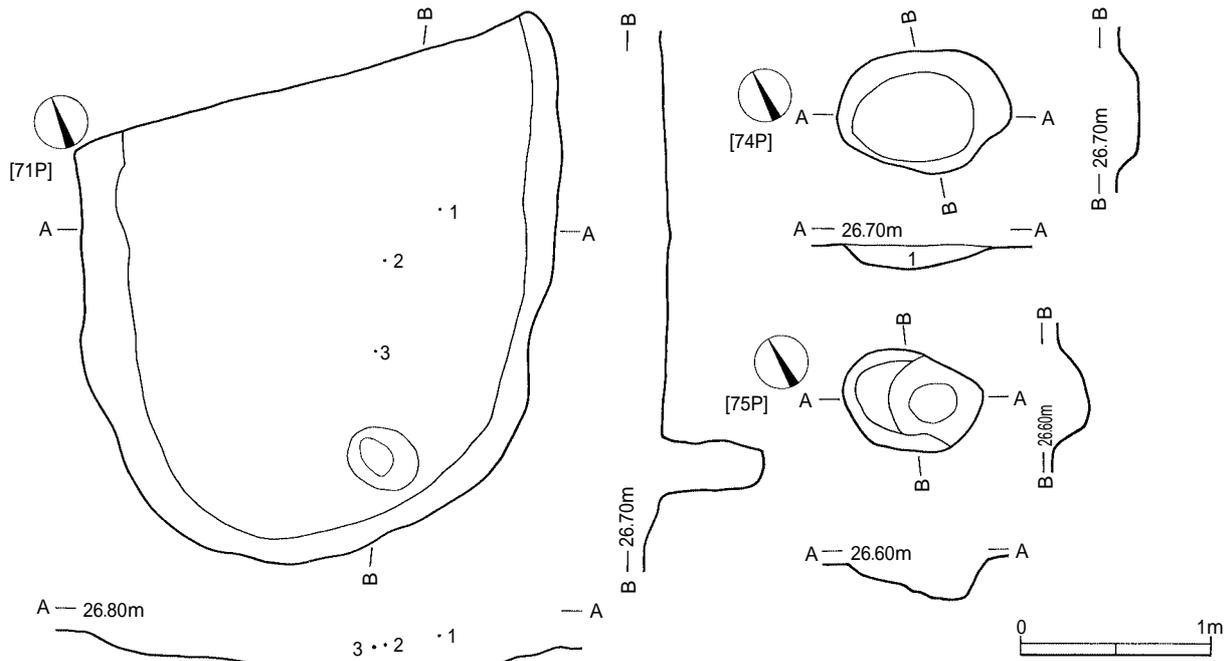
第79図 68P 出土遺物

70P 土層説明

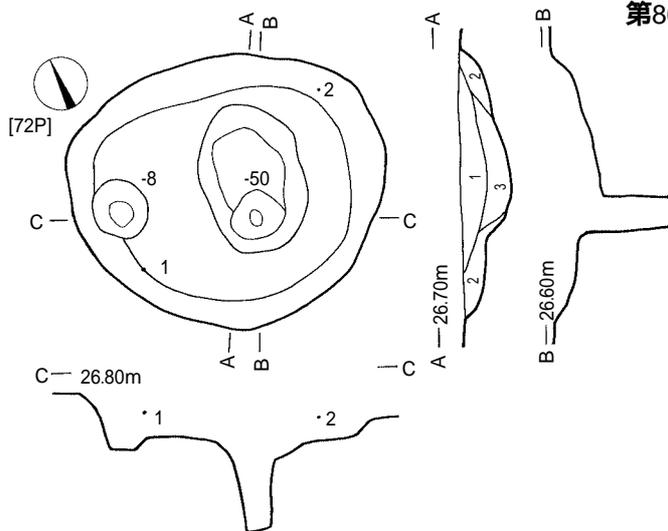
- 1 暗黄褐色土 ローム主に、多量の暗褐色土が混入。粘性しまりともに弱い。
- 2 黒褐色土 少量のロームが混入。粘性しまりともに弱い。
- 3 黄褐色土 ローム主に、少量の暗褐色土が混入。粘性しまりともに弱い。
- 4 暗黄褐色土 暗褐色土主だが、多量のローム混入。粘性しまりともに弱い。
- 5 黄褐色土 暗褐色土主だが、多量のローム混入。粘性ややあり、しまり弱い。
- 6 暗黄褐色土 暗褐色土主だが、多量のローム混入。微量の焼土混入。粘性しまりともに非常に弱い。
- 7 暗黄褐色土 ローム主だが、多量の暗褐色土が混入。ロームは、火を受けざらざらしている。粘性しまりともに非常に弱い。
- 8 黒褐色土 少量のローム、微量の暗褐色土を混入。粘性しまりともに弱い。



第78図 68・70P 平面図



第80図 71・72・73・74・75P 平面図

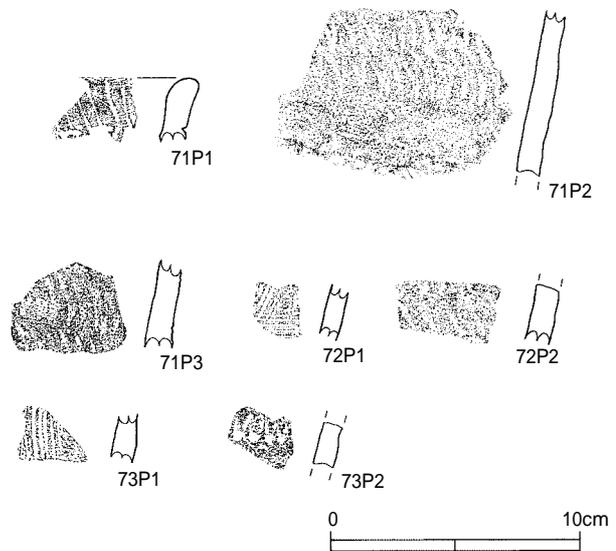
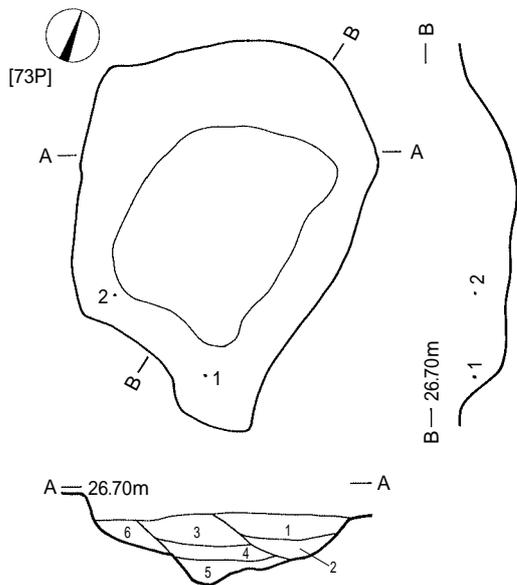


72P 土層説明

- 1 暗褐色土 少量の黒色土，微量のロームが混入。粘性弱く，しまりやや強い。
- 2 黄褐色土 少量の暗褐色土が混入。粘性弱く，しまりやや強い。
- 3 暗黄褐色土 暗褐色土主だが，多量のロームが混入。粘性弱く，しまりやや強い。

73P 土層説明

- 1 黒褐色土 少量の暗褐色土が混入。粘性しまりとともに弱い。
- 2 黒褐色土 少量の暗褐色土，微量のロームが混入。粘性しまりとともに弱い。
- 3 黒褐色土 少量の暗褐色土が斑点状に，微量のロームが混入。粘性しまりとともにやや強い。
- 4 黒褐色土 少量の暗褐色土が混入。粘性しまりとともに弱い。
- 5 黒褐色土 少量の暗褐色土，ロームが混入。粘性しまりとともに弱い。
- 6 黒黄褐色土 ローム主に，少量の暗褐色土，黒色土混入。粘性しまりとともにややあり。



第81図 71・72・73P 出土遺物

### 68P (第78図)

規 模 3.12m × 2.1m × 深さ0.16m の不整楕円形 長軸方位 N - 52° - E 67P と重複する。  
壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。北側壁際にピットが穿たれる。  
備 考 出土遺物は、前期後半である。

### 68P出土遺物(第79図 写真図版37)

1は67Pからも出土した。胴下部から内彎気味に開く椀形の土器である。拓影図左半分は無肋貝殻を用いた貝殻腹縁刺突文を、細く鋭い単沈線で直線的に区画している。右半分は全面に貝殻腹縁刺突文を施文している。2は興津II式の口縁部で、単沈線文の条線帯の下には半截竹管の挟りによる凹凸文を施文している。67P2と同一個体である。3は単沈線文を縦位に施文している。4は櫛歯条線文である。5は波状貝殻文(有肋)である。

### 69P (第75図 写真図版20)

規 模 4.10m × 2.38m × 深さ0.1mの不整楕円形 長軸方位 南北方向 68P と重複する。  
壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。東壁際にピットが穿たれる。  
備 考 出土遺物は、前期後半である。

### 69P出土遺物(第77図 写真図版37)

1は変形爪形文と平行沈線文を施文している。2は波状貝殻文(有肋)で、71P2・3、遺構外48と同一個体である。3は遺構外93と接合する。口唇部に波状貼付をくわえ、貼付文上にはRL、胴部はLR?を施文している。4・5は諸磯b式で、4は単節RL地文上に浮線をつけ、浮線の上に更にRLを施文している。5は単節RLを施文する。7は土製塊状耳飾である。1/2 弱の遺存で4.0gである。

### 70P (第78図)

規 模 2.8m × 2.28m × 深さ0.26~0.42m の不整形 方位計測なし  
壁・底面 壁、底面は掘り返しのためか一定していない。底面に2基ピットが穿たれる。  
覆 土 黒褐色土~暗黄褐色土を主体とした自然堆積だが、5~8層から1層、2~4層から1層の最低2回の掘り返しが土層から観察できる。  
備 考 出土遺物はなく時期不明だが、焼土を含んだ層があり、炉穴ないし炉跡としての性格が想定できる。

### 71P (第80図 写真図版20)

規 模 3.1m以上 × 2.52m × 深さ0.1mの楕円形 長軸方位 N - 30° - E 67P と重複する。  
壁・底面 掘り込みが浅い。壁は緩やかに立ち上がり、底面は皿状である。  
覆 土 暗褐色土を主体とした自然堆積と考えられる。掘り直し、重複等はなかった。  
備 考 出土遺物は、前期後半である。

### 71P出土遺物(第81図 写真図版37)

1は興津 式で、単沈線文と有肋の貝殻腹縁刺突による口縁部条線帯の下に、半截竹管の押し引きによる爪形文を施文する。2・3は同一個体で、遺構外48とも同一である。波状貝殻文(有肋)を施文する。

### 72P (第80図 写真図版20)

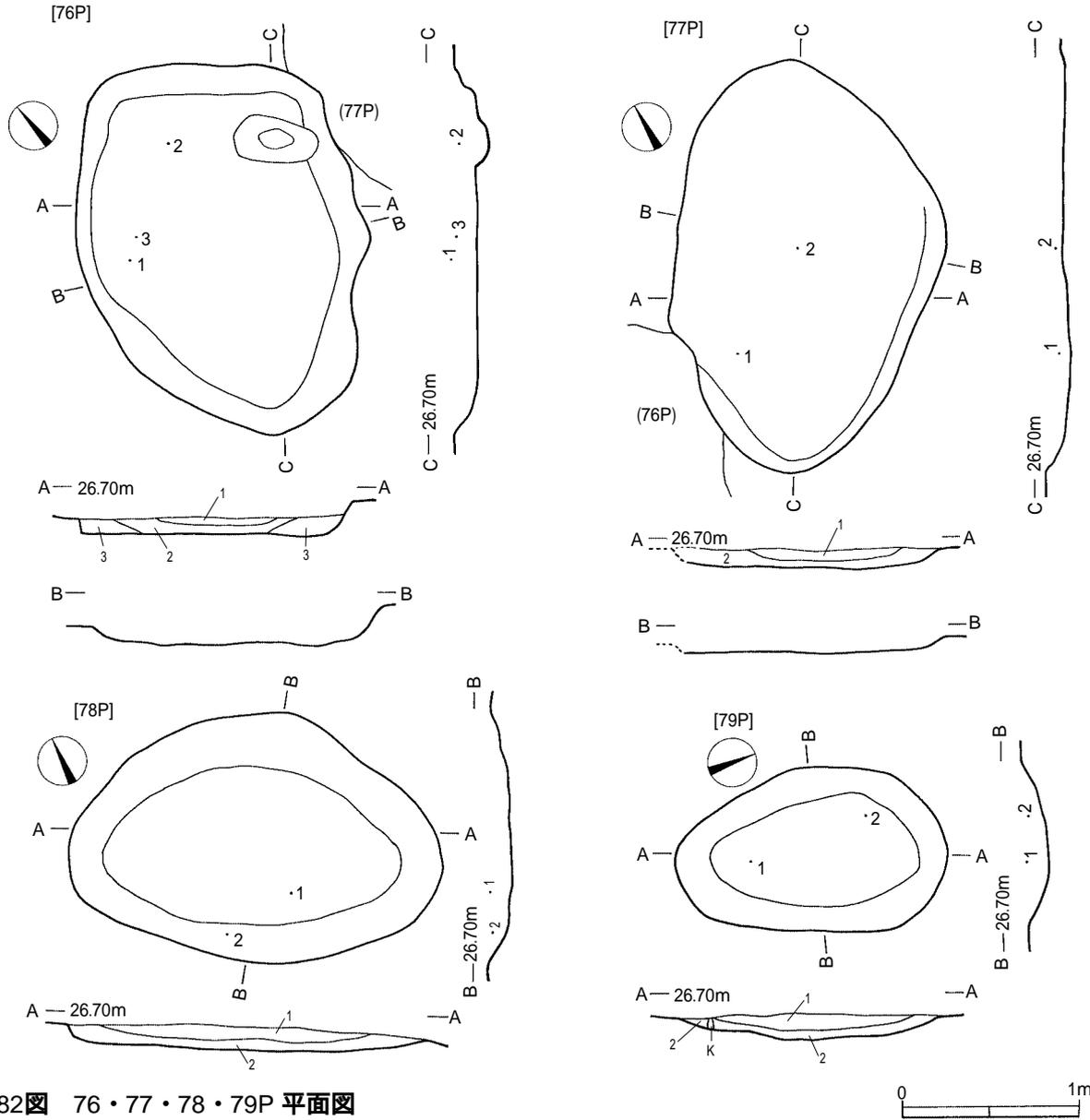
規 模 1.68m × 1.45m × 深さ0.24m の長円形 長軸方位 N - 82° - W  
壁・底面 壁は緩やかに立ち上がり、底面中央と壁際にピット2基が検出された。  
覆 土 暗褐色土~暗黄褐色土の自然堆積である。掘り直し、重複等はなかった。  
備 考 出土遺物は、前期後半である。

### 72P出土遺物(第81図 写真図版37)

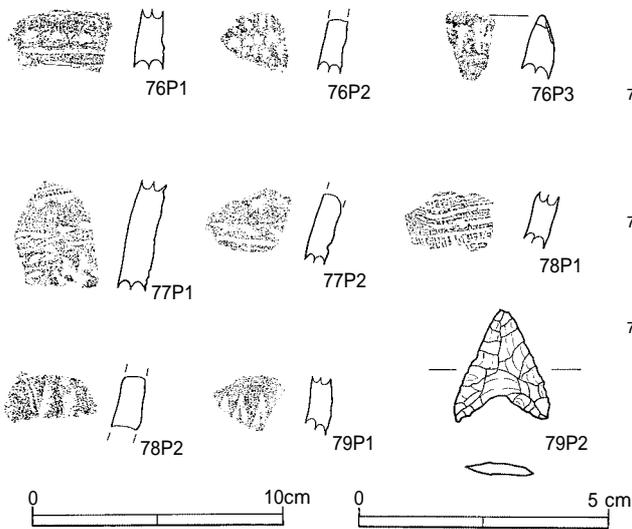
1は櫛歯条線文である。09D1と接合する。2は波状貝殻文(有肋)を施文する。

### 73P (第80図 写真図版20)

規 模 1.78m × 1.5m × 深さ0.3mの不整長方形 長軸方位 N - 32° - E  
壁・底面 掘り直しが見られる。6層~3.4.5層~1.2層と新しくなっている。  
覆 土 黒褐色土を主体とした自然堆積と考えられる。  
備 考 出土遺物は、前期後半である。



第82図 76・77・78・79P 平面図



第83図 76・77・78・79P 出土遺物

76P 土層説明

- 1 暗褐色土 少量の黒色土、微量のローム混入。粘性しまりとともに弱い。
- 2 暗褐色土 少量のローム、微量の黒色土が混入。粘性しまりとともに弱い。
- 3 暗黄褐色土 ローム主に、少量の暗褐色土混入。粘性しまりとともに弱い。

77P 土層説明

- 1 暗褐色土 暗褐色土主だが、多量のロームが斑点状に混入。粘性しまりとともに弱い。
- 2 暗黄褐色土 ローム主だが、多量の暗褐色土が全体に混入。粘性しまりとともに弱い。

78P 土層説明

- 1 暗褐色土 少量のローム、微量の黒色土が混入。粘性弱く、しまり強い。
- 2 暗黄褐色土 暗褐色土主だが、多量のロームが斑点状に、微量の黒色土が混入。粘性ややあり、しまり強い。

79P 土層説明

- 1 暗褐色土 少量の黒色土、微量のロームが混入。粘性しまりとともに弱い。
- 2 暗黄褐色土 暗褐色土主だが、多量のローム混入。粘性しまりとともに弱い。

### 7 3 P 出土遺物 (第81図 写真図版37)

1は7本以上の単位の櫛歯条線文である。2は波状貝殻文(有肋)を施文している。

### 7 4 P (第80図)

規 模 0.92m × 0.66m × 深さ0.12m の楕円形 長軸方位 N - 8 2 ° - W

壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

覆 土 暗褐色土の単一層である。

備 考 出土遺物はなく、時期、性格ともに不明である。

### 7 5 P (第80図)

規 模 0.74m × 0.52m × 深さ0.1 ~ 0.2mの楕円形 長軸方位 N - 5 2 ° - W

壁・底面 2基のピットからなる。壁はやや角度をもって立ち上がる。底面は二段である。

覆 土 暗褐色土~暗黄褐色土の自然堆積である。

備 考 出土遺物はなく、時期、性格ともに不明である。

### 7 6 P (第82図 写真図版20)

規 模 2.16m × 1.62m × 深さ0.2mの不整長方形 長軸方位 N - 2 0 ° - E 77Pと重複する。

壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。

覆 土 暗褐色土を主体とした自然堆積と考えられる。

備 考 出土遺物は、前期後半である。

### 7 6 P 出土遺物 (第83図 写真図版37)

1は三角文と平行沈線文を施文する。2は波状貝殻文(有肋)である。3は外削ぎ状口唇に、半截竹管による平行沈線文で口縁部条線帯としている。

### 7 7 P (第82図 写真図版20)

規 模 2.36m × 1.54m × 深さ0.1mの不整楕円形 長軸方位 N - 2 2 ° - E

壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。

覆 土 暗褐色土~暗黄褐色土を主体とした自然堆積である。

備 考 出土遺物は、前期後半である。

### 7 7 P 出土遺物 (第83図 写真図版37)

1・2は同一個体で、遺構外22とも同一である。1は変形爪形文と三角文、2は変形爪形文と平行沈線文を施文している。

### 7 8 P (第82図)

規 模 2.14m × 1.46m × 深さ0.14m の楕円形 長軸方位 N - 6 7 ° - W

壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。

覆 土 暗褐色土~暗黄褐色土を主体とした自然堆積である。

備 考 出土遺物は、前期後半である。

### 7 8 P 出土遺物 (第83図 写真図版37)

1は平行沈線文を施文する。諸磯b式である。2は波状貝殻文(無肋)を施文する。

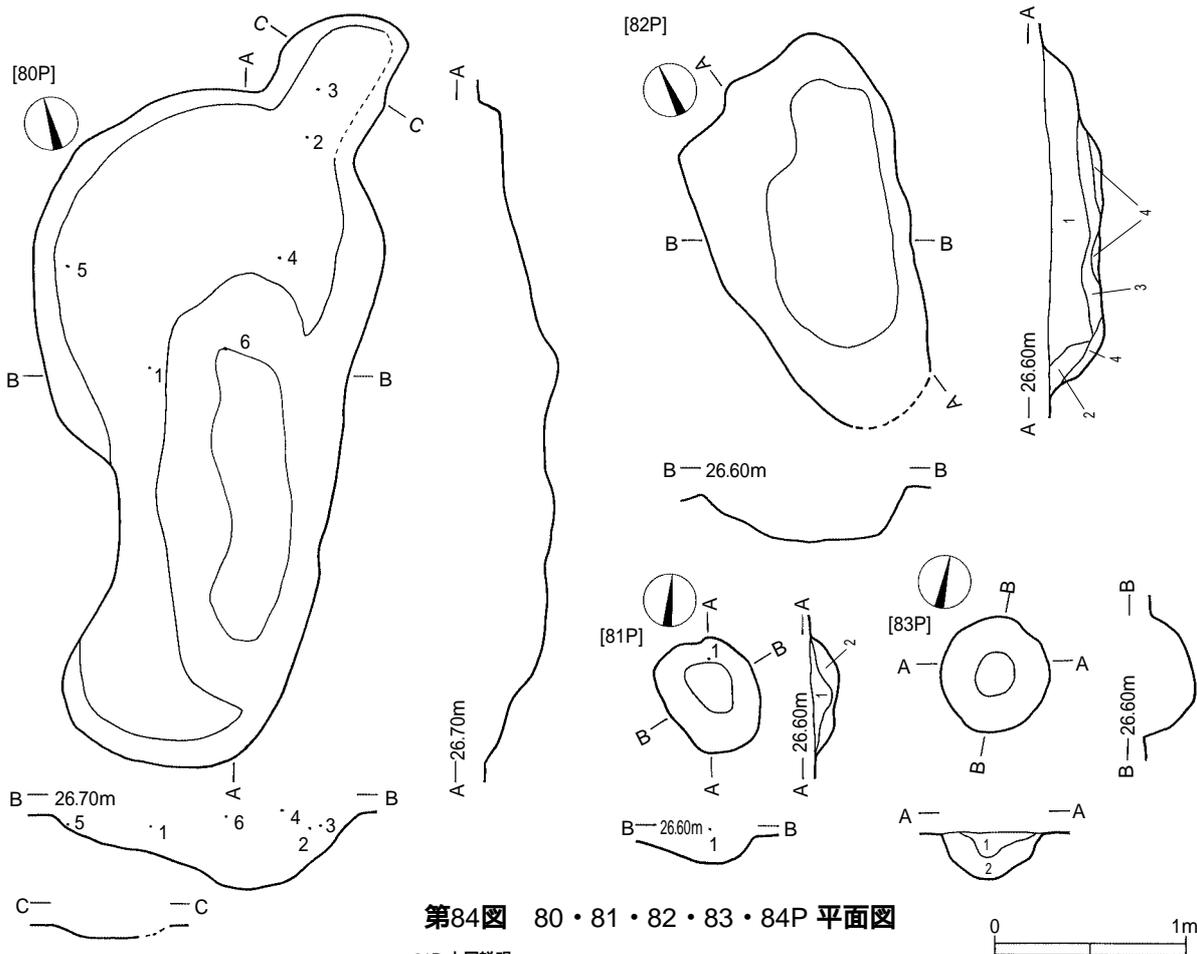
### 7 9 P (第82図 写真図版21)

規 模 1.56m × 0.96m × 深さ0.15m の楕円形 長軸方位 N - 6 ° - E

壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。底面は皿状である。

覆 土 暗褐色土~暗黄褐色土を主体とした自然堆積である。

備 考 出土遺物は、前期後半である。



第84図 80・81・82・83・84P 平面図

81P 土層説明

- 1 暗褐色土 褐色土斑点状に混入。粘性しまりともに強い。
- 2 褐色土 暗褐色土にじむ。粘性しまりともに強い。

82P 土層説明

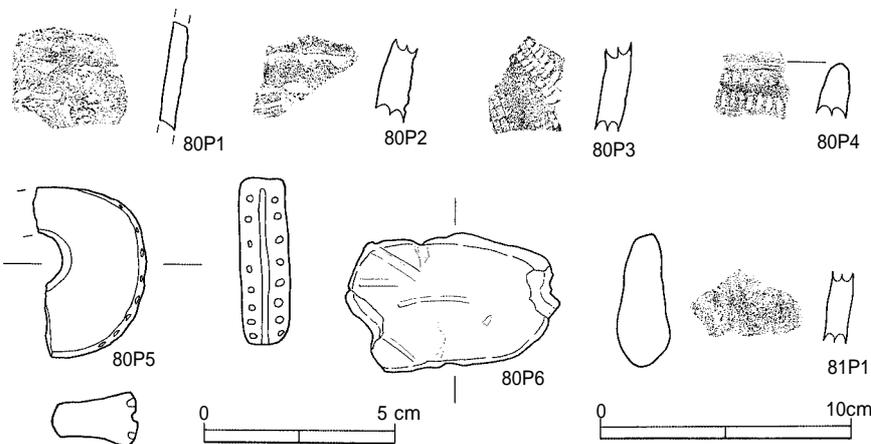
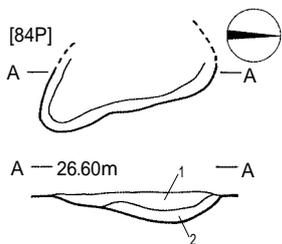
- 1 黒褐色土 褐色土斑点状に混入。粘性しまりともに強い。
- 2 褐色土 黒褐色土にじむ。粘性しまりともに強い。
- 3 暗黄褐色土 暗褐色土、褐色土混合層。粘性しまりともにやや強い。
- 4 褐色土 暗褐色土にじむ。粘性しまりともに強い。

83P 土層説明

- 1 暗褐色土 褐色土斑点状に混入。粘性しまりともに強い。
- 2 暗褐色土 1より多く褐色土が斑点状に混入。粘性しまりとも強い。

84P 土層説明

- 1 暗黄褐色土 暗褐色土、褐色土混合層。粘性強く、しまりやや弱い。
- 2 褐色土 暗褐色土斑点状に混入。粘性しまりともに強い。



第85図 80・81P 出土遺物

### 79P 出土遺物 (第83図 写真図版38)

1は波状貝殻文(無肋)を施文している。2はチャートの石鏃で、2.3cm, 幅1.8cm, 0.8gである。

### 80P (第84図 写真図版21)

規 模 3.6m × 1.8m × 深さ0.32~0.4mの楕円形 長軸方位 N - 22° - E

壁・底面 土層観察から、北側の突起状ピットと楕円形ピットの重複である。底面は凹凸している。

覆 土 暗褐色土~暗黄褐色土を主体とした自然堆積か。

備 考 出土遺物は、前期後半である。

### 80P 出土遺物 (第85図 写真図版38)

1は変形爪形文を施文する。2は変形爪形文と平行沈線文を組み合わせている。3は波状貝殻文(有肋)だが、貝殻腹縁刺突文に近い。4は三角文である。5は土製珧状耳飾である。1/2の遺存で17.9gである。側縁には、棒状工具による沈線と刺突列を加える。全体に指ナデ整形を行っている。6は焼成粘土塊である。扁平な形状で、棒ないしヘラによる擦痕が見られる。乾燥時のひび割れが顕著である。計測値は5.7cm × 3.5cm, 29.2gである。

### 81P (第84図 写真図版21)

規 模 0.63m × 0.51m × 深さ0.14mの長円形 長軸方位 N - 32° - W

壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。底面は皿状である。

覆 土 暗褐色土~褐色土を主体とした自然堆積である。

備 考 出土遺物は、前期後半である。

### 81P 出土遺物 (第85図 写真図版38)

1は無文である。胎土から浮島・興津式か。

### 82P (第84図 写真図版21)

規 模 2.12m × 1.08m × 深さ0.28mの楕円形 長軸方位 N - 12° - E

壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。底面は壁との境が明瞭ではないが、平坦である。

覆 土 暗褐色土~褐色土を主体とした自然堆積である。

備 考 出土遺物はなく、時期、性格ともに不明である。

### 83P (第84図 写真図版21)

規 模 0.64m × 0.58m × 深さ0.22mの円形 方位計測なし

壁・底面 断面は緩いU字状である。

覆 土 暗褐色土の自然堆積である。

備 考 出土遺物はなく、時期、性格ともに不明である。

### 84P (第84図 写真図版21)

規 模 (0.96)m × (0.5)m × 深さ0.17mの楕円形 方位計測なし

壁・底面 西側部分の壁が消失している。断面は皿状である。

覆 土 暗褐色土~褐色土を主体とした自然堆積である。

備 考 出土遺物はなく、時期、性格ともに不明である。

### 85P (第86図)

規 模 0.44mの円形? × 深さ0.18m 方位計測なし

壁・底面 西側部分が消失している。断面は皿状である。

覆 土 暗褐色土~褐色土を主体とした自然堆積である。

備 考 出土遺物はなく、時期、性格ともに不明である。

**86P (第86図 写真図版22)**

規 模 1.4m × 0.94m × 深さ0.28m の楕円形 長軸方位 N - 38° - W  
壁・底面 壁はB'側で角度をもって立ち上がる。底面は二段で平坦を意識していない。  
覆 土 暗褐色土主体の自然堆積である。  
備 考 出土遺物は、前期後半である。

**86P 出土遺物 (第87図 写真図版38)**

1は無文である。浮島・興津式か。

**87P (第86図)**

規 模 0.98m × 0.83m × 深さ0.16m の楕円形 長軸方位 N - 54° - W  
壁・底面 断面はやや緩いU字状である。  
覆 土 暗褐色土主体の自然堆積と考えられる。掘り直し、重複等はなかった。  
備 考 出土遺物はなく、時期、性格ともに不明である。

**88P (第86図)**

規 模 2.02m × 1.11m × 深さ0.18m の楕円形 長軸方位 N - 33° - E  
壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。底面はやや凹凸がみられる。  
覆 土 暗褐色土主体の自然堆積と考えられる。掘り直し、重複等はなかった。  
備 考 出土遺物はなく、時期、性格ともに不明である。

**89P (第86図 写真図版22)**

規 模 2.3m × 1.34m × 深さ0.1mの楕円形 長軸方位 N - 80° - W  
壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。  
覆 土 暗褐色土主体の自然堆積と考えられる。掘り直し、重複等はなかった。  
備 考 出土遺物はなく、時期、性格ともに不明である。

**90P (第86図 写真図版22)**

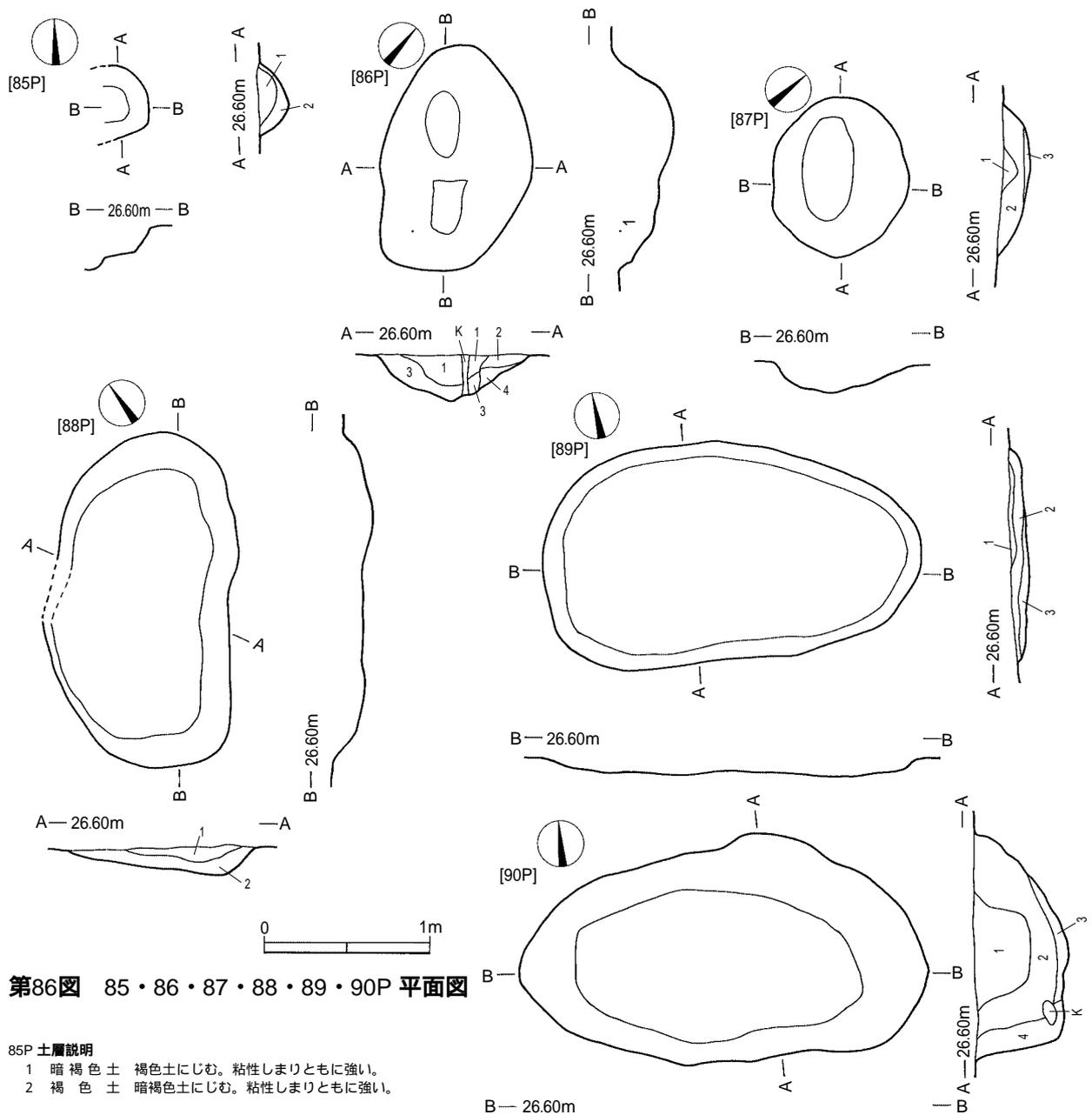
規 模 2.48m × 1.38m × 深さ0.58m の楕円形 長軸方位 N - 81° - W  
壁・底面 壁はやや角度をもって立ち上がる。底面はほぼ平坦である。  
覆 土 黒褐色土～暗褐色土主体の自然堆積と考えられる。掘り直し、重複等はなかった。  
備 考 出土遺物はなく、時期、性格ともに不明である。

**91P (第88図 写真図版22)**

規 模 3.7m × 1.18m × 深さ0.14m の不整楕円形 長軸方位 N - 66° - E  
壁・底面 (a), (b) 2遺構の重複であるが、新旧は不明である。掘り込みは浅く、壁は緩やかに立ち上がる。底面は平坦ではなく緩いカーブ状である。  
覆 土 暗褐色土主体の自然堆積と考えられる。覆土上層で、焼土混じりの褐色土が検出された。  
備 考 出土遺物はなく、時期不明だが、火床施設としての性格が考えられる。

**92P (第88図 写真図版22)**

規 模 (a) 1.23m × 0.78m × 深さ0.12m の楕円形 長軸方位 N - 22° - W  
(b) (0.8) mの円形で深さ0.08m 方位計測なし  
壁・底面 (a), (b) 2遺構の重複である。(a) が (b) を切る。両遺構とも浅いU字状の断面である。  
覆 土 暗褐色土～褐色土の自然堆積と考えられる。  
備 考 出土遺物はなく、時期、性格ともに不明である。



第86図 85・86・87・88・89・90P 平面図

85P 土層説明

- 1 暗褐色土 褐色土にじむ。粘性しまりともに強い。
- 2 褐色土 暗褐色土にじむ。粘性しまりともに強い。

86P 土層説明

- 1 暗褐色土 微量の2mm 大の褐色粒、微量の褐色土が斑点状に混入。粘性しまりともに強い。
- 2 暗褐色土 1より明るい。褐色土が斑点状に混入。粘性しまりともに強い。
- 3 暗褐色土 褐色土にじむ。粘性しまりともにやや強い。
- 4 褐色土 暗褐色土にじむ。粘性しまりともに強い。

87P 土層説明

- 1 暗褐色土 褐色土斑点状に混入。粘性しまりともに強い。
- 2 暗黄褐色土 暗褐色土、褐色土混合層。粘性しまりともに強い。
- 3 褐色土 暗褐色土にじむ。粘性しまりともにやや強い。

88P 土層説明

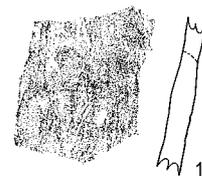
- 1 暗褐色土 褐色土にじむ。粘性しまりともに強い。
- 2 暗黄褐色土 暗褐色土、褐色土混合層。粘性しまりともに強い。

89P 土層説明

- 1 暗褐色土 褐色土が斑点状に混入。粘性しまりともに強い。
- 2 暗褐色土 褐色土にじむ。粘性しまりともにやや強い。
- 3 褐色土 暗褐色土にじむ。粘性しまりともにやや強い。

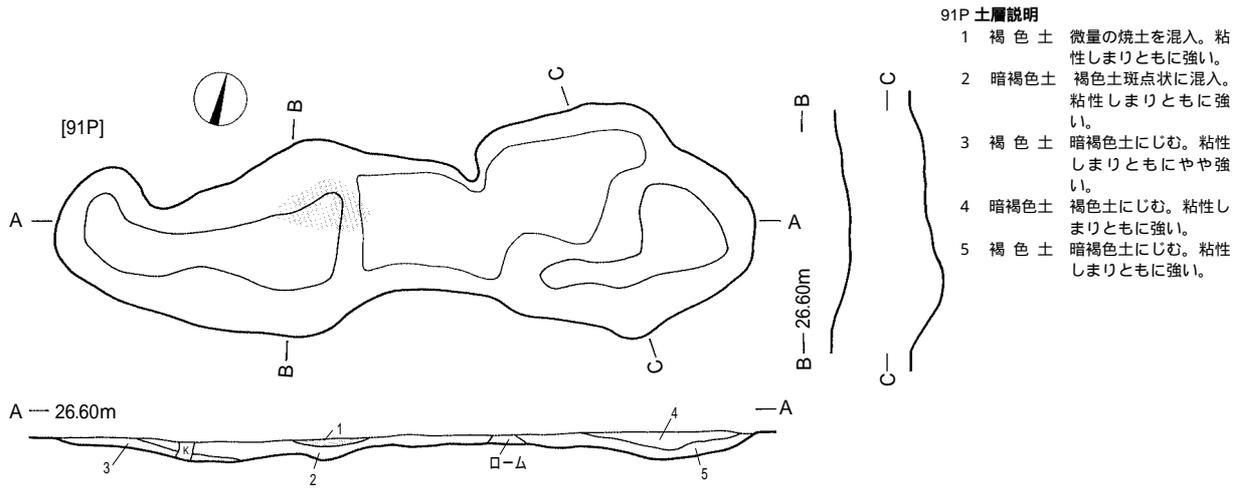
90P 土層説明

- 1 黒褐色土 微量の褐色土が斑点状に混入。粘性しまりともに強い。
- 2 黒褐色土～暗褐色土 褐色土斑点状に混入。微量の5～20mm大ロームブロック混入。粘性しまりともに強い。
- 3 暗褐色土 ロームにじむ。粘性しまりともにやや強い。
- 4 褐色土 暗褐色土にじむ。粘性しまりともにやや強い。

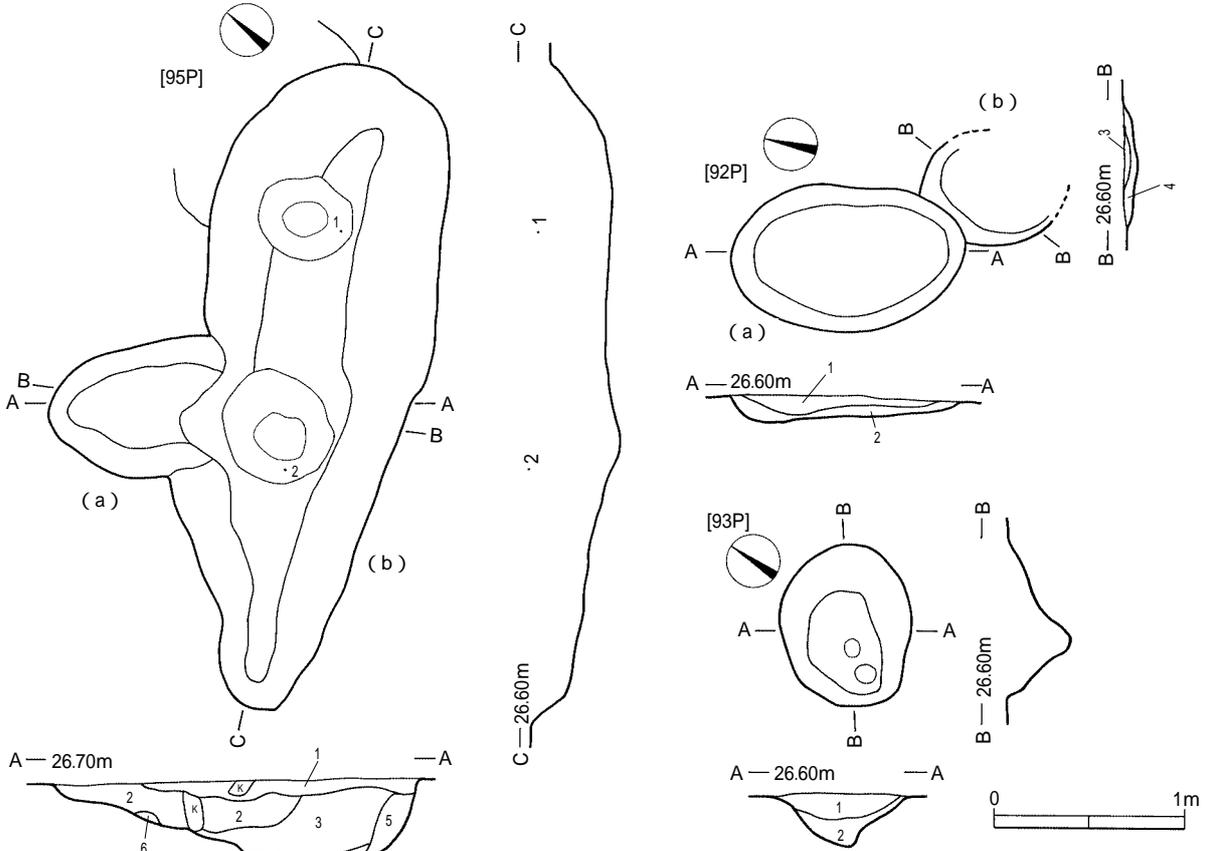


0 10cm

第87図 86P 出土遺物



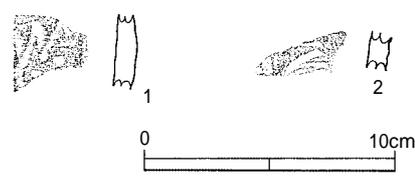
- 91P 土層説明
- 1 褐色土 微量の焼土を混入。粘性しまりともに強い。
  - 2 暗褐色土 褐色土斑点状に混入。粘性しまりともに強い。
  - 3 褐色土 暗褐色土にじむ。粘性しまりともにやや強い。
  - 4 暗褐色土 褐色土にじむ。粘性しまりともに強い。
  - 5 褐色土 暗褐色土にじむ。粘性しまりともに強い。



第88図 91・92・93・95P 平面図

- 92P 土層説明
- 1 暗褐色土 微量の褐色土が斑点状に混入。粘性しまりともに強い。
  - 2 褐色土 暗褐色土にじむ。粘性しまりともに強い。
  - 3 褐色土 明褐色土にじむ。粘性しまりともに強い。
  - 4 褐色土 ロームにじむ。粘性しまりともに強い。
- 93P 土層説明
- 1 暗褐色土 褐色土斑点状に混入。粘性しまりともに強い。
  - 2 褐色土 暗褐色土にじむ。粘性しまりともに強い。
- 95P 土層説明
- 1 褐色土 暗褐色土がにじむ。新期テフラ層か。粘性強く、しまりやや弱い。
  - 2 暗黄褐色土 暗褐色土、褐色土混合層。粘性しまりともに強い。
  - 3 暗褐色土 褐色土斑点状に混入。粘性しまりともにやや強い。
  - 4 暗褐色土 3に類似。褐色土の量が多い。ロームがにじむ。粘性しまりともにやや強い。
  - 5 褐色土 暗褐色土がにじむ。粘性しまりともに強い。
  - 6 褐色土 微量の暗褐色土がにじむ。粘性しまりともに強い。

第89図 95P 出土遺物



### 9 3 P (第88図)

規 模 0.86m × 0.68m × 深さ0.3mの楕円形 長軸方位 N - 36° - E  
壁・底面 壁はやや角度をもって立ち上がる。底面は尖底状をなす。  
覆 土 暗褐色土～褐色土主体の覆土である。  
備 考 出土遺物はなく、時期、性格ともに不明である。

### 9 4 P (第90図 写真図版22)

規 模 2.05m × 1.64m × 深さ0.18m の楕円形 長軸方位 N - 8° - E  
壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。断面は皿状になっている。  
覆 土 褐色土主体の自然堆積と考えられる。掘り直し、重複等はなかった。  
備 考 出土遺物は、前期後半である。

### 9 4 P 出土遺物 (第91図 写真図版38)

1は平行沈線文を施文している。

### 9 5 P (第88図 写真図版22)

規 模 3.44m × 1.83m × 深さ0.28～0.4mの不整楕円形 長軸方位 N - 56° - E 105Pを切る。  
壁・底面 (a),(b)2遺構の重複である。(a)が(b)を切っている。底面は(a)が浅く,(b)が深い。  
覆 土 暗褐色土主体の自然堆積と考えられる。105P 95P(b) 95P(a)と新しくなる。  
備 考 出土遺物は、前期後半である。

### 9 5 P 出土遺物 (第89図 写真図版38)

1・2ともに波状貝殻文(無肋)を施文する。2は縦位に施文している。

### 9 6 P (第90図 写真図版23)

規 模 1.26m × 1.28m × 深さ0.12m の円形 方位計測なし  
壁・底面 緩い皿状の断面である。  
覆 土 暗褐色土主体の自然堆積である。掘り直し、重複等はなかった。  
備 考 出土遺物はなく、時期、性格ともに不明である。

### 9 7 P (第90図 写真図版23)

規 模 2.9m × 1.52m × 深さ0.1mのヒョウタン形 長軸方位 N - 6° - W  
壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。断面は皿状になっている。  
覆 土 暗褐色土主体の自然堆積と考えられる。掘り直し、重複等はなかった。  
備 考 出土遺物は、早期前半と前期後半である。

### 9 7 P 出土遺物 (第91図 写真図版38)

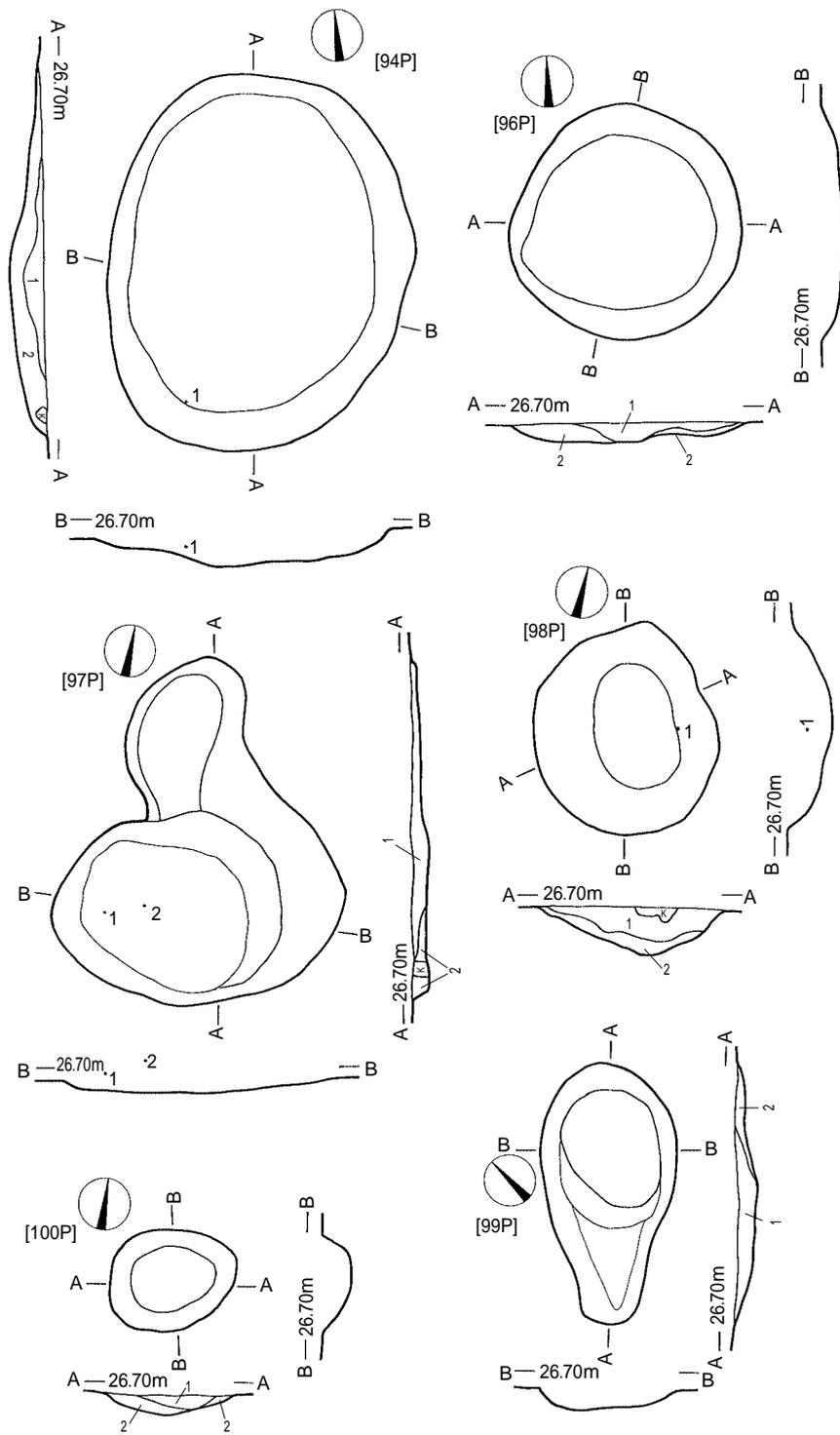
1は単軸絡条体1を施文した燃糸文系土器である。2は波状貝殻文(無肋)を施文する。

### 9 8 P (第90図 写真図版23)

規 模 1.12m × 0.99m × 深さ0.24m の楕円形 長軸方位 N - 29° - W  
壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。断面は皿状になっている。  
覆 土 暗褐色土主体の自然堆積と考えられる。掘り直し、重複等はなかった。  
備 考 出土遺物は、前期後半である。

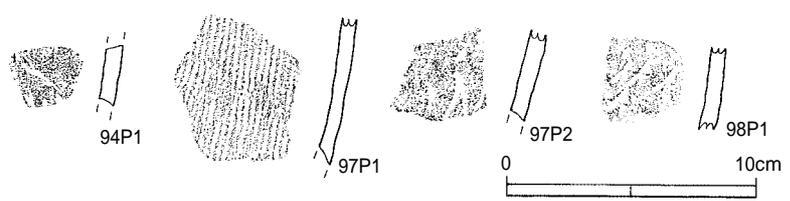
### 9 8 P 出土遺物 (第91図 写真図版38)

1は波状貝殻文(無肋)に近い三角文を施文している。

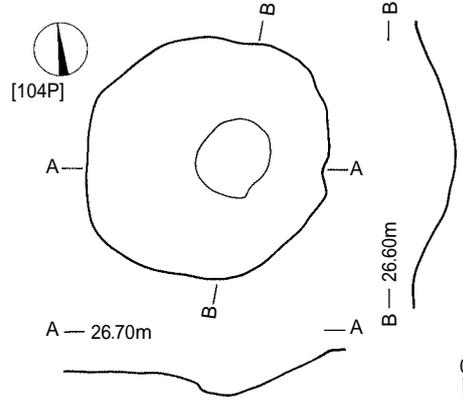
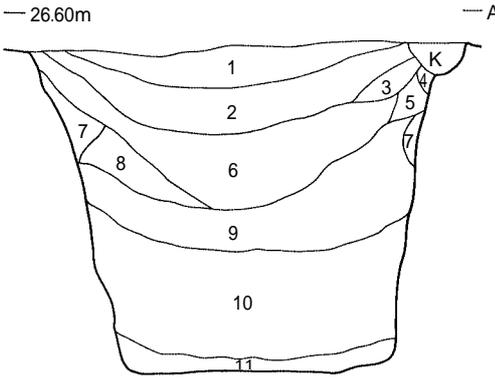
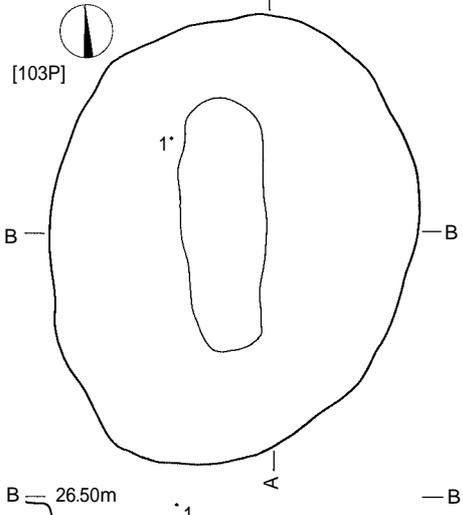
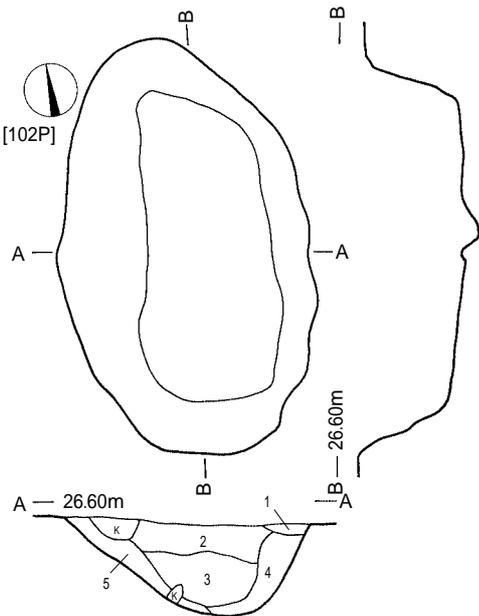
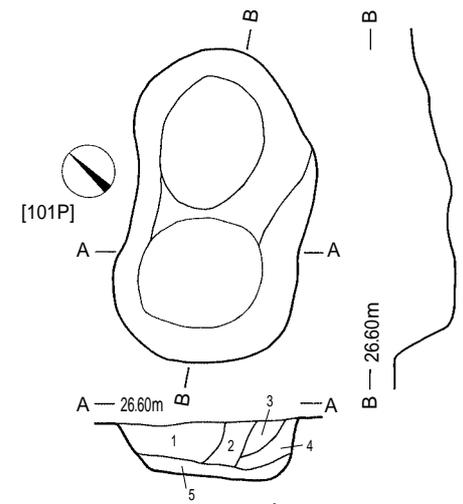


- 94P 土層説明**
- 1 褐色土 少量の明褐色土斑点状に混入。粘性強く、しまりやや弱い。
  - 2 褐色土 ロームにじむ。粘性しまりともに強い。
- 96P 土層説明**
- 1 暗褐色土 褐色土が斑点状に混入。粘性しまりともに強い。
  - 2 褐色土 暗褐色土がにじむ。粘性しまりともに強い。
- 97P 土層説明**
- 1 暗褐色土 褐色土がにじむ。粘性しまりともに強い。
  - 2 褐色土 暗褐色土がにじむ。粘性しまりともに強い。
- 98P 土層説明**
- 1 暗褐色土 褐色土が斑点状に混入。粘性しまりともに強い。
  - 2 褐色土 暗褐色土がにじむ。粘性しまりともに強い。
- 99P 土層説明**
- 1 暗褐色土 褐色土が斑点状に混入。粘性しまりともに強い。
  - 2 褐色土 粘性しまりともに強い。
- 100P 土層説明**
- 1 暗褐色土 褐色土が斑点状に混入。粘性しまりともに強い。
  - 2 褐色土 粘性しまりともに強い。

第90図 94・96・97・98・99・100P平面図 0 1m

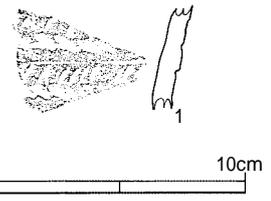


第91図 94・97・98P 出土遺物



- 101P土層説明**
- 1 黒褐色土 粘性弱く、しまり強い。
  - 2 黒褐色土 やや多量の1～5mm 大のローム粒を混入。粘性弱く、しまり強い。
  - 3 黒褐色土 1層類似。少量のローム粒混入。粘性弱く、しまり強い。
  - 4 黒褐色土 ロームないし暗褐色土が斑点状に混入。粘性弱く、しまり強い。
  - 5 暗褐色土 粘性弱く、しまり非常に強い。
- 102P土層説明**
- 1 褐色土 粘性強く、しまり弱い。
  - 2 暗褐色土 微量の2mm大黄色粒子混入。粘性強く、しまりやや強い。
  - 3 暗褐色土～黒褐色土 微量の褐色土が斑点状に、微量の1～2mm 大黄色粒子混入。粘性強く、しまりやや強い。
  - 4 褐色土 ロームにじむ。粘性強く、しまりやや強い。
  - 5 褐色土 ローム、ロームブロック混入。粘性強く、しまりやや強い。

- 103P土層説明**
- 1 暗褐色土 微量の黒色土、ローム、2cm 大ロームブロックを混入。粘性弱く、しまりやや強い。
  - 2 黒褐色土 微量の暗褐色土、ローム混入。粘性弱く、しまりやや強い。
  - 3 暗褐色土 少量のローム混入。粘性しまりともに弱い。
  - 4 暗褐色土 暗褐色土主だが、比較的少量のローム混入。粘性しまりともに弱い。
  - 5 暗褐色土 少量のローム混入。粘性しまりともに弱い。
  - 6 黒褐色土 微量のローム混入。粘性弱く、しまりやや強い。
  - 7 暗黄褐色土 ローム主に、微量の暗褐色土混入。粘性弱く、しまりやや強い。
  - 8 暗褐色土 少量のローム、微量の黒色土混入。粘性弱く、しまりやや強い。
  - 9 暗褐色土 少量の黒色土、ローム、5cm 大ロームブロックを混入。粘性弱く、しまりやや強い。
  - 10 黄褐色土 少量の黒色土、ローム、10cm 大ロームブロックを混入。粘性しまりともに弱い。
  - 11 黒褐色土 少量の暗褐色土、ロームを混入。粘性しまりともに弱い。



第92図 101・102・103・104P平面図

第93図 103P出土遺物

**99 P (第90図 写真図版23)**

規 模 1.42m × 0.74m × 深さ0.06 ~ 0.1mの楕円形 長軸方位 N - 36° - E  
壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。断面は皿状になっている。  
覆 土 暗褐色土 ~ 褐色土主体の自然堆積である。  
備 考 出土遺物はなく、時期、性格ともに不明である。

**100 P (第90図 写真図版23)**

規 模 0.7m × 0.55m × 深さ0.12m の楕円形 長軸方位 N - 73° - E  
壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。断面は皿状になっている。  
覆 土 暗褐色土 ~ 褐色土主体の自然堆積である。  
備 考 出土遺物はなく、時期、性格ともに不明である。

**101 P (第92図 写真図版23)**

規 模 1.68m × 0.98m × 深さ0.2 ~ 0.32m の楕円形 長軸方位 N - 49° - E  
壁・底面 2基のピットからなる。壁は南側で角度をもって、北側で緩やかに立ち上がる。  
覆 土 黒褐色土主体の自然堆積である。  
備 考 出土遺物はなく、時期、性格ともに不明である。

**102 P (第92図 写真図版23)**

規 模 2.25m × 1.33m × 深さ0.55 ~ 0.65m の楕円形 長軸方位 N - 8° - W  
壁・底面 壁は南北方位では角度をもって、東西方位ではやや角度を緩めて立ち上がる。  
覆 土 暗褐色土 ~ 黒褐色土の自然堆積である。  
備 考 出土遺物はなく、時期、性格ともに不明である。

**103 P (第92図 写真図版23)**

規 模 2.32m × 1.97m × 深さ1.74m の楕円形 長軸方位 N - 0° - S  
壁・底面 壁は角度をもって立ち上がる。底面はほぼ平坦である。  
覆 土 1 ~ 9層は自然堆積で、10・11層は人為的埋め戻し層である。  
備 考 出土遺物は流れ込みの遺物と思われる、本跡に伴うとは考えられない。

**103 P 出土遺物 (第93図 写真図版38)**

1は変形爪形文である。平行沈線文の後に変形爪形文を施文している。

**104 P (第92図)**

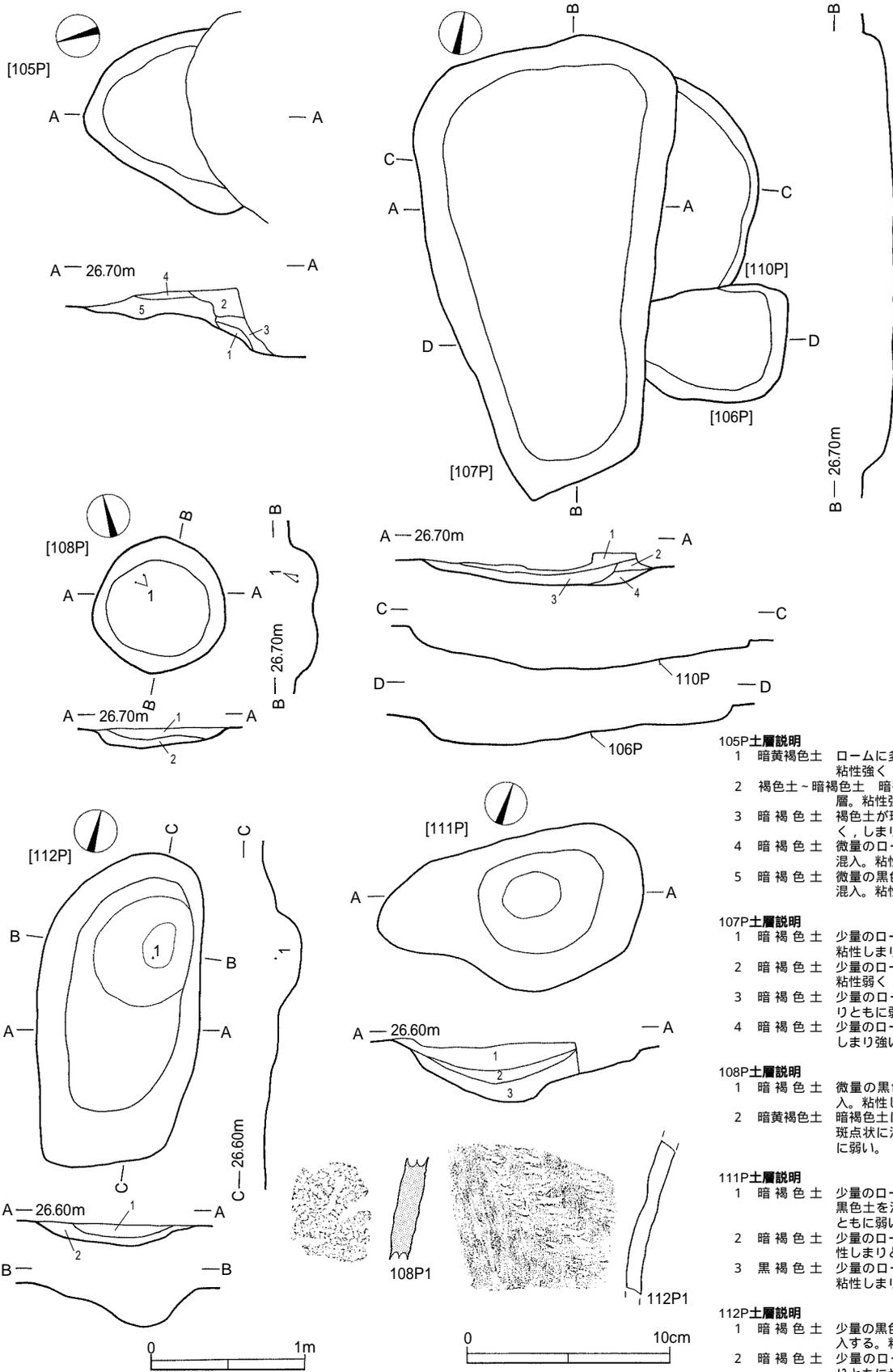
規 模 1.28m × 1.24m × 深さ0.22m の円形 方位計測なし  
壁・底面 緩やかな曲線で、壁の立ち上がり、平坦な底面は意識されていない。  
備 考 出土遺物はなく、時期、性格ともに不明である。

**105 P (第94図)**

規 模 (1.3)m × 1.16m × 深さ0.1mの楕円形? 方位計測なし 95P に切られる。  
壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。底面はやや凹凸が見られる。  
覆 土 暗褐色土の自然堆積である。1 ~ 3層は95P 覆土である。  
備 考 出土遺物はなく、時期、性格ともに不明である。

**106 P (第94図 写真図版24)**

規 模 (1.04)m × 0.75m × 深さ0.12m の楕円形 長軸方位 N - 84° - E  
壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。  
覆 土 暗褐色土 ~ 暗黄褐色土の自然堆積である。出土遺物はなく、時期、性格ともに不明である。



- 105P土層説明**
- 1 暗黄褐色土 ロームに多量の暗褐色土が混入。粘性強く、しまりやや強い。
  - 2 褐色土 - 暗褐色土 暗褐色土と褐色土の混合層。粘性強く、しまりやや強い。褐色土が斑点状に混入。粘性強く、しまりやや強い。
  - 3 暗褐色土 微量のローム、少量の黒色土が混入。粘性しまりともに弱い。
  - 4 暗褐色土 微量のローム、少量の黒色土が混入。粘性しまりともに弱い。
  - 5 暗褐色土 微量の黒色土、少量の黒色土が混入。粘性しまりともに弱い。
- 107P土層説明**
- 1 暗褐色土 少量のロームが斑点状に混入。粘性しまりともに弱い。
  - 2 暗褐色土 少量のロームが斑点状に混入。粘性弱く、しまり強い。
  - 3 暗褐色土 少量のロームが混入。粘性しまりともに弱い。
  - 4 暗褐色土 少量のロームが混入。粘性弱く、しまり強い。
- 108P土層説明**
- 1 暗褐色土 微量の黒色土、少量のローム混入。粘性しまりともに弱い。
  - 2 暗黄褐色土 暗褐色土にやや多量のロームが斑点状に混入。粘性しまりともに弱い。
- 111P土層説明**
- 1 暗褐色土 少量のロームが斑点状に、微量の黒色土を混入する。粘性しまりともに弱い。
  - 2 暗褐色土 少量のローム、黒色土が混入。粘性しまりともに弱い。
  - 3 黒褐色土 少量のローム、暗褐色土が混入。粘性しまりともに弱い。
- 112P土層説明**
- 1 暗褐色土 少量の黒色土、微量のロームを混入する。粘性しまりともに弱い。
  - 2 暗褐色土 少量のロームを混入。粘性しまりともにやや弱い。

第94図 105・106・107・108・110・111・112P平面図

第95図 108・112P出土遺物

107 P (第94図)

規 模 2.86m × 1.62m × 深さ0.15m の不整長方形 長軸方位 N - 20° - W

壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

覆 土 暗褐色土主体の自然堆積である。

備 考 出土遺物はなく、時期、性格ともに不明である。

108 P (第94図 写真図版24)

規 模 0.88m × 0.86m × 深さ0.18m の円形 方位計測なし

壁・底面 壁はやや角度をもって立ち上がる。底面はやや凹凸が見られる。

覆 土 暗褐色土～暗黄褐色土主体の自然堆積である。掘り直し、重複等はなかった。

備 考 出土遺物は、前期半ばである。

108 P 出土遺物 (第95図 写真図版38)

1は黒浜式である。文様は不明瞭である。附加条か。

109 P (第96図)

規 模 3.3m × 1.56m × 深さ0.45m の楕円形 長軸方位 N - 28° - E

壁・底面 壁は北と西側では角度をもって、南と東側では緩やかに立ち上がる。

覆 土 ロームブロックを含む暗褐色土、暗黄褐色土で人為的堆積と考えられる。

備 考 出土遺物は、前期後半である。また、調査者は墓坑としての可能性を考慮している。

109 P 出土遺物 (第97図 写真図版38)

1は外削ぎ状の口唇部に棒状工具による単沈線文で口縁部条線帯としている。下には平行沈線文上に変形爪形文を時計回りに施文する。2は平行沈線文と波状貝殻文(有肋)を施文する。3は右側が10D2と接合する。口唇上に棒状工具側面を押圧し、平行沈線文で口縁部条線帯としている。胴部は横位の櫛歯条線文を施文する。4は単沈線文と考えられる。5は無文である。

110 P (第94図)

規 模 円形ないし楕円形のプランと想定されるが、規模は不明 深さ0.1m 方位計測なし

壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。

備 考 出土遺物はなく、時期、性格ともに不明である。

111 P (第94図 写真図版24)

規 模 1.74m × 0.98m × 深さ0.42m の楕円形 長軸方位 N - 66° - E

壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。底面はU字状で平坦ではない。

覆 土 黒褐色土～暗褐色土主体の自然堆積である。

備 考 出土遺物はなく、時期、性格ともに不明である。

112 P (第94図 写真図版24)

規 模 2.02m × 1.06m × 深さ0.14m の不整長方形 長軸方位 N - 26° - W

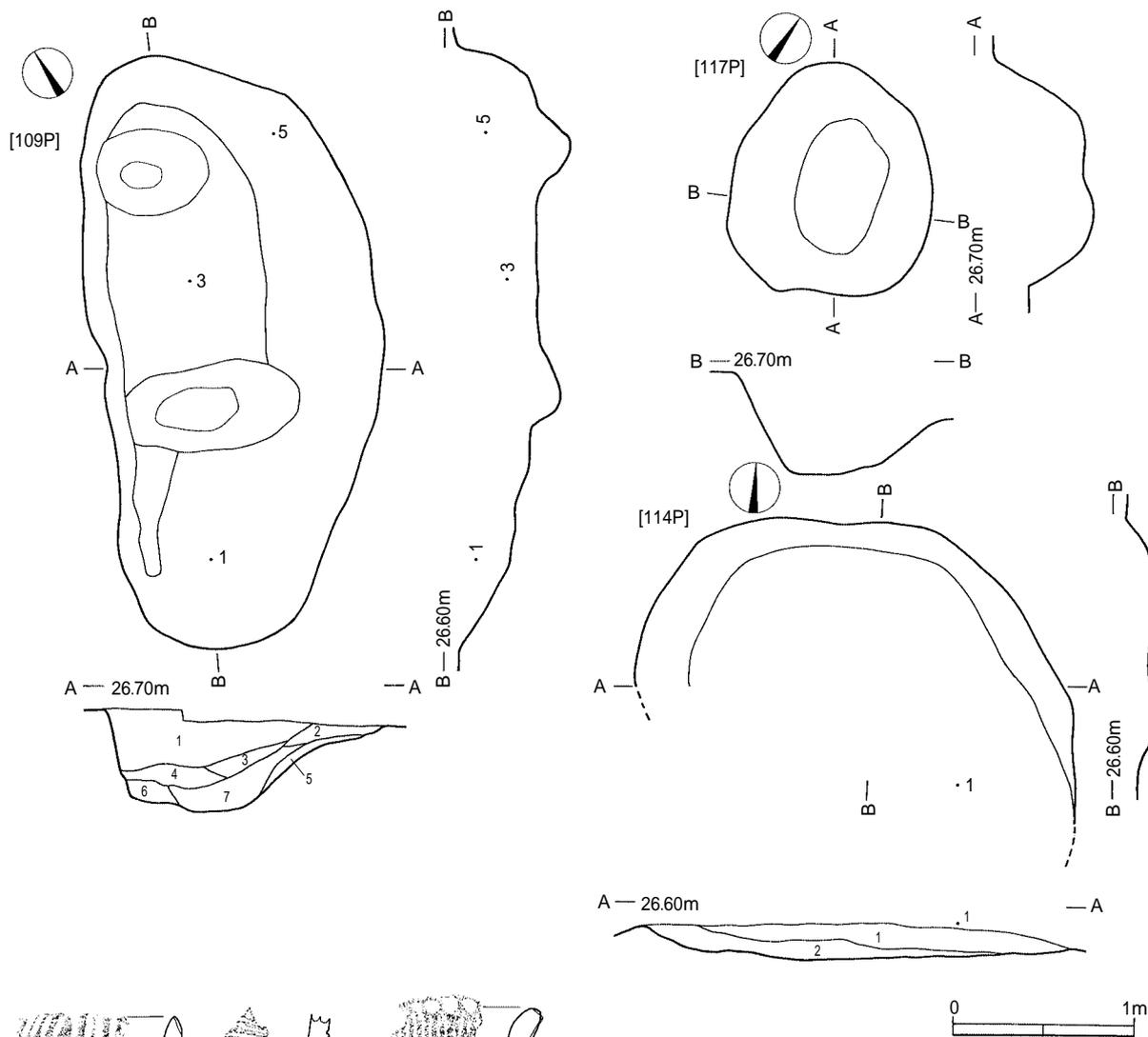
壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。底面北側にピットが検出された。

覆 土 暗褐色土主体の自然堆積である。

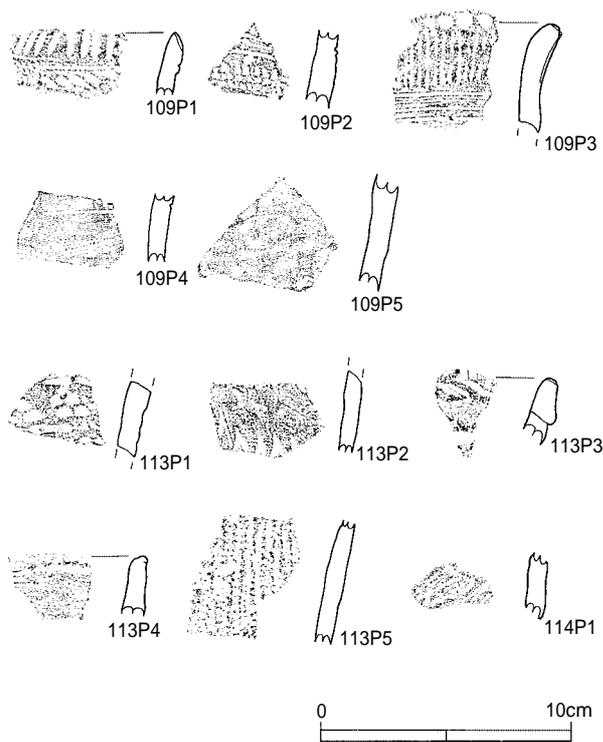
備 考 出土遺物は、前期後半である。

112 P 出土遺物 (第95図 写真図版38)

1は遺構外73・74 と同一個体である。66P1とも同一個体の可能性がある。波状貝殻文に近い三角文を右下がりに施文している。



第96図 109・117・114P平面図



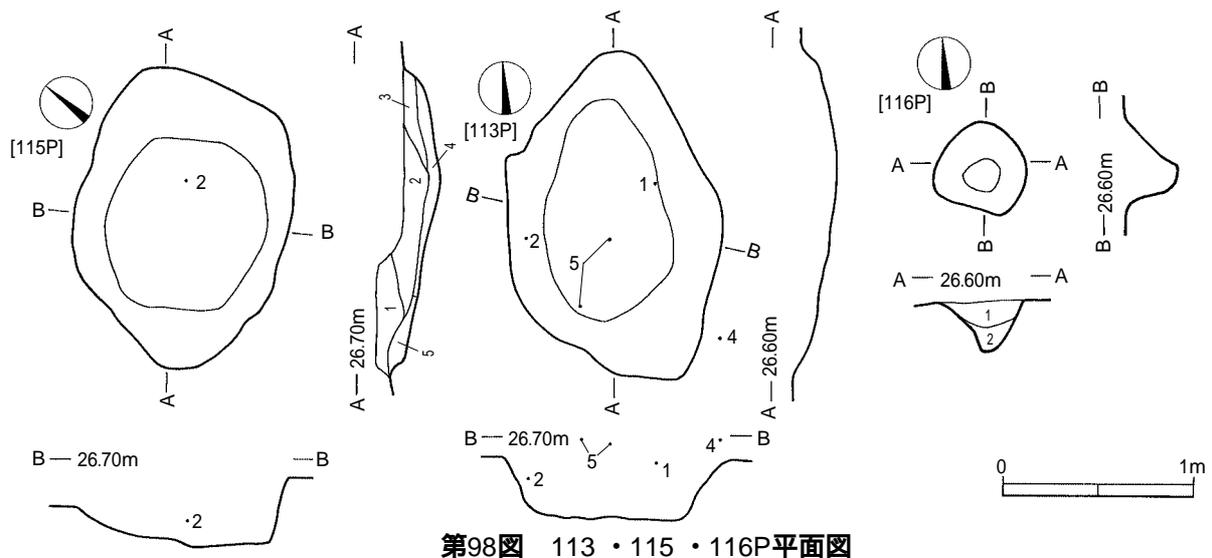
第97図 109・113・114P出土遺物

109P土層説明

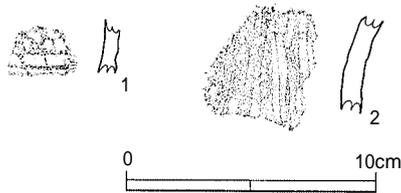
- 1 黄褐色土 ローム主に、微量の暗褐色土が混入。粘性しまりともにやや強い。
- 2 暗褐色土 微量のローム、黒色土が混入。粘性しまりともにやや強い。
- 3 暗褐色土 少量のローム、黒色土が混入。粒子粗くざらざら。粘性しまりともに非常に弱い。
- 4 暗褐色土 少量のローム、微量の黒色土混入。3cm 大ロームブロック少量混入。ロームはわずかに熱を受け劣化する。ごく微量の焼土を含み、やや赤みを帯びる。粘性しまりともに非常に弱い。
- 5 黄褐色土 ローム、暗褐色土混合層。粘性しまりともに強い。
- 6 黄褐色土 ローム主に、微量の暗褐色土が混入。粘性しまりともに強い。
- 7 黒褐色土 少量の暗褐色土、微量のローム混入。5cm 大ロームブロック少量混入。粘性しまりは非常に強い。

114P土層説明

- 1 暗褐色土 少量の黒色土、ロームを混入する。粘性しまりともに弱い。
- 2 暗黄褐色土 暗褐色土を主としながら、多量のローム、微量の黒色土を混入。粘性しまりともに弱い。



第98図 113・115・116P平面図



第99図 115P出土遺物

115P土層説明

- 1 褐色土 b層の新时期テフラ層。粘性しまりともに弱い。
- 2 暗褐色土 少量のローム、微量の黒色土混入。粘性しまりともにやや弱い。
- 3 暗褐色土 少量のロームを混入。粘性しまりともに弱い。
- 4 黄褐色土 ローム主に、少量の暗褐色土混入。粘性しまりともに弱い。
- 5 暗褐色土 少量の黒色土、ロームを混入する。粘性しまりともに弱い。

116P土層説明

- 1 黒褐色土 少量のロームが斑点状に、微量の黒色土が混入する。粘性しまりともに弱い。
- 2 暗黄褐色土 暗褐色土主だが、多量のロームが斑点状に混入する。粘性しまりともに弱い。

113 P (第98図 写真図版24)

規模 1.68m × 1.12m × 深さ0.32m の不整楕円形 長軸方位 N - 2° - E

壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。

覆土 暗褐色土主体の自然堆積である。

備考 出土遺物は、前期後半である。

113 P 出土遺物 (第97図 写真図版38)

1は波状貝殻文(有肋)である。2は波状貝殻文(無肋)を施文する。3は口唇上に半截竹管の刻みを入れた輪積痕の土器である。4は無文, 5は単節RLを施文する。諸磯b式であろう。

114 P (第96図)

規模 (2.7)m × - m × 深さ0.2mの楕円形? 方位計測なし

壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。

覆土 暗褐色土~暗黄褐色土の自然堆積である。

備考 出土遺物は、前期後半である。

114 P 出土遺物 (第97図 写真図版38)

1は波状貝殻文(無肋)を施文する。

115 P (第98図)

規模 1.6m × 1.15m × 深さ0.3mの不整楕円形 長軸方位 N - 38° - E 13D に切られる。

壁・底面 壁は緩やかに立ち上がる。底面は平坦ではなく、やや窪む。

覆土 暗褐色土主体の自然堆積である。

備考 出土遺物は、前期後半である。

115 P 出土遺物 (第99図 写真図版38)

1は波状貝殻文(有肋)である。2は無文である。縦位ヘラ削りが明瞭である。浮島式か。

116 P (第98図 写真図版24)

規 模 0.48m × 0.48m × 深さ0.28m の円形 方位計測なし

壁・底面 断面はU字状である。

覆 土 黒褐色土～暗黄褐色土の自然堆積である。

備 考 出土遺物はなく、時期、性格ともに不明である。

117 P (第96図 写真図版24)

規 模 1.3m × 1.12m × 深さ0.5mの楕円形 長軸方位 N - 30° - W

壁・底面 壁はやや角度をもって立ち上がる。底面はやや凹凸が見られる。

備 考 出土遺物はなく、時期、性格ともに不明である。

c . 遺構外出土遺物 (第100図～106図 写真図版39～44)

1～14は撚糸文系土器である。3～10は井草式、1・2・11～13は井草式である。1・2は口唇部RL、胴部RLである。3は口唇部RL、口縁部RLである。4は口唇部LR、口縁部RLか。5は05D3と接合する。口唇上面にLR側面押圧、外面にLR、口縁部文様帯は不明だが、横走するようである。6は口唇部RL、口縁部RLが横走する。7は口唇部にLRを2段、口縁部にLRを横・縦回転する。8は口唇部にLRを2段、口縁部はLRである。9は口唇・口縁部に単節RLを施文する。10は口唇部に3段にわたってRL施文している。11は口唇部にLRを2段、胴部は撚糸文Rである。12は推定口径11cmの小型の土器で、口縁部LR、胴部はLRか。13は口唇部は撚糸文R?、胴部は無節Rか。14は底部付近と考えられる。単節LRが施文される。

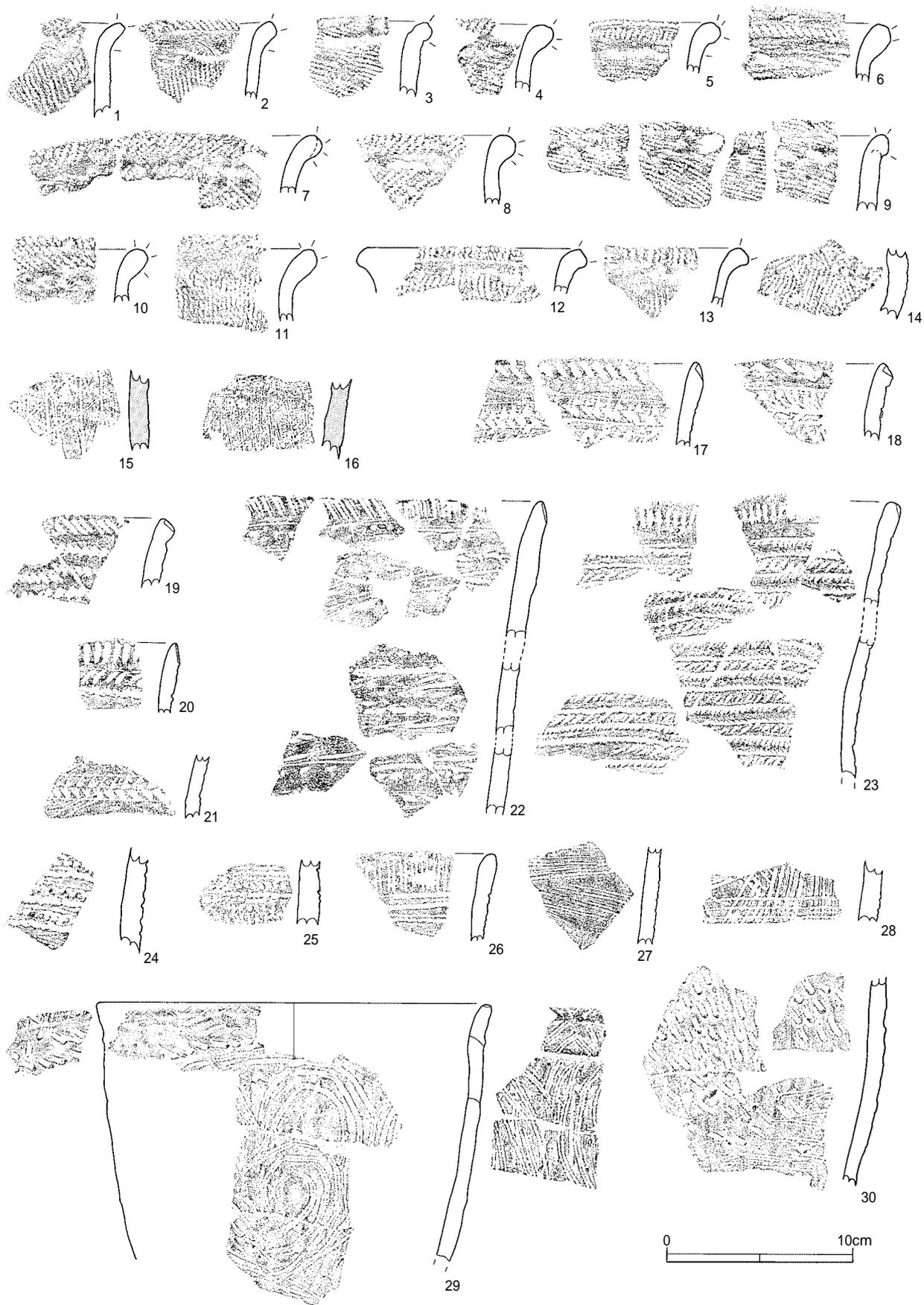
15・16は黒浜式である。どちらも単沈線文で斜格子文を施文している。

17～25は変形爪形文である。浮島式～式である。17は外削ぎ状口唇に半截竹管外側を刺突して彫っている。平行沈線文上に変形爪形文、変形爪形文間に刻みを施文している。18は外削ぎ状口唇に半截竹管内側を刺突、平行沈線文上に変形爪形文、変形爪形文間に刻みを施文する。19は突出する口唇部に半截竹管外側を刺突している。20は外削ぎ状口唇部に棒状工具を引曳し、平行沈線文上に変形爪形文を施文する。21は平行沈線文上に変形爪形文、変形爪形文間に刻み、下部には意匠文と思われる平行沈線文を斜めに施文する。22は77P1・2と同一個体である。外削ぎ状口唇に半截竹管で平行沈線文を引き、口縁部条線帯とし、胴部は平行沈線文上に変形爪形文、変形爪形文間に刻みを付す。23は口唇外側角に半截竹管外側を刺突して彫っている。変形爪形文間には刻みを付けている。25は先の割れた工具により施文していると思われる。

26～31は平行沈線文である。26は平行沈線文による口縁部条線帯である。29は複合口縁が軽く外反する寸胴の器形である。口唇部には鋸歯状に鋭い刻みが入れている。胴部には細い半截竹管による平行沈線文で、形の崩れた長楕円ないし渦巻形が横に連続して描かれる。複合口縁の部分には胴部と同一個体を用いて、拓影図左側は短い斜め沈線列が加えられ、右側では胴部文様が延長されている。30は29と同様の原体を用いて、短い斜め沈線と横位平行沈線が施文されている。胎土や器厚も29と類似しており、同一個体である可能性が高い。31は角頭気味の口縁部に斜めの平行沈線文を施文している。

32～35は櫛歯条線文である。32は口唇を外反させて、波状にしている。櫛歯の本数は、32が5本、33は9本以上、34は7本以上、35は7本である。

36は単沈線文を格子状に施文している。



第100图 遺構外出土遺物(1)

37～40は有肋の貝を用いた貝殻腹縁刺突文である。37は貝殻を引きずるように施文している。単沈線文区画である。38は幅の狭い原体で刺突している。39・40は先端の尖った棒状のものを何本か束ねた工具を使用して施文している。

41～52は波状貝殻文（有肋）である。41は推定口径32cmの寸胴形である。42の口縁部条線帯は半截竹管内側による平行沈線文であり，43は棒状工具側面の押圧，45は劣截竹管内側の引曳による。48は69P2，71P2・3と同一個体である。

53～66は波状貝殻文（無肋）である。53の口縁部条線帯は鋭いヘラによる刻みで，54は棒状工具の引曳による単沈線文である。59は2種類の原体を使用している。61・62は同一個体である。65・66も同一個体である。66の底面には細いヘラ状のものが押圧された痕が数本見られる。

67～74は三角文である。67は05D5と同一個体で，68とも同一の可能性ある。69・70は波状貝殻文に近い三角文である。73・74は同一個体であり，112P1とも同一個体である。波状貝殻文（無肋）に近く，原体を器面に垂直に立てて施文し，三角文列が横位のみならず，縦位にも構成される。

75～88は輪積痕及び凹凸文の土器である。75～77は輪積痕に指頭による凹凸文を不等間隔に加えている。75は03I1と接合する。78・79は同様に凹凸文が密接して等間隔に加えられたものである。78の口縁部条線帯は幅広のヘラを引曳したものである。80は輪積痕上に単沈線を縦位に引いている。81は輪積痕及び波状貝殻文（無肋）を施文している。82は有肋の貝殻腹縁を所々に刺突している。腹縁はとても鋭い。83～85は輪積痕のみである。83の口縁部条線帯は劣截竹管内側による沈線である。86～88は有肋の貝殻による凹凸文の見られるものである。86の口縁部刻みは半截竹管とも見えるが工具不明である。87は波状貝殻文（無肋）を，88は波状貝殻文（有肋）を施文している。

89は口唇部を波状に作出した無文の土器である。

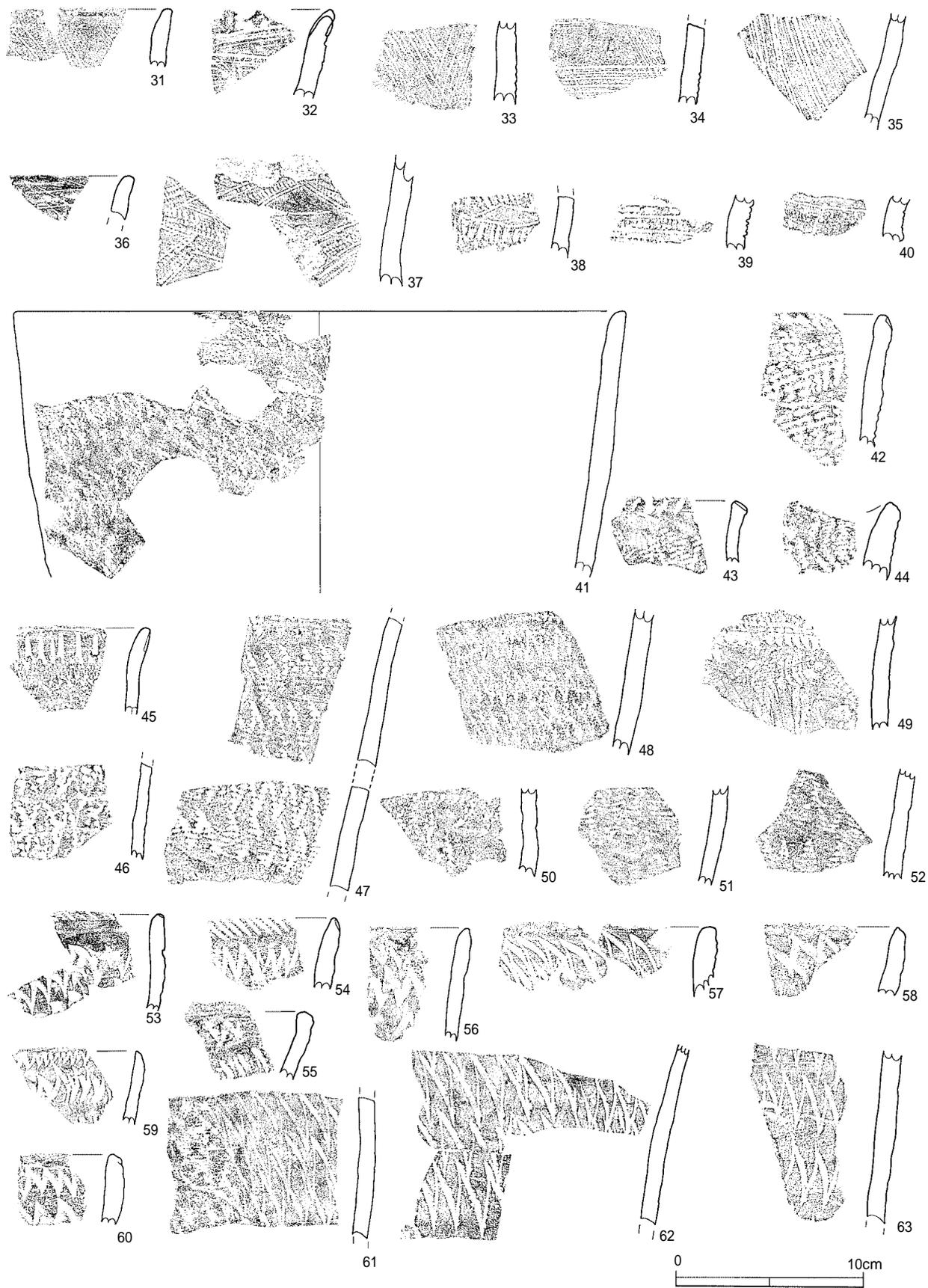
90～92は浅鉢である。90は口縁下に孔列がめぐり，胴部には劣截竹管による平行沈線文を引き，その上に同一工具による爪形文を連弧状に施文する。91にも劣截竹管による平行沈線文と爪形文が施文されている。92は有肋の貝ないし櫛歯状工具の引きずりによって施文している。

93～105は前期末葉に位置づけられる土器である。93は69P3と接合する。口唇部に波状貼付を加え，その上面と胴部に単節縄文を施文している。原体は口唇がRL，胴部は特定できない。94は複合口縁を有する土器で，口唇及び胴部に単節RLを施文している。95は擬口縁逆形が顕著で，複合口縁と思われる。単節RLを口唇，胴部に施文する。96は口唇部に単節LRを施文，胴部は縄文であるが，大半が欠けていて不明である。97はRLとLRの羽状縄文で，結束第1種と思われるが不明瞭である。98は図の天地が逆である。97と類似し，同一個体の可能性がある。結束の有無は不明である。99・100は同一個体の可能性が高い。比較的短い原体を用いた単節RLである。101は口唇部に指頭で凹みをつけ，指ナデして小波状にしている。単節RLを施文している。102は附加条LのL巻または反撚LLと考えられる。器面への押圧が弱い。103～105は結節縄文である。103は[LR-RZ]を施文したのち，結節に沿って斜めに単沈線文，そのあと縦に3本単沈線文を施文している。104は自縄結節[L-LS]またはL2本の端末結節[2L-LS]の結節部を施文している。105はLの自縄結節に端末結節も施した[L-Ls-rZ]か或いはL2本の端末結節[2L-Ls-rZ]であろう。主に[LS]の部分を重ねて施文している。

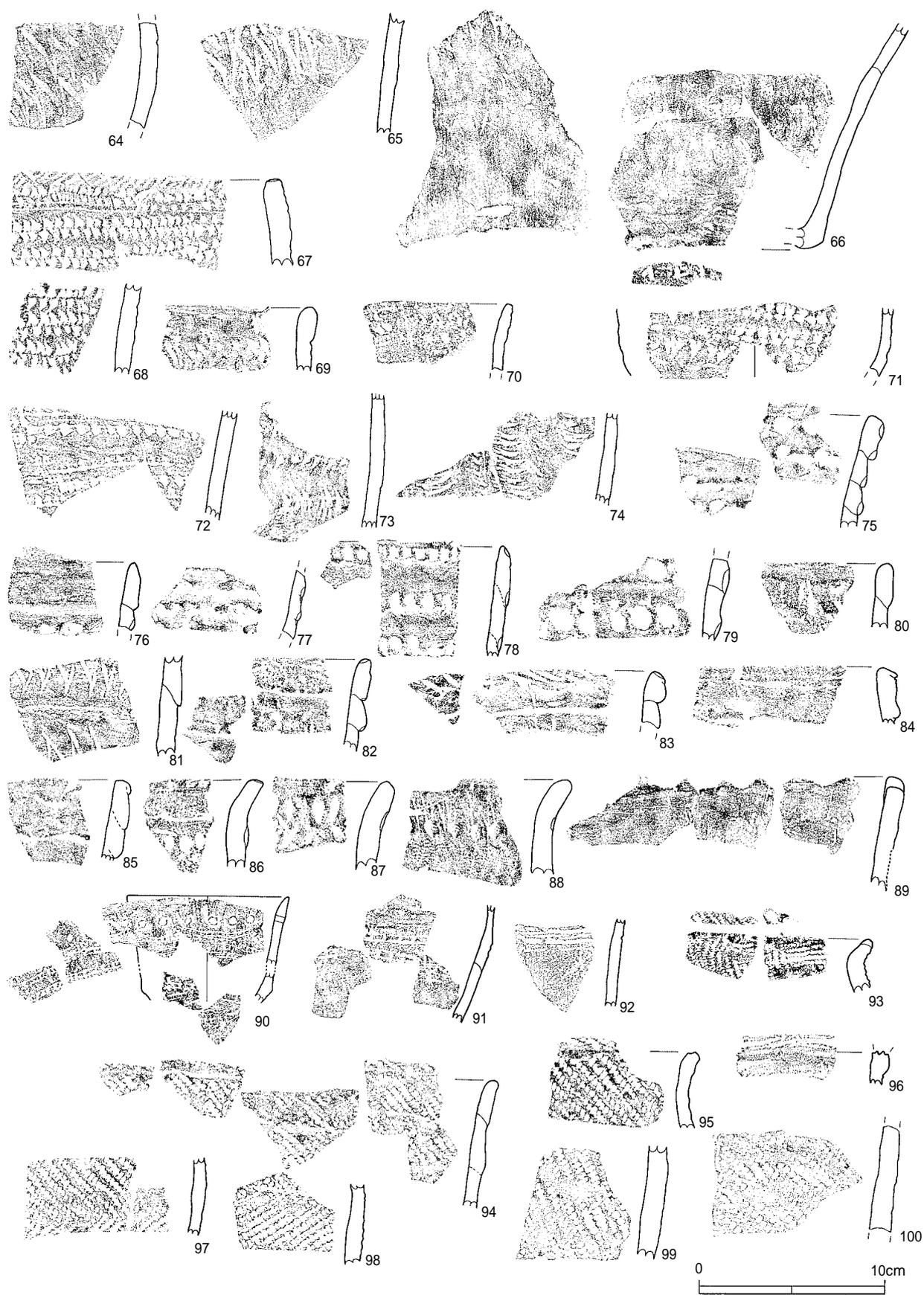
106～108は浮島・興津式と思われる底部片である。

109～118は諸磯b式である。109～112・115は地文単節LRで浮線上にもLRを施文する。113は地文単節LRで浮線上にもLRを施文する。114は地文RLである。115・116は同一個体である。117・118は同一個体の可能性が高い。117は平行沈線文で，118は単節RLを施文している。

119～121は諸磯c式（古）である。119は口縁部が矢羽状，胴部は縦位の平行沈線文を地文とし，



第101図 遺構外出土遺物(2)



第102 図 遺構外出土遺物(3)

ボタン状貼付文をつけている。120・121は平行沈線文である。

122は諸磯b式の底部片である。

123～126は五領ヶ台式である。123は双頭の突起を有し、管状工具によって口縁部条線帯、複合鋸歯文を施文し、頸部に橋状をなさない縦の突起を貼り付け、更に沈線を施文している。124は頸部がくびれ、内彎気味に開く器形で、口縁下の無文帯下に複合鋸歯文を横位にめぐらし、頸部には瘤状貼付文を貼り付けている。125は内彎する口縁で、内面に稜はない。口縁下に横長の棒状貼付文を付し、その上面にヘラで縦刻みを入れている。貼付文の周囲にはヘラ状工具の刺突文列を施文している。126は口唇部が肥厚する口縁部片で、単沈線文で口縁部条線帯を作り、胴部は沈線と単節LRである。123・126の胎土は赤褐色で、砂粒も多く、本遺跡の他の五領ヶ台式とは異なっている。

127は波状口縁になると考えられる。口縁下に環状?の貼付文をつけた無文の土器である。

128は内彎する無文の土器で、口縁下に孔列がめぐる。諸磯b式ないしc式の有孔浅鉢であろう。

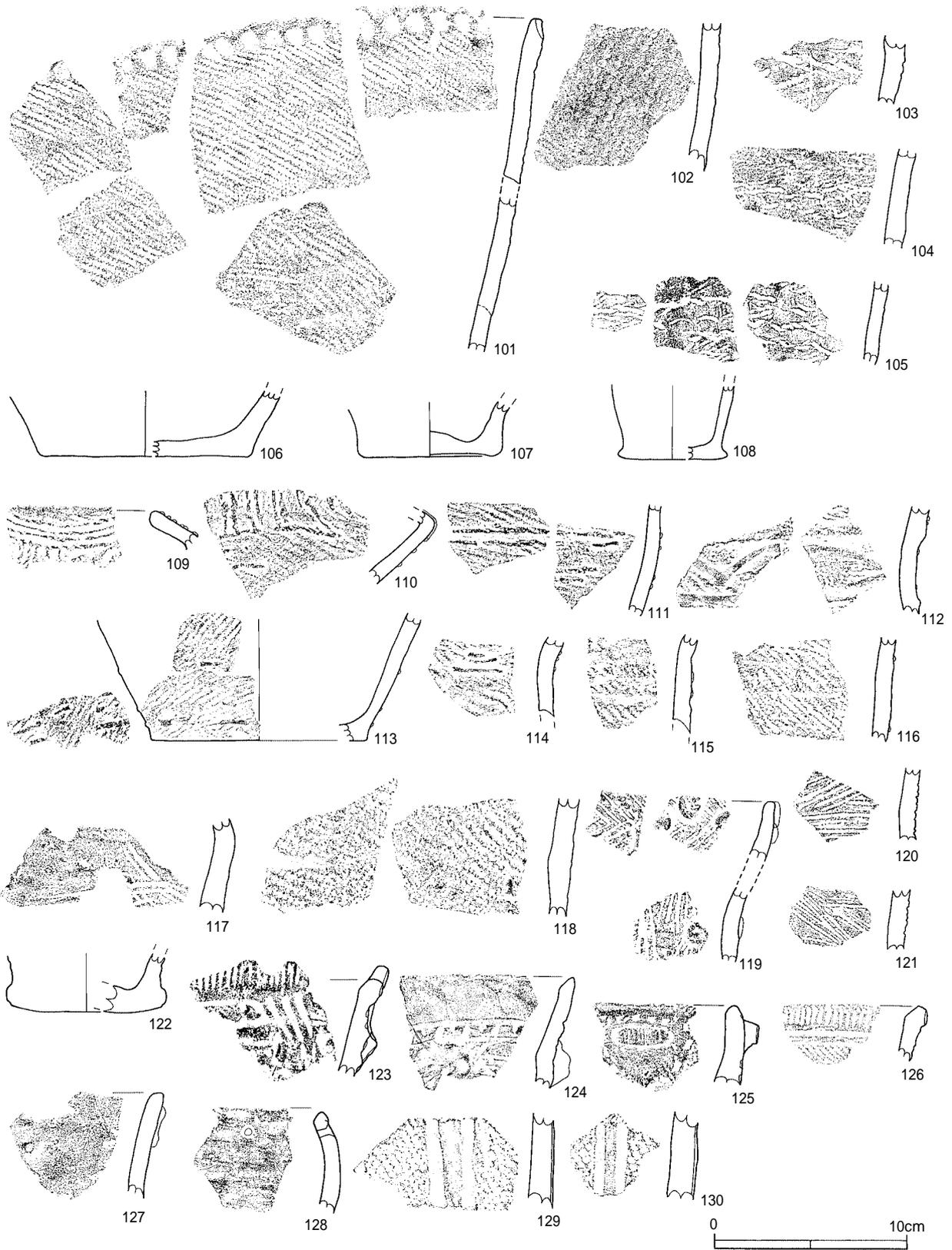
129・130は加曽利E式の胴部片である。

131～145は土製瑇瑁耳飾である。131は胎土に砂粒を含む。ヘラナデ整形である。132は指ナデ、全体に赤彩される。135は砂粒を含み粗い胎土である。指ナデ整形である。136は側縁に刻みか。137は1/2の遺存で、3.8cm、幅2.1cm、重さ11.0gである。ヘラナデである。138は1/2の遺存で、5.1cm、幅2.4cm、重さ16.5gである。丁寧なヘラナデ整形を行う。139も1/2の遺存で、6.4cm、幅2.4cm、重さ15.0gである。140は側縁に縄文原体の押圧が見られる。141も1/2の遺存で、4.4cm、幅2.0cm、重さ7.2gである。142も1/2の遺存で、3.9cm、幅1.9cm、重さ10.5gで、ヘラ削りと指ナデにより整形している。144は1/2の遺存で、3.4cm、幅1.9cm、重さ8.3gで、周縁は突起と沈線により装飾が見られる。145は小破片で全形は不明だが、周縁に尖った棒状工具による刺突と沈線を組み合わせている。

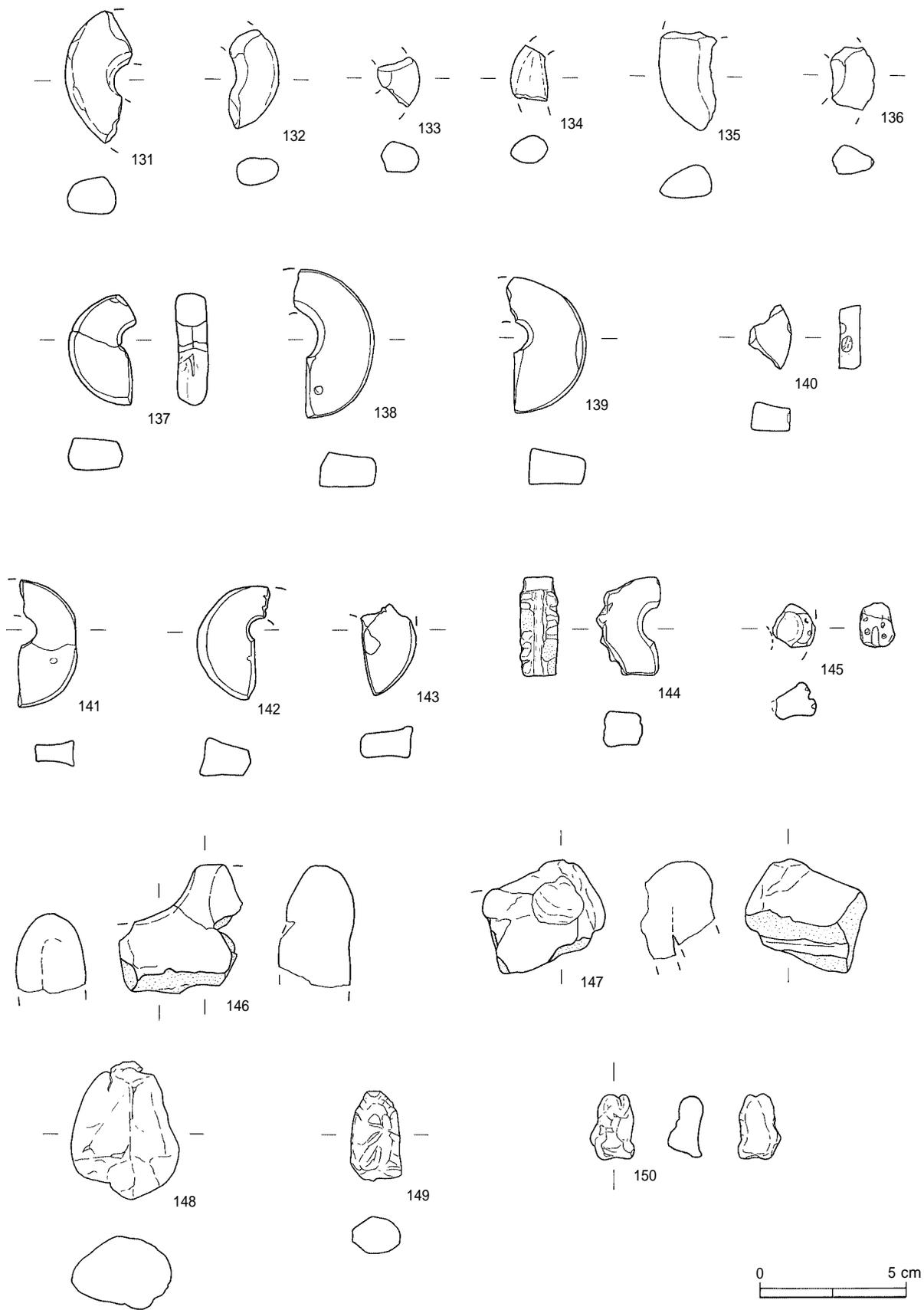
146・147は粘土板を折り返したような構造を持ち、土器口縁部のような部分も見られる形状の性格不明の土製品である。

148～150は焼成粘土塊である。148は手中に収まるサイズの粘土塊で、4.7cm、幅3.7cm、重さ34.8gである。整形は特にしていないが、指ナデか。149は下部を欠損している。遺存長3.0cm、幅1.8cm、重さ6.8gである。表面には、ヘラによる不規則な刻みが見られる。150は三角形の断面で2.2cm、幅1.5cm、重さ2.8gである。149同様、ヘラによる刻みと尖った棒状工具による不規則な刺突が見られる。

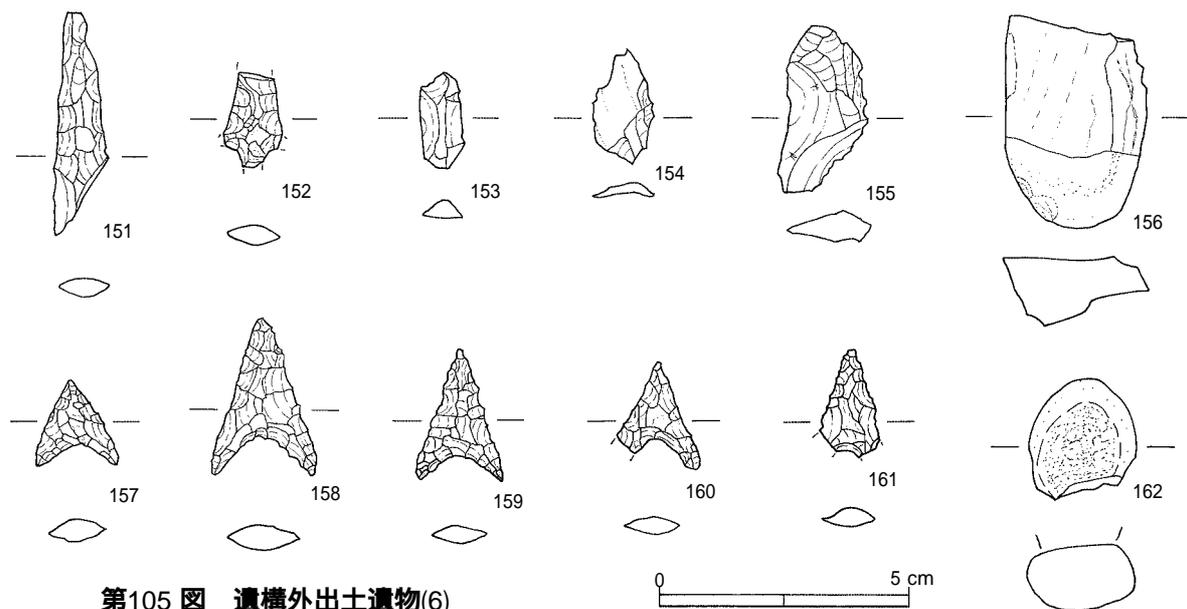
151～162は石器類を一括した。151は頁岩?の石錐で、先端部と基部を欠損する。剥離は不明瞭である。遺存長4.4cm、幅1.0cmで、重さ2.3gである。152はチャートの尖頭器ないしは有茎石鏃と思われるが、確証はない。先端部と基部三方向を欠損する。153は粘板岩の剥片で1.9cm、幅0.9cm、重さ0.9gである。154は天地逆である。ホルンフェルスの剥片で2.3cm、幅1.2cm、重さ0.6gである。頭部調整が見られる。155はチャートの剥片で3.3cm、幅1.8cm、重さ3.2gである。156は安山岩の石核で4.3cm、幅2.8cm、重さ21.9gである。自然面が見られる。157～161は石鏃である。157はチャートで、全長、幅共1.7cm、重さ0.8gである。158はホルンフェルスで、大振りな作りである。3.1cm、幅2.1cm、重さ1.8gである。159はチャートで丁寧に作られている。2.6cm、幅1.7cm、重さ0.9gである。160は通称トロトロ石と言われる安山岩の一種で、左基部を欠損する。2.1cm、幅(1.7cm)、重さ0.6gである。161はホルンフェルスで、両基部を欠損する。遺存長2.1cmで、0.6gである。162は安山岩の小礫で2/3程度の遺存で、2.5cm×2.2cmの円形で、9.3gである。摩耗面が顕著に見られる。



第103図 遺構外出土遺物(4)



第104図 遺構外出土遺物(5)



第105 図 遺構外出土遺物(6)

### 第3章 まとめ

調査者は、両遺跡の遺構調査についてのむずかしさを、非常に痛感したことと思う。遺物は出土するが、プランが不明瞭である。住居であれば炉や柱位置、床の硬化面等の住居施設が判然としない。土坑であれば遺構の性格が明らかとなるような、遺物や覆土の状態が不明確である。ただ、両遺跡においては縄文時代晩期以降に降下したと想定される新期テフラ層が良好な状態で堆積しており、この下層に検出された本遺構は、明らかに縄文時代に帰属するのである。調査者からバトンタッチを受けた筆者は、この点を考慮しながら本整理を進めていった。

#### 第1節 黒沢池上遺跡

本遺跡の住居跡は、炉を持つ02D と炉を持たない01D が中期加曾利 E 式期である。03D については時期の特定がむずかしい。

土坑は、各遺構からの遺物も少なく、また時期が異なる土器が同一遺構内から出土する等時期の特定はむずかしい。この内06P は陥穴で、覆土最上層の自然堆積層から前期後半の土器が出土しており、確実に埋まる過程の遺物であるので早期ないしは前期の遺構と言えよう。また人為的埋め戻しの見られる遺構に14・20・25Pがある。覆土やプラン、深さから墓坑としての可能性は否定できない。

遺物については、中期前半の阿玉台 b 式が全体の中ではやや多く、ついで前期後半の浮島 ~ 興津式、前期末葉と中期初頭の五領ヶ台式が続き、中期終末の加曾利 E 式が少ない。こうした中で、帰属不明の遺構の時期を考えると、前期後半 ~ 中期前半に帰属する可能性が高いと言えよう。

#### 第2節 新林遺跡

遺構は旧石器時代、縄文時代前期後半・中期初頭と比較的限定される。谷津を隔てただけの黒沢池上遺跡では、中期前半と終末の遺構が展開することからも、遺跡としての占地の違いが明白である。

旧石器時代の遺物集中地点では、層中位からの出土で、作業段階での人の位置が想定できるような遺物出土状態を示している。扇状の広がりから、円形状の空間の隅にうずくまって作業をしたのではないだろうか。とすれば、3 m 程度の簡易テント内で作業し、移動していった想像も可能か。

縄文時代の住居跡・土坑については、遺物の出土状況からも前期後半 ~ 中期初頭に帰属するであろう

事が伺える。

**住居跡**は、ややいびつな方形ないし長方形の平面形をもつ。規模は5m～6m程度で、規則性のあるピットをもつ遺構は皆無であった。また炉施設については、報文中において可能性として指摘したが、明確な焼土の堆積や赤色化したロームの痕跡を留めている遺構はなかった。掘り込みも全体に浅く、確認面の違いもあるが、深い遺構でも27cm程度、ほぼ7,8cm程度が全体を占める。

**竪穴遺構**は、便宜的に住居跡と分けた遺構で、規模が3m～4m程度、円形ないし長方形の平面形のものとした。炉及び規格性のあるピットは検出されなかった。

**土坑**については、特徴的要素をもつ遺構について検討していきたいと思う。

**人為的堆積を示す土坑** 03P, 05P, 35P

覆土全てではなく、底面に近い1ないし2層を埋め戻している。これらの土坑に共通する規格性は見られない。覆土はロームブロックを含むローム土、暗褐色土である。

**焼土を伴う土坑** 01P, 06P, 08P, 70P, 91P

01P, 70Pは覆土中に焼土が検出されている。06P, 08Pは当初から炉として使用されている。01P, 70Pについても、下層の覆土は人為的埋め戻し土であり、炉としての使用目的として掘り返した可能性があるのではないかと考えられる。本遺跡の住居跡からは炉跡が検出されていない。可能性として、屋外炉として機能したとは考えられないだろうか。位置としては01P, 70Pが住居群に近く、06P, 08Pは台地南側先端部で、やや距離がある。

**陥穴** 07P, 09P, 31P, 32P, 103P

09P, 103Pは形態、覆土、深度からも確定でき得る。他については形態、覆土は前者に近いが、深度が0.5m～0.8mとやや浅い状況である。位置は31, 32Pが住居群に接して、07, 103Pは台地南側先端部、09Pは台地南側緩傾斜面に位置している。

**楕円形ないし三日月形平面の土坑** 10P, 40P, 62P, 66P, 82P, 88P, 90P, 95P, 102P, 109P

規模は長軸2.02～3.44m、短軸1.08～1.56mで、平均すると2.5m×1.25m程度となる。また、壁の立ち上がりを短軸でみた場合、片側が角度をもって、他方が緩やかに立ち上がる傾向が見られる。覆土はほぼ暗褐色土～黒褐色土の自然堆積である。109Pにおいては、褐色土の埋め戻し土であった。また、中層において焼土を含む覆土が検出された。何ら証左は得ていないが、規模・覆土の状態から、伸展葬の墓坑としての性格を考えたい。位置については、09Dを中心に回りを取り囲むように検出されている。

**作り替えの見られる土坑** 54P, 58P

同位置に重複するように検出されている。54Pでは、中央部分から北側と南側に広げられる。58Pでは、同軸上で南中央北と位置を変えている。炉穴の場合には、天井部の崩落から作り替えが必要であるが、この2土坑からは焼土等の検出は見られない。現時点では、類例の増加を待って結論を導いていきたい。

以上、雑駁ではあるが遺構について特徴的要素を述べてみた。その他の土坑についても、何らかの目的があって作られたものであるが、不明な部分が多い。

**遺物**については、縄文時代早期前半の井草式、前期中葉の黒浜式、後半の諸磯b.c式、浮島式、興津式、末葉の土器群、中期初頭の五領ヶ台式等の遺物が出土している。ほぼ主体を占めるのが、諸磯b式、浮島式、興津式の前期後半の時期である。このあと、末葉の土器群に細々と繋がっていくようである。第3節にその様相について稿を改める。

### 第3節 縄文時代前期末葉の土器について

新林遺跡・黒沢池上遺跡からは興津式以降の縄文時代前期末葉に位置づけられる土器群が出土している。これらはそれまで浮島・興津式でほとんど用いられることのなかった各種縄文を多用することが特徴的で、その成立には東北南部の大木5式が大きく関与していると考えられ、中期初頭の五領ヶ台式に伴う「下小野式」へとつながることで注目すべき土器群であるが、この時期の遺跡自体が僅少で、良好な一括資料も乏しく、前後型式との差異も不明瞭な部分を残して、型式名も定まっていない。本遺跡においても当該土器は住居跡・土坑から出土しているものの、それらを同時期一括資料とみなすことはできなかった。明らかに異なる時期の土器が混入しているケースが多く、また、遺構相互での接合資料もかなり見られたからである。したがってここでは、両遺跡をあわせて主な文様要素別に、その位置づけについて考察を加える。

まず、縄文施文の土器についてとりあげる。口唇を除く器面施文縄文によって大きく3種類に分けることができる。第一に縄の側面圧痕文、第二に結節縄文、第三に単節および無節縄文である。

縄の側面圧痕文は、黒沢池上07P4・11P1・遺構外10～12と、新林03D5の4点が出土した。このうち前2者が2段の縄LR、後2者が1段の縄Lを用いている。芳賀英一氏(1985)によって大木5式・6式における側面圧痕文の2段1段という変遷が指摘され、東関東においても同様の変化をすることが示唆されて以降、この2種がおおむね時期差を示すとする見方は一般化している。黒沢池上07P4は波状口縁の形状が興津式に近く、側面圧痕による菱形の構成は興津式の貝殻文土器の構成に近いばかりでなく、興津貝塚からは波状口縁でないものの、菱形を重囲させた土器(西村1977:第13図1;西村1984:第21図2)が出土している。本例は今のところ興津式とほぼ同時期とみることができよう。ただし、口縁部が外反しない点で、興津式よりも後になる可能性も残る。

1段縄の黒沢池上遺構外10～12は環状貼付文と無節縄文も施文している。環状貼付文は大木5式の文様要素が導入されたもので、興津式以降に見られる。一方、無節縄文は興津貝塚で出土していない。興津式よりも後の前期末葉とみてよいだろう。また、本例は縄文上に波状貝殻文が施文されている。類例が栗島台遺跡(松田ほか2000:第73図24・25)にある。新林03D5も1段縄であり、幅が狭く外反する複合口縁である。これも前期末葉とみることができよう。なお、黒沢池上07P4と新林03D5の側面圧痕原体は端末結節が施されている。側面圧痕原体における結節・結束については新井和之氏の指摘がある(新井ほか1985:p.316)。

結節縄文については、まず本文中で使用した原体の表記法について説明する。結節原体の記号表記については、すでに篠原(鮫島)和大氏(1994)が関東弥生後期土器について考案したすぐれたものがある。ここではそれを参考にして、繋辞「+」「-」の使い方などに変更を加え、

[ (結縛される原体) - (結縛する条) (結縛の方法: S または Z) ]

という表記法を用いた。たとえば2段の縄LRの0段条におけるS字状結節縄文は[ LR - 1 S ]と表記され、1段の縄Lの自縄結節は[ L - LZ ]となる。ただしこの表記法は、関山式の複雑な結節(たとえば上守2001)などに対応しておらず、該期の結節の広範な観察によるものでもない仮のものである。

本報告中の結節縄文の資料は、4種類認められた。まず、黒沢池上05P2・06P4、新林55P5・遺構外103が[ LR - RZ ]であり、このうち新林遺構外103には単沈線文も施文されている。次に、黒沢池上遺構外16・10P1・3は[ LR - 1 S ]である。これは並木忠良氏(1977)の指摘された1種aである。第三に新林遺構外104は自縄自縛の[ L - LS ]またはL2本を端末結節した[ 2L - LS ]であり、同遺構外105はこれにさらに0段条の端末結節をつけた[ L - LS - rZ ]または[ 2L - LS - rZ ]であると考えられる。結節縄文は報文中に詳しい原体の同定がなされることが少ない。編年

との関わりは今後の課題であろう（小林謙一氏（1991）によれば、中期初頭には並木（1977）の第2類（[ L R - R Z ] [ R L - L S ] など）がほとんどを占めるようになるという）。唯一の口縁部片である黒沢池上遺構外16（10P 1・3と同一個体）は、外反する口縁部形状、口唇部への縄文施文からみて、中期初頭ではなく、前期末葉であるといえよう。他の例についても、縦回転が皆無であることなどから、前期末葉におさまるものと考えたい。なお、本例に見られる縦に筋の残る外面調整については、茨城県土浦市壺杯清水西遺跡（関口満ほか1997：第76図43・44）に類例がある。

無節・単節縄文の土器は、口唇部の文様によって分類できる。

波状貼付文（新林69P 3、遺構外93）は、すでに多くの研究者によって指摘されているように、大木5式の鋸歯状装飾体由来し、興津貝塚など興津式に伴出することが多く、興津式の貝殻文土器に付される例もあることから、興津式期とみるべきであろう。

口唇部に刻みのつけられた土器（新林01D 4・18P 2）は、刻みの施文技法が興津式の一部と共通し、興津貝塚には新林01D 4のように刻みはないが羽状縄文の土器が出土していることから、興津式期に位置づけることができる。

また、新林遺構外101の口縁部凹みは毛内遺跡008住（岡田ほか1991：第45図143）などに類例がある。興津式～前期末葉と考えておきたい。

口唇部にも縄文を施文した土器は、黒沢池上遺構外15、新林03D 6・03I 2・遺構外94・95・96である。これらは口縁部が外反する器形で、新林03I 2・遺構外94・95は複合口縁である。大きく興津式～前期末ととらえられるだろう。

口唇部に施文しない土器は、黒沢池上遺構外13・14の2点である。14は外反する複合口縁で、やはり興津式～前期末とみられる。無節Lを施文した黒沢池上遺構外13は、断面図では口唇内側が複合口縁状に見えるが、実際には左側3分の1程度で口唇作出したときの成形痕であり、右側の口唇部形態は、新林03I 2のような角頭状である。本例は、無節縄文が興津貝塚になく、中期初頭とも考えにくいことから、興津式より後の前期末葉と思われる。

このほか、前期末葉と考えられる資料を以下に挙げる。

黒沢池上22P 7は、単沈線文の状態や、馬蹄形貼付文が環状に近いことなどを考慮して興津式～前期末葉と考えたが、確証はない。

新林遺構外29・30は、胴部文様が興津式にみられる楕円形を横にならべる意匠に類似する。外反する複合口縁や、細い半截竹管内側を用いた刺突文は茨城県南坪例（寺門ほか1978：挿図16-145）などに比較的近く、前期末葉と考えられる。

新林68P 1は、単沈線文区画を有する貝殻腹縁刺突文であり、一応興津式に属すると考えたいが、原体に無肋貝殻を用い、区画による図文もかなり崩れていて、ほぼ半周は全面貝殻文のみである。口縁部条線帯もなく、口縁も内彎気味に開きほとんど外反していない。後出的な様相を示す可能性もありうる。

松田光太郎氏（2000）は、前期末葉に縄文の土器・沈線文土器以外に、波状貝殻文・三角文・刺突文など多様な文様要素が存在することを明らかにしている。本遺跡では、明らかに前期末であるとみなしうるそのような資料はないが、縦位に波状貝殻文的な三角文を施文した新林66P 1・112P 1・遺構外73・74や、器面に垂直気味に波状貝殻文を施文した新林01I 5・6、26P 1などは、前期末葉に下る可能性があるだろう。

また、この時期の異系統土器としては、新林から諸磯c式が出土している。遺構外119～121が諸磯c式（古）、37P 4が諸磯c式（新）である。十三菩提式や大木式などは出土していない。

以上が本遺跡出土の前期末葉の土器の概要である。近年、当該土器群をさらに数段階に細分する試みもある（小林1991・1992、松田2000）。黒沢池上・新林出土資料はおおむね小林氏の前期末（古和田台式）期から期、松田氏の興津式～前期末葉（粟島台式）古相に対比できそうであるが、改めて検討が必要である。なお、前期末葉の土器は、八千代市内からは新林d・黒沢池上のほかに、沖塚（大鷹1994）、川崎山（小川ほか1999）、坊山（大野1993）、向山B（大鷹1994）、芝山（落合1990）、ライノ作（森1996）、川向（武藤1999）、などでも出土している。これも今後比較検討をすすめる必要があると考えている。

## 引用参考文献

- 新井和之ほか（1985）『西の台（第2次）』船橋市遺跡調査会  
 安藤文一（1977）『粟島台式土器の設定 - 東関東における縄文前期終末の様相 - 』『房総文化』14号  
 今橋浩一（1991）『縄文時代前期後半の文化動向 - 東部関東浮島式土器分布圏における異系統土器との共存関係 - 』『古代探叢』早稲田大学出版部  
 大鷹依子（1994）『向山遺跡B』『沖塚遺跡』『八千代市沖塚遺跡・上の台遺跡他』千葉県文化財センター調査報告第245集、千葉県文化財センター  
 大野康男（1993）『八千代市坊山遺跡』千葉県文化財センター調査報告第226集、千葉県文化財センター  
 岡田光広ほか（1991）『毛内遺跡』『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書（佐原地区3）』千葉県文化財センター調査報告第191集、千葉県文化財センター  
 小川和博ほか（1999）『川崎山遺跡』八千代市川崎山遺跡調査会  
 落合章雄（1990）『芝山遺跡』『八千代市仲ノ台遺跡・芝山遺跡』千葉県文化財センター埋蔵文化財報告第176集、千葉県文化財センター  
 小野真一ほか（1979）『常陸伏見』伏見遺跡調査団  
 加藤修司（1997）『結節文の構造についての一考察 - 房総地域の後期弥生土器から - 』『奈和』第35号  
 上守秀明（2001）『結節回転による施文効果 - 『千葉県幸田貝塚資料』山内清男考古資料12の整理作業成果から - 』『史館』第31号  
 小林謙一（1991）『東関東地方の縄文時代前期末葉段階の土器様相 - 側面圧痕土器及び全面縄文施文土器の編年的位置づけ - 』『東邦考古』15号  
 小林謙一（1992）『千葉県大原内貝塚出土土器の研究 - 東関東地方前期末～中期初頭の土器様相 - 』『民族考古』第1号  
 鮫島和大（1994）『南関東弥生後期における縄文施文の二つの系統』『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第12号  
 関口満ほか（1997）『三夜原東遺跡・新堀東遺跡・沓杯清水西遺跡』土浦市教育委員会  
 常松成人（2000）『新林遺跡d地点（第1次確認調査）』『千葉県八千代市内遺跡発掘調査報告書 平成13年度』八千代市教育委員会  
 寺門義範・西宮一男（1978）『南坪遺跡』新四号国道遺跡発掘調査会  
 並木忠良（1977）『7類土器の縄文原体に就いて』『獅子穴 遺跡発掘調査報告』富里村教育委員会  
 西村正衛（1977）『茨城県稲敷郡興津貝塚（第二次調査） - 東部関東における縄文前期後半の文化研究（その四） - 』『學術研究 - 地理学・歴史学・社会科学編 - 』第26号  
 西村正衛（1984）『石器時代における利根川下流域の研究』早稲田大学出版部  
 芳賀英一（1985）『大木5式土器と東部関東との関係』『古代』第80号  
 松田光太郎ほか（2000）『粟島台遺跡』銚子市教育委員会  
 松田光太郎（2000）『東関東における縄文前期末葉土器群の諸様相 - 粟島台式土器の再設定 - 』『神奈川考古』第36号  
 武藤健一（1999）『川向遺跡』『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書（平成11年度）』八千代市教育委員会  
 森竜哉（1996）『ライノ作遺跡』『仲ノ台遺跡・ライノ作遺跡他発掘調査報告書』八千代市西八千代遺跡群調査会  
 山内清男（1979）『日本先史土器の縄紋』先史考古学会（原著1961）  
 和田哲（1973）『浮島系土器の諸問題』『古和田台遺跡』船橋市教育委員会  
 和田哲（1996）『縄文前期浮島系土器論』（原著1958）



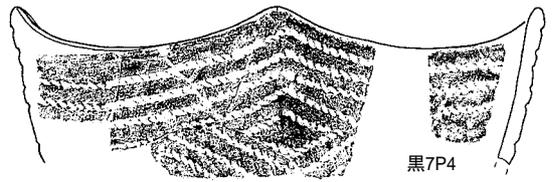
新69P3



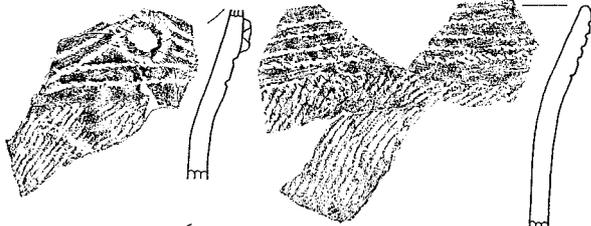
新遺構外93



黒11P1



黒7P4



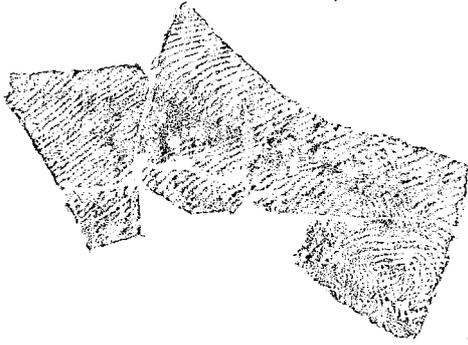
黒遺構外10~12



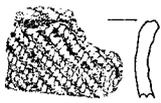
新3D5



新01D4



新遺構外101



新遺構外95



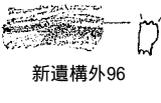
黒遺構外15



新312



新遺構外94



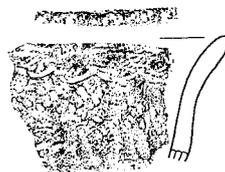
新遺構外96



黒遺構外14



黒遺構外13



黒遺構外16



黒6P4



新55P5



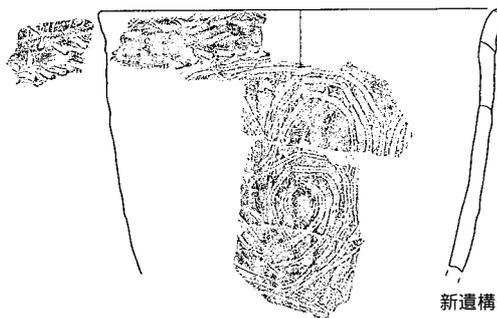
新遺構外103



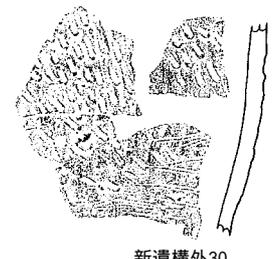
新遺構外104



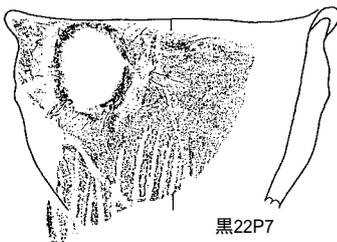
新遺構外105



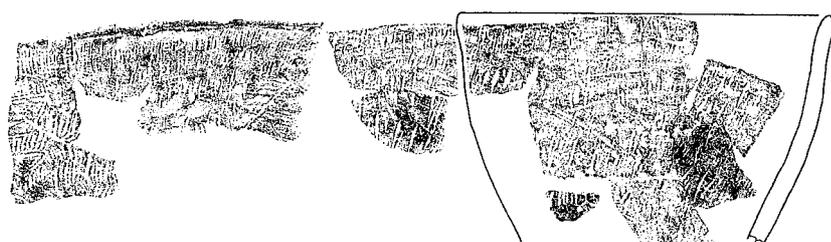
新遺構外29



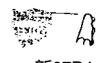
新遺構外30



黒22P7

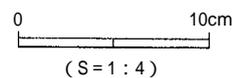


新68P1



新37P4

黒沢池上・新林遺跡出土の縄文時代前期末葉関連資料



# 写 真 图 版



プラン検出状況



完掘全景



完掘全景



完掘全景



01M全景



下層トレンチ土層



01D 遺物出土状況



01D 全景

## 図版 2

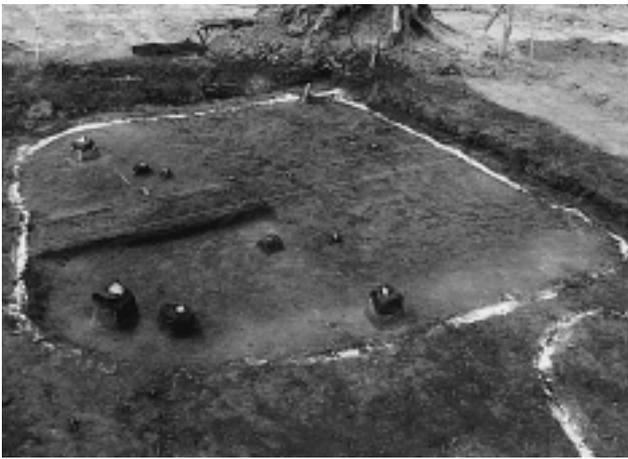
[ 黒沢池上遺跡遺構 2 ]



02D 遺物出土状況



02D 全景



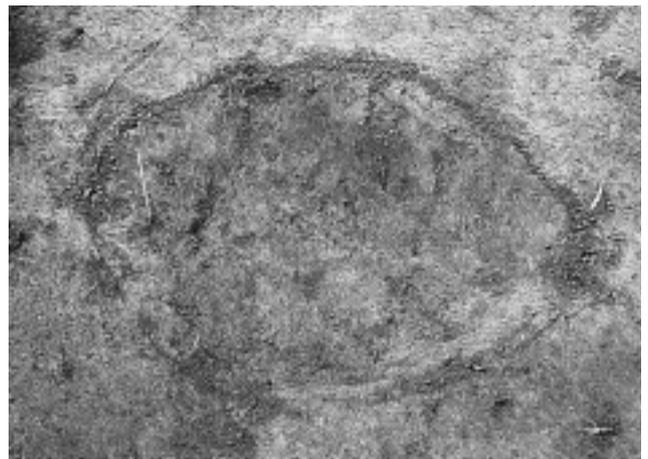
03D 遺物出土状況



03D 全景



01P 全景



02P 全景



03P 全景



04P 全景



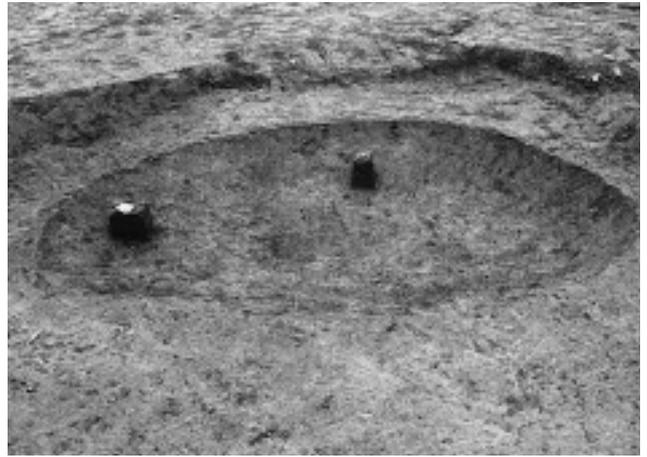
05 P 全景



06 P 全景



07 P 遺物出土状況



08 P 全景



09 P 全景



10 P 遺物出土状況



11 P 全景



12 P 全景

図版 4

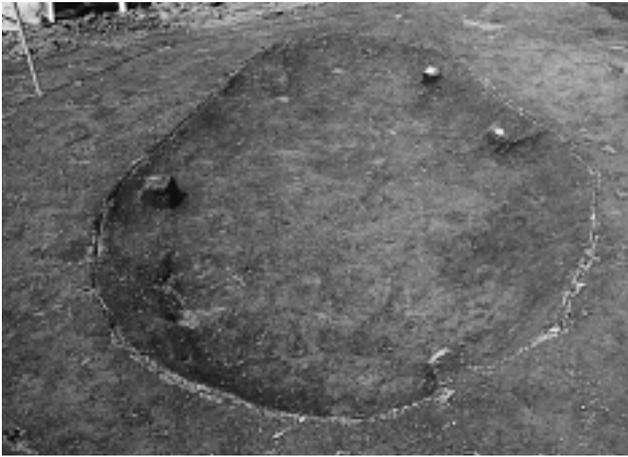
[ 黒沢池上遺跡遺構 4 ]



13P 全景



14P 全景



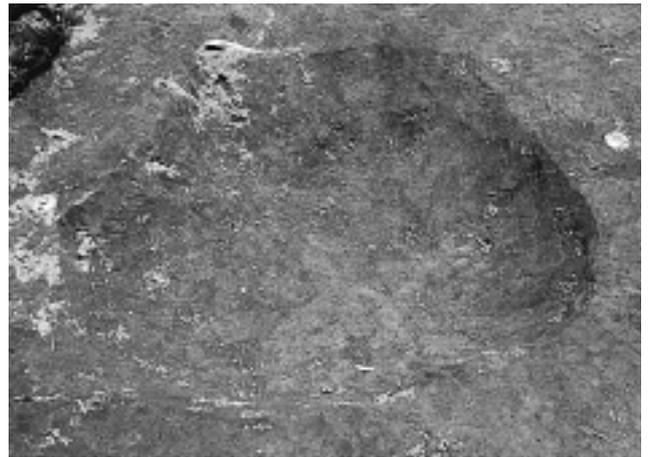
15P 全景



16P 全景



17P 全景



18P 全景



19P 全景



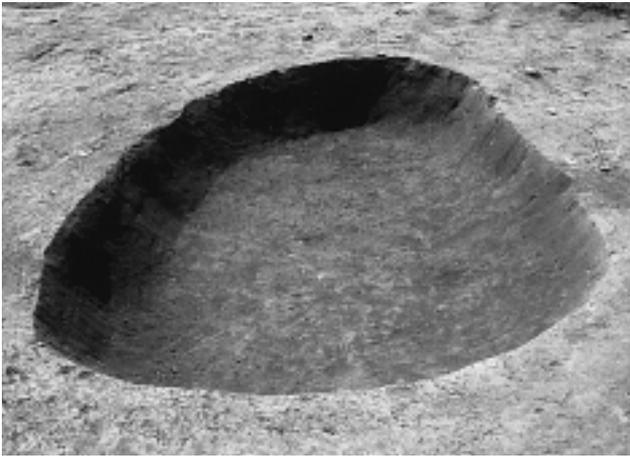
20P 全景



21 P 全景



22 P 遺物出土状況



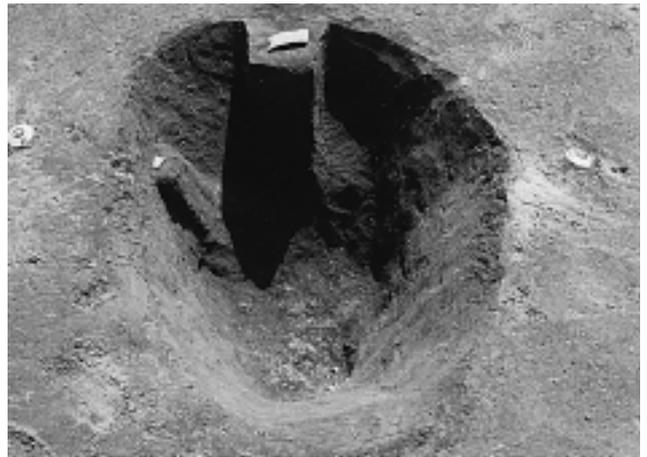
22 P 全景



24 P 全景



25 P 全景



27 P 遺物出土状況



28 P 全景



29 P 全景

図版 6

[ 黒沢池上遺跡遺構 6 ]



30 P 遺物出土状況



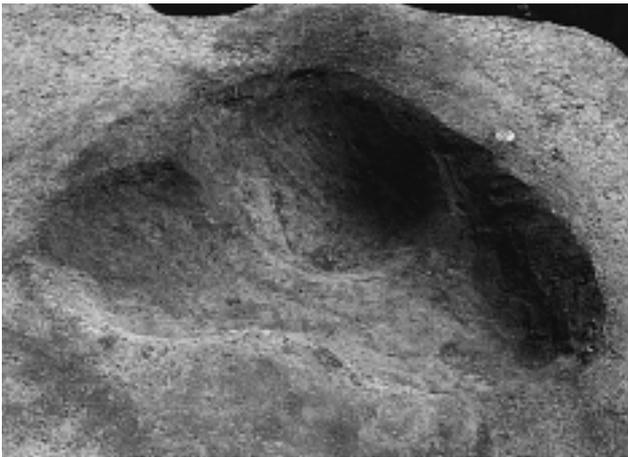
31 P 全景



32 P 全景



33 P 全景



34 P 全景



35 P 全景



36 P 全景



37 P 全景



38 P 全景



39 P 全景



40 P 全景



41 P 全景



新林遺跡完掘全景

図版 8

[ 新林遺跡遺構 2 ]



完掘全景 (部分)



作業風景



01 D 全景



02 D 遺物出土状況



02 D 全景



03 D 遺物出土状況



03D 全景



06D 全景



04D 全景



05D 全景



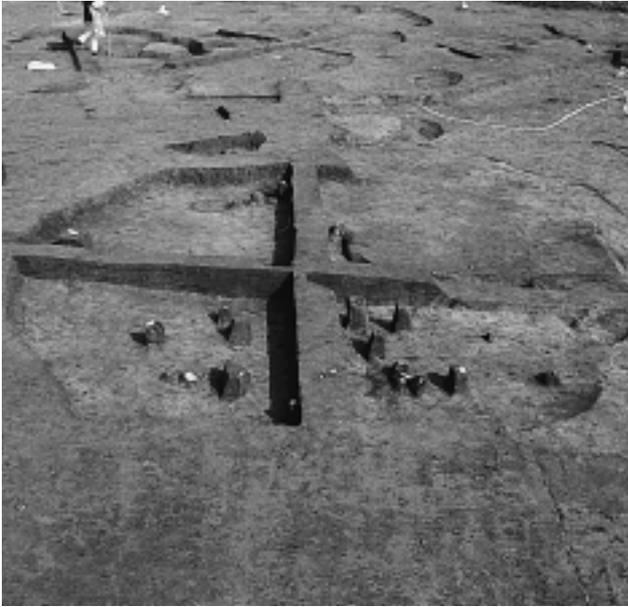
07D 全景



09D 床面精査状況

図版10

[ 新林遺跡遺構 4 ]



09 D 遺物出土状況



10 D 全景



11 D 全景



12 D 全景



13 D 全景



01 I 全景



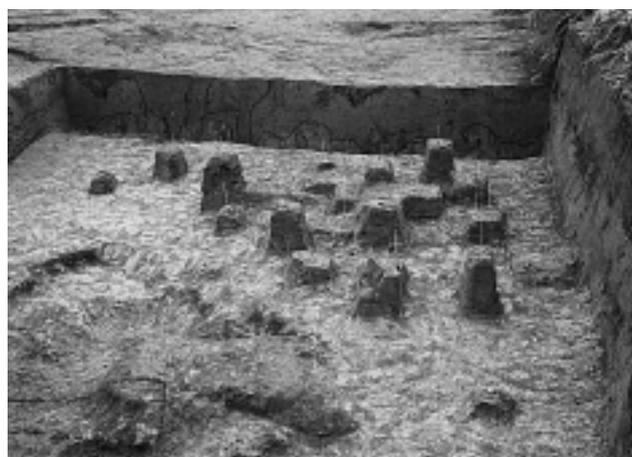
02 I 全景



03 I 全景



04 I 全景



05 I 遺物出土状況



01 P 全景



02 P 全景



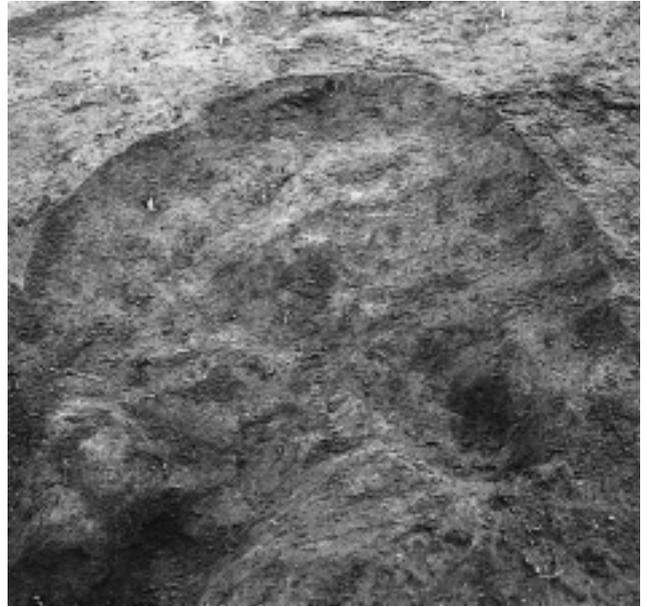
03 P 全景



04 P 全景



05 P 全景



06 P 全景



07 P 全景



08 P 全景



09 P 全景



10 P 全景



11 P 全景



12 P 全景



14 P 全景



15 P 全景



16 P 全景



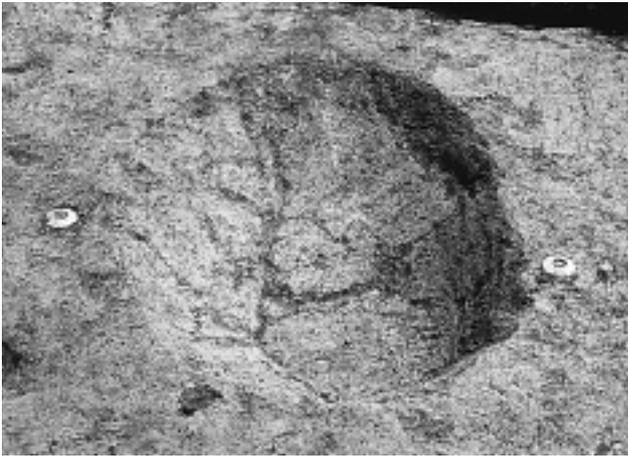
17 P 全景



18 P 全景



19 P 全景



21 P 全景



23 P 全景



24 P 全景



20 · 25 P 全景



27 P 全景



28 P 全景



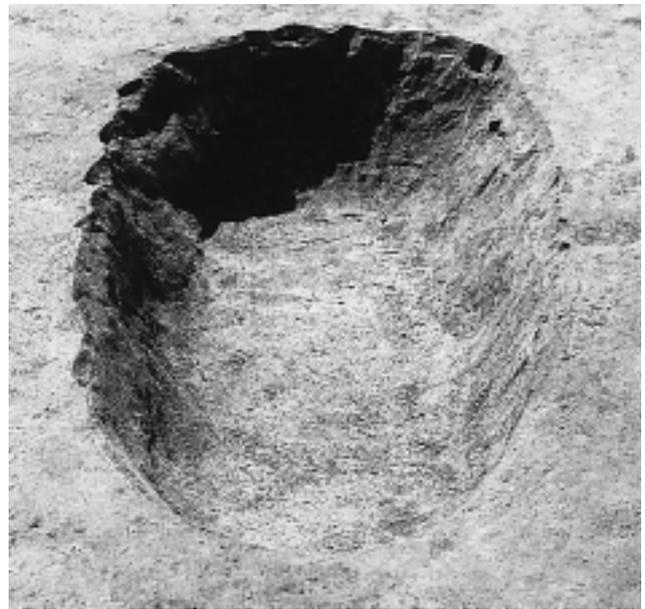
29 P 全景



31・32 P 全景



33 P 全景



36 P 全景



35 P 全景



34 P 全景



37 P 全景



38 P 全景



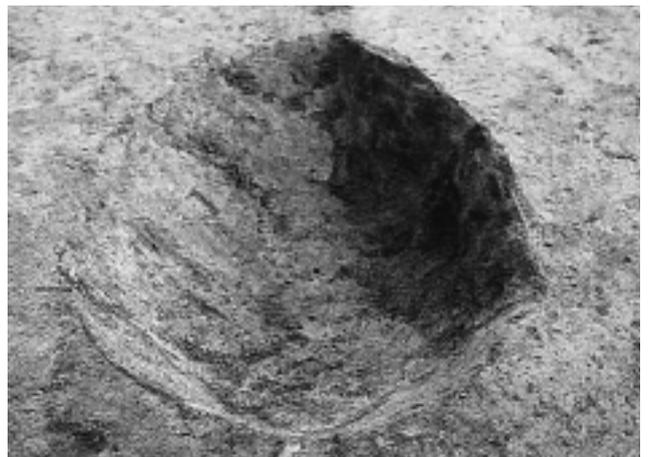
39 P 全景



40 P 全景



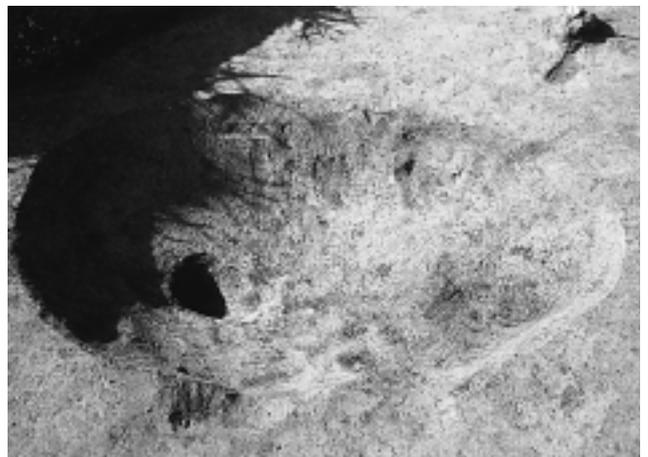
41 P 全景



42 P 全景



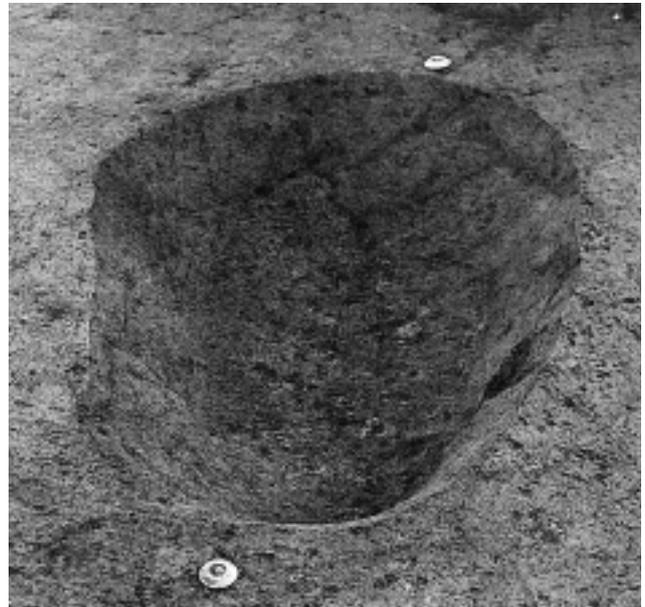
45 P 全景



46 P 全景



44 P 全景



43 P 全景



47 P 全景



48 P 全景



49 P 全景



50 P 全景



52 P 全景



53 P 全景



54 P 全景



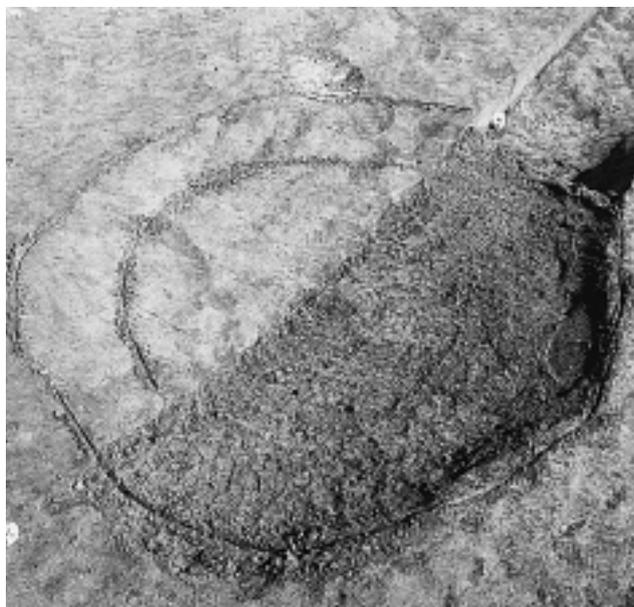
55 P 全景



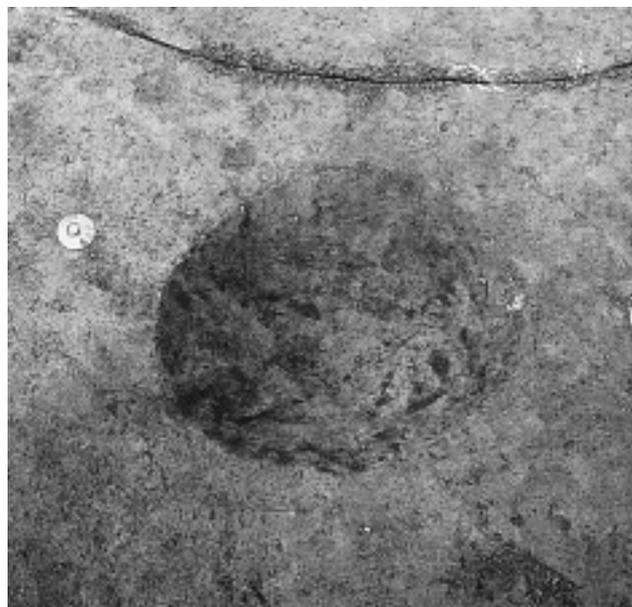
56 P 全景



57 P 全景



59 P 全景



60 P 全景



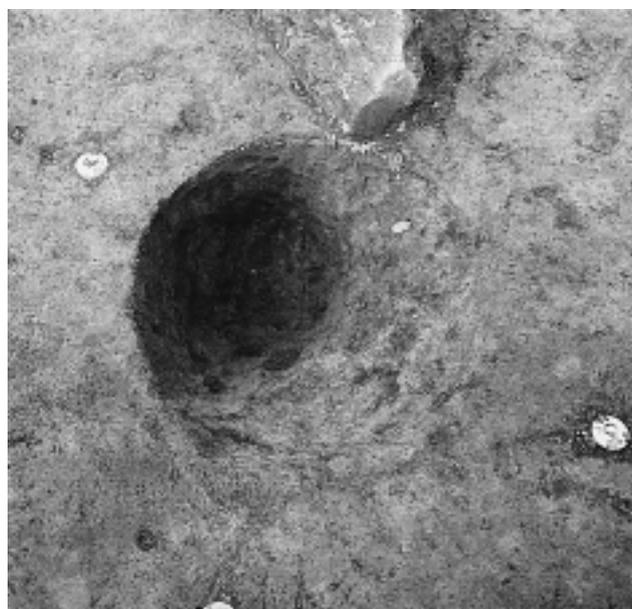
61 P 全景



62 P 全景



63 P 全景



64 P 全景



58 P 全景



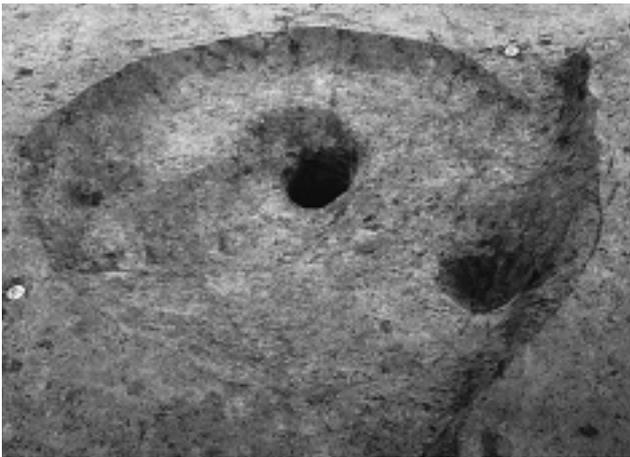
66 P 全景



69 P 全景



71 P 全景



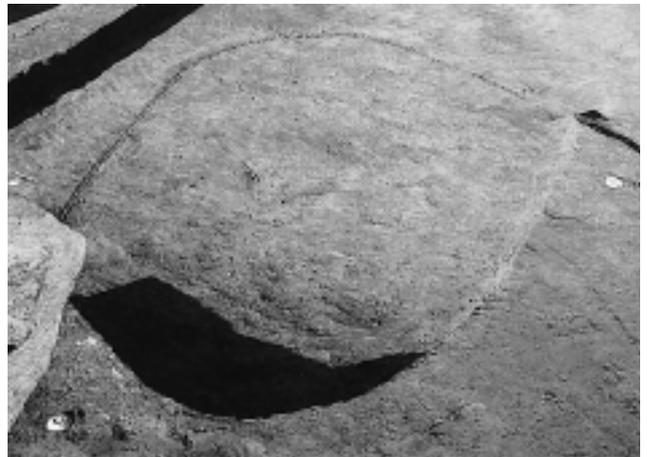
72 P 全景



73 P 全景



76 P 全景



77 P 全景



79 P 全景



80 P 全景



81 P 全景



83 P 全景



82 P 全景



84 P 全景



86 P 全景



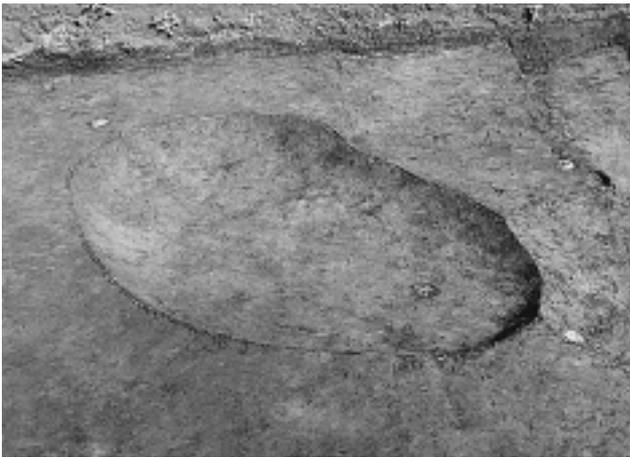
89 P 全景



90 P 全景



91 P 全景



92 P 全景



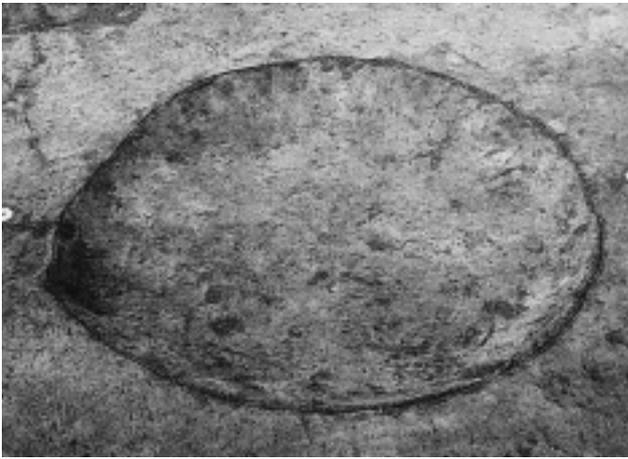
94 P 全景



95 P 全景



95 P 全景



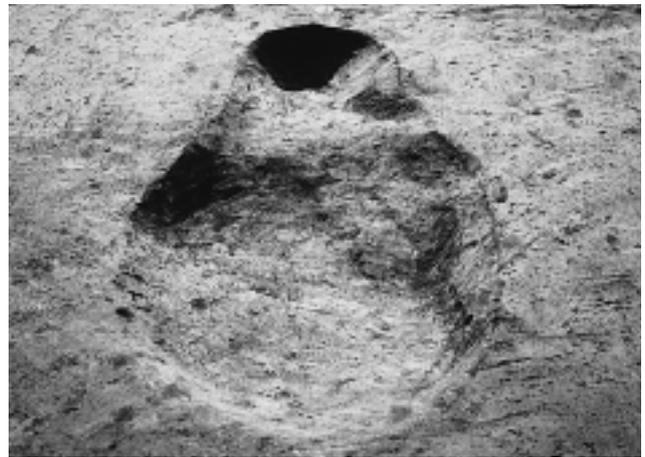
96 P 全景



97 P 全景



98 P 全景



99 P 全景



100 P 全景



101 P 全景



102 P 全景



103 P 全景



106 P 全景



108 P 全景



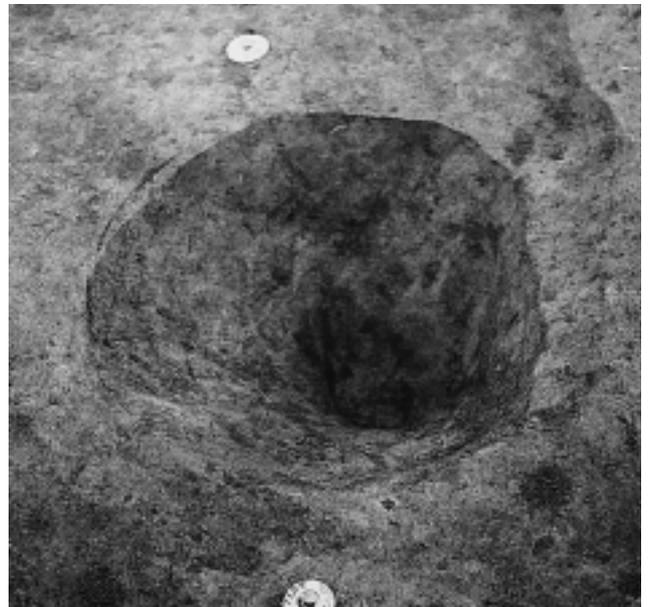
111 P 全景



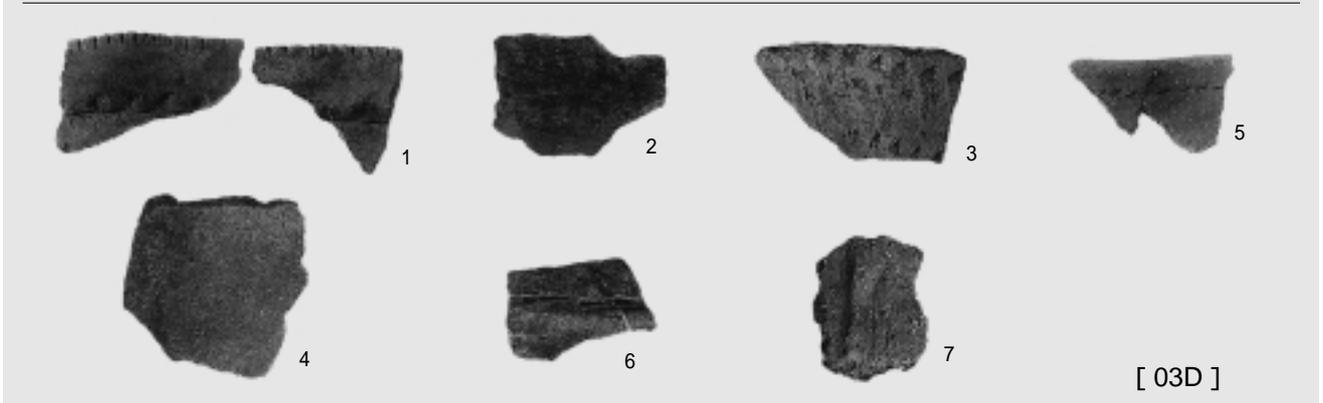
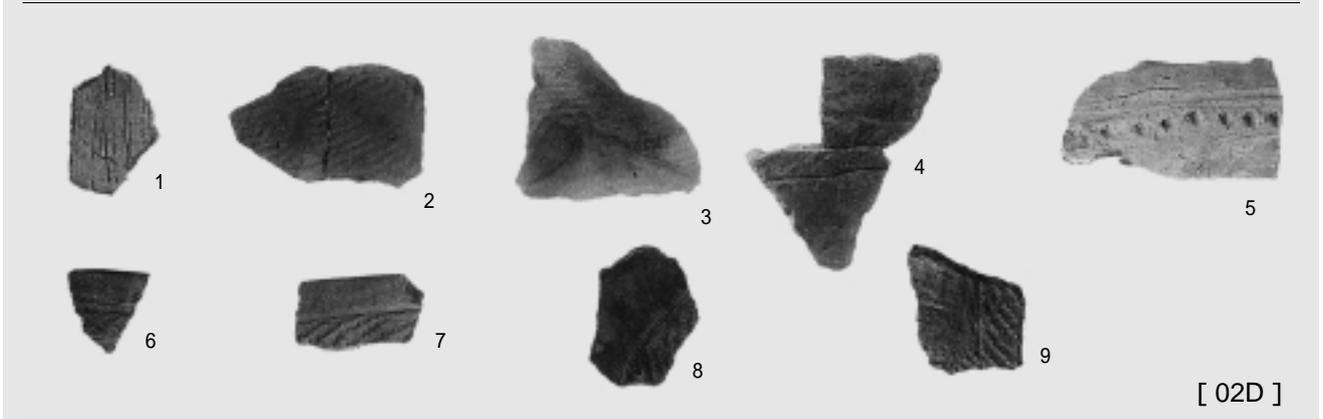
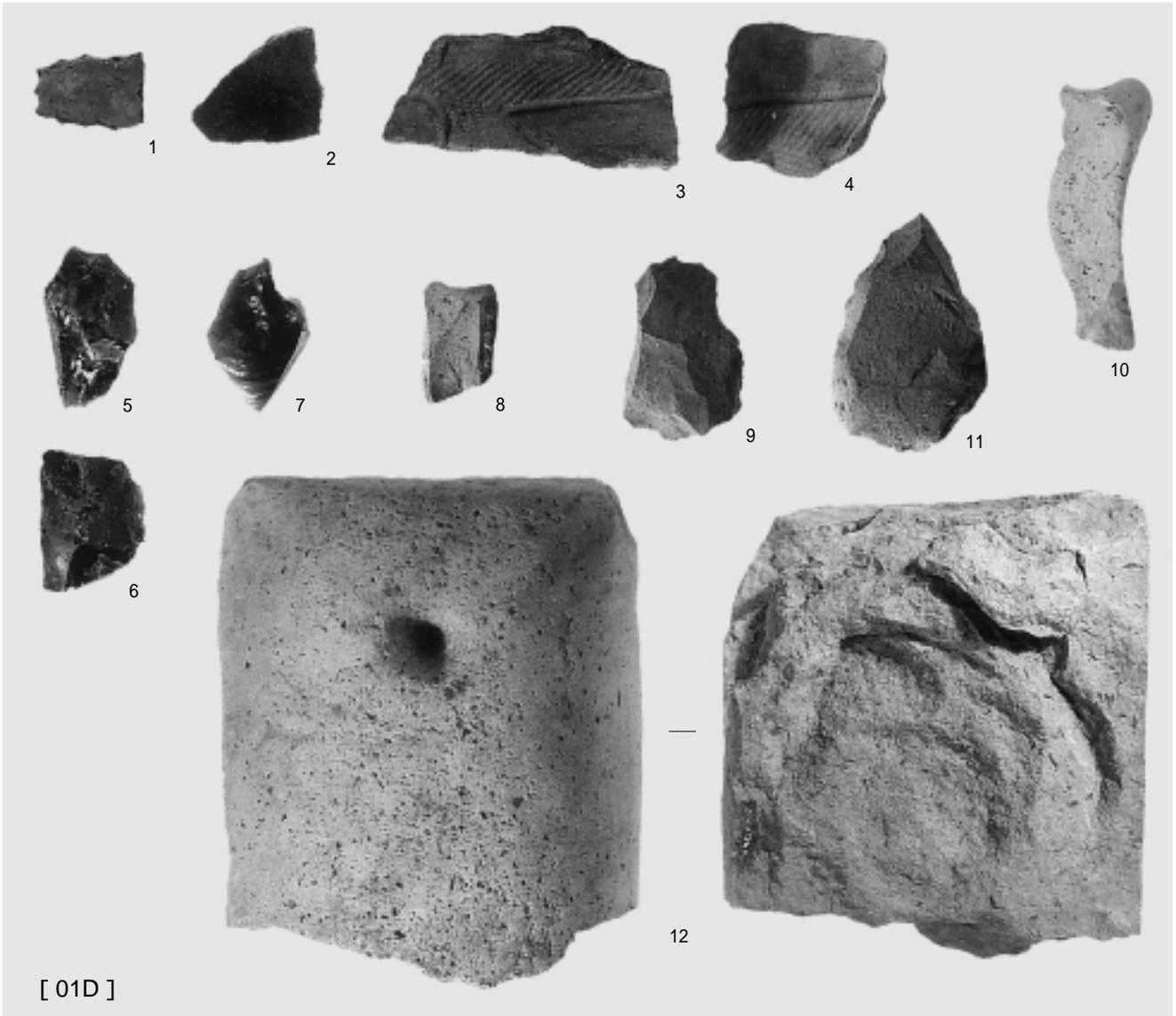
112 P 全景



113 P 全景



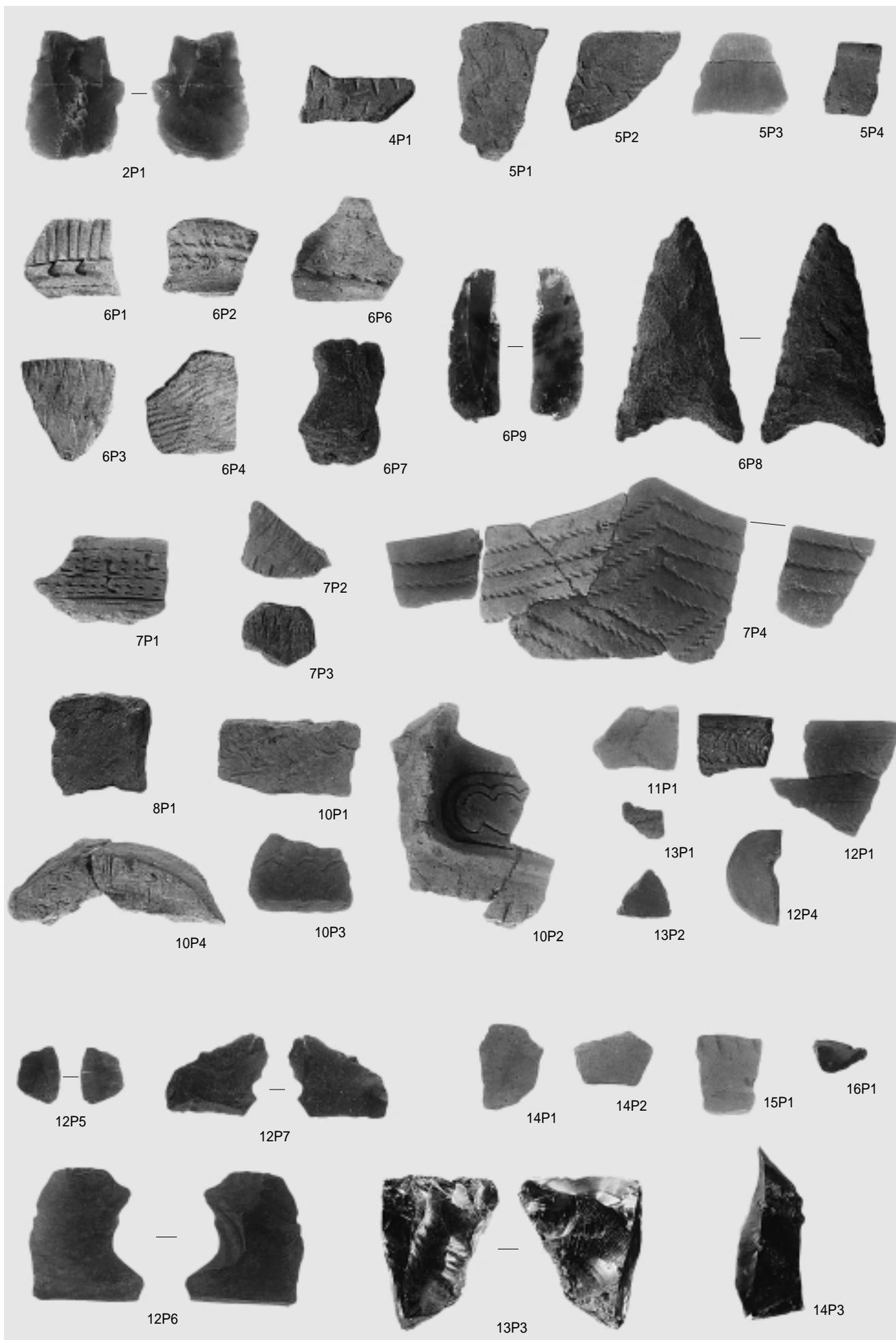
116 P 全景

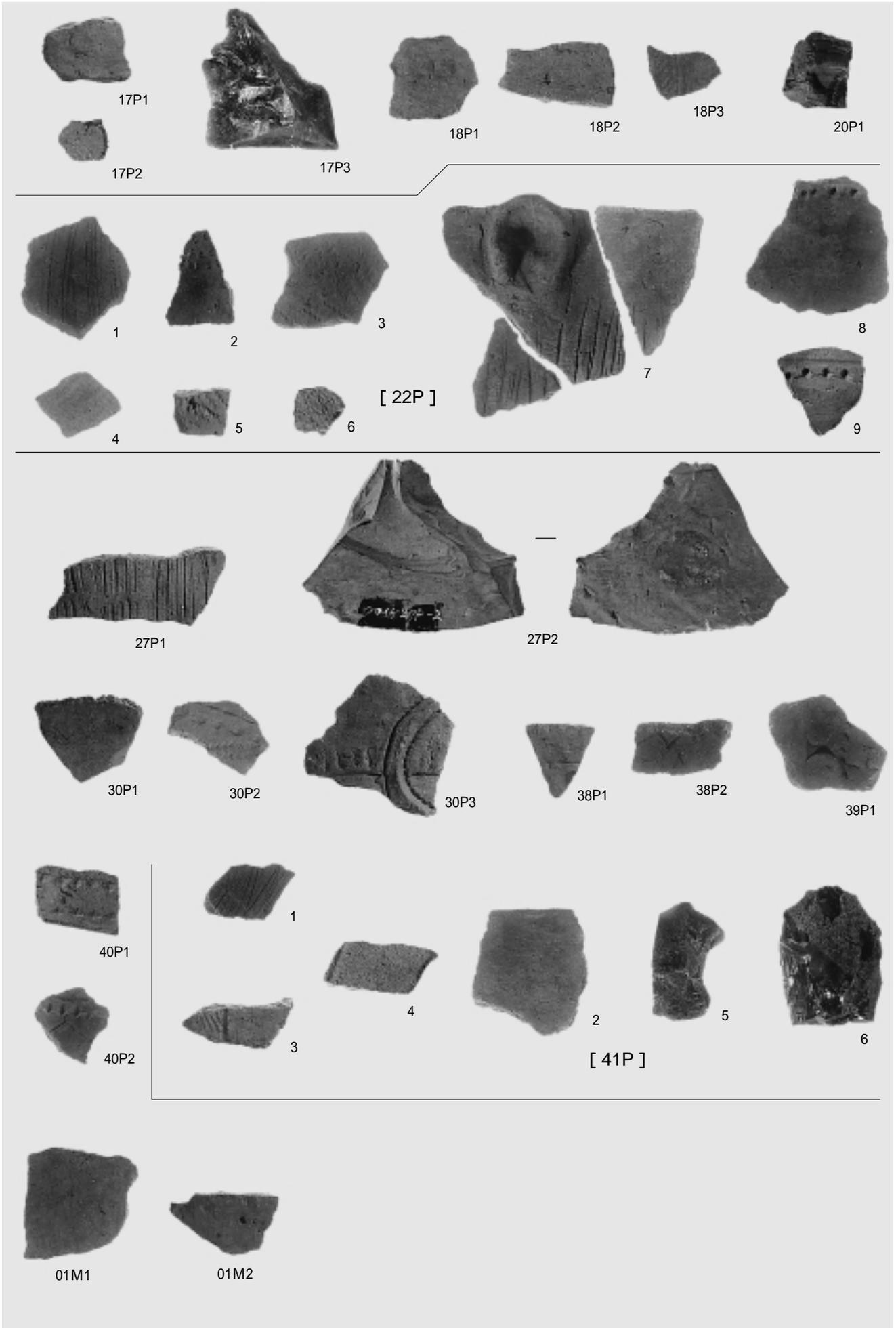


図版26

[ 黒沢池上遺跡出土遺物 2 ]

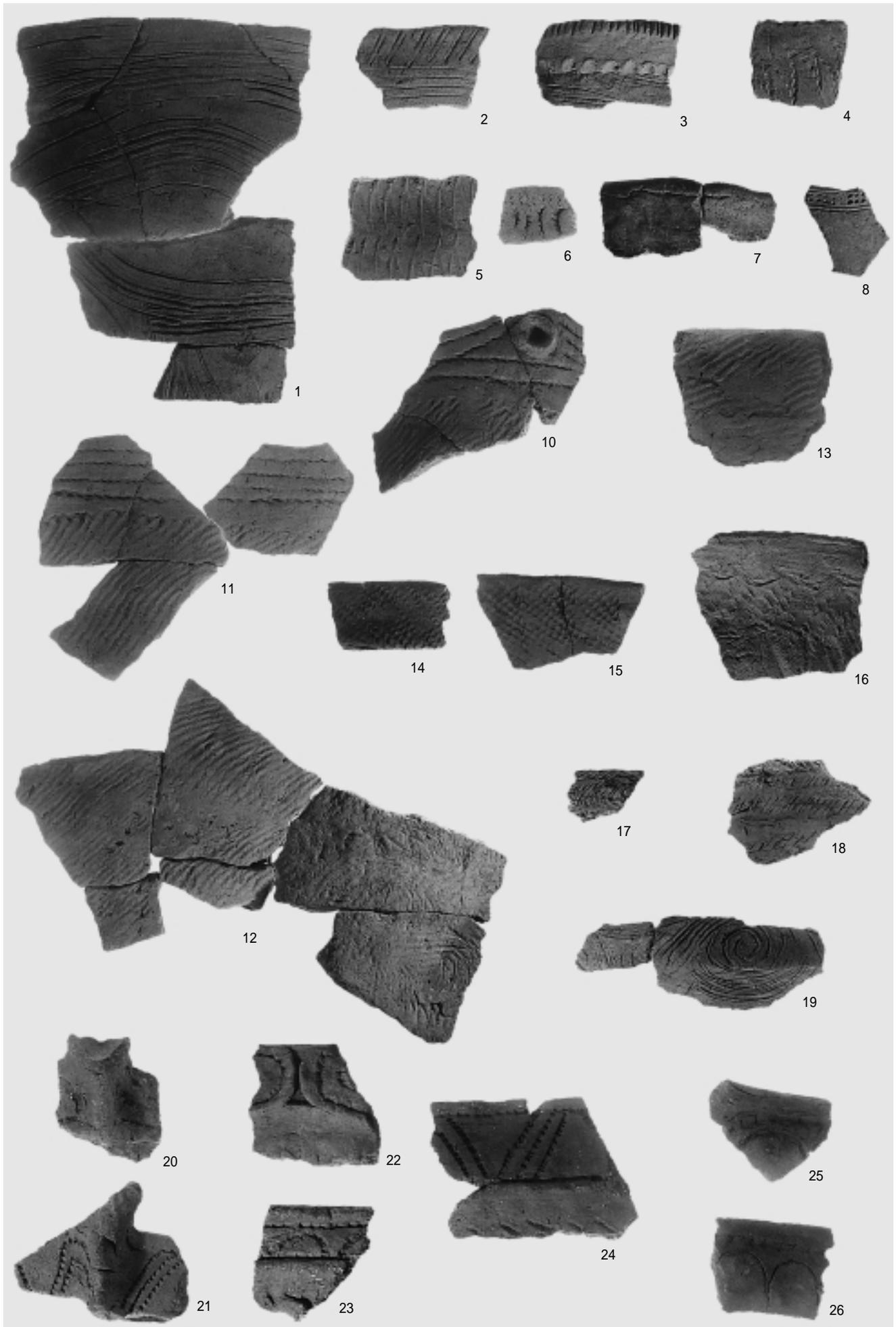
02P ~ 16P

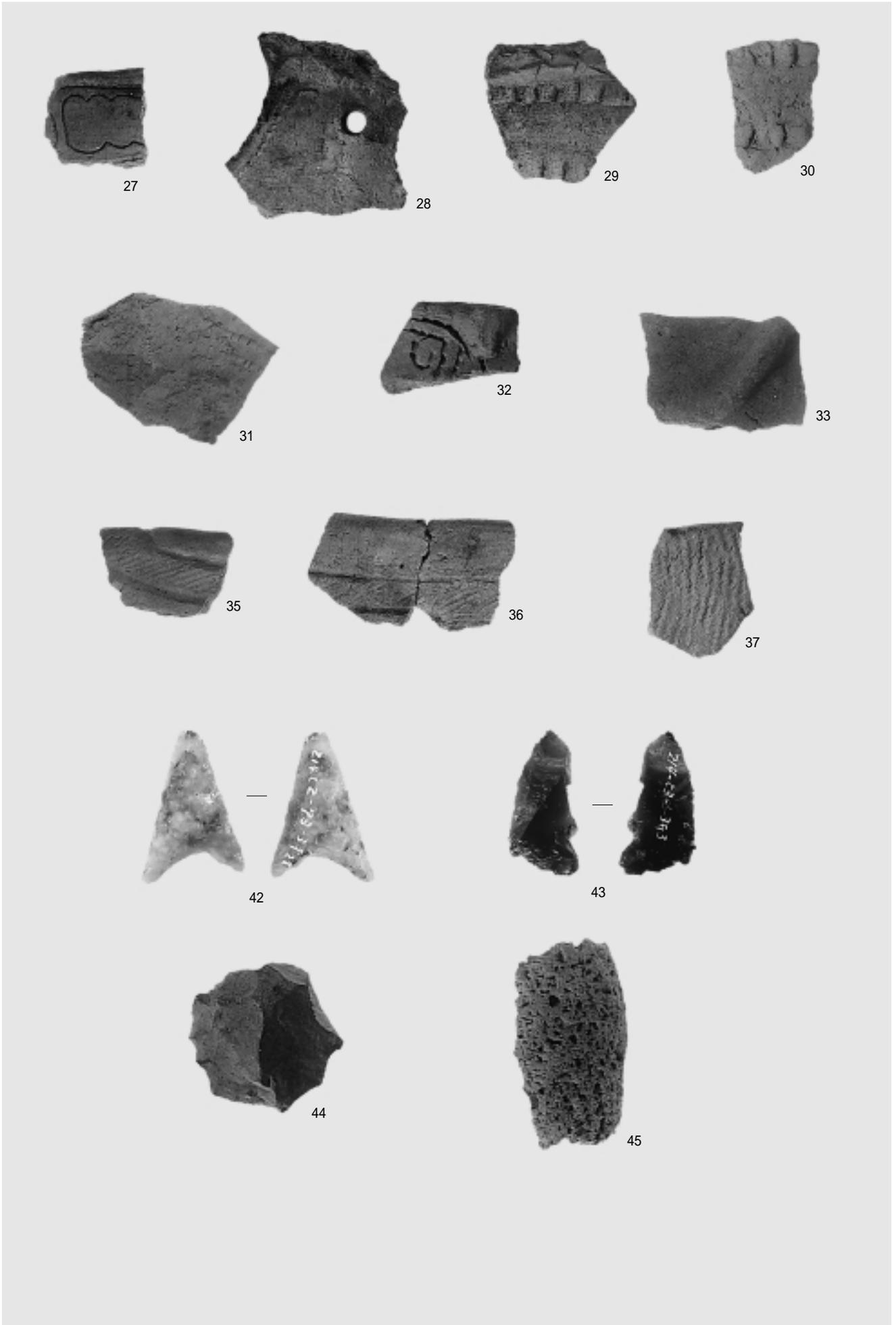




図版28

[ 黒沢池上遺跡出土遺物 4 ]  
遺構外 1 ~ 26

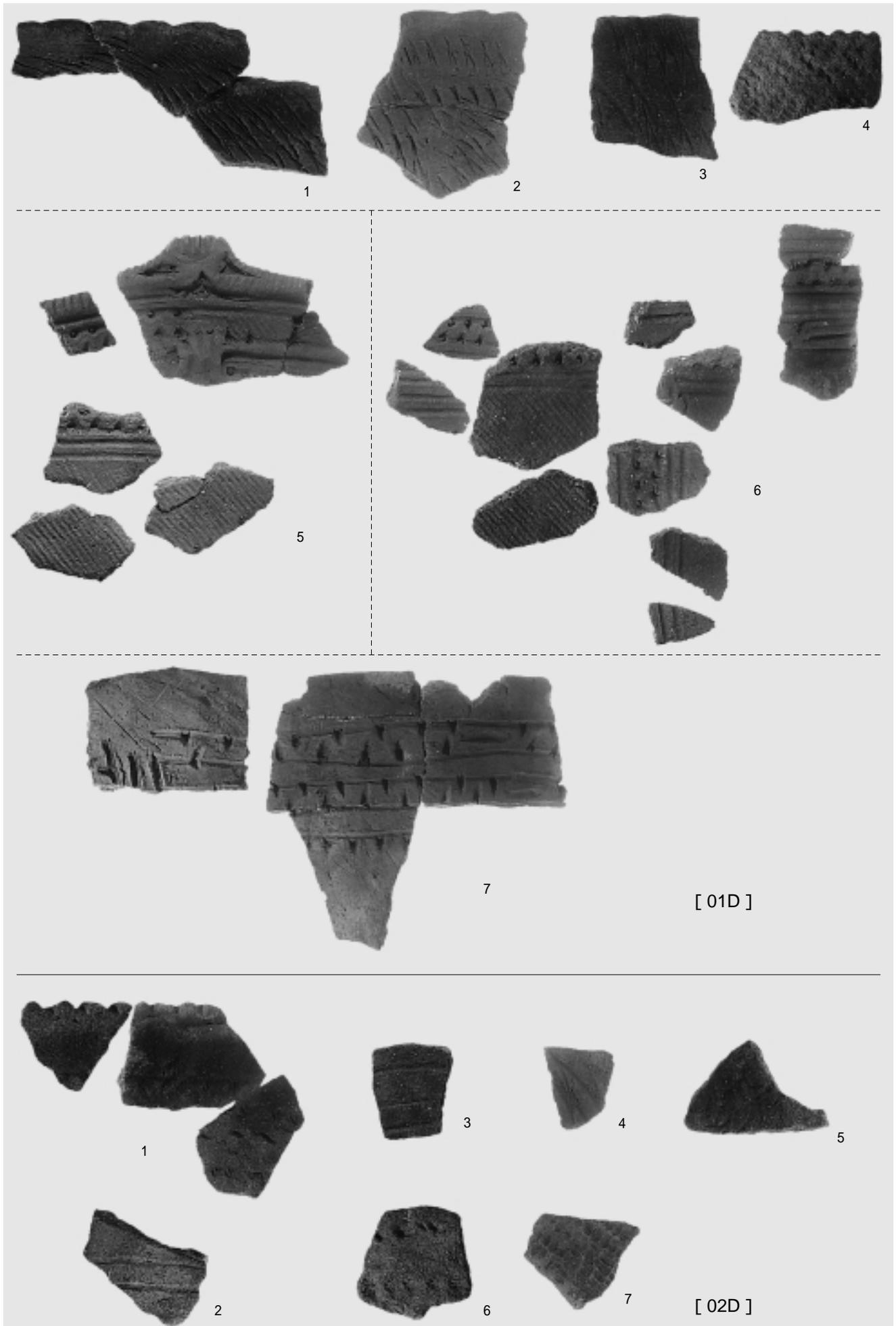


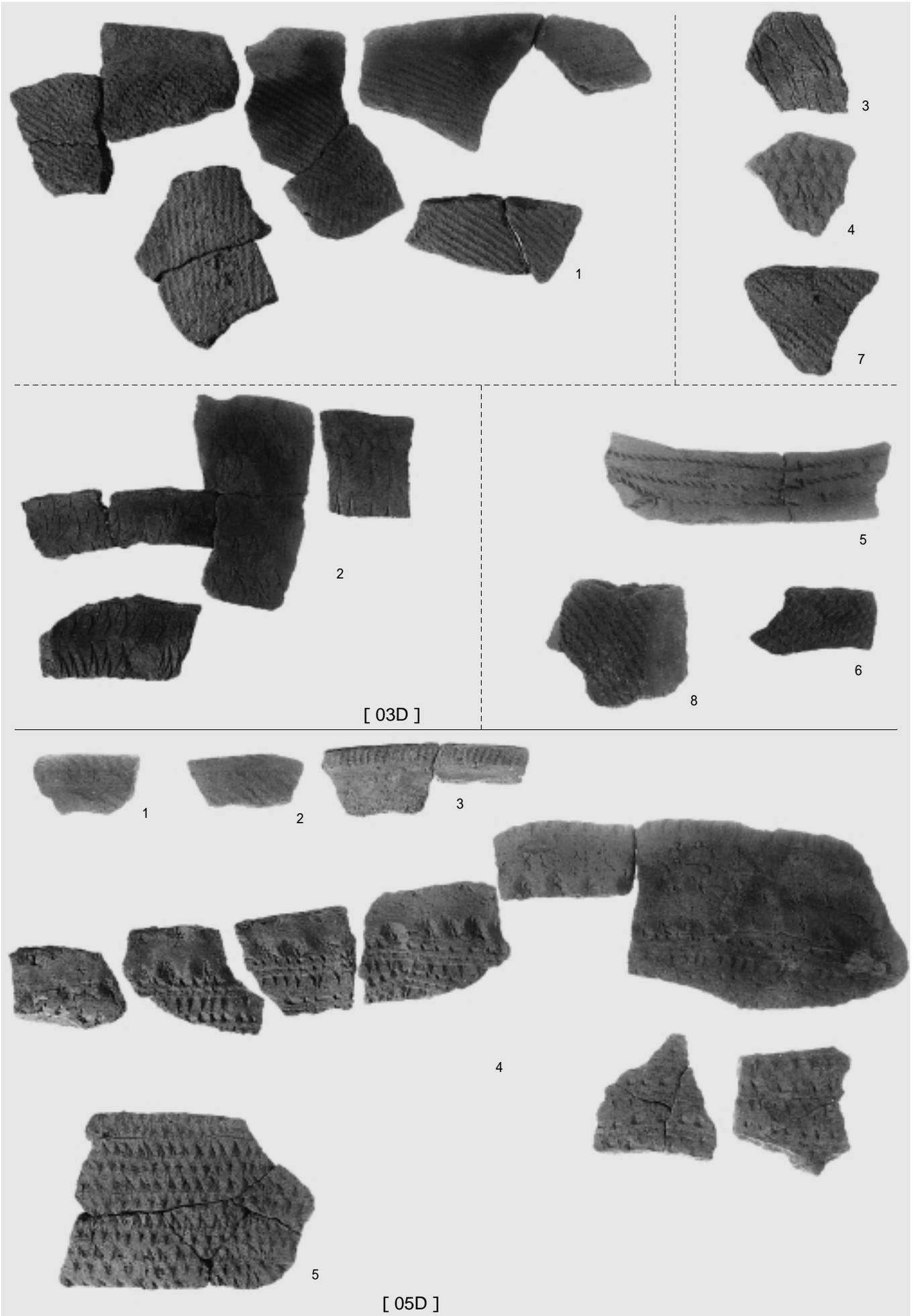


图版30

[ 新林遺跡出土遺物 1 ]

01D・02D

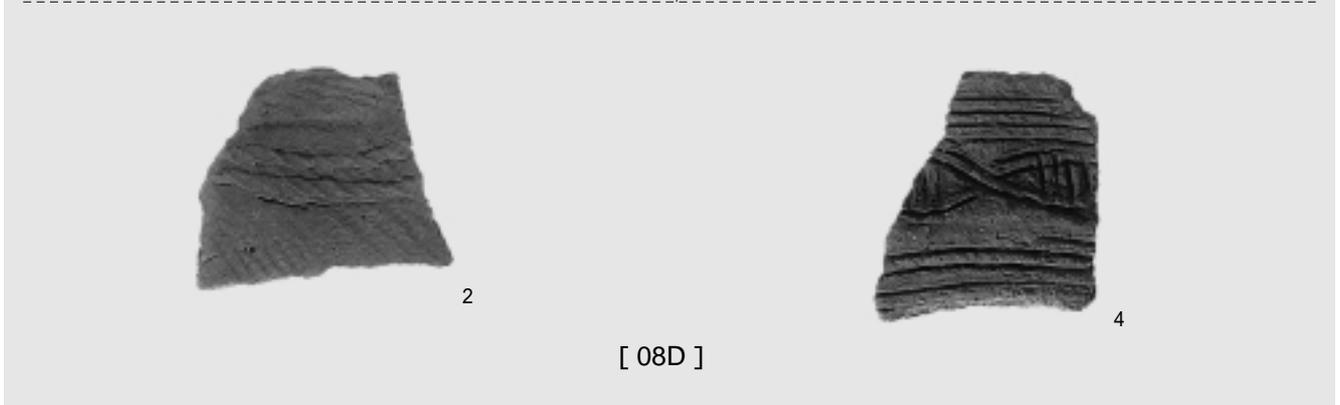
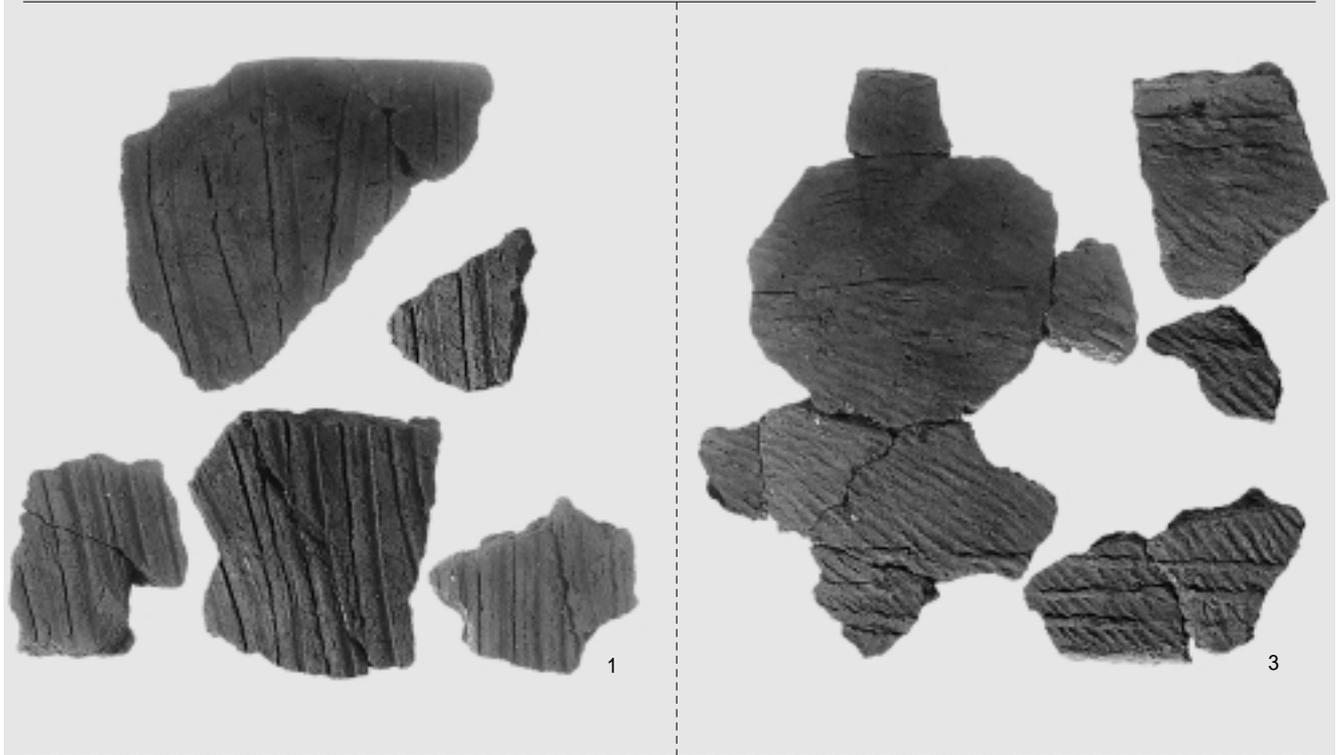
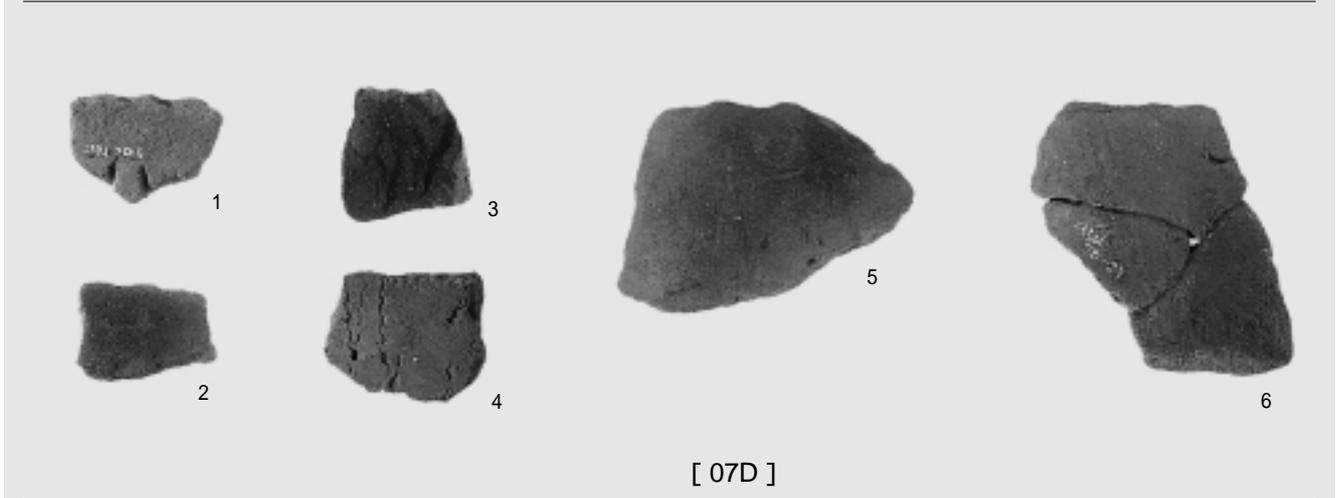
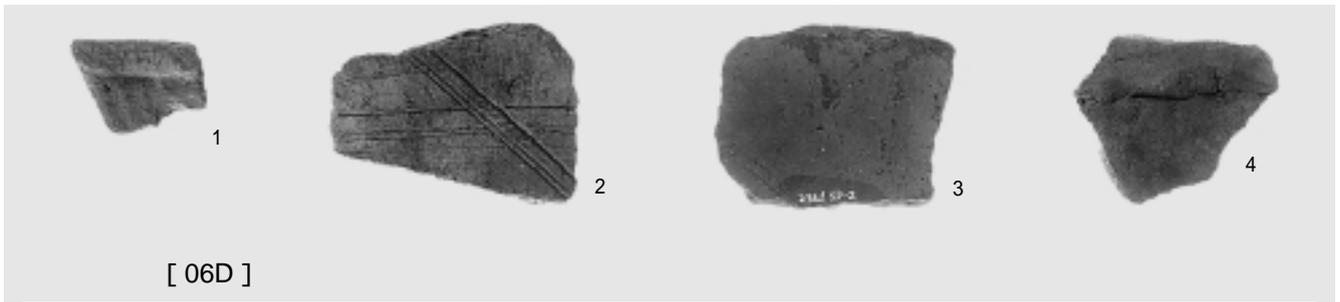


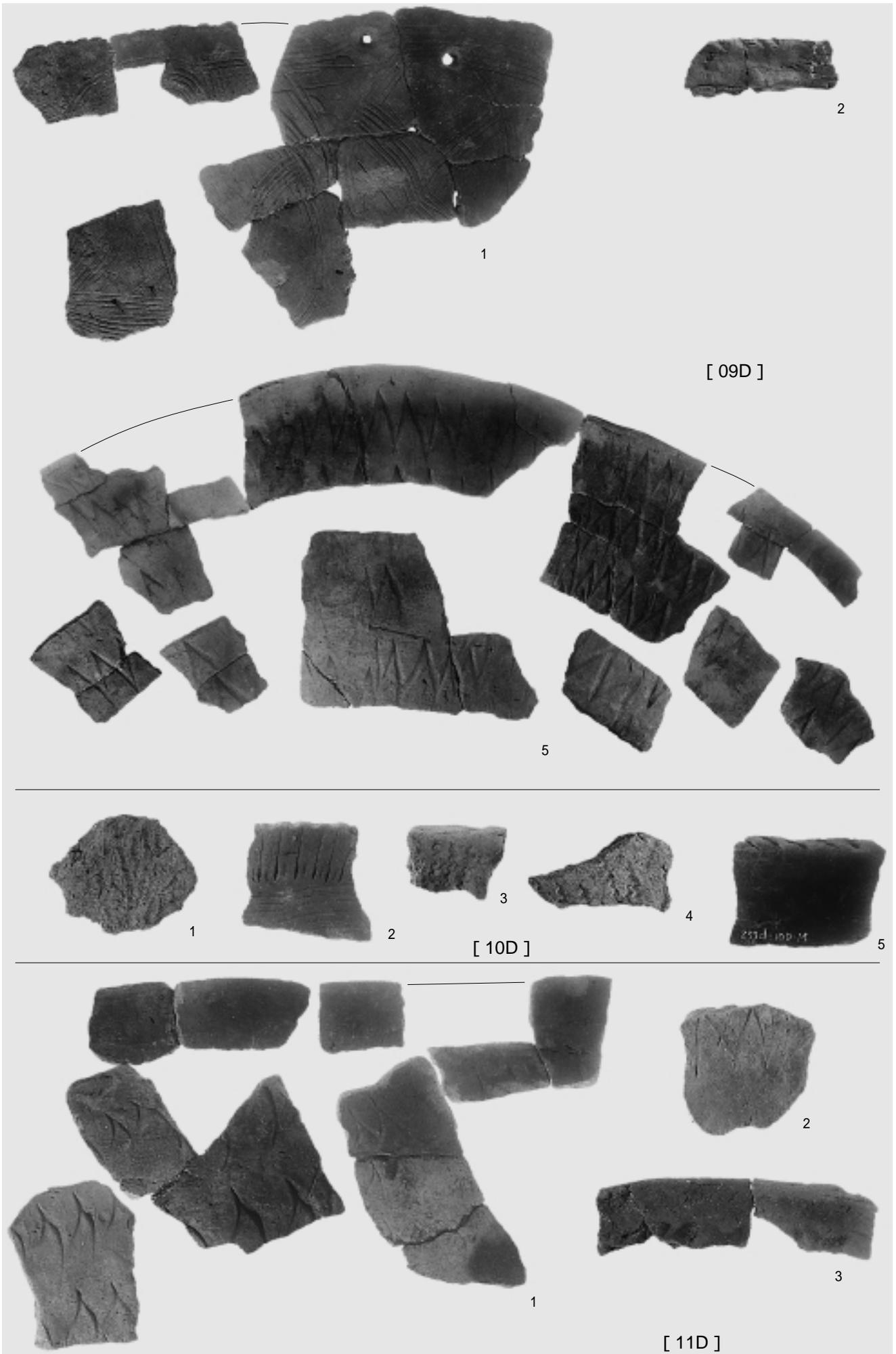


图版32

[ 新林遺跡出土遺物 3 ]

06D · 07D · 08D

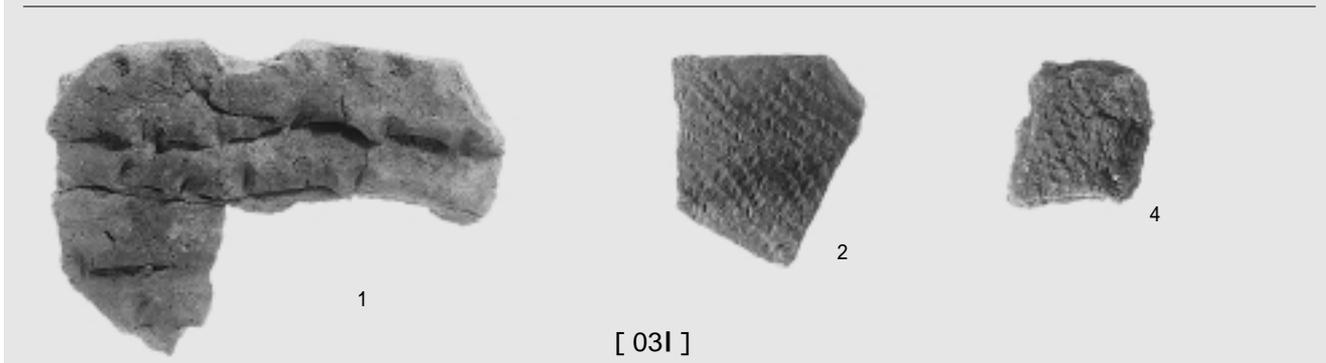
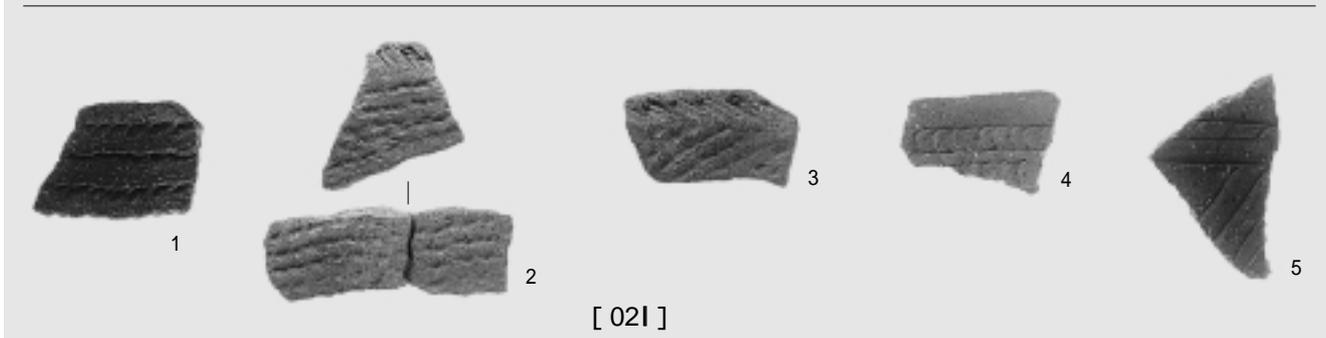
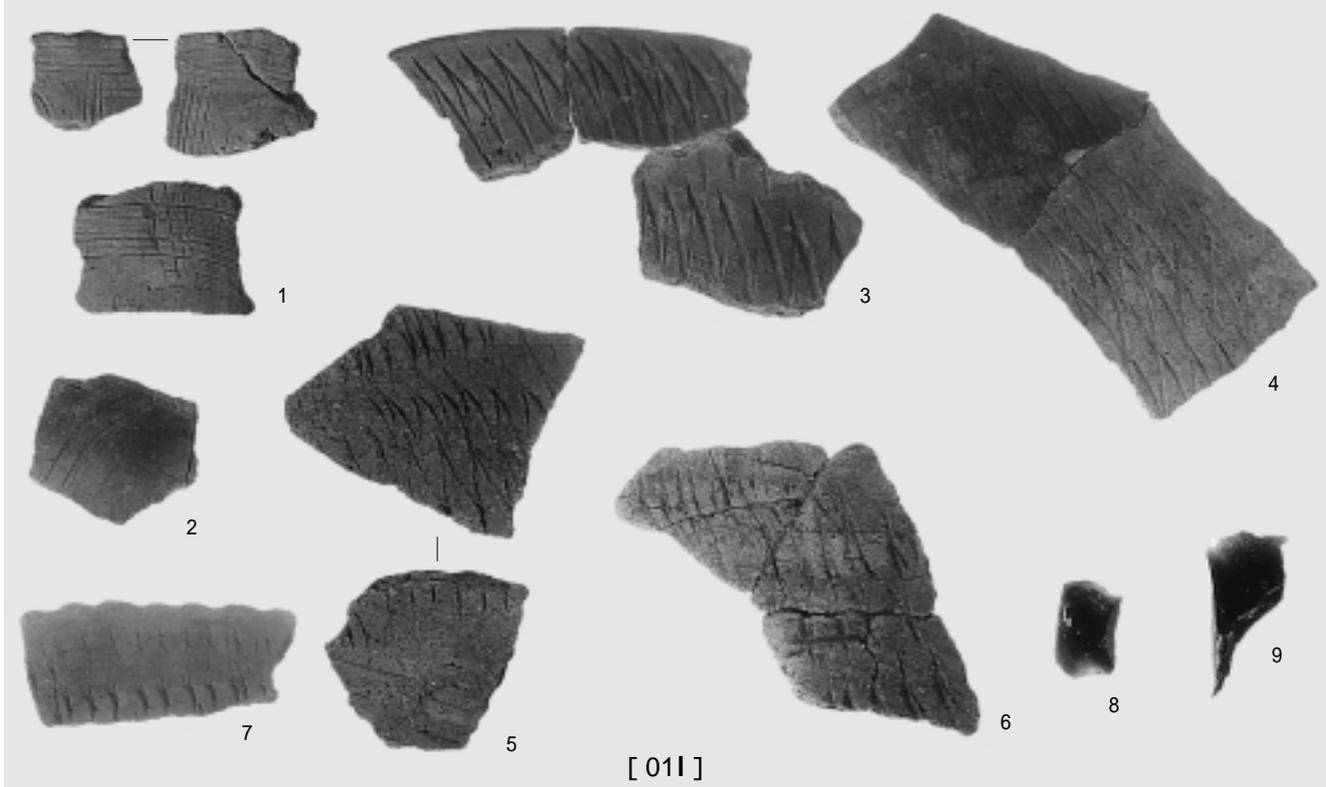
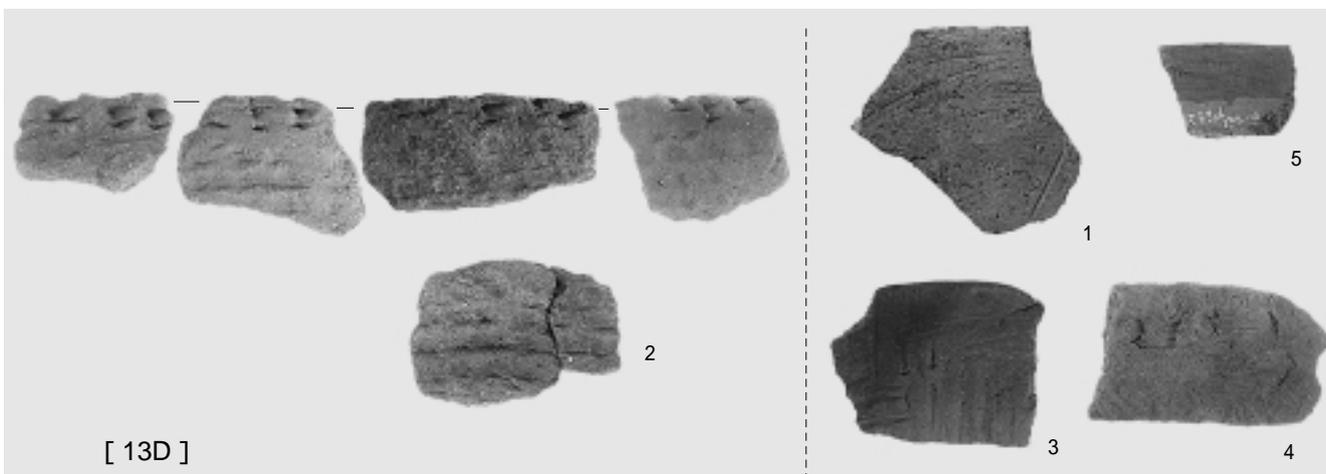




图版34

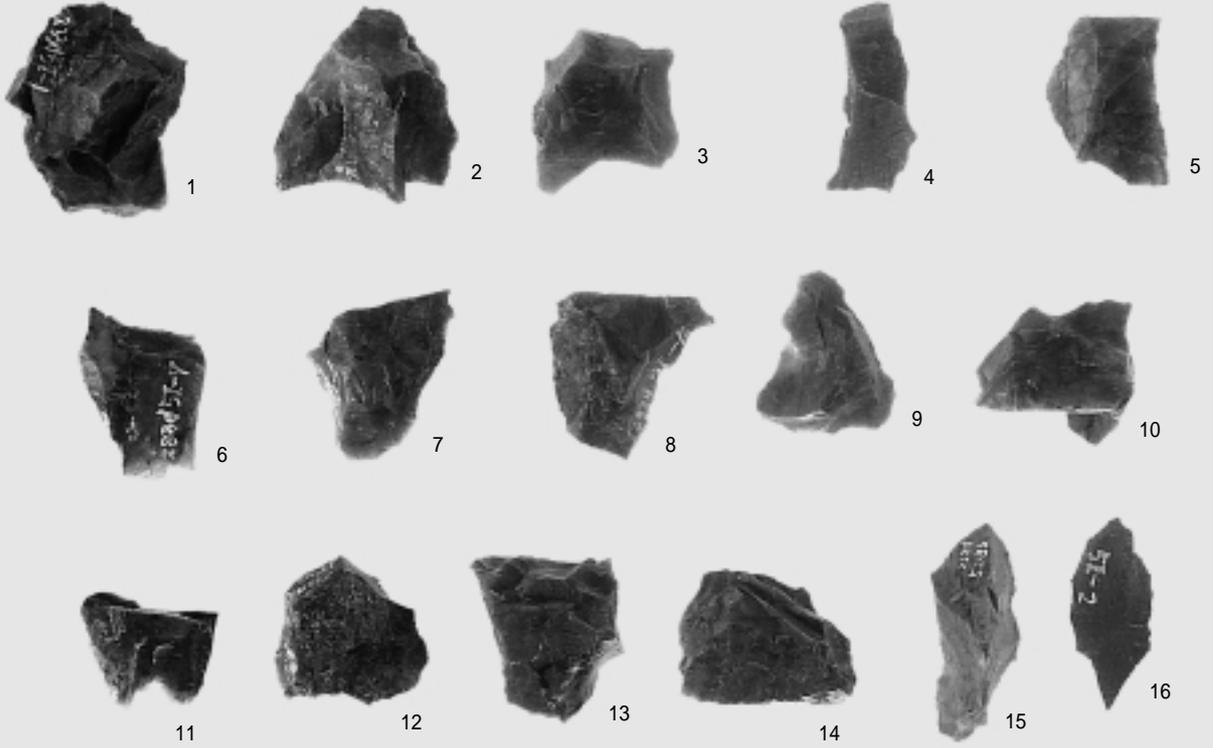
[ 新林遺跡出土遺物 5 ]

13D・01I・02I・03I

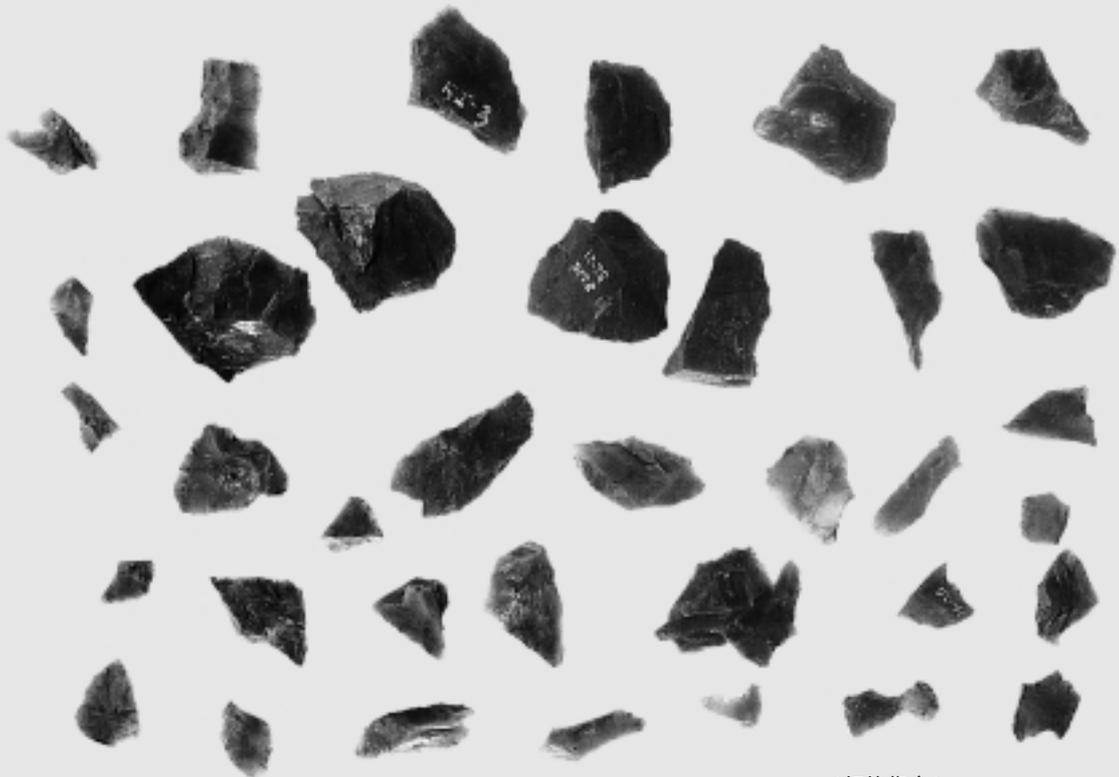




[ 04I ]



[ 05I ]

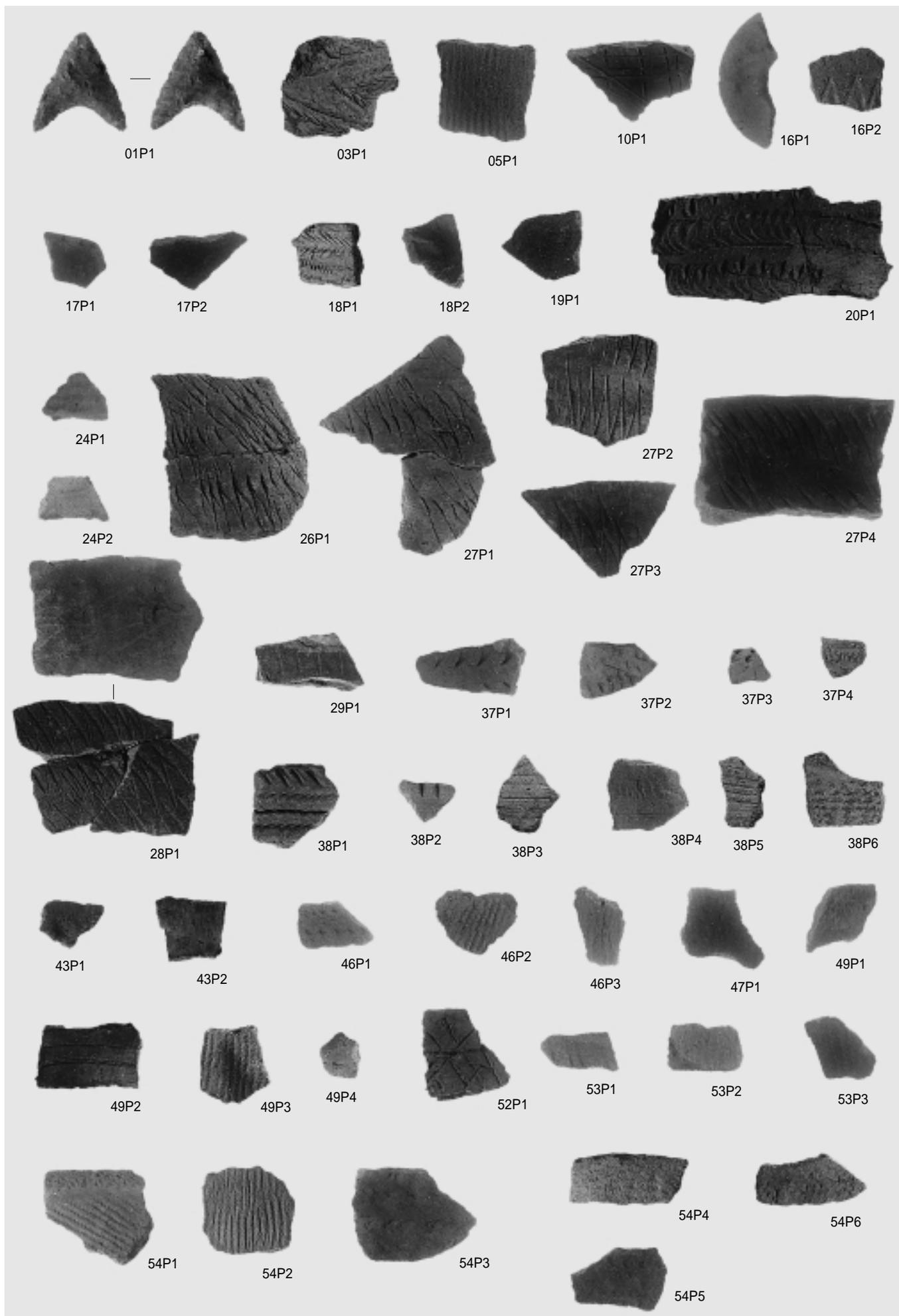


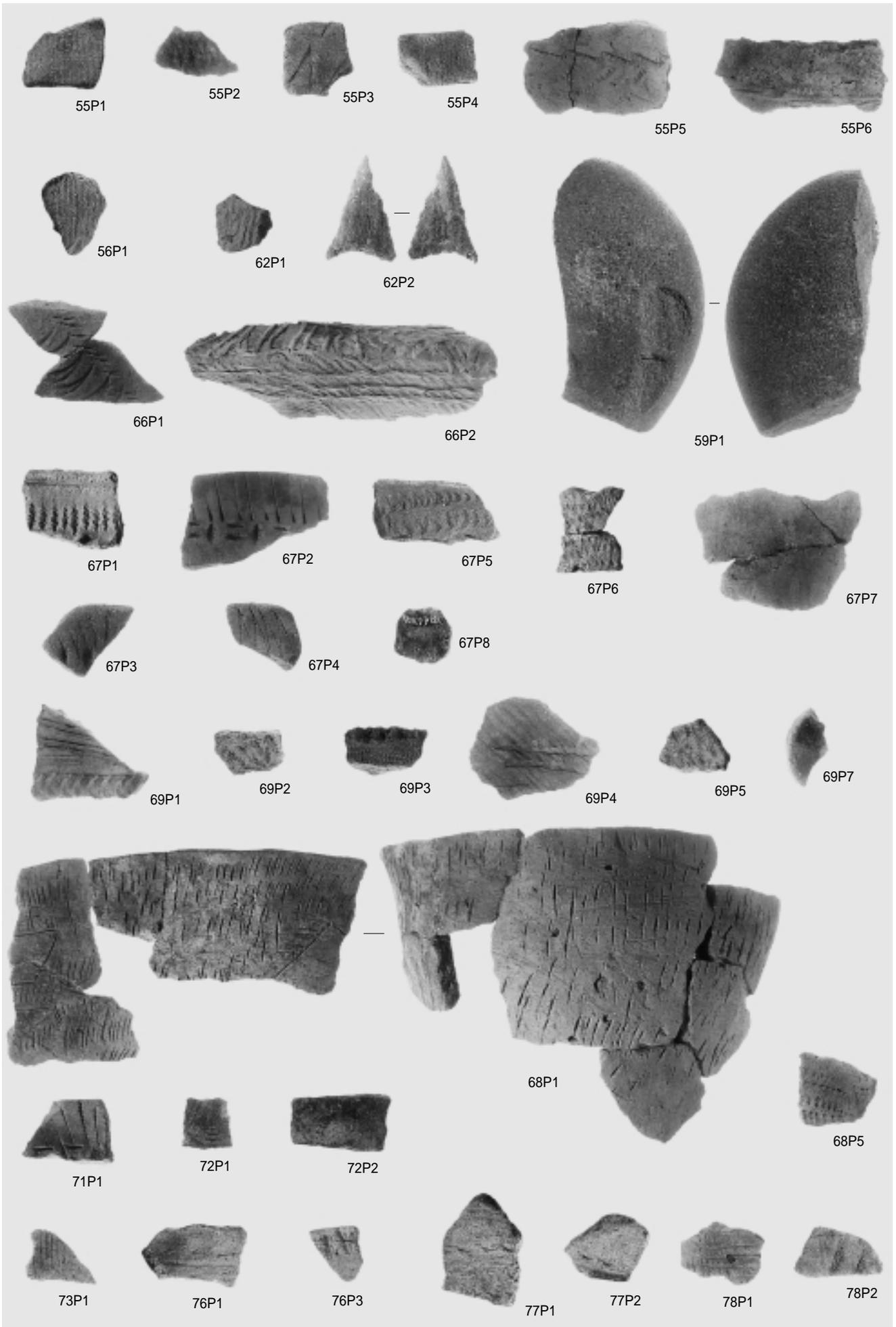
( 細片集合 )

图版36

[ 新林遺跡出土遺物 7 ]

01P ~ 54P

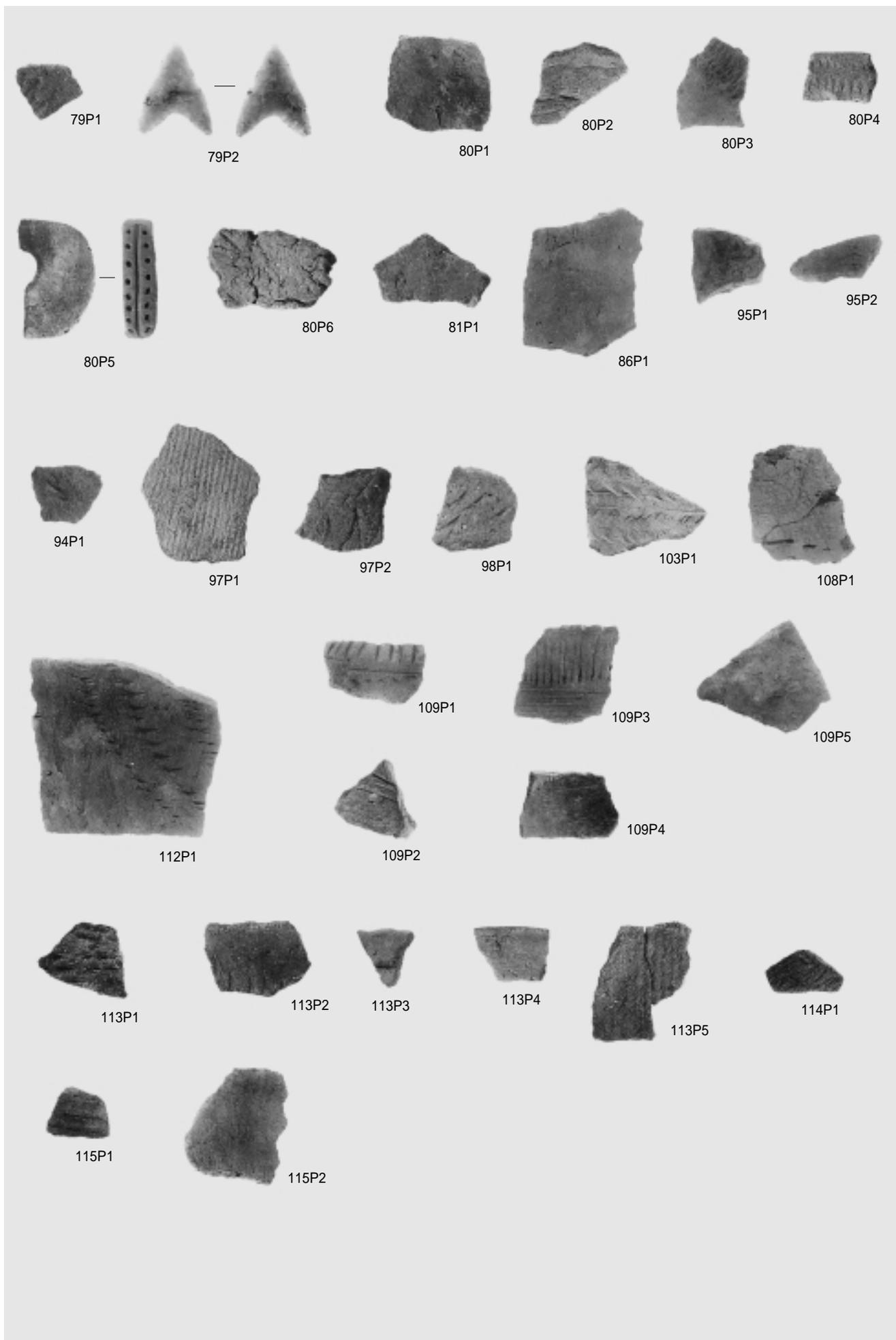


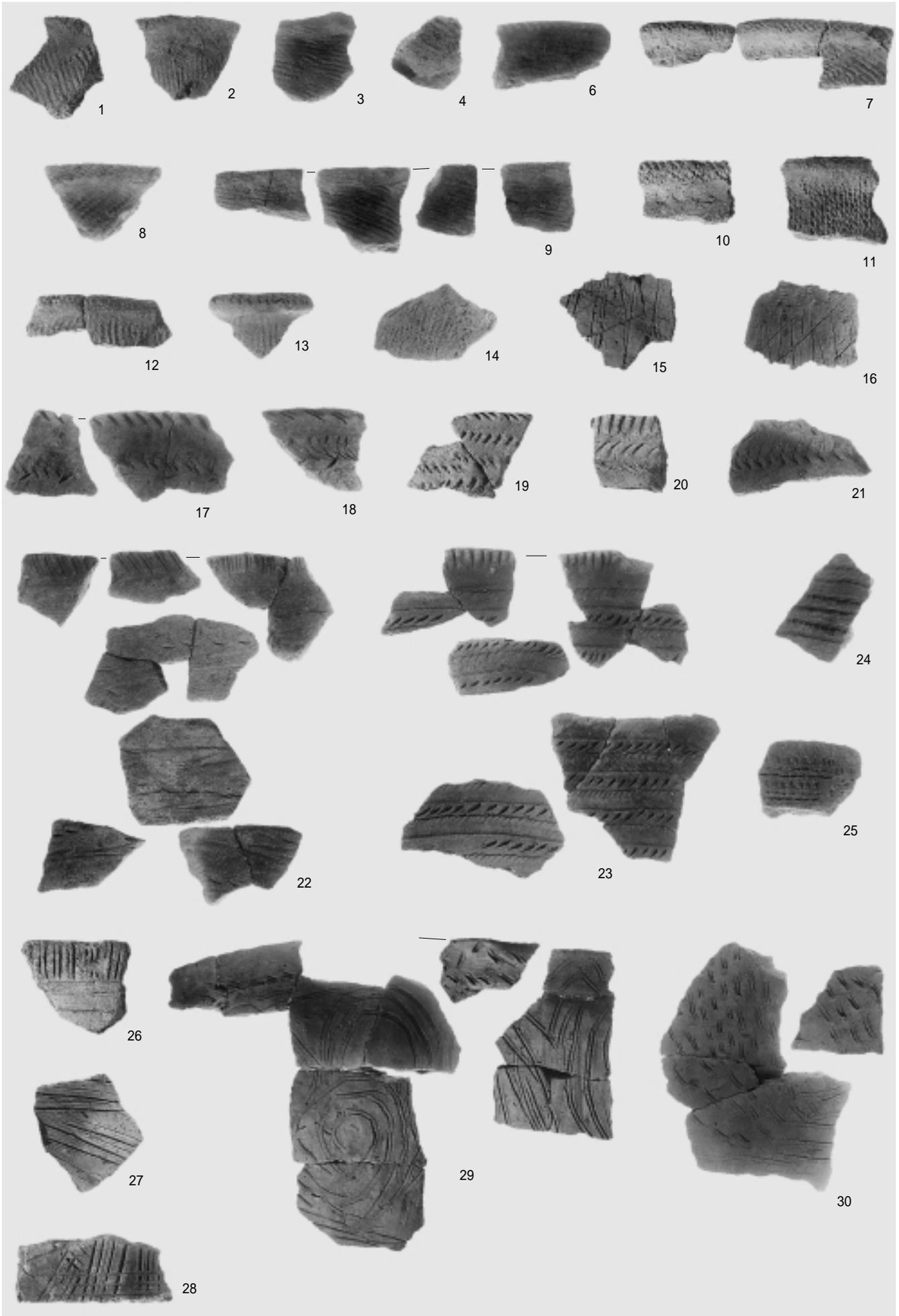


图版38

[ 新林遺跡出土遺物 9 ]

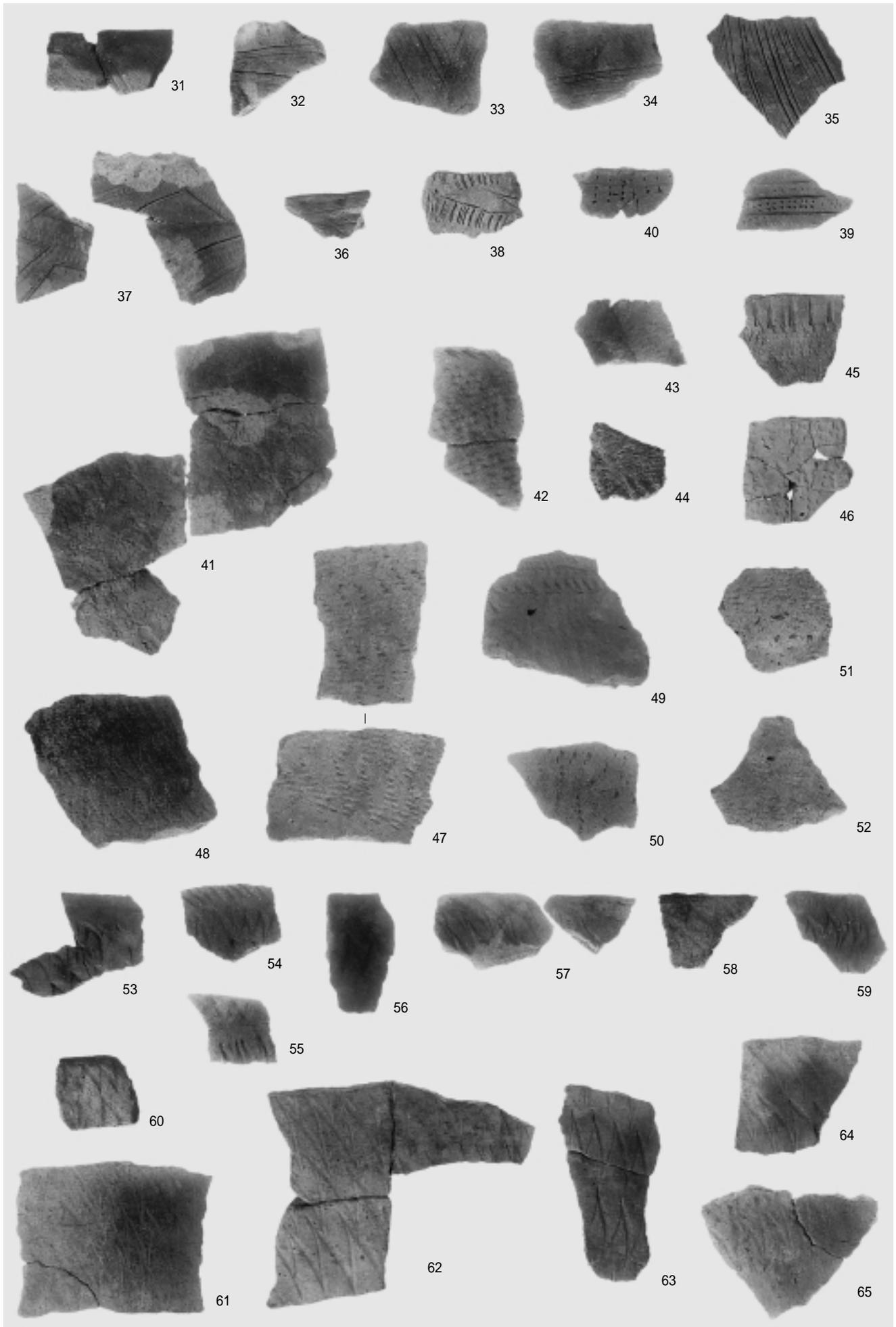
79P ~ 115P

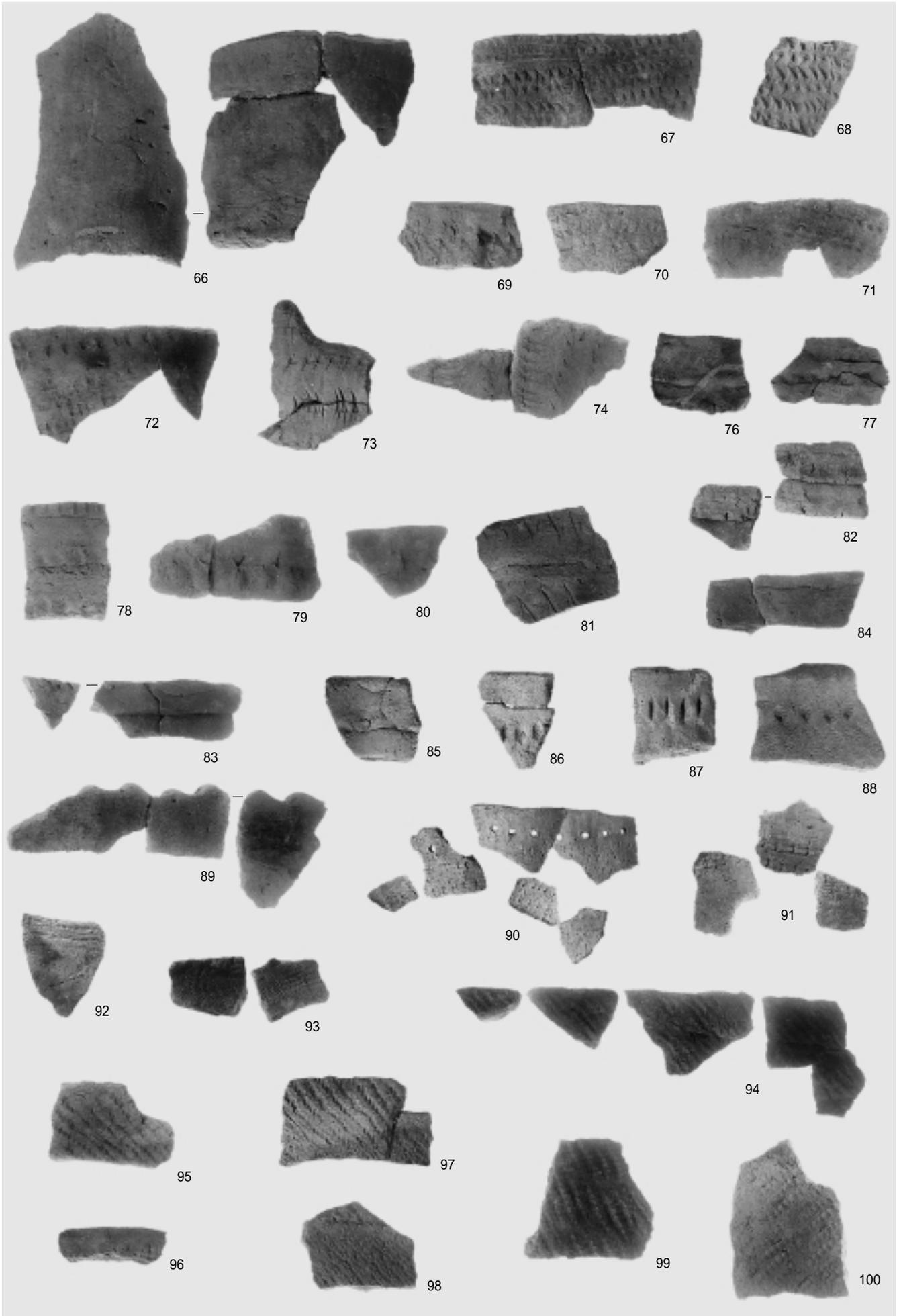




图版40

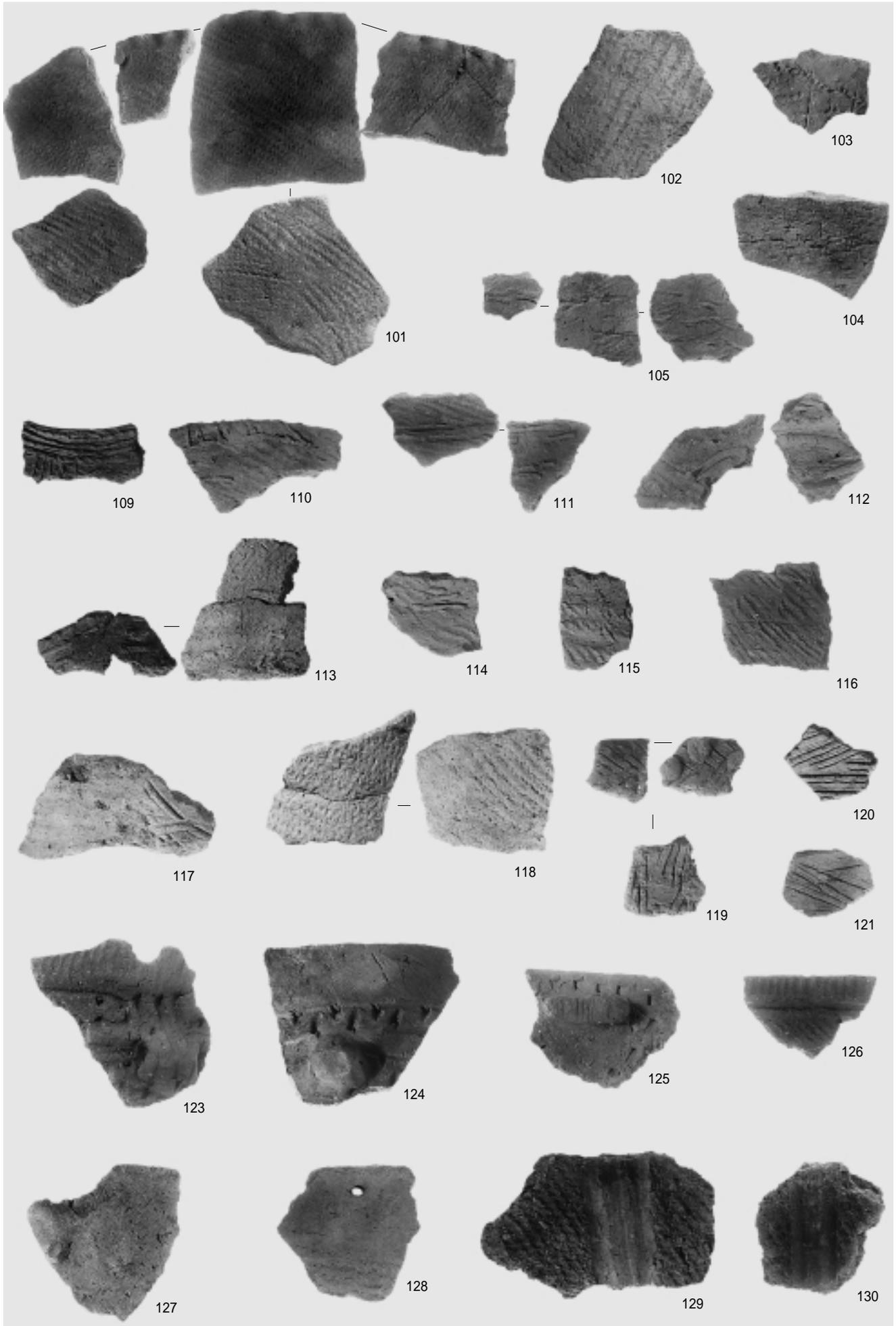
[ 新林遺跡出土遺物11 ]  
遺構外31 ~ 56

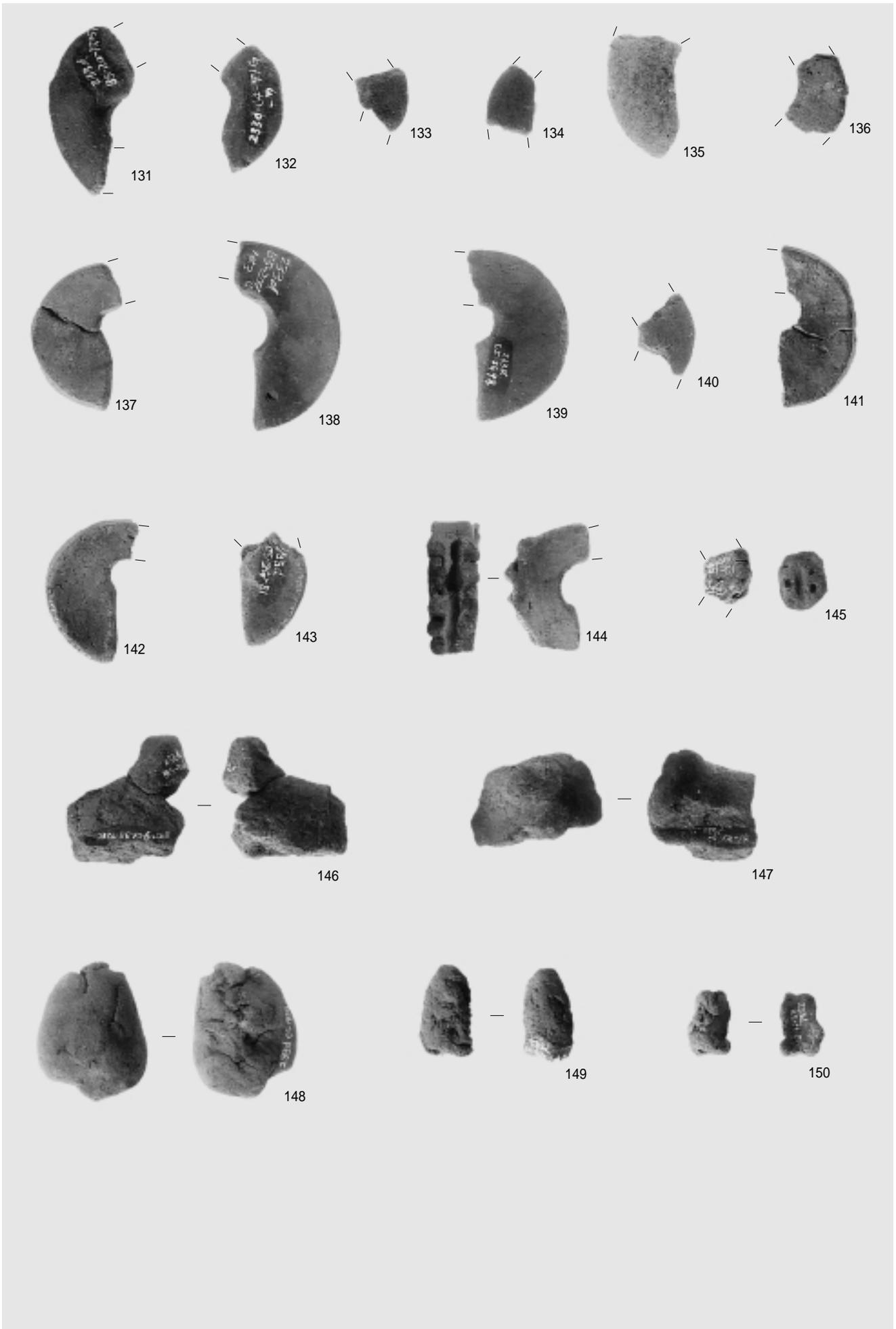




图版42

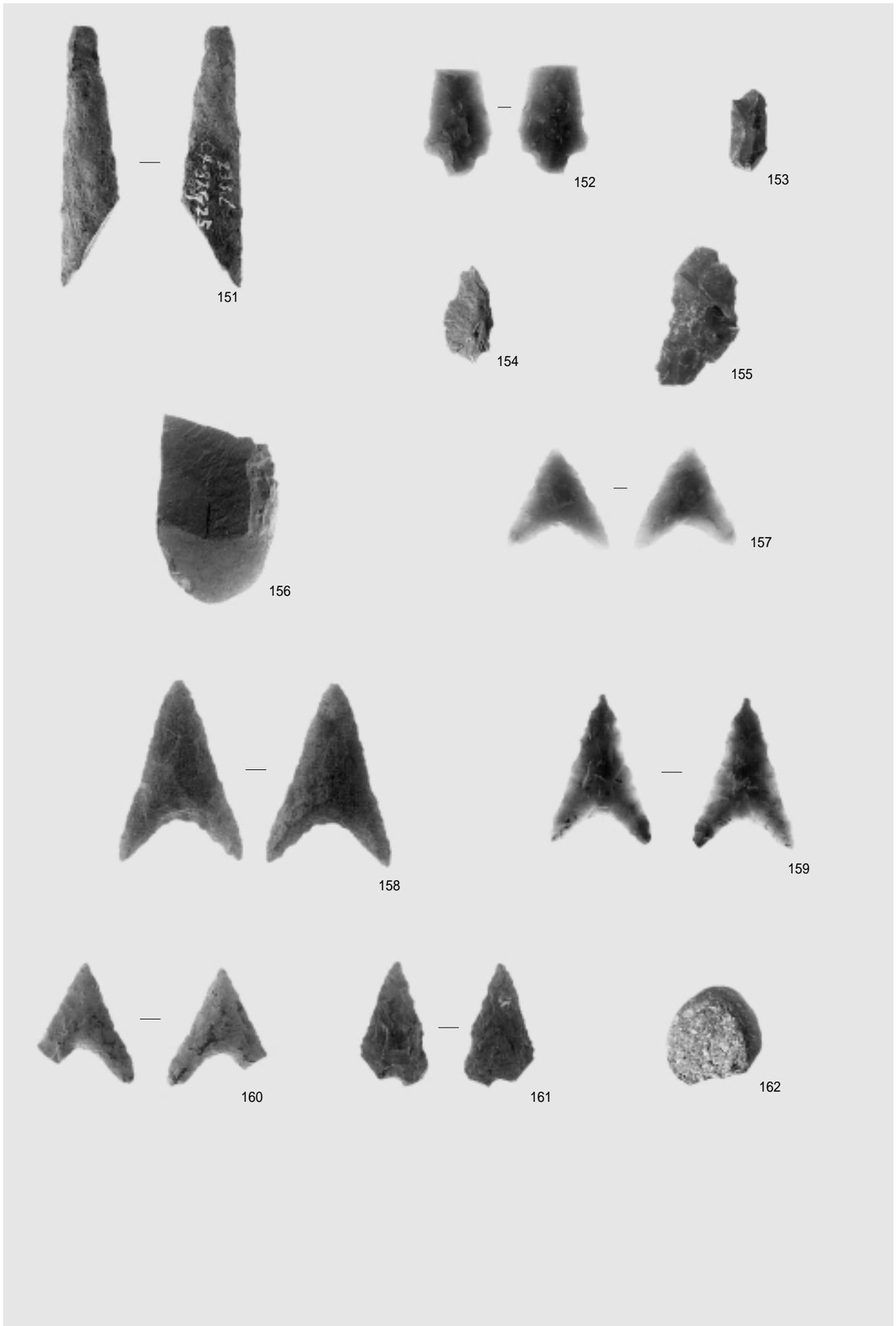
[ 新林遺跡出土遺物13 ]  
遺構外101 ~ 130





图版44

[ 新林遺跡出土遺物15 ]  
遺構外151 ~ 162



# 報 告 書 抄 録

ふりがな	ちばけんやちよしくさわいけがみ・しんばやしせいせきはくつちようさほうこくしょ
書名	千葉県八千代市黒沢池上・新林遺跡発掘調査報告書
編著者名	森 竜哉・松浦史浩
編集機関	八千代市遺跡調査会
所在地	〒276-0045 千葉県八千代市大和田138-2 TEL.047 (483) 1151
発行年月日	西暦 2003年 8月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
くろさわいけがみ 黒沢池上遺跡	やちよしくさわいけがみ 八千代市村上字 黒沢池上2089-5他		214	35度 43分 01秒	140度 07分 50秒	20010509 ～ 20010724	上層1,800m <sup>2</sup> 下層 18m <sup>2</sup>	土地区画整理
しんばやし 新林遺跡	やちよしかみこうやあざしんばやし 八千代市上高野字 新林1191-1他	12221	233	35度 43分 04秒	140度 07分 56秒	20010730 ～ 20011107	上層2,860m <sup>2</sup> 下層 27m <sup>2</sup>	土地区画整理

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
黒沢池上遺跡	集落跡 土坑群	縄文時代 前期～中期	竪穴住居跡 3軒 陥穴 1基 土坑 39基	旧石器時代スクレイパー、 細石刃、縄文時代前期後半 ～中期土器片、土製品、石鏃 等	
新林遺跡	集落跡 土坑群	旧石器時代 縄文時代前期 後半～中期前 半	旧石器時代遺物集中地点 1 竪穴住居跡 11軒 竪穴状遺構 4基 陥穴 5基 土坑 111基	旧石器時代細石刃、有茎 尖頭器、縄文時代早期、 前期後半～中期前半土器 片、土製品、石鏃等	

**千葉県八千代市  
黒沢池上・新林遺跡発掘調査報告書  
2003**

印刷日 2003年 8 月22日

発行日 2003年 8 月29日

発 行 八千代市上高野第 1 土地区画整理組合

編 集 八千代市遺跡調査会

〒276-0045 八千代市大和田138-2

八千代市教育委員会生涯学習課内

印 刷 金子印刷企画

〒276-0043 八千代市萱田410-1